

よう実 Aクラス昇格RTA Dクラスルート

青虹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはよう実のAクラス昇格RTAです。

バスイベント発生と同時にタイマースタート、Aクラス昇格が受理された瞬間タイマーストップです。

見切り発車につきチャートもブレイングもガバガバなので、寛大な心で見逃して下さい。許して下さい、お願ひします何でもしますから！

淫夢要素はほどほどに、老若男女誰でも家族の目の前でも楽しめる安心安全なRTAを目指したいと思います（目指すとは言つてない）。

番外編はこ→こ←から。←

<https://syosetu.org/novel/2130>

目次

3月	3月	3月	3月	3月	3月	2月	2月	1月	1月
裏話	裏話	裏話	裏話	その3	その2	裏話	裏話	裏話	裏話
その3	その2	その1	その1						

388 358 336 330 323 316 300 292 273 264

初日

はい、よーいスタート。

最速で2000万プライベートポイント集めてAクラス昇格を目指すRTA、はーじまーるよー。

計測開始はバスイベント発生、終了はAクラス昇格受理とします。ちなみに、先駆者はいないので私が世界一です。

名前は打ちやすさの関係で八遠 はちとう 愛あいとします。性別は女です。（深い意味は）ないです。

では、バスイベントを背景に本RTAの簡単な説明をしていきます。レギュレーションは3つあります。違いはスタートするクラスがB→Dクラスのどれかしかありませんが。今回はあくまでもAクラス昇格を目指とするので、Aクラススタートは除外しています。

今回はDクラスルートを進みます。後述の理由により、このルートが最難関です。

他のルートも基本的にやることは変わりませんが、走るなら原作の側の方が良いでしょう。何より書きやすい。

本RTAではポイントを貯めることに全力を注ぐので、基本的に0円生活です。スーパーなどにある0円コーナー、山菜定食を駆使していきます。日用品なども0円でカバーします。Aクラスに上がったらリツチな生活になるので、それまでは全力で耐えます。

5月最初のイベントは回避不可能です。そうじゃなきゃ行動次第ではRTAが成立しません。念のために説明しておくと、このイベントはDクラスが最初に割り振られた1000クラスポイントを全て吐き出し、茶柱先生にボロクソに言われる、というものです。

Dクラスルートが最難関なのはそのためです。5月1日時点で、最も簡単なBクラスルートと数万ポイントも差がついてしまいます。月を追うごとにどんどん差が開くので、どれだけ不利なのかよく分かりますね。ふざけんな！

淫夢要素は出来るだけ抑えていきたいと思います。（ないとは言つて）ないです。

主人公の能力はカンストしています。そうじゃないとそもそも卒業までに2000万たまる気がしません。平凡な能力でやつてやる、というD.M兄貴は勝手にやつて、どうぞ。私は256回で断念しました。

原作はどんどん壊す予定です。もしかしたら完走する頃にはBクラスに昇格しているかも知れない（）

どうやらそろここうしている間に着いたようです。

席は……廊下側から2列目の後ろから2番目ですか。比較的移動が楽な位置ですね。することもないでの、適当に本でも読んでいましょう。始めておいてアレですが、このRTAは基本地味です。短縮などの要素がない上に、動きが受け身になることがほとんどです。回収できるポイントは全部回収していくというチャートになるので仕方ない。特別試験が始まれば多少面白くなるかも知れませんが……。

こ→こ←で一つ注意点があります。現在私以外の人間は友達を作ることでなくなりますが、人間関係はあまり築かないようにしてください。特に女子は危険です。4月の大散財祭りに巻き込まれてくだけます。そこでなくとも、定期的に遊びに誘われてポイントを浪費してしまいます。断り続ければ友達関係解消なので（問題）ないです。特に軽井沢には気を付けましょう。近づきすぎると、5月頭にポイントを搾取されかねません。目指せ堀北。

ただし、無人島試験開始前までに高円寺とだけは仲良くなつてください。無人島試験で勝手にリタイアすることと体育祭をサボるのを防ぐためです。それまでに仲良くなれなかつた場合再走です（114敗）。安心してください、隠キヤは画面内では陽キヤつてそれ一番言われてるから。Twitter? Facebook? 隠キヤにはそんなもの存在しないんですよ。

しばらくして現れるのが我らがDクラスの担任、茶柱先生です。ご丁寧に説明してくれますが、全て把握済みです。暗唱は最低条件です。当たり前だよなあ？

……仕方がないので、忘れてしまつたというそこの兄貴のために私が説明してあげましょう。

この学校に入つたら卒業か退学するまで敷地外出ることはできず、外部との連絡も一切出来ません。その代わりに、敷地内は学校だけでなく娯楽施設や商業施設もあります。もはや一つの街のようですね。

寮では電気代や水道代等は全部タダで使えます。夜に他人の部屋に入ることはできないようです。ですが守らない生徒が多いようです。みなさんナニしてるんでしょうかね……。ボブは訝しがります。

そしてこの学校最大の特徴が、本RTAの主軸でもあるSシステムです。各クラスにクラスポイントが与えられ、保有するポイントの多さを競います。進学率・就職率100%を謳っているこの学校ですが、恩恵を受けられるのはAクラスで卒業できた生徒のみです。

本来はクラスポイントでAクラスを競うべきですが、私はそんな正攻法はしません。それが本RTAの目標でもある20000万ポイントを支払って昇格するというものです。ちなみに、一人が貯めた過去最高は1600万ポイント。詐欺込みです。学校側も行けるか行けないかギリギリを攻めていますね。地味で鬼畜なRTA、頭がおかしくなりそうです。

このSシステムとやらのせいでのクラス替えはありません。

では話を戻しましょう。最初に回つてくる学校の資料は家に帰つたらごみ箱にでもぶち込んでおいて問題無いです。（全く必要）ないです。

その後に配られるのが学生証カード。簡単に言えばクレジットカードのような役割を果たしてくれます。かざすだけでお金が支払われる、簡単仕様です。まあ、私は使いませんが。

ここで10万ポイント振り込まれます。他人からすれば10万は大金のようですが、私の場合進捗の0・5%分の塵芥でしかありません。周りが多さに驚いていますが、少なさに驚いてください。

最後に携帯端末が配布されます。スマホをタダでくれるようなものですね。国が運営しているとはいえ、太っ腹スギイ！

茶柱先生が退室すると、爽やかイケメン平田くんが自己紹介の提案をしてきます。今回は大丈夫でしたが、万が一須藤よりも先に順番が

回ってきた場合、ブチ切れて教室を出て行つてください。本来は彼のポジションですが、保身のためなら致し方ないことです。

今回はこちらの方が後なので、自己紹介の最中に須藤が怒つて途中退席します。それに便乗してください。自然と陽キヤが接触を避けてくれます。

上述の大散財祭りの参加者は陽キヤ軍団だけです。なので、堀北や綾小路を始めとした陽キヤ軍団に属さない人たちとは仲良くして問題ないです。逆に、綾小路や堀北とは仲良くなつても問題ありますん。というか仲良くなつた方がいいです。

特に堀北はこのRTAにおいてかなり重要な人物となっています。1人だと物理的に不可能なことが多々あるので、それを補つてもらうのが堀北というわけです。

選んだ理由ですが、単純にスペックが高いからです。学力も運動能力も（道具としては）申し分なく、（道具としては）胆力もあり、（道具としては）機転もききます。我が強いのがネックですが、そこは走者の技量次第でどうにでもなるので、（問題）ないです。

それ以外の特筆事項はありません。最低限高円寺とだけ仲良くしていればいいと思います。

昼食は山菜定食で済ませてください。間違えてスペシャル定食を頼もうものなら、再走までは行かなくてもかなりメンタルを持つていかれることでしょう。選ぶ際は慎重に（1敗）

こ→こ←でやるべきことは、高円寺に全力で話しかけること、敷地中に点在する0円コーナーを出来るだけ回ることです。

高円寺と友達になる際にオススメなのは、ひたすら褒めることです。高円寺は自尊心が高いので、鬱陶しくらいに褒めまくるのが丁度いいですね。まあ、心にもないことなんですがね。そうすれば高円寺はすぐに調子に乗りります。いい意味でも悪い意味でも。

ただし、そればかりでは流石にそのうち好感度が下がり始めますので、高円寺自身のことでも聞いてあげて下さい。嬉々とした表情で語り始めます。頑張って聞いてあげましょう。もしかしたら奢つてくれるかもしれません。高円寺なのでないと思いますが。

ダメそうでも諦めてはいけません。諦めたら再走です（無慈悲）
0円商品に関してはコンビニやスーパーなど、回れるところは全て
回りましょう。やり損ねると飢えに苦しみながらの夜となります。
優先すべきは食品と洗剤などの日用品です。

回る順番によつては、コンビニにて堀北と綾小路に遭遇します。先
程も言いましたが、本RTAは基本的に短縮のしようがないので、寄
り道は全然問題無いです。ただし、気を抜きすぎてガバらないように
だけは気をつけましょう（23敗）

物品をある程度回収し終えたら初日は終了です。1日の疲れを癒
しましよう。

ちなみに、寮の家賃は14万3000円（大嘘）だそうです。あほ
くさ。

では、今回はこ→こ←までとします。閲覧ありがとうございます。次
回もよろしくオナシヤス！

かつてないほど地味なRTA、はーじまーるよー。

今回は4月を一気に駆け抜ける予定です。やることが少ないからね、仕方ないね。

まずは起きてからの行動についてです。後述しますが、本RTAの重要な収入源の一つに部活があります。身体能力はAですが、体は大切にしないといけません。それに備えて、少しでもいいので運動してください。ランニング程度で十分だと思います。0円生活のせいでは栄養が乏しいので、過度な運動は控えましょう。能力がチートでも体は人間なのです。ちゃんと労つてあげましょう。

前回言い忘れましたが、よう実を詳しく知らない兄貴のために能力について簡単に話します。知っているという兄貴は飛ばしてもらつて結構です。

兄貴のために身を粉にして説明してあげる私優しすぎワロタ（自画自賛）（配信者の肩）

能力の判断基準は学力、知性、判断能力、運動能力、協調性の5つです。能力値はA～E、AにはAとAー、A以外にB+、B、Bーの3段階があり、全14段階となります。最高がA、最低がEーというわけですね。

私が操作するキャラの場合、全てがAです。チートや、チートや！でも何でこの人はDクラスなんだろ……？ ボブは訝しがる。まあ平田や櫛田みたいなのもいるし、多少はね？ では話を戻しましょう。

この日から早速授業が始まります。俗に言うオリエンテーションです。先生はフレンドリーですが、生徒は授業に対しても然フレンドリーやないので騒がしいです。流石に底辺校でもここまで騒がしくないと思いますが。彼らの場合全員寝てて一周回つて静かそうですがどね。

私語、スマホいじり、遅刻、睡眠は当たり前です。お前、一番態度悪いって言われてるぞ（心の中で）。気づいてくれよな、頼むよ。

授業中何をしようがクラスポイントを全て吐き出す事には変わりないので、実質自由行動です。私は少々プライドが高いので真面目に受けます。というのは嘘で喋る相手がないだけです。すいません調子に乗りました、許して下さいお願ひしますなんでもしますから！

(震え声)

そう懺悔しながら、クラスポイントをみるみる吐き出していくのと、それを必死にカウントする先生の様子を見守ります。先生が何か喋っていますが、何も聞こえません。本当は授業の名前を被つた休み時間だつた……？

今回私は綾小路や堀北とある程度の関係を築いていきたいと思っているので、数日後に櫛田による堀北の連絡先をゲットしよう大作戦に巻き込まれます。カフェで奢ってくれれば協力する、と言つておけば問題ないです（ゲス顔）

参加するかどうかは（兄貴たちの好みで問題）ないです。この時点では堀北からの好感度は底辺から動きません。0円生活にオアシスが欲しければ行つてください。

非常に新鮮で、非常に美味しいナニかを常飲しているというガチ勢の兄貴はいると思いますが（震え声）

櫛田は何で退学させたい堀北と友達になりたいとかほざいていらっしゃるんでしょうかね……。あーもうめちゃくちゃだよ。

あ、コーヒーとお菓子はちゃんと頂きました。やっぱ人の金で食う飯は美味しいな（人間の屑）

人の闇を丸出しにしたところで次のイベントに進みます。

この日のイベントその1、部活動説明会です。絶対に行きますよう。好成績を残すとそれに応じてポイントが貰えるので、部活動は貴重な収入源となります。入部し忘れたら詰るので忘れないようにしますよう。まあ、こんなビッグイベントをド忘れするバカはないと思いますが（3敗）

こ→こ←で、入るべき部活に関して説明していきます。まず絶対に入つてはいけない部活ですが、団体競技や文化部がこれに当てはまります。サッカー部や野球部、茶道部あたりですね。こちらの身体能力

はその辺の高校生とは比にならないので、周りがついて来れません。文化部はポイントがほとんど稼げません。（全種類100回試走した私が言うので間違い）ないです。

それと、自分で部活を作るのもオススメできません。代行サービスでもしてみようかと思いましたが、止められました。他にも、部活で商業行為をしようとしたが、あっさりバレて廃部になりました。頭に来ますよ。

一方、個人競技なら十分全国レベルを目指せるので、大金を獲得できます。

今回はテニスします。国際大会なんかを見ても分かりやすいのですが、テニスは賞金が高いです。これが一番効率いいと思います。堀北の表情でも楽しみながら時間が過ぎるのを待ちましょう。堀北兄の姿を確認した後堀北は石になるので、弄り放題です。どんどん行きましょう。お次は水泳の授業です。

女子の大半は見学しますが、参加してください。優勝すれば5000ポイント貰えます。場合によつては後で泣きます（1敗）
櫛田に注目が集まっていますが、無視して高円寺に話しかけてください。ナニがとは言いませんが、ブリーフのせいで主張が激しいです。

すごく……大きいです……（意味深）

そう思つても、襲わないでください。退学になるので再走です（5敗）。あのさあ……。

レース前に堀北が綾小路の筋肉をお触りするので、気になる兄貴たちは勝手に行つて、どうぞ。暴れるなよ……暴れるな……。
女子は人数が少ないので、最初から決勝戦です。つまり総当たりですね、わかります。それでは対戦よろしくオナシャス。

種目は自由形50mです。とりあえず光を置き去りにすれば一位です。

対戦ありがとうございました。

ぼつちだと速いね、とか言われることもほとんどないので気が楽です。さつさと堀北の側に移動してください。確実性が増します。

堀北に中学の頃に所属していた部活動を聞かれるので適当に帰宅部と答えておきましょう。綾小路のパクリですが割と最適解だと思います。

はい、これで5000ポイントゲット。自主的に獲得したのはこれが初めてですね。

今後もこうやって拾えるところはどんどん拾っていきます。逃したら再走です。

裏でノンケがおっぱいで賭けをしているので、頭に来たら止めさせましよう。変態男子を、ぶつ壊す！ イケ、私の忠実な僕たち！ さて、それではスッキリしたところで次が4月最後のイベント、小テストです。

原作を読む限りここではポイント貰う描写はありませんが、茶柱先生に聞いたら貰えるようです。今回は100点で10000ポイントです。もつと貰えないか試しましたが、上がりも下がりもしませんでした。どうやら校則で決まっているようです。なので（画面の奥の兄貴たちは深追いする必要）ないです。

テストは主人公の頭脳にかかるれば満点です。これで10000ポイント獲得です。

これにて4月のイベントは全て完了です。お疲れ様でした。

現時点で獲得したポイントは115000ポイント、残りは1988万5000ポイントです。進捗で言えば0.575%、今回で0.075%進みました。これ、終わるのか……？ ボブは訝しがります。今回はこ→こ←までとなります。次回もよろしくオナシャス！

4月 裏話

入学式の翌日、2日目の放課後。この日は部活動説明会が行われる。部活に入る予定の愛はもちろん行くつもりにしているのだが、一人だと寂しい。

そこで目をつけたのが堀北鈴音だつた。堀北は今後必要不可欠な人だし、ある程度関係を深めておくのもいい。

そう思つて、ホームルームが終わつてすぐ堀北のもとへ向かい、抱きついた。特に深い意味は無いが。

「堀北ちゃん、部活動説明会行かない？」

「行かないわよ。部活なんて入るつもりないもの。それに離れてくれないかしら」

愛は堀北が部活動説明会に行かないことも、部活に入らないことも知つていた。正確には知らされていたと言う方が正しいのかも知れないが。

それでも、愛は堀北と友達になるべく折れるまで誘い続けるつもりでいた。

「堀北ちゃんが一緒に行つてくれるつて言うなら考えてあげる」

「綾小路くんが一緒に行きたいらしいから、二人で行つてきたらどうかしら」

「じゃあ綾小路くんも参加決定。あとは堀北ちゃんが頷くだけなんだけど。綾小路くんからも何とか言つてあげてよ」

愛がそう言うと、綾小路は自分に振られたことに少し驚きながらも、堀北を勧誘すべく口を開く。

「堀北、行つて損はないと思うぞ」

「それは得もないってことよね？」

「それは……」

綾小路が言葉に詰まらせていると、堀北は大きなため息を吐いた。

「……分かつたわ。少しだけなら行つてあげるわ。だから離れてくれないかしら」

「ありがとう、堀北ちゃん！」

「はあ……」

堀北も仲間に加えた愛は3人で体育館へ向かう。

部活は何にしようか。出来れば個人種目がいい。団体種目は向いていないと知っているから。

そんなことを考えながら体育館へ向かう。

「綾小路くんは部活入るの？」

「いや、オレは入らない予定だ。少しでも友達ができたらなあ、って思つたんだ」

「なるほどなるほど」

綾小路は昨日の自己紹介で失敗していた。事なきれ主義としては、ほどほどに友達がほしい。可もなく不可もなく、そんな学生生活を目指している。

「あ、じゃあ連絡先交換する？」

「いいのか？」

僅かに綾小路の口調が弾んだ。何せ彼が初めて手に入れることになつた連絡先が愛のものだからだ。

堀北はそんな二人を一度見て、視線を前に戻した。体育館はもう目の前だ。

「よかつたじゃない、綾小路くん。友達ができるて

「……そうだな」

体育館には既にかなりの一年生が集まっていた。その中には、須藤健や池寛治、山内春樹の姿もあつた。

「おい綾小路、お前もう抜け駆けか!?」

「違うって」

「俺より先に彼女作るとか許さねえからな！」

確かに側から見ればそう見えるかも知れない。しかし、綾小路にとつては片方は未だ友達認定されてもらっていない堀北、もう片方はさつき連絡先を交換してもらつたばかりの愛。

自己紹介で失敗した綾小路が2日目にして彼女を作るなど、普通に考えればあり得ない話である。

「違うって。私たちは友達つてだけ」

「ならいいけどよ」

愛が助け舟を出すと、須藤以外の二人は急に安心した表情になり、絶対に先に彼女つくんじゃねえぞと言い残して何処かへ行つてしまつた。

「須藤くん……だつけ。君は部活入るの？」

「ああ。俺は子供ン時からバスケ一筋だ」

「へえ、団体競技か。私が苦手な分野だなあ」

「俺も団体競技は苦手だと思つてたんだけどな。バスケだけはしつくり來たんだ」

そんなことはないだろう、愛は内心思つた。

団体競技は一対一ではない以上、自分自身の能力を最大限發揮するだけではどうしようもないところがある。その点、個人競技は自分のことだけに集中できる。愛にとつては、後者の方がしつくり來っていた。

「そつか。私は個人競技の方が好きだからねー」

「静かにしてください」

そんな他愛無い会話をしていると、物腰の柔らかい声が体育館中を包み込んだ。

「これから部活動説明会を始めます。司会は生徒会書記の橘です」
私語は止み、それぞれが部活を知るべく壇上に注目する。

サッカー部や野球部などメジャーなものから、滅多に聞かないようなマイナーな部活まで様々だつた。しかし、どれにも共通して言えることがあつた。

「やっぱり施設は充実してるんだね」

「国立だからだろうな」

多くの部活に——特に、部員の多い部活に専用の建物がある。部員が多いほど部費も増えるので、当然のことと言えるだろう。

「——つ

突如、先ほどまで綾小路に空手を勧めるほど軽口を叩いていた堀北の動きが硬直した。

「この部活は——つて堀北?」

「……」

綾小路の声にも全く反応せず、その視線は壇上に向けられたままだった。

そんな堀北を見た愛は、あろうことか頬を突きだした。

「おお、柔らかいしすべすべだ……。毎日手入れしてるね、これは」

「……やめなさい」

「あはは、ごめんね？ ちょっと面白くって」

堀北が愛を睨みつけるが、当の本人はそんなものは全く気にしていなかつた。

そして最後の紹介、生徒会。壇上には生徒会長の堀北学——堀北鈴音の兄が立つていた。

堀北はさつきと同じように全く動かない。愛はまた頬を突くが、今度はそれにも反応しない。

「返事がない、ただの屍のようだ……」

「いや死んでないだろ」

「そりやそうだよ。例えだからね」

学は一向に話そうとしない。そのせいか、会場は笑い声や私語で溢れかかる。このままでは壇が開かない、そう思つて櫛が注意を呼びかけようとしたところで——会場が静まり返つた。

無駄な話はしてはいけない、そんな謎の張り詰めた空気に包まれていた。

「すこつ……」

壇上で淀みなく生徒会の説明を行う学に、愛は感嘆の言葉を漏らす。

学が話を終えて、解散になつてもしばらくその空気は留まり続けた。

帰つていく生徒の中にも、萎縮しきつた様子の人気が何人か見受けられた。

「おーい、堀北ちゃん、終わつたよー」

「……分かつてるわよ」

一番影響を受けていたのは、彼に一番近い少女だった。

?? ?? ??

——何だあの変人は。

4月も半分が過ぎ、Dクラスの誰もが八遠愛に抱いた感想がそれだつた。

櫛田桔梗や軽井沢恵をはじめとした活発な生徒と関わりを避け、堀北や綾小路、極め付けには高円寺六助と言つた目立たない生徒や変わり者とばかり仲良くしようとしているからだ。その上、ポイントはいくらでもあるはずなのに、食堂では何食わぬ顔で山菜定食を頬張つている。0円モノを買つていてる様子しか見たことがないので、実は0円生活をしているのではないかという噂さえ流れる始末。

決して性格の悪い人間ではないのだろうが、そういうふた謎めいた行動のせいで近寄りがたい人だというイメージが定着しつつあつた。

「おはよう、堀北ちゃん！」

「抱きつくのはやめなさい……。それに、ちゃん付けも止めてと言つたでしよう？」

だからこそ、堀北にとつて愛が話しかけてくることはある意味櫛田よりも鬱陶しく感じていた。

純粹に“疲れる”のだ。

「え？ 何それ初耳なんだけど」「はあ……」

今の注意も以前に何度したことか。堀北はそう思いながらため息を漏らした。

堀北がやめてほしいと言つたことはことごとく無視された。関わるな、抱きつくな、ちゃんと付けするな……。

堀北がどれだけ関わりを持たないようにしても、愛は次の休み時間には同じように話しかけてくる。

優先順位の先頭が自分自身ではないことが唯一の救いかも知れない、そう思わなければ今まで孤独を貫いてきた堀北のキヤバを超えて

しまいそうだった。

それは堀北に限ったことではない。綾小路や佐倉といった、友人を作ることに失敗したり、一人を好む人によく話しかけているのを見る。にも関わらず、軽井沢をはじめとしたグループには関わろうとしないばかりか、拒絶とも取れる反応を示していた。榎田に似ているようで全く違う。八遠愛はそんな少女だった。

「あ、そういうえば今日つて水泳の授業があるんだったよね」

「らしいわね。あそこで集まつて良からぬことをしているけれど」

堀北が視線を向けた先では、池や山内をはじめとした男子生徒数名が下らない会話をしている。その声は教室中によく響いていて、何かの女子生徒が怪訝そうな顔をしながら会話をしていた。授業を見学しよう、という類だ。

その男子の集団の中には綾小路の姿もあり、すぐに愛の目に留まった。

「池くんたちがこんなに朝早くに来てるなんてね。面白そうだし行つてみようつと」

「そ、そう……」

愛が池たちの方へ向かつて行くのを確認すると、堀北はまた小さくため息を零す。

八遠さんは自分とは違つて一人を好むタイプではない。ポイントも全て使い切つた訳ではないはずなのに、山菜定食ばかり食べている。コンビニで会つた時も、真っ先に0円コーナーを見つけてその物を買つていた。

八遠愛の行動の目的は何なのか。

いくら考えても、堀北の頭に浮かぶのはそんな疑問だけだつた。

「へえ、童顔で貧乳だから興味ない？ 子供っぽい体型で悪かつたね！」

「ごめんつて、ごめんなさい！」

そう騒ぎ立てる池と愛を無視して、堀北は本を開く。一刻でも早く本の世界に入つて、頭痛の種から逃れたかったのだ。

それでも既に悩みの種は堀北の頭にしつかりと根を張つていた。

ページをめくる手がほとんど進んでいないのだ。

ちょうど教室に入ってきた高円寺の元へぱたぱたと駆けていく少女の謎の多さが、かえつて興味を惹いてしまう。

「おはよう、高円寺くん。今日も決まってるね」

「おはよう、八遠ガール。今日も君は相変わらずだねえ」

どうやら高円寺は愛とだけまともな会話をするらしい。変わり者

同士、何か近いモノを感じたのか分からない。

そんなことを考え、堀北は一度上げた顔をまた本に戻した。

そこにあるのは、いつもと何ら変わらないただの日常だけなのだから。

今日もDクラスは騒がしい。休み時間も、授業中も。堀北には本当にこれを授業と呼んでもいいのかと頭を抱えるほど悲惨なものだったが、教師は誰も注意する様子はない。

そんな騒がしさの中、時間はあれよあれよと経過していく。

そして数時間後、男子が楽しみにしていた水泳の授業を迎えた。

高度育成高等学校のプールは、屋内型でしかも温水だ。そのため、4月という水泳には早い時期でも授業を行うことができる。

いつもは遅刻したり時間ギリギリに登校してくる池たちが朝早くから盛り上がっていたのは、この授業のためだ。

「長谷部は!? 長谷部がいないぞ!」

女子が着替えて男子と合流すると、池がそう叫んだ。

池の言う長谷部という生徒は、併設された見学スペースに姿を現した。

「巨乳が……。ああ……」

目に見えて落胆する池たち数名の男子生徒。女子たちはそんな彼らを汚物を見るような目で見下している。

「何してるんだか。朝からあんなことしてたらそりやそうなるつて」

「俺たちは今崖っぷち……。そして目の前には断崖絶壁……痛い、痛

いって！ ギブ！ ギブ！」

「何か言うことは？」

「ごめん！」

池を羽交い締めにすると、どこから出したのか分からぬほど冷たい声で愛は池に迫った。

池は謝つたことで無事に解放されたが、膝は笑っていた。しかし、周りの男子には聞こえていないようで、揃つて首を傾げていた。

「愛ちゃん、池くんが可哀想だよ」

「……」

「櫛田ちゃん……！」

愛は櫛田を——正確には櫛田のある一部分を——睨みつけていた。

何人かはそれに気づいて理由を察して苦笑いを浮かべていたが、櫛田は気付いていないかのように笑顔を浮かべていた。

愛は櫛田を一瞥すると、顔を伏せて横を通り過ぎていく。

「櫛田ちゃんには私の苦労なんて永遠に分からぬだろうね」

「……」

すれ違ひざまに発せられた、二人にしか聞こえない声。だが、周囲の空気を一変させるには十分だった。櫛田にさえ聞こえていれば、お得意の笑顔が消える。異変に気付いた周囲に広がっていくまでにはそう時間はかかるない。

櫛田の目標に『全員と友人になる』というものがある。本人もそれを達成できるだけの力はあると思つていて、だからこそ未だに愛と友人関係になれていないことに疑問を抱いた。

八遠さんはコミュニケーションが苦手なわけじやない。現に堀北や佐倉さんをはじめとした子との仲はいいように見える。でも、私や軽井沢さんたちに対しては意図的に避けている。

八遠さんは違う中学校。あの事件のことを知っているはずはない。

堀北が教えた……？ そんなことをあいつがするはずがない。多分あいつの中ではあの事件はどうでもいいことだ。

様々な憶測が櫛田の頭を駆け巡るが、どれ一つとして当てはまるものがいる。

「櫛田ちゃん……？」

「ごめん、何でもないよっ！」

池に声をかけられて櫛田は我に返つた。離れたところで高円寺と親しげに談笑している愛には、さつきの面影はどこにもなかつた。

「おーい、お前ら並べー」

体育教師の号令がかかり整列する。教師の男は参加者の少なさを一瞬だけ気に留めたが、追及することはなかつた。

「今日は最初だし、50m泳いでもらうからな」

「先生、泳げません！」

男子生徒の一人が、そんな悲痛な声をあげた。他にも何人かいるようだつたが、教師はそんな彼らを見渡して言つた。

「大丈夫だ、俺が絶対に泳げるようにしてやる。いつか役に立つときがくるからな」

「絶対にいらないですって！」

「いや、ダメだ」

そう言つて準備運動をするように指示した。各自散らばつて、楽しげに喋りながらする人、見えきつた未来に絶望する人など様々だった。

愛は相変わらず高円寺との会話を楽しんでいた。

「高円寺くんは水泳も速そうだよね。筋肉割れてるし」

「そうだねえ。この中では私に匹敵する相手はいないね」

相変わらずの自信家だ。誰の実力も見ていないのに、自分が一番と言いつつた。

実際にそうちだから反応に困るなあ……。

ポーズを決める高円寺を見て、愛は苦笑いを浮かべるしかなかつた。

「そういう八遠ガールはどうなんだい？　早くから私の魅力に気づいた君なら一位を取つて当然だと思うんだが」

「あはは、どうかな。でも、負けるつもりはないかな」

強敵といえば、堀北や水泳部の小野寺たち。

だが、負ける未来は見えなかつた。

自分には才能がある。ちょっと運動ができるから、部活動でやつているから、そんな理由で負けるつもりは全くなかった。

各自準備体操が終わると、50mの競争をすると宣言した。

泳ぎが得意な人からは歓声が上がるが、苦手な人は悲痛な叫び声をあげるしかなかった。

「記録が悪いやつ10人は補習だからな、ちゃんと泳げよ。その代わり男女それぞれ一位の生徒には俺から5000点あげよう」

その言葉が運動が不得意な生徒に追い討ちをかける。一方の自信がある人は、少しでもポイントを得ようと躍起になつた。特に、多くの生徒は金欠になり始めている頃だつたのだから。

その後、男女共にいくつかのグループに別れて予選を行う。予選突破を決めて喜ぶ生徒、まずは成績で安堵する生徒、最下位ファニッシュを決めて補習確定に嘆く生徒など様々だ。

男女別にいくつかのグループに分けられて予選を行うことになった。最初に男子の予選を行いそのあと女子の順位決定戦、男子決勝へと続していく。

「堀北ちゃんとグループかあ。楽しみ」

「相手があなたでも小野寺さんでも負けるつもりはないわ」

「言うねー、堀北ちゃん」

その会話の間、男子の予選が行われていく。まず須藤が決勝進出を決めた。

「あれ、綾小路くんはダメだつた?」

「ああ。順位は真ん中辺りだからな」

2組目の綾小路は決勝には進まないが、補習もないという微妙な位置で泳ぎ切つた。

「その割にはフォームはすごく綺麗だつたよね」

「そうね。体つきもしつかりしているもの。綾小路くん、中学の頃は何かやつていたのかしら?」

「ああ、ピアノと書道なら」

綾小路はそう言つたが、堀北は全く信じていない様子だった。

「書道つてあのでつかい紙に書くやつなんじやない? 座つて書くやつじやここまで筋肉いらぬでしょ」

「ちよつ」

「おおー、筋肉だ……。堀北ちゃんも触る？」

「やめておくわ」

愛が綾小路の許可なく体を触り出し、堀北にも勧める。綾小路は急な出来事に驚いていた。

「お、最後じゃない?」

スタート地点に向かつていたのは平田だ。女子からの歓声を一身に浴びていた。

「フツフツフ、私の肉体美に見惚れているだけではいけないよ」「……」

同じ組の高円寺は何をどう勘違いしたのか、平田に向けられた黄色い声援を自分に向けられたものだと思っているらしい。

女子からは気持ち悪い、などと言われているにもかかわらず、本人は気にしていなかった。

高円寺が履いているのはブリーフ。女子が引くには十分すぎる威力だった。

「高円寺くん、頑張つて！」

「フツ」

愛が高円寺に向かつて声援を送ると、高円寺は手を上げて応える。しかし、周りからの視線は冷たいものだつた。

けれども、愛には野望がある。最速で2000万ポイント集めてAクラスに上がるという野望が。与えられた才能と知識をフル活用し、誰も成し遂げたことのない偉業をやってのけるのだ。

そのためには、多少の恥さらしは我慢せねばならない。

「よく高円寺くんと仲良くしようと思つたわね」

「なんか逆にあれくらいの方が面白そうかなーってね」

その会話とほぼ同時に笛が鳴る。

一斉に飛び込み、平田と高円寺が先頭争いを展開する。

しかし、それも長くは続かない。

「うおっ、あいつ速っ！」

高円寺は平田を突き放し、折り返しの時点でき半分ほど先行した。須藤が驚くのも無理はないだろう。

そのまま高円寺が独走を続け、先頭でフイニッッシュ。

「フツ、今日も私の筋肉は絶好調だねえ」

それでも本人はまだ余裕そうだ。

平田は2位でフイニッッシュしたが、決勝には出場できるタイムだった。

「平田くんすごいよね。何でもそつなくこなすイメージじゃない?」

「まあ、そうね」

2位は1位の影に隠れて目立ちにくくと言われているが、平田にはそんなことは関係ないらしい。決勝でリベンジしてやれ、と女子から声援を受けていた。

「あ、次私たちの番だね」

「ええ」

愛と堀北は立ち上がり、スタート台へ向かう。しかしその途中で一度立ち止まり、堀北の方を振り返る。

「本気で泳いでよ」

「……」

事実上の宣戦布告。堀北がそう理解するのにほとんど時間はかからなかつた。まだ戦いは始まつていないにも関わらず、そう言い切つた。その自信家っぷりは高円寺に似ているものがあつた。

「流石だね、高円寺くん」

「我ならこれくらいは当然さ」

すれ違つた高円寺からの返事に、相変わらずだねえ、と苦笑いを浮かべ、愛はプールの中へ入る。温かな水が心地いい。

「よーい」

そして笛が鳴り響く。

同時に壁を蹴り、ゆっくりと浮上していく。十数メートルのところでクロールの形に。

隣には——堀北ちゃんだけ。みんな、もう何十センチか後ろだ。これからどんどん差が広がっていくのだろう。それは堀北ちゃんも多分同じ。それは寂しい。

ターンしたところで後ろとの差は身体一つ分。これでも本気では

泳いでいない。周りが遅いだけだ。

来たところをまた戻り、愛は1着でゴール。他也続々と泳ぎ終えた。タイムは25秒ジャスト。記憶の中での小野寺のタイムは26秒台だったはずだから、これでいいはず。

プールから上がり、ゴーグルを外し、元いた場所——今綾小路がいるところへ戻っていく。後ろから堀北が早歩きで追いかけて来た。息が荒いので堀北なりに全力で泳いだのだろう。

「はあ……はあ……あなた、今の本気じやなかつたわよね？」
「どう思う？」

互いの視線が交錯する。愛の挑戦的な笑みを、堀北は真正面から受け止める。

愛は小柄ではあるが、堀北には愛のシルエットがいつもよりも大きく見えていた。

「堀北から目を逸らし、愛はまた綾小路の隣へ移動する。
「意外と速いんだな」

「意外って言葉が腑に落ちないけど……まあいいや。まあ、あの中じゃ負けることはないかな」

堀北が愛を睨んでいたが、それ以上何か言うことはなかつた。腰を下ろし、プールの方へ目を向ける。

こちらの方が色々な意味で激戦区だ。小野寺と櫛田がいる。各所で激しい争いが行われることは間違いないな、と愛は思つた。

「八遠、高円寺はいいのか？」

「……あんなんじやちよつと近寄りにくいにしょ」

「だな」

視線の先では、水道の鏡に向かつてポーズを決めては『嗚呼、今日も私は美しい……』と自画自賛している高円寺がいた。その身なりも相まって、さすがの愛でも易々と近づくことはできなかつた。

そんな高円寺の様子を眺めていると、スタートの笛が鳴り渡つた。スタートから抜け出したのは、やはり小野寺。水泳部に所属しているだけあつて力量はかなりのもの。どんどん後ろを引き離していく。「やっぱり水泳部は強いね！」

「経験が違うんだろうな」

そのまま小野寺が一位でレースを終えた。タイムは25秒台だったが、僅かに愛には届かなかつた。

「あっぷなー……」

「あなたが一位かしら」

「そうだね。樋口は私のものよつ！」

堀北は興味なさげに「良かつたわね」と言うとそれきり口を開かなくなつた。まだ負けたことを根に持つてゐるらしい。

ため息を漏らした愛は、これから行われる男子の決勝を見るべく視線をプールの方へと移す。

男子の決勝には概ね予想通りの生徒が集まつたと言えるだろう。決勝でも平田は誰よりも歓声を浴びていた。それを見た須藤は舌打ちをしていたが、高円寺は相変わらず自分に向けたものだと勘違いしている様子だつた。

「綾小路くんは誰が勝つと思う？」

「オレは……須藤だと思う。予選も相当速かつたしな」

「平田くんはないでしようね」

「平田くんも速いけど、やつぱりこの相手には厳しそうだよね」

優勝者が誰かなんて分かりきつてゐるけど。

きっと与えられた知識が無くとも、誰が優勝するかなんて簡単に予想がつく。

「でも、多分高円寺くんが勝つんじゃないかな」

「それは単純にあなたが勝つて欲しいだけじゃないかしら」

「ううん。須藤くんも平田くんも予選でかなり疲れてる。でも、高円寺くんだけはまだ余裕があつたからね。多分本気で泳いでないんじゃないかな」

陸上を例に出すと分かりやすいかも知れない。

予選だと突破を確信した場合、最後に流すのが普通だ。それは決勝に向けて体力を少しでも多く残しておくための戦略の一つ。

もつとも、高円寺自身にそんな意図があるかどうかは愛にも分からなかつたが。

「始まつたな」

「そうね」

一斉に飛び込むと同時に歎声が沸き起ころ。ほとんどが平田に向かれたものだということは言うまでもない。

しかし、折り返しの時点では先頭は高円寺。それに須藤が続く。平田は僅かに遅れる形となつた。

しかし、最終的には高円寺が須藤を5m離して先にファニッシュ。須藤は前半で体力を使い果たしてしまつていた。

そのあと3位で泳ぎ終えた平田だつたが、プールサイドに上がるどぐるに女子に取り囲まれていた。

ちなみに決勝にはもう一人いたが、愛も堀北も綾小路も誰も名前を覚えていないわゆるモブ生徒だつた。

無事に愛は5000ポイントを獲得した。『最速でAクラスに昇格する』という彼女の目的に一步近づいたと言えるだろう。必要なポイントが2000万である以上、全工程から見ればとても小さな一步だ。

目標を成し遂げるためとはいゝ、高円寺というもつとも面倒であろう男と交友関係を築くことは非常に気に食わない。しかし与えられた知識がそうしろと警鐘を鳴らす。この先行われる無人島試験や体育祭で高円寺はサボってしまう。それだけは食い止めなければならない。

授業後、偶然高円寺の姿を見つけた愛は彼の下へ向かつた。

「高円寺くん、一位おめでと」

「フフッ、私にかかれば当たり前のことを」

髪を搔き上げ、高円寺は続ける。

「そう言う八遠ガールも一位だつたじやないか」「結構ギリギリだつたけどね……」

「その割には余裕そうだつたようだねえ？」

「うつ……」

高円寺は協調性が皆無なだけでとても優秀な男だ。やはりバレていたか。

「一度も息を荒くしていなかつたことに私が気づかないでも？」

「……ううん。意外とちゃんと見てるんだなって思つただけ。私が見た時はいつも鏡と睨めっこしてたからさ」

「相手の方から話しかけてくるというのは珍しいからねえ。気になるのは当然だと思うのだがね」

「それもそうだ。ただ、もう少し時間がかかるだろうという予想でいた。高円寺は自分にしか興味が無い男だと愛は考えていたからだ。」「そうだよね」

あはは、と愛は笑つた。

何にせよ、状況は少し進展したと言えるだろう。友人とは言えなくとも、興味を抱いてくれたのだから。

この平和な生活が終わるまで残り2週間、それまではぬるま湯に浸かっていてもいいだろう。

高円寺の隣を歩く愛の足取りが僅かに軽くなつた。

5月 その1

目標の難易度はルナティックなのに一個一個こなすべきことの難易度は低いRTA、はーじまーるよー。

今回は5月分を進めていきます。

5月のイベントは一つだけなので確実に攻略していきましょう。気を抜いたら負けです。気を抜いたら負けだからな?

ちなみに今は5月1日のホームルームです。『茶柱先生、教え子をバカにするの巻』が開催されています。

適当に高円寺とイキつておきましょう。今更減る好感度なんてねえ。

それが終わると池たちがゲームを買ってくれと頼んできますが、断つてあげましょう。軽井沢も嫌々ながら金くれ金くれと言つてきますが、突っぱねてください。敗北者に慈悲はない。

茶柱先生に0円生活をバラされるので、堀北に色々職質されます。が、適当にそれっぽいことを並べておけばいいです。クラスポイントはギリギリまで伸ばしたいので、堀北の成長もある程度は必要です。綾小路と同じく、気づかせるやり方でいいと思います。というか私のプライベートはどこにあるんですか?

初回にて冗談半分でBクラスに上がっているかもと言いましたが、実際それに匹敵するくらいのクラスポイントは必要です。

ポイントがなくて落ち込んでいるDクラスの側で私は勝ち誇った表情で今日も山菜定食を貪ります。Dクラスの大半が同じものを食べるはずなのに、浮かべる表情は真逆になるという構図が簡単に想像できま……。

……。

……。

察しのいい兄貴なら『あつ……(察し)』と反射的に呟いたでしょう。

何が起こつたかは言うまでもないです。

現在私の机の前には豪勢な料理が並んでいますね。幻覚ででしょうか。いつもは山菜とご飯だけの氣がするんですけど。

そうだよ（便乗）。ガバつたんだよ（逆ギレ）。はい、あろうことか手が滑つてスペシャル定食を頼んでしまいました。

注文は食堂のおばちゃんに口で注文するのですが、私目線でいえば画面に現れる選択肢から選ぶタイプのものです。その配置がいやらしい。山菜定食とスペシャル定食が隣り合っているんですね。今まで何万と押してきて、目を瞑つても外すことはないレベルまで精度が上がつていたので、それが慢心に繋がつたようです。

今までガバがなかつたというのも要因の一つだと思います。マイナス1000ポイントです。お前高スギイ！

おばちゃんが事件だと騒いでいますが、マジで事件です。周りの生徒が『山菜女がスペシャル定食食つてやがる！』と騒いでいやがります。こつちだつてスペシャル定食を食いたいわけじやないんじやい！

1000ポイントなら僅かに足りなかつた場合誰かに借りれば済む話なんですが、その時間すら口スになつてしまします。畜生！

氣の緩みを反省し、これからはガバ0でお送りします（フラグ）。山菜定食エ……。

悲しみに打ちひしがれながら、スペシャル定食の味を噛みしめます。Aクラスに上がるまではこれ以上味わわないようにするんだ、と決意しながら、丁寧に味わつて食べ進めていきます。

クラスメイトにいい身分だな、と皮肉たっぷりに言われたら睨みを利かせてあげてください。山菜定食と変えてあげようかと言われたら、ぶつきらぼうに断つておきましょう。山菜定食よりスペシャル定食の方が美味しいに決まつてるだろいい加減にしろ！

というわけで、無事に高円寺や綾小路以外は凹んだところで先に進んでいきましょう。そこら辺に転がつて いる屍は適当に踏み潰して乗り越えておいてください。

5月といえば中間テストです。

堀北が3バカ（池、山内、須藤）を対象に勉強会を開くようで、奢りで釣ろうとしてきます。折角なのでついて行つてあげましょ。綾小路はスペシャル定食を奢つてもらつたようですが、私は山菜定食を奢つてもらいます。これでWin-Winですね。

勉強会には参加します。堀北の代わりに勉強をマイナスから教えてあげましょ。これでテストの成績アップを狙います。平田の方は参加しようとしても、（女子たちとの関係が最悪なので意味）ないです。

それと並行してやつておくことがあるので、先にそちらを説明しておきます。

堀北が勉強会を開かない日——その日にも会場である図書館に足繁く通うようにしてください。

図書館にはAクラスの生徒も現れます。今後、彼らが鍵になってしまいます。Aクラスは坂柳派と葛城派に分かれていますが、坂柳派に接触してください。親しいとまでは言わなくとも、顔見知りくらいまでは親交を深めておくことをオススメします。その理由はその時になつたら説明します。

（葛城と親しくしても意味）ないです。葛城は使えません。無駄に眩しいですがゴミ同然です。それと個人的に弥彦は嫌いです。

この時にDクラスにだけ伝えられない、範囲の変更も教えてくれます。伝えたら須藤赤点危機ルートは回避できる上、テスト対策が早く行えるため全体の点数アップに繋がります。特に下位集団ですね。

そうすると、貰えるクラスポイントが若干上がります。原作では87ポイントとなっていますが、5~10ポイント増しで5月を終えることができます。たかが500から1000ポイントですが、スペシャル定食のことを考えればバカになりません。

それでは勉強会開始です。何で櫛田がいるんですかね。愛ちゃんじやダメなんだ……。あつ、ふーん。

須藤たちは連立方程式すら理解できないレベルなので、算数の復習からです。

といきたいところなんですけど、当日までに総復習は無理。なのでしばらくは行動は起こしません。Aクラスから範囲の変更を教えられ次第堀北に伝えさえすれば十分です。

堀北が3バカに罵詈雑言を浴びせても、基本アクションなしの方向で。しばらくはことの成り行きを見守つてあげましょう。

このタイミングで裏櫛田公開イベントがありますが、行かなくていいです。無駄にヘイトを向けられるくらいなら、知らないふりをしておいた方が楽です。

その後の堀北兄弟イベントは、櫛田イベントを通過しないと（遭遇でき）ないです。張り込みで行けるだらいい加減にしろ！ と野次が聞こえきますが、張り込みをしてると堀北兄にバレます。余計な原作破壊は今後に悪影響を及ぼすので、ポイントに関わる部分だけで十分です。

3バカに関して、堀北とは別で勉強会を開くのが一番いいかと思います。彼らには出来るだけ高得点を取つて欲しいので、綾小路が過去問を入手したタイミングでコピーを貰い、3バカに渡します。あとは暗記ゲーです。

なお、ちゃんと監視してあげてください。隙あらばサボるので、それを防止するためです。

テスト当日までは、部活に勉強にとやることがたくさんですが頑張つてこなしていきましょう。それと、ポイント請求も忘れずに。10000ポイント、スペシャル定食10人前です。かなり大きいと思います（小並感）

上手くいけば3バカの順位が真ん中になつてくれるはずです。これで点数買収イベントも潰れます。7巻の綾小路の雑談のネタが減りました。

テスト後、打ち上げに誘われる所以で参加します。その時に綾小路の部屋の合鍵を入手します。おそらく使わないと思います。

今月は10000ポイントしか貰えませんでしたね。

……10000ポイントマイナスも忘れずに。今回は9000ポイントです。

進捗でいえば理想がプラス0.05%、現実は0.045%です。獲得ポイントは124000ポイント、総進捗は0.645%です。理想は0.65%なんですね。それでは今回はここまでです。次回もよろしくオナシャス！

5月 その2

やたらとガバを根に持つRTA、はーじまーるよー。
前回、5月分を終わらせると言いましたね？

あれはうそだ。

はい、というわけで今回は5月後半戦です。

おい原作では5月分終了してのぞこのガチホモが、だつて？
いやいや、私はノンケです（）

では兄貴たちの時間を取らせるわけにはいかないのでさつさと進めます。

今回は2巻の内容をさつさと終了させるための下準備をします。
2巻は須藤の暴力事件を解決すべく綾小路や堀北たちが奔走する話ですが、私にはそんなことをしている暇はないのです。ちょうど6月上旬にはテニスの地区大会があるので、彼らに付き合っているとコンディション管理がうまくいきません。

じゃあ無視しろよ、というせつかちな兄貴の皆さん、少々お待ち下さい。

実はこの暴力事件でもポイントを稼ぐことができます。

そう、証拠の提出です。

これをしてことで500000ポイント獲得できます。

今までが50000ポイントや100000ポイントだつたことを考えるとともに大きな収入ですね。

……失った10000ポイントは一生忘れませんがね。

証拠の集め方ですが、試走の結果から思想したところ（激ウマギヤグ）、運ゲーであることが判明しました。原作に日時が指定されていないイベントはランダム発生の模様。運ゲーにおいて大切なのは運です。

最近FGOを始めたのですが、早速剣トルフオを引き当てるのでは（運は問題）ないです。

やることは簡単、事件発生まで現場で張り込みをするだけです。小学生でもできるね！

発生日時は須藤が綾小路に相談を持ちかける6月1日の前の週です。

月曜日から金曜日の5日間に及ぶ張り込み。場所は特別棟です。5月とは言えかなり熱がこもりやすいので、他の場所よりも暑いです。

それに、最終日まで引っ張られると若干怪我のリスクが上がります。その間部活に参加できないからね、仕方ないね。

怪我の可能性を少しでも抑えるために、朝の軽い運動は欠かさず行いましょう。

そういえば、リアルでも朝にランニングしているという健康志向の兄貴のためにいいことを教えてあげましょう。

どうやらランニングといった朝の運動は健康にはあまり良くないそうです。まだ体が起ききっていない時に無理に体を動かすことが良くないらしいです。するならウォーキングや散歩がいいのではないかでしょか。お前愛ちゃんにランニングさせてるだろ、だつて？
……細けえこたあいいんだよ。

詳しくはヤフーでググつて、どうぞ（）

はい、特別棟に到着しました。張り込む場所は3階です。ですが、ここで一つ注意点。場所によっては佐倉さんに見つかる危険性があります。

須藤が去っていく方向に佐倉さんはいるので、そこから見えない位置——理科室前の廊下にてスクープを狙います。

それではいきましょう。RTAの醍醐味の一つ、運ゲーのお時間です。本RTAの中の数少ない運要素の一つです。

1日目。スポーツドリンク——ではなく、綺麗に洗った拾い物のペットボトルに入っている、ウォーターサーバーの水を片手にその時を粘ります。塩分補給は汗でも舐めればいいんじゃないですかね（適当）

張り込む時間帯は午後5時から午後6時半の90分間です。一部始終を携帯に収められればそれで終わりですが、最長で5日間、計7時間半に及ぶ戦いの幕開けです。

1日目で終わればラッキーです。

廊下の奥に見える紅の空を見つめながらのんびり待ちます。その間はとても暇なので、ホモという単語について理解を深めておきましょう。

ホモはラテン語で「人」という意味だそうです。

……あつ（察し）

また、ホモには「均質化」という意味もあり、主に牛乳やソーセージの脂肪分の分離を防ぐために脂肪球というものを細かくする加工のことを指します。この加工を行った牛乳やソーセージをそれぞれ「ホモ牛乳」「ホモソーセージ」と言うそうです。そこの兄貴も食べたことのある可能性が微レ存……？

他にも、某大手文房具会社が発売している鉛筆の一つに「HOMO」という名前のものがあります。もしかしたら兄貴たちも見たことがあるんじゃないですか？ 他にもいくつかの意味があるようなので、気になりすぎて逝つてしまいそうなそこの兄貴はすぐに調べて、どうぞ。

参考、Wiki先生。

さて、ホモに関して簡単な講義をしてみたところでタイムアップです。

残念ながらスマホに收めることはできませんでした。流石に那么简单にはいきませんね。

3日目までに終われば問題ないので、それまでは気楽にいきましょう。

2日目。ここで終われば運が良い方です。

移動の際は堀北たちに訝しまれないように気をつけてください。万が一ただでさえおかしい頭がさらにおかしくなったかななどと指摘されたら、そうだよ（適当）とでも答えておきましよう。

未来のことが分かるんだ、とか言つたら社会的に人生が終了します。

授業が終了してから張り込みまでの時間は1時間弱。私は図書館の探索をしてやり過ごしています。蔵書数が高校にしては異常に多

いので、（飽きることは）ないです。

さて本日の結果ですが……

まあ、出ないんですね。

分かりやすく言えばソシヤゲのガチャ。物欲センサーのせいでイベントが発生してくれません。

あ、明日終われば良いだけだし？ 恐くないし？

3日目。そろそろ出ないと運がない方です。

今日も今日とて図書館行きです。

ん？ あそこにいるの椎名さんじやないですかやだ奥さん。

せつかくなのでその辺のミステリー小説でも読むことにしましょう。場所は椎名の近くです。高確率でイベントが発生します。

……。

お？ 来たようです。こちらはすんなりと行きましたね。メインイベントもこれくらい順調に進んでくれないかなあ（遠い目）

イベント内容は椎名のミステリー小説マシンガントークです。頑張つて最後まで聞いてあげると友達認定され、連絡先を獲得できます。

Cクラスの情勢を知るためにも彼女は重要な人物です。深追いはできないでしようが、基本中立なので龍園の行動が気に食わなかつたりするとボロを出します。

それに椎名は可愛い。椎名は可愛い。大事なことなので2回言いました。

ですが、マシンガントークに気を取られてばかりいると張り込み時間に遅れるので、時間になつたら心を鬼にして話を打ち切ります。遅刻している間に事件が発生したら2巻の話を0からなぞつていかなけばなりません。それに、もらえるポイントも激減するのでそうなつたら再走でお疲れ様でした（5敗）

では、椎名に癒されたところで地獄の張り込みと行きましょう。イクイク。

今日は椎名に勧められた本を読んで時間を潰します。

どうやら愛ちゃんには好評の模様。良かつたです。

……え？ もう時間？ いやあ、面白かったなー……って今日も事件起こつてねえじやねえがこの野郎！ おいどうした私の運は!? アストルフオキゅんに吸い取られたのか？

……はあ。また明日もですか。このまま最終日まで張り込む羽目になるのではないかと心配になつてきました。

張り込みました。

……はい。結局最終日まで粘りました。ここ最近の試走では2日目までに終わることが多かつたのですが……。発狂する気すら失せました。

どうやら私は本番に弱いらしいです。

……操作ミスで10000ポイント失ったもんなあ。

ま、まあ何はともあれ、これで証拠を確保できました。何度も見ているのですが、どうしても殴り合い（一方的）の最中は「3人に勝てるわけないだろ！」と叫びたい衝動に駆られました。

勢い余つてキーボードをぶつ壊した最初期の頃がとても懐かしく思えますね（3敗）

こうして命がけで手に入れた証拠は、ホームルームで目撃者がいないか茶柱先生が問うてきた時に提出します。

若干須藤から的好感度が上がりますが、私としては断じて御免です。須藤推しのガチホモ兄貴の方は須藤ルートを攻略しておきなさい（汚物を見る目）

というわけで今回はここまでです。

今回で50000ポイント稼いだも同然ですが、振り込みは6月に入つてからなので来月分に回ります。

なので、今回獲得したポイントは0です。どこからか夜11時台のニュース番組のS.Eが聞こえてきた気がしますが、今回はここで終わるうと思います。

それでは次回もよろしくオナシヤス！

5月 裏話

堀北鈴音は戸惑いを隠せないでいた。

クラス分けが能力順であること。何より、自分自身に底辺の烙印を押されていることが判明したこと。

学力だつて学年トップレベル。運動も武道を嗜んでいたから、悪いわけではない。

……一体何が駄目だつたのだろうか。私は兄さんに追いつくために何が足りていらないのだろうか。

兄さんに憧れて、今までずっと背中を見て追いかけて育ってきた。髪を伸ばしたのだと兄さんの好みだと聞いたから。

……マイナス思考をしている場合ではない。

堀北は邪念を振り払う。

幸運なことにも、自身が優秀であると証明する方法はある。Aクラスに昇格することだ。2000万ポイント集めるというのも一つの手段だが、過去の最高獲得者でも1600万ポイント程度。それも詐欺行為を働いて、だ。

堀北はすぐにその選択肢を捨てた。そんなことをするのは相当な変人だ。それに、そんなやり方は自分自身が納得いかない。自分の実力でAクラスに上がった、と言えないからだ。

「堀北ちゃん、どうしたの？ そんなに難しい顔して」

「……何でもないわ」

「もしかして、Dクラスにいることが不服だつて思つてる？」
「……そう、ね」

話しかけてきた少女——愛の目は堀北の机の上に広げられたノートに向かっていた。そこには、数分前まで行われたホームルームで茶柱先生が話していたことが簡潔に書かれていた。

Aクラスに上がるためには、Aクラスのクラスポイントを上回る必要がある。

進学率・就職率100%という学校一の魅力の恩恵を受けられるのはAクラスのみ。

そして最後に、必ずAクラスに上ると大きめな字で書かれていた。

「堀北ちゃんはAクラスに上がりたいんだ」

「そうよ」

「そつかそつか」

「何かおかしいことでも言つたかしら?」

「ううん。私もおんなんじだし」

そう言う八遠に、堀北は内心驚いていた。

彼女はホームルームの時、悔しがる素振りを全くしていなかつた。それどころか、高円寺と共に軽口を叩いていたほどだ。

しかし、悔しいからAクラスを目指すということに愛は当てはまらなかつた。

「追われる立場より追う立場の方がいいじゃん。シマウマとライオンみたいにさ」

「……そう」

確かにそういう考え方も出来る。しかし、堀北や八遠たちDクラスが無能だという事実を一方的に押し付けられてしまったのだ。

堀北が納得のいかないのは当然のことだ。

「まあ、手伝つてほしいことがあれば言つてよ。友達なんだし」

「勝手に友達認定しないでくれるかしら?」

「つれないなあ……」

「困つたら頼つていいんだからね」と言い残して高円寺のところへ向かつた愛を堀北はしばらく見ていた。

八遠愛はこの前のテストで満点。水泳でも1位に輝いた。コミュニケーション能力も決して低くない。

茶柱先生の言つたように、学力だけで判断しないとしても愛はDクラス落ちする要素が見当たらなかつた。

もしかしたら、愛は過去に何かあつたのかも知れない。それとも、あれは仮面を被つているだけなのか。

少なくとも、軽井沢にポイントを貸してくれと頼まれて、本当に返してくれるのかと迫つてゐる愛に堀北はなぜか親近感を覚えていた。

「……お前、本気でAクラスを目指すのか？」

突然堀北の左側から無気力な声が聞こえ、声の主の方へ首を向けた。

彼は机に肘をつき、頬杖をしていた。いつも通りやる気が感じられない男だ。

「そうよ。私はDクラスにいるべきではないもの」

「すごい自信だな……」

「そうよ。私はその分だけ努力したと自負しているもの」

綾小路が一瞬高円寺の方を見た気がして、堀北は綾小路を睨んだ。

「……彼と一緒にしないでくれるかしら？」

「いや、ほとんど同じだと思うんだけど――痛つ!?」

綾小路が腕を痛む場所、右腕を押さえる。堀北の手には、いつの間にかコンパスが握られていた。

「あの男と一緒にしないでもらえるかしら」

「は、はい……」

綾小路は美しき悪魔の脅しに屈する他なかつた。

?? ?? ??

——綾小路くん、八遠さん、今日は私が昼ごはんを奢つてあげるわ。

堀北の誘いで、愛と綾小路と堀北の3人は食堂を訪れていた。

綾小路机の上には、スペシャル定食が鎮座している。

愛はそれを忌々しきものを見るように見つめていた。

「結局あなたは山菜定食なのね……」

「これが私の主食だからね」

まずいと評判の山菜定食を何の躊躇いもなく愛は口に放り込んでいく。

そんな愛を見かねた綾小路が、定食を食べかけた手を止めた。

「それ、まづくないのか？」

「うーん。そんなにかな。確かに最初はまづいつて思つたけど、最近は慣れてきたからね」

そう言うと、再び愛は山菜定食を頬張った。

学校中でまざいと噂されているはずなのだが、愛が次々と食べ進めるせいで、もしかしたら本当は美味しいのではないかと思わされてしまう。

「これじゃあ奢つたことにならないじゃない」

「私は今、スペシャル定食を封印しているんだよ……」

「ああ、この前食べてたって噂を聞いたぞ」

5月1日のことだつたらしい。間違えてスペシャル定食を注文してしまつたという。口頭で注文するはずなのに、そんなミスを犯してしまうものなのだろうかと堀北は疑問を覚えた。

「あれは屈辱だつたね。山菜女と呼ばれるこの私がそんな過ちを犯しちやつたんだから……」

「おばさんたちもやつと山菜定食以外を注文してくれたと喜んでいたらしいしな」

「何でそんなことで有名になれるのかしら。というかその田舎臭いあだ名どうにかしなさいよ……」

堀北は頭を抱えた。

今日も今日とて愛に振り回され、本題を忘れそうになる。

なんとか思考回路を復旧させると、綾小路の方を向く。

「ところで綾小路くん」

「何だ？」

「スペシャル定食、とても美味しそうね」

「そりやスペシャルだもん。山菜定食しか食べない私からすれば号泣ものだね」

「……あなたには聞いていないのだけれど」「すぐにこれだ。

なんとか主導権を握ろうとしても愛が邪魔してくる。意識的にやつてているのか分からぬが、かなり厄介だ。

「ま、まあ美味しいけど」

「へえ、良かつたわね。私の奢りで美味しいもの食べれて。私の奢りで」

「お、おう」

やけに「私の奢りで」を強調する堀北。そんな彼女が次に発する言葉が碌なものではないことを薄々察した綾小路は、顔を引きつらせていた。

「今から言う私のお願いに協力してほしいのだけれど、いいかしら?」「いや、でも——」

「食べたわよね? スペシャル定食。私の奢りで」

「協力させていただきます……」

残念ながら、既に綾小路に退路はなかつた。

「これから赤点組のために勉強会を行おうと思うの。池くんや山内くん、それに須藤くんね。彼らは平田くんが開催する勉強会には参加しないだろうから、綾小路くんに声をかけてきてもらいたいの」「わ、分かりました……」

たとえ友達とはい、彼らが勉強をするために重い腰を上げるとも到底思えない。赤点回避は一夜漬けでどうにかなると思つてているタップに違いない。

綾小路は半ば諦めかけていた。

「できればあなたにも彼の手伝いをしてもらいたいのだけれど」

「え? 何で? 山菜定食は0.5ポイントだから、奢つてもらつたとは言えないと思うんだけど」

「綾小路くんだけでは頼りないじゃない」

「じゃあ仕方ないか」

愛は細めた目を戻し、納得したように手を叩いた。

しかし、次に納得がいかなくなつたのは綾小路だった。

「もう少しオレを信用してくれてもいいんじやないか?」

「じゃあ間違ひなく連れて来られるという自信があるのかしら?」「うつ……」

綾小路は言葉を詰まらせた。勉強のことになると地蔵のように動かなくなる3人を、一人で全員連れてくることは不可能だと思つたらだ。

とはい、愛も彼らと深い関わりがあるわけではない。櫛田のよう

な魅力に溢れた女子が好みだということも心得ていた。

「でもさ堀北ちゃん。私たちでは間違いない無理だよ」

「ああ。櫛田に頼るのが最善だと思うんだが」

「それはダメよ。何としてでも二人で集めなさい」

堀北は櫛田のことを徹底的に嫌っている。しばらくするとこの構図が見事なまでにひっくり返るのだから、皮肉なものだと愛は思つた。

堀北は櫛田を遠ざけたいと思っているが、二人の中には櫛田を利用するという道しかなかつた。

「ま、まあ頑張つてみるよ。ね、綾小路くん」

「そ、そうだな」

「不安でしかないわ……」

堀北はこめかみを手を当てたが、仕事を押し付けられた二人もため息を漏らしていた。

「堀北ちゃんがぼつちじやなきやなあ……」

「堀北の性格が良かつたらあの3人もホイホイついてくるはずなんだけどな……」

「何か言つたかしら?」

「何も言つていないよ?」

「ああ」

未来のことが分かつてているとはいえ、本当に上手くいくのだろうかと愛は不安に苛まれた。

?? ?? ??

高度育成高等学校にある図書館。そこは高校としては多すぎるほどの蔵書数を誇り、本好きの生徒にとつてはオアシスそのものだ。自習スペースも完備されているため、テストの2週間前になるところを利用する人が増える。

愛もその一人であり、この日も図書館に足を運んでいた。

出入り口を潜つた愛は、勉強する集団のうちの一団を見つけると、

その方へ歩みを進める。

その中の銀髪の少女を見つけると、声をかけた。

「やつほー、坂柳さん」

「ここにちは、八遠さん」

愛が加わったのはAクラスの集団だ。一人でいたところにAクラスのかたまりを見つけて声をかけたのだ。何人かが愛の声に気づき、顔を上げた。が、すぐに自身の勉強へと戻つていつた。

4月末のテストで満点を叩き出したことがなぜか広まつていたため、すぐに坂柳に気に入られたのだ。

愛は坂柳のノートを覗き込むと、不思議そうに見つめた。

「つてあれ？ 範囲変わつたの？」

「そうですよ。Dクラスでは知らされなかつたのですか？」

「うん。……確認してきた方がいいかなあ」

「その方がいいと思いますよ。このまま放置してテストの点数が悪化することに繋がりかねませんし。あなたには関係のないことかも知れませんが」

「一応行つてくるね」

つい先ほど通つたばかりの出入り口を逆方向に潜つた愛は、来た道を引き返した。

たどり着いたのは職員室。2回ノックすると、中に入る。「どうしたのー？」

「ここにちは、星乃宮先生」

入るなり真っ先に声をかけてきたのは、Bクラス担任の星乃宮知恵。

「もしかしてサエちゃんに用事？」

「そうです」

「ふーん」

そう言いながら顔を覗く星乃宮先生に、愛は僅かに後退りしていった。

「おい、ウチのクラスの生徒にちよつかいをかけるな」「痛つ」

パン、と乾いた音が響いた。

頭を抑える星乃宮先生の背後に立っていたのは、茶柱先生だ。

「八遠、何か用か?」

「あ、はい」

「え? 何々? 私も気になるなあ」

「知恵はダメだ」

「ええー?」

これはウチのクラスの話だ、と星乃宮先生を振り払い、茶柱先生は愛を奥へと連れて行く。

そこは生徒指導室だつた。

「何でこんな物騒な場所で……」

「ここなら知恵も来ないからな」

そういうことか、と愛は納得した。星乃宮先生は人は悪くないのだろうが、あの絡みは鬱陶しいと思つてしまふのが本音だつた。

星乃宮先生がそういう人だと知つていても、あれはかなり面倒だ。

「それで、用事とは何だ?」

「テスト範囲のことなんですが、今日変更があつたらしいですね」

「ほお、それは誰から聞いた?」

「たまたま仲良くなつた他クラスの生徒です」

そこまで聞くと、何の悪気もなくメモ帳を切り取つて変更後の範囲を書き、愛に手渡した。

「すまないな。うつかり忘れていたようだ」

その言葉とは裏腹に、反省の意図は全く感じられなかつた。

この人が誰よりもAクラスへの野心が強いというのだから、変わつた話だ。愛は協力するつもりはさらさらない。

茶柱先生が協力してくれていると勘違いすることはあれど、愛がそこまで手を貸すことはまずないのだ。

「……ありがとうございます」

出がかかつた本音を飲み込んだ。結局口に出たのは、心にもない言葉だつた。

出来れば頼りたくはなかつたが、櫛田にお願いするしかないだろ

う。

愛の中でこの中間試験をどう乗り切るのか、そのビジョンは既に出来上がっている。

だからその先を見据えた行動を始めている。

愛は部屋を後にする、貰った紙を折りたたんでポケットにしまい、再び図書館に戻った。

太陽は先ほどよりも更に傾いていた。しかし、入学時よりもかなり長くなつたものだ。

少し前まではひどく退屈だつた時の流れ。毎日がモノクロのように映り、何にも興味が湧かなくなつた日々。

ここに導いてくれた『記憶』に、愛は感謝していた。

目標が出来た。生きる意味を見いだせた。そう言うにはとても小さなことかも知れないが、愛にとつてはそれだけで十分だった。

間違いなく、以前よりも笑うことが増えた。未来のことを考えるようになつた。

久しぶりに楽しいという感情に包まれていることに愛は気づいた。
「……ありがと」

刺激を求めていた時に与えてくれたモノ。

誰からの贈り物かは知らないが、送り主にも感謝したいものだ、と愛は思つた。

「ただいま」

「どうでしたか？」

「やつぱり、ウチだけ教えてもらつて無かつたっぽい」

ここに足を運んでいる他クラスの生徒に、そんな素振りは見られないと。
「そうですか。早めに気づくことができて良かつたですね」
「本当だよ。このまま誰も気づかずに本番を迎えていたらどうなつたことか……」

Dクラスには学力に問題がある生徒が多い。先日の小テストでも、7人が赤点ライン。中学生レベルの問題だったのにも関わらずだ。赤点を取つたら即退学のこの学校では、彼らはこの学校から去ること

になる。

授業で学習済みとは言え、出題されるのは高校の範囲。しかも、複数の教科の中で一つでも赤点があればそれを遙かに上回る赤点者——つまり退学者が出ることは明白だつた。

「……本当に大丈夫なのかなあ、ウチのクラス」

未来のことを知つてゐるのは紛れもない事実。しかし、愛といふイレギュラーがいる以上、ストーリーはどう転ぶか分からぬ。

「それはあなた次第じやないですか？」

「私自身……うん。うん、そうだよね」

原作が崩れてしまうことは仕方がない。どうすればいい方向に転ばせることができるか、それを模索することが大切だ。

愛は堀北たちよりも早く範囲変更の情報を得た。知らせるのは週が明けてからでもいいだろうと思つていたが、もつと早めた方がいいかも知れない。勉強が終わつたら櫛田に頼むことを愛は決めた。

心の整理がついたところで、机の上に勉強道具を広げる。一度授業を聞けば内容を理解できてしまふので、その時間は退屈なものだつたが。

坂柳以外のAクラスの生徒に話しかけようにも、相当集中していてとてもそんなことができる様子ではない。

坂柳も坂柳で、眞面目に勉強をしている。問題のレベルが定期テストに見合つたものかどうかは別の話だ。

一銭も使えない愛にとつて、参考書を持つてゐる坂柳が羨ましい。課金アイテム

勉強は嫌いだが、何もしないことよりはマシ。心が落ち着かないのも仕方がないことだつた。

「……今日はここまでにしましようか」

6時を少し回つた頃、坂柳の透き通る声が終了を告げた。

何もしないのは申し訳なかつたので参考書眺めていたが、既に読み終えた小説のようであつまらなかつた。

それぞれが荷物をまとめ、帰る準備が整つた人から「お疲れ」と言って寮へ戻つて行く。愛もその中に紛れて帰ろうかと思つていたのだが、坂柳に呼び止められてしまつっていた。

向かいの席で大人しく座つて、全員が帰つて行くのを見送る。

「え？ 何？ 私お説教されちゃうの？ 先生に残れつて言われて延々と怒られるパターンのやつ？」

「……そんなわけないじやないですか」

良かつた、と愛は胸を撫で下ろした。しかし、坂柳に「あなたのことをについてです」と言われば、多少は気を引き締めなければならなかつた。

「あなたに関する話は色々なところから上がっています。山菜定食ばかり食べていること。スペシャル定食を食べてひどく落ち込んでいたこと。水泳で1位を取つたこと。小テストで私と同じく満点だったこと」

坂柳は一呼吸置き、愛を見据える。

「そして、私たちに接触を図つてきた。これはどういうつもりですか？」

「どういうつもりって言われてもね……。私にはやつてみたいことがある。今取つてている行動は、それに基づいたものばかりだよ」

図書館内は先ほどまで勉強していたほとんどの生徒が帰つてしまつたために、いつも増して静かだ。あるとすれば、本が仕舞われる音くらい。

二人の声がどんなに小さかろうと、よく響いた。

「八遠さんと会つたのはここ数日のことです。しかし、話からあなたの目的を推測することは思つたよりも簡単なことです」

「そりやそうだ。ここまで露骨なことをしてたら、坂柳さんくらいならすぐに気付くよね」

もしかしたら堀北も気づき始めているのではないか、とすら思つていたくらいだ。

「で、その結論に至つた坂柳さんは何をするの？」

「何もしませんよ」

「へえ？」

何の迷いもなく、坂柳はそう言い切つた。

「本当は今は他のクラスの人と関係を持ちたくなかったんです。こち

らから深く踏み込むなんてことはしませんよ」

Aクラスは内部で争いが起きている。Dクラスの生徒と秘密裏に会っているという話が広まつたらどうなるか。

今のDクラスのクラスポイントは0。愛がどれだけ優秀だろうと、その評価はつきまとう。1000ポイント近いAクラスが見下すことは想像に難くない。当然、坂柳のグループから反対勢力が現れてもおかしくないのだ。

いくら葛城康平という、慎重な性格の男と対極に扱われていても、ハイリスクローリターンはしないということだ。

「そつか」

確かに、先ほどの坂柳以外の何人かは疑いの目を向けていた。

もし坂柳が負けるようなことがあれば——そう考えるだけでも恐ろしい。

「じゃあ、私は先に行くね？ 本当は一緒に帰りたいけど、変な噂が立つのは良くないしね」

「ええ。それでは」

「うん、またね」

坂柳と別れ、図書館を後にする。

空は橙に染まり、所々に見られる薄く引き延ばされた白が彩りを添える。本当に都内かと思わされるほどはつきりと見え、しばらく見入ってしまう。

間もなく陽が落ちて夜を迎える。

こうして空を観察すると、意外と面白い。止まつて見える雲は意外と早い速度で動くし、青や橙、白や黒など様々な色が映し出される。

毎日毎日違う模様をしていて、今もなお変化し続けている。今見逃せば、再び見ることができない光景だ。

寮の前まできたところで、入り口前に設置されている自販機の前へ移動する。

ボタンを押すと、冷たい水が音を立てて落ちてきた。もちろん0ポイントだ。

それを手に取つて、ベンチに腰掛ける。

キヤップを開けて、一口飲んだ。冷たさが体の髓まで染み渡った。
この学校に入学して早い1ヶ月半。愛には今まで一番まともな
学校生活をしているように思えた。

当然0円生活をしたり、本気で2000万ポイント貯めようとして
いる時点で普通の学校生活をかけ離れているのだが、小中学生時代を
振り返れば、まともだと言える。

愛は生まれた時から物覚えが良かつた。

他の子供が地面を這っている頃には立っていた。言葉を話せるよ
うになつていていた頃には、平仮名の読み書きを習得した。

両親は揃つて愛を天才だと言い、大いに喜んだ。

——愛の苦労も知らず。

学校では気持ち悪いと距離を置かれた。かと言つて虐められる訳
でもない。いないものとして扱われただけのこと。

授業も面白目に受けないがテストは満点。何をしても一番。教師
も期待を通り越して恐れていた。

愛の隣に立つ人は現れない。常に孤高で、孤独。

親は相変わらずもてはやすだけ。
何でも出来てしまふが故に何に対しても面白みを感じられず、興味
を持てなかつた。

そんな時だつた。『記憶』を与えられたのは。

推薦でしか入ることができないこの学校に入学する。そうすれば
邪魔でしかない両親からも離れられるし、綾小路や坂柳といった自分
に匹敵するであろう人との出会いもある。

そして、誰もやつたことがないことを思いついた。
それが今愛の原動力だ。

「何してるんだ？」 風邪引くぞ

声の主は、ベンチの空いているスペースに腰を下ろした。
「ちょっと感傷に浸つてただけだよ」

空はすっかり暗くなり、側の外灯が愛と綾小路に光を落としてい
た。髪を揺らす風は思いの外冷たい。

愛は残つていた水を一気に飲み干した。ゴミ箱へ投げ入れると、音

を立てて中に収まつた。

「綾小路くんつてさ、目標とかつてあるの？」

「平穏な学校生活を送ることだな。大きな目標なんてないさ」

「でもさ、目標があるつていいと思わない？ ゴールの見えないマラソンなんて地獄以外の何物でもないからね」

「それはごめんだな」

でも、ゴールがあるならそこまでは頑張ろうつて思える。

あの時のような、無気力に時が流れるのを待つ日々は終わつた。今はゴールがあつて、そこに向かう道がある。

取り巻く環境は日々変化を続け、新しい姿を見せる。変化がなかつたあの頃とは大違ひだ。

「もし、自分がいる環境が急に変わつたらどうする？」

「今の生活からか？」

「うん」

そうだな、と声を漏らし、綾小路はしばらく黙り込む。絶え間なく吹き付ける風の音だけが耳に飛び込んでくる。

「オレだつたら、甘んじて受け入れるな」

「そつか」

丸めていた腰を起こし、空を見上げる。

漆黒の空に煌く幾つもの星々が、遙か遠い地球に光を届けている。自らの存在を主張するために。ここに届く頃にはもう無いかも知れないのに。

……むしろ、もう消えてしまつたからかも知れない。消えてもなお、そこにあつたという証を残そうとしている。愛にはそう見えた。「じゃあ、私は行くね。流石に体が冷えてきたし」

「……おいおい、風邪は引くなよ？」

「もしかしたらもう移っちゃつてるかもね」

「おい」

流石に大丈夫でしょ、と愛は笑つた。

「また月曜日。おやすみ、綾小路くん」

「ああ、おやすみ」

櫛田に範囲の変更も教えないど、そんな記憶を奥から引っ張り出して部屋へ戻つていった。

?? ?? ??

「それじゃあ、赤点回避記念に乾杯！」

愛の声と共に、グラス同士がぶつかつた。

「八遠ちゃんが過去問の暗記に協力してくれたから、自分でもびっくりの高得点が出たぜ！」

そう嬉しそうに笑つたのは池。

愛は綾小路から過去問のコピーを受け取り、池と須藤、山内にはひたすら暗記させていた。

「何回もサボろうとしてたくせにね」

「うつ」

「あれはもうやりたくねえ……」

暗記は勉強でも地味でつまらない方だ。それを大の勉強嫌いの3人が何日もやらされたのだ。須藤がそう嘆くのも無理はない。

「何にせよ、あなたのおかげでクラス平均が大幅に上がつたことでしょうね」

「堀北ちゃんに褒められたっ！」

「そこまで喜ぶことでもないでしよう？ ……暑いから離れてくれないかしら」

「まあまあ、少しならいいじやん」

私だつて疲れたんだよ、と付け加えた。

「来月はポイントが貰えるんだろ？ どうしよ、今から楽しみ過ぎて夜も寝れねえかも……」

「授業中に寝たらどうなるか分かるわよね？」

「うつ」

さつきから池が集中砲火を浴びている気がしてならない。

仕方ない、少しは褒めようかと思つていたところへ、別の声が割り込んできた。

「でも、今回は高得点ばかりだったよね」

「櫛田ちゃん……！」

現時点では天使キャラで通っている櫛田。その本性を知つたら、彼らはどんな反応をするだろうか。

愛は雑談に花を咲かせる櫛田たちから視線を外した。

「……ごめんなさい、八遠さん」

「いって。友達だから、助け合うのは当然でしょ？」

須藤たちが高得点だつたのも、愛の存在があつたからだ。

堀北が開いた勉強会で口論に発展してしまい、勉強を放棄していった。そこへ愛が過去問を持つて現れた。

取り敢えずこれを覚えれば高得点が出る、そう言われば、堀北がやろうとしていることより簡単なのだから、やらない訳にはいかなかつた。

「友達、ね」

「堀北ちゃんが本気でAクラスを目指すのなら、一人じゃ絶対に無理。心の拠り所は必要だよ」

「人間は強くない。常に誰かに支えられて育つものだ。

「一人で大きな目標に挑むと、絶対に挫折するよ」

今まで自ら孤独を望んだ堀北に、どう伝わったかは知らない。堀北の中で何かが変わってくれればいい、愛が願うのはそれだけだ。自らの目標もとても大きなもの。今まで、何でも出来るともてはやされたけれど、どこかで壁にぶつかるかも知れないと思つていて。でも、そろそろ孤独な過去とは一旦別れよう。
こんな騒がしさも初めてかも知れない。だから、この身を委ねても問題ない。そうに決まっている。

「堀北ちゃん、ジュースちようだい」

「飲み過ぎは良くないわよ」

「ん、ありがと」

コップ一杯のオレンジジュースを一気に飲み干し、堀北から2Lのペットボトルを受け取る。

オレンジの爽やかな甘さはいつまでも残り続けていた。

6月

数少ない運要素で確実にガバるRTA、はーじまーるよー。

前回、運との死闘（完全敗北）を繰り広げ、無事に証拠を掴むことができたので今回はこれをぶつけていきます。

6月1日のホームルームでは、クラスポイントが発表されます。本来なら100ポイント欲しいところですが、赤点ギリギリ組が大量発生しているせいでそこまではいかないようですね。

平田に暗記会をやつてもらつても良かつたけど、陽キヤ軍団がめんどいとか言い出してほっぽり出してあまり成績が上がらなかつたので却下です。むしろ下がる時もありましたね。なんでや（半ギレ）数百ポイントの誤差なので、再走になることはありませんが、RTAガチ勢（）としては1.0ポイントでも多く獲得したいところです。9.0ポイント後半あれば完璧。

……。

……ダ○ンタ○ンの○田の「結果発表！」が脳内されますね。

……。

よし、9.6ポイントですね。上々と言えるでしょう。しかし、Aクラスは相変わらず100ポイント以上伸ばしています。流石Aクラスですね、優秀優秀。ただし弥彦、テメーはダメだ。

ああ、今度も弥彦への当たりが強いので、弥彦推しの兄貴には先に謝つておきます。ついでに山内推しにも。流石にいないとは思いますがね。

残念ながら獲得したポイントはまだ振り込まれません。須藤のせいですね、分かります。

この日はそういう事件があつたよ、という説明のみなので、証拠は翌日まで温めておきます。

証拠を提出すれば、Cクラスはなす術もなく敗れます。ざまあみやがれ龍園さんよおく。

はい、2巻終了でお疲れ様でした。

ですが今回はまだ終わりません。6月には別の大きなイベントがあります。

第2回のことを思い出してくれば分かると思います。そう、部活です。愛ちゃんはテニス部でしたね。今月は関東高等学校テニス大会、要するに地区大会が行われるのです。

現在、愛ちゃんはバスに乗つて会場まで移動しています。流石は高度育成高等学校、窓はカーテンで閉め切られ、外の様子を観察することができません。場所を知らされていなければ、監獄に連れて行かれるのかと勘違いしそうですね。

出発してから2時間と少しして、ようやく試合会場に到着したようです。

こ→こ←からの移動も国から雇われたSPみたいな屈強な男たちに囲まれながらとなります。ハリウッドスターみたいですね。

荷物置き場も、専用の部屋が用意されています。他の学校の荷物置き場からはかなり距離を置かれています。いやいやお国さんや、いくら何でも徹底しすぎじゃないですか？

愛ちゃんの生着替えは割愛して、アップをします。当然専用の場所が確保されています。もう驚きませんよ。……フラグじゃないですかね？

ストレッチやらラリーやらして最終調整をして、試合に臨みます。当然狙うは優勝です。優勝すれば学校から10万ポイント貰えるので、1年生だからと言つて躊躇は一切なしです。

中身は勝ちたいとかいう青春に染まつた感情ではなく、金目当ての汚れきつたモノなんですがね。はつはつはつ。

当然個人の部では優勝ですが、団体とダブルスに関しては優勝できるか怪しいです。

ダブルスでは優勝を目指しますが、団体はベスト4入りを目指します。あわよくば優勝ですね。

言い忘れていましたが、他の部員たちもそれなりに優秀です。設備が整っているからか、たまたまそういう生徒が集まつたからか、ベスト4までは割とどうにかなることが多いです。

愛ちゃんのスペルタ教育によつて、優勝の可能性はぐんと増しますがね。当たり前だよなあ？

ダブルスのペアは部長です。部長はテニス部の中では二番目に上手いので、何としてでも優勝をもぎ取りたいですね。一番上手いのは愛ちゃんです。

……。

つと、シングルスは優勝です。諭吉10人入りまーす！

次のダブルスの賞金は5万ポイントです。逃すわけにはいきません。

……敵影^{諭吉}捕捉、これより捕獲に向かいます。

……。

つぶな！ なんとか優勝出来ました。ちょっと、部長さん足引っ張りすぎんよ。後でお説教（意味深）ですね。

最終セットまでもつれ込みましたが、これで諭吉5人が追加来店です。

団体戦も無事に決勝戦まで勝ち残りました。5人での戦いなので、4人目の部長まで2勝しなければなりません。愛ちゃんに敗北の二文字はない。

試合に向かう前に、チームメイトに一声かけることをおすすめします。

ちなみに、優勝すると6万ポイント、2位だと3万ポイントです。諭吉が3人いるのと6人いるのとでは大違いです。安心感が違う。

……チツ。えー、1人目は負けてしまつたようです。え？ 舌打ちが聞こえて來た？ 気のせいですよ。はつはつはつ。……チツ。

2人目、3人目は勝ちました。君たち大好き。

さて、ここで部長の出番です。勝てば優勝確定、負けたら……。

正直負けてくれた方が展開的には面白かつたり。ていうか愛ちゃん

んの出番無くなっちゃうじゃないですかヤダー。

あつ、部長負けましたね。部長、ドンマイ（微笑）

いいでしょ、ここで真打愛ちゃん登場です。2冠を達成した愛ちゃんなら、こんなの余裕のよっちゃんです。

……あれ？ おつかしいぞ？ 私のブレイングは問題ないはずなのですが……。

おい今のアウトかよ！？

やべえよ、やべえよ。デュースまでもつれ込んでしまいました。手汗が凄いです。

では、本気で行きますか。こちとら何百回も試走してんじやい！

……ふつ、どうよどうよ。動搖してるんじやないですか？（激ウマ

ギヤグ）

……。

ゲームセット、勝ちました！ いやあ、今回はうまく行きましたね。

3冠を達成したのは142回ぶりで嬉しそうなので後で泣きます。

……スペシャル定食、オメーのことは忘れねえからな。

はい、これにて大会は終了です。今回は最高の結果で終われたので良かったです。……最後まで護衛完璧なのかよ！？ メディアからの取材を受けなくて済むので楽ですけどね。

プライベートポイントにばかり目が行つて忘れていましたが、3冠を達成すると150クラスポイント獲得出来るようです。一つ優勝すると50ポイント貰える計算ですね。……ほんとにこんなに貰つて良いんでしようかね？

とまあ3冠を達成したは良いですが、今後の学校生活について注意事項があります。帰りのバス内の景色を背景に、それに関して説明していきます。

今回Cクラスの嘘を完全に見抜き、部活で圧倒的な強さを發揮したわけですが、上述の通り成果はクラスポイントになつて表れます。

それによつて、A・Cはともかく、Dクラスからも好奇の目に晒されことになります。行動は出来るだけ隠密にするようにお願ひしていきます。

今回Cクラスの嘘を完全に見抜き、部活で圧倒的な強さを發揮したわけですが、上述の通り成果はクラスポイントになつて表れます。

それによつて、A・Cはともかく、Dクラスからも好奇の目に晒されことになります。行動は出来るだけ隠密にするようにお願ひしていきます。

ます。気を抜くといつも間にか情報が漏れ出している可能性があります。

私からも安全な場所、タイミング等は伝えたいと思いますが、兄貴たちも細心の注意を払うようにお願いします。

え？ 遠回しに言うな、言つてる意味が分からぬ、だつて？ 要するに、難易度が上がつたので頑張つて下さい、つてことです。

Dクラスの生徒に目をつけられた場合、綾小路のようにその生徒を隠れ蓑に使つても良いですが、特にCクラスには気をつけて下さい。龍園は何をしてくるか分かりません。今までされたことを振り替えると、最悪なパターンで、犯されたなんてことがありましたね。あれ？ これって全年齢対象ですよね？

これ以上は良くないですね。バスも学校に到着したようなので話を進めます。

無事に大会を終えたら、6月に進めておくことがあるのでそれをやつていきます。

以前Aクラスに接触しましたが、このタイミングで仕掛けます。取り引きをするのですが、具体的な内容は「毎月Aクラスに上がるためのポイントの支給をする」というものです。

もちろん、こちらもAクラスをAクラスのまま卒業させるために出来るだけのことはします。Aクラスに移動したら、の話ですが。当たり前だよなあ？

このタイミングで行わなければならぬ理由は、無人島試験で葛城と龍園がポイントのやり取りが絡んだ契約を交わすからです。Aクラスのポイントの一部がCクラスに流れるようにする、と言うモノです。

先を越されると、あちこちに出費はできないと破談してしまうので、必ずそれまでに契約を結んでください。葛城は（絶対に許さ）ないです。

葛城派からは（ポイントが送られてくることは）ないですが、坂柳派はこれから拡大していくので、その分支給されるポイントは増していきます。

ここで使うのが大会で得た150クラスポイント。これをAクラスに譲る代わりにポイントを譲渡してもらう、という手を打ちます。

こうすることで、5000ポイントのラインは越えます。ですが、私は強欲なので更に欲張ります。

15000ポイントを目指しましょう。初めは10000ポイントを提示して来ますが、さすがにそれは虫が良すぎると思うんですね。

まずは口で攻めますが、無理だと悟つたら攻めの方法を切り替えます。

坂柳の得意なチエス、これに賭けます。勝てば15000ポイント、負けたら10000ポイントという条件で戦いを挑みます。序盤からラスボス登場みたいな展開になっていますが、愛ちゃんは最強無敵なので負けません（迫真）。

置く場所も愛ちゃんが絞つてくれるるので、ある程度試走を繰り返せば安定して突破できるようになると思います。私は安定クリアに60回ほどかかりましたがね。坂柳さん強すぎんよ。

これでも綾小路の方が強いので驚きです。綾小路くん何者……？

はい、この手順を踏むことで、何と毎月（15000）×（坂柳派の人数）ポイントも貰えます。これをしなければ2000万ポイントを達成することは出来ないと思います。

貰いすぎだろ、と思う兄貴もいるかも知れませんが、元は愛ちゃんが稼いだ150クラスポイントなので、私は貰いすぎだとは思いません（迷推理）

更に、愛ちゃんが150ポイント稼いだことはクラスには知らされていない状況で行なわれているので、Dクラスの皆様方はそのことは何も知りません。

クラスポイントの移動は理事長に許可を取れば、茶柱先生は口出しえきませんね。ボブが訝しむ隙は一切与えません。

はい、これで6月は終わりとなります。最後に現在の状況を整理して今回は終わりとします。

まず、須藤暴力事件で500000ポイント。そして96クラスポイントがあるので、9600ポイント。テニスの大会で21万ポイントです。坂柳派との契約は7月から有効となるので、今月は無しです。合計で269600ポイント獲得です。ようやくまとまった収入が得られましたね。進捗は1. 348%です。

ですが、合計はまだ393600ポイント、進捗は1. 968%、約2%です。

来月からは大きなポイントの流れが発生するので、この数字もどんどん増えていくことでしょう。

それでは、次回もよろしくオナシャス！

6月 裏話

「八遠、ちょっと来い」

「はい、何ですか？」

6月に入つて早々、愛はホームルーム終了後茶柱に呼び出されて例の生徒指導室に向かつた。これから梅雨がやつて来る。ただでさえ気分が落ち込みやすい季節だというのに、説教となれば更にその気分は落ち込んでしまう。

生徒指導室に入ると、茶柱は愛を自身の対面に座らせた。そして問い合わせる。

「八遠、今回お前が事件の証拠を掴むことができたのは偶然か？」

「当然に決まっているじゃないですか」

「事件が発生する数日前から特別棟に通つていた、という話を聞いたが？」

八遠は押し黙つた。心当たりはある。理科の教師だ。張り込みの間、何度か顔を合わせていた。言葉を交わすことはなかつたが、やはり奇妙だと思われていたらしい。

「たまたまCクラスの密会を聞いてしまつたんですよ。教室内ではなかつたので、詳細な日時までは聞き出せませんでした。万が一を危惧したのでしようね」

「場所はどこだ？」

「体育館裏です。メンバーは龍園と、石崎ら実行犯たちでした」

愛は淡々と語る。一切迷いのない表情、揺るがない瞳。ここまでの大愛の言動に嘘はないと茶柱は結論付けようとして——踏みとどまつた。

八遠愛が本当に使える人物か。ただ頭がいいだけ、運動ができるだけの生徒ではないか。茶柱は試すように問いかけた。

「八遠、今の話は本当か？　どこかに原稿を隠しているのではないだろうな」

「なぜそんな面倒なことをする必要があるのでしようか。今私が話したこととは全て事実です。茶柱先生にそれを完全否定できる材料があ

るのですか？ それとも、私が未来予知能力持ちだとかいう悲しい考
えでもしているのですか？」

茶柱は口を閉ざした。愛が言うように、絶対的な証拠はないし、
ファンタジーな思考をするほど幼くはない。あるのはAクラスへの
執着。あの日のリベンジ。^{復讐}

そしてその全てを愛は知つていて。

「私は偶然彼らの行動を知り、その証拠を掴んで事件を解決した。そ
れでこの話は終わりでいいじゃないですか」

「ああ、この話はな」

そう言うと、茶柱は何枚かの紙を取り出した。入試から定期考查ま
でのテスト用紙だった。

並んでいたのは、100という数字。全てのテストで100点を記
録していることを示していた。

「八遠、お前のテストの成績は学年トップタイだ。水泳でも一位だつ
たらしいな」

「そららしいですね」

「入学当初から続く0円生活。更にお前はテストの度にプライベート
ポイントを要求している。……お前の意図は何だ？」

茶柱は確認するように問い合わせた。狙いはただ一つ。Aクラスに
昇格するために愛を利用すること。入試でオールAを叩き出した愛
を使いこなせれば、Aクラス昇格に大きく近づくことになる。

しかし愛はAクラスに上がろうという気はあるが、あいにくDクラ
スをAクラスに昇格させようという考えは全くない。

「お前は2000万ポイントを使ってAクラスに昇格しようとしてい
るようだが、はつきり言わせてもらう。それは無理だ」

「……………」

「ああ。だから大人しくクラスポイントで戦え」

目を伏せた愛に茶柱が言い放った。この学校の出身者で、現在も教
師として関わり続けている茶柱が言うのだから、その言葉の説得力は
高い。

「ふふふ……」

「何だ？」

「ふふふつ、あはははははははつ！　あははは！」

愛は突然腹を抱えて笑い始めた。

茶柱は困惑を隠し切ることが出来なかつた。こんな反応を見せた生徒は初めてだつたからだ。

「何かおかしなことでも言つたか？」

「あははははつ、すいません。この私に無理を突きつけてくるとは思わなかつたので」

「何だと？」

愛は何とか笑いを鎮めると、口角を上げて挑戦的な笑みを浮かべた。

「ナポレオン卿の言葉を借りると『私の辞書に【不可能】の文字はない』と言つたところですね」

「……」

何度目かの沈黙。

愛の声音、表情。どれを取つても、欺瞞の欠片もなかつた。

結局、茶柱にできることは強がることだけだつた。

「はつ、完璧な人間はいない。それはお前も同じだ、八遠。全てを完璧にこなす人間はいない」

「そう思うのであればそう思つていればいいです。ただ、世界は広いとだけ言つておきましよう」

そろそろ授業が始まるので、一旦話は終わりにしましよう、そう言つて愛は席を立つ。

気がつけば、会話の主導権は愛の手元にあつた。

「誰よりもAクラスへの執念が強い茶柱先生」

扉は閉ざされた。生徒指導室には、茶柱と己の本性を見抜かれていた、という事実だけが取り残されていた。

何とかチャイムが鳴る直前には愛は教室に戻ることが出来た。堀北から熱い視線を浴びていてことに気づいたが、その場では見て見ぬふりをした。

四限が終わり、いつものように愛は食堂へ向かう。いつものように

山菜定食を注文し、空いている席へと向かう。あの事件以降、食堂のおばちゃんは愛の注文に何やら期待をするようになつていて。またスペシャル定食——いや、山菜定食以外を注文してくれるのではないのか、と。

「……、座つてもいいか?」

愛が山菜定食にありつこうとしたところで、そんな声がかかつた。

声の主は綾小路だつた。

「うん、いいよ」

ありがとう、と言うと綾小路は愛の正面に腰を下ろした。

綾小路が選んだのはエビフライ定食。大振りのエビが3尾並んでいた。

「そのエビフライ美味しそうだね」

「らしいな。オレも食べるのは初めてなんだが、池に勧められたんだ」

「へえ」

反対側に並ぶ山菜定食は、元からみすぼらしいのに更に貧しく映つた。

「いるか?」

「で、でも綾小路くんが満足しなかつたら申し訳ないし、いいよ」

「いや、オレはこんなにも食べないからな。それに、お前部活やつてるんだろう? だつたら尚更じゃないか?」

「じゃ、じゃあいただきます……」

結局綾小路に押された愛は、エビフライを一尾取つて口に運んだ。しゃおつ、という衣の音とともに口の中にエビの香りが広がる。更に、かかるつているソースとの相性も抜群で、エビの旨味をより引き出していた。知らず知らずのうちに、エビフライを食べ進める手が早まつていく。

流石は国営、料理にも妥協はない。

愛の表情は知らず知らずのうちに緩んでいた。

「そんなに美味かつたか?」

「え、う、うん。いつも味のない山菜定食ばかり食べるからね。たまにこういうのを食べると余計に美味しく感じるんだと思うよ」

エビフライでご飯を食べ切ると、残った山菜たちを少しづつ口に運んでいく。エビフライのせいで、いつもより山菜が不味く感じた。「どうで八遠、少し聞きたいことがあるんだが」

「何?」

ちようど山菜定食を完食したところで、綾小路が口を開いた。顔を上げて綾小路の目を見たところで——察した。

あつ、この目ガチのやつだ、と。

普段のやる気のない目ではない。獲物を見つけた肉食獣の目。愛を試さんとする目。

「お前、堀北のことを見た友人だと思つてないだろ」

「うん、そうだね」

愛にとつて堀北はAクラス昇格のための道具に過ぎない。愛が真っ当な人生を送つていれば堀北を友人だと思つていたかも知れない。しかし、愛の人格は捻じ曲げられてしまった。

陰で囁かれる忌みの言葉。無数の悪意。

生まれながらに才能を得てしまつたがために、普通から隔離された。

純粹な心を以て普通を望んだ愛は既に過去の遺産。

愛は悟つた。人間は惡意に塗れている、と。私は友人を作ることは許されない、と。

同時に愛は思つた。よくよく考えればそれでいいではないか。わざわざ一般人と親しくして益はあるのか?

八遠愛は天才であり、一人で何でもこなせる。一人ではどうしようもないことは、他人を使えばどうにでもなる。

今はそれが堀北だということ。だから愛は迷うことなくそう答えた。

「でも、それは綾小路くんも同じでしょ?」

「同じ? いやいや、オレはほどほどに友達がいればいいと思つている事なかれ主義者だぞ」

あくまでもシラを切るつもりか。ならば、こちらも追い込んでやろう。

愛を見る綾小路の表情はまったく変わらない。

「でもさ、テストの時よく思いついたよね。先輩から過去問を貰うだなんて」

「いや、それは堀北が——」

「堀北ちゃんは何もしてないって言つてたけど？」

綾小路はそれ以上言い返さなかつた。

逃げに回つていたが、これ以上は無理だと察したのだ。

「……それはまあ認める」

「あれ、案外素直に白旗を上げたね」

「オレはそこまで意地を張る人間でもないからな」

そう言いながら、あそこに戻ることは頑に拒むクセに。

「でも、何で私が堀北ちゃんを友達だと思つてないって分かつたの？」

愛にとつて、綾小路に20000万ポイントを集めているということは、5月にそのことが知らされてから悟られていても仕方がないと思つていた。

しかし、堀北を友人と思つていないということには気づいていないと思つていた。

やはり、同類の考えにはすぐに気付くのかも知れない。

「結局は勘だ。堀北に対して過剰にスキンシップをしたり、時々友達だからと言つて友達であることをアピールしたりしていただろ」

「そうだね」

綾小路の目が愛を鋭く射抜く。綾小路にバレて阻止されればそれまでだ。

綾小路にとつて、愛は隠蓑にしやすい。既に単独で須藤の事件を解決しているので、綾小路の暗躍を愛の手柄にしても怪しまれることはない。

堀北もうまく使えば警戒を分散させることができると、最高の環境が出来上がつているのだ。

「ちなみに、私の計画のこと気付いてるよね？」

「ああ。少し考えればすぐに分かる。堀北や平田でも気づくんじゃないか？」

「……かもね。もしかしたら、二人とも私の邪魔をするかも知れない」
ただ2000万ポイントを集めただけなら、その時その時で対策を講じれば対処はできる。

しかし、なるべく早くとなると話は変わってくる。Aクラス——坂柳派を味方につけなければ、この先やつていくのは無理に等しい。
「私の計画を阻止するの？」 綾小路くんは

「どうだろうな」

「ちゃんとほつきりしてくれないと。綾小路くんは不気味で未知数だからね」

特に綾小路は危険だ。高円寺はクラス争いに興味を示していないので度外視してもいいだろうが、綾小路はそうは行かない。
「そうそう。綾小路くんがピンチになつたら手伝つてあげるから。でも邪魔するつて言うのなら手伝えないかな」

「……オレはピンチにならないだろ。表舞台に立つことはないんだから」

秘密を知っていることを暴露してもいいだろうが、変に警戒されたらそれこそ邪魔される可能性がある。

「それが一番だけどね。それで、そろそろ結論は出そうかな？」

「邪魔はしない、これでいいな？」

綾小路は諦めたように言つた。

「ありがと」

愛の目的を達成する上で、全てがDクラスにとつて有害と言つわけではない。本当に成し遂げようとするのであれば、クラスポイントを稼ぐ必要もある。それを阻止する理由はないだろう。綾小路はそう結論付けた。

「あ、ごめんね。ご飯冷めちゃつた？」

「いや、大丈夫だ」

愛は再び定食に手をつける綾小路をじつと見つめた。

例え自身にアドバンテージがあつたとしても、綾小路は気が抜けない人物だ。

綾小路との付き合い方は、目的の達成において重要な位置づけにな

る。

そういう意味ではとても大きな収穫だと言える。

「そろそろ昼休みが終わっちゃうね。急いで帰ろつか」

「そうだな。遅れて変な目で見られたくない」

綾小路と共に、足音を立てながら少し急ぎ足で教室へ戻つて行った。

?? ?? ??

少し前にテニスの大会が終わつたかと思えば、あつという間に梅雨の空模様へと移り変わつていく。

6月も後半に差し掛かつたこの日も、一向に止む気配を見せない雨に見舞われていた。外に目を転じれば、濃い灰色の空が目に飛び込んでくる。

愛は雨の音を聞きながら、エレベーターに乗つて階を移動した。二つ上の階で降りると、ある扉の前に立ちインターほんを鳴らす。しばらくして愛を出迎えるべく一人の少女が扉を開けて顔を覗かせた。

「おはよう坂柳さん」

「おはようございます、八遠さん」

挨拶を交わし、部屋に入る。豪華さは感じられず、着飾つている様子はないが、清潔感があつて居心地がいい。

「八遠さんはコーヒーか紅茶、緑茶のどのがいいですか？」

「コーヒーにしようかな。砂糖とミルクは自分で入れるね」

坂柳が用意したブラックコーヒーに、砂糖と牛乳を加える。

それをテーブルに置き、絨毯の上に座る。愛の家はフローリングのままなので、床が柔らかいことに少し感動を覚えていた。

「やつぱり味のある飲み物はいいなあ……」

「八遠さんはいつも水を飲んでいるのですか？」

「そう。ポイント縛りはキツいなあ」

だからと言つて人生で初めて出来たとも言える目標を諦める理由

にはならない。

ここで諦めれば、以前のモノクロの生活に逆戻りだ。

「だからこそ、こうやつてたまに飲むコーヒーとかがすごく美味しく感じるんだけどね」

どんな高級品でも、毎日食べれば次第に飽きてくる。たまにしか食べられないからこそ、より美味しく感じるのだ。

「ポイントを使いたいと思ったことはないのですか？」

「全然あるよ。むしろいつも使いたいって思ってる」

スペシャル定食を食べた時のあの衝撃は忘れられない。

今も、愛は学校が休みにも関わらず制服を着ている。ケヤキモールで服を買っておしゃれしたいだと、美味しいものを食べたいだとか、そういう欲は人一倍強い。

周りがそうしているのに自分だけ。そう考えると、欲は余計に強くなる。

「ではなぜそこまでして20000万ポイント集めたいと？」

「楽しいから、かな」

「楽しい？」

「うん」

何でも完璧にこなしてきた小中学時代。周りからは天才だとか言われたけれども、愛の喜びは全く満たされなかつた。

普通に友達と喋ったり遊んだり。どこにでもあるような、何よりもそんな当たり前が一番欲しかつた。何でもできると言われた愛が唯一できなかつたことだ。

人にはできないことができるくせに、人にはできることがどうしてもできなかつた。

愛にやりたいことがあればまだよかつただろうが、愛の欲求を満たせるようなことは幼い愛にはできなかつた。

そんな愛が高校生になつて初めてできた目標。茶柱が「無理だ」と言い切つた目標だ。未だに成功者がいないこの目標と戦うことは何よりも楽しく、幸せなのだ。

「楽しいと言うのであればそれでいいのですが」

坂柳はテーブルの上の紅茶を手に取り、一口飲んだ。

「ところで、話とは何でしよう」

「今の話にも関係してくるんだけどね、この前のテニスの大会でさ、私が優勝したんだよね」

「凄いじやないですか」

「ありがと。その時の報酬でプライベートポイントとクラスポイントを貰つたんだ」

坂柳は口を開くことなく愛の話に耳を傾けている。

「そこで相談——というか交渉なんだけど」

——私が得たクラスポイント、欲しくない？

「……どういうつもりですか？」

坂柳は警戒を強めた。

一度聞いただけでは、Dクラスに不利な話だ。それをDクラス側から持ちかけられて疑問に思わないわけがない。

「貰つたクラスポイント——150ポイントをAクラスにあげる。その代わりに、得た150ポイント分のプライベートポイント、一人あたり15000ポイントを私に譲つて欲しいってこと」

「なるほど」

Aクラスは他クラスとのポイントの差を更に広げることができる。一方の愛は一人分のプライベートポイントではなく、Aクラスの坂柳派の分だけ得られる。効率で言えば実質得られるポイントは20倍以上にも膨れ上がる。

「どう？　win-winじゃない？」

「確かにそうですね……」

坂柳は考え込む。

愛の学力面での優秀さは知っている。坂柳自身と並んでいるのだから、学年トップレベルだ。

それに、テニスの大会で優勝したときだ。運動面でもトップクラスの力を持っていると考えていい。

交渉 자체も、愛が言う通りwin-winだ。Aクラスのリードは今まで以上に広がる。愛が要求しているポイントも、愛が譲渡したことによって得られるクラスポイントからくるもの。実質Aクラスにマイナス要素は全くない。

だが、愛はDクラスだ。先月の勉強会でも、終了後反発の声が見られた。なぜDクラスと一緒にいなければならぬのか、と言ったものだ。

坂柳はどこのクラスに所属しているかよりも、個人の能力がどれだけ高いかを重視している。

それでも、Aクラス内にそのような考えがある以上一つ返事で受理することは難しいのだ。

「その返事は今日でなければダメですか？」

「今日がいいかな。……うん、今日じゃなきやダメ」

Aクラス内でその話が広まると、Dクラスの耳にも入る恐れがある。櫛田がいる以上そうなるのは時間の問題だ。

「もしかして、私がDクラスだから、つて思つてる？」

「私は気にしないのですが、どうしても他の人たちはそうにはいかないもので」

「私の名前は伏せればいいじやん。『協力者A』みたいな感じ？おー、これカツコよくない？」
「そうですか……？」

坂柳は胸の前で腕を組む愛に困惑して、苦笑いを浮かべた。

「ですが……150000ポイントは多いですね。100000ポイントならないでですが」

プライベートポイントは何に対しても使うことができる。学校の敷地内だけで言えば、日本円以上に価値が高いのだ。

Aクラスは大量のクラスポイントを保持し、それに比例して一人一人が保有するプライベートポイントも、必然的に多くなる。

それでもプライベートポイントを少しでも多く得たいという考え方

は変わらない。この先いつどのような形で使うことになるか分から
ない。

だからこそ、坂柳も100%譲渡することを躊躇っている。

当然、愛は譲渡したポイントの分だけしか要求していないので、虫
がいいのは重々承知だ。

「じゃあアレで勝負しない？」

愛が指差したのはチエスボードだ。

チエスは坂柳の得意なもので、その実力は折り紙付き。あの綾小路
が世界レベルだと認めた腕前だ。愛はもちろんそれを知っているし、
その上で挑戦状を叩きつけた。

「フフ、いいですよ。勝つたら私の要求通り100000ポイント、八遠
さんが勝つたら15000ポイント譲渡するということでいいですか？」

「そうだね。わざわざ家に置いてるつてことは随分得意なんだろうけ
ど、私だって負けるつもりはないよ」

坂柳は慣れた手つきで用意し、両手を愛の前に差し出した。

「では、白の駒が入っていると思う手を選んで下さい」

「うーん……右かな」

「白ですね。では、八遠さんの先行で始めましょうか。よろしくお願
いしますね」

「うん、こちらこそよろしく」

チエスは一般的に先行が有利とされる。先行の方が主導権を握り
やすく、展開しやすいからだ。

先行を取った愛の方が勝ちに一步近づいた、と言える。

「じゃあ、遠慮無く行かせてもらうね」

その言葉とともに、盤上を白と黒の駒が飛び交う。

お互い考える時間は僅か数秒。愛の攻撃に坂柳が対処する。
「意外とやるじやないですか」

「そりやどうも」

駒を動かすまでの時間の短さ。それでいて常に最善手を打つてい
る。

「以前にやつたことがあるのですか？」

「うん、あるよ。ネットでだけどね！」

残念ながら現実にはいない。愛の実力について来れないから、とうのもあるかも知れないが、そもそもやる相手がいなかつた。

ぼつちなのだからネットに逃げ込むのは当然だ。

「学校の勉強だつて簡単すぎてやつてなかつたし、時間はいくらでもあつたからね。その間チエスやら将棋やらオセロやらやつてたもんね！」

「それは自慢することではないと思いますが……」

坂柳はため息を漏らした。それでも駒を動かす手は止まらない。

「つと」

初めて愛の手が止まつた。

試合も終局に突入し、一手一手が重要になつてくる。

愛は真剣な眼差しで盤上を見つめる。

チエックメイトまでの道筋を思い浮かべながら、そこへ導くまでの最適な一手を導き出していく。

30秒と少し考えて、駒を進めた。

「面白いですね……」

「ま、これでもトップランカーだからね」

坂柳も指折りの実力者。最善だと思われる手を打てばチエックメイトに持つていかれるることは見通していた。

「さすがにそれは読めたか」

「当たり前じやないですか」

「じゃ、次はこつちだね」

今度は坂柳の手が止まつた。

「久しぶりです。こんなに強い人と対戦したのは」

「それは良かつた。あれだけ強気でいてボッコボコにされたら恥ずかしいつたらありやしないからね」

坂柳もまた30秒を超える思考の後に駒を進めていく。

終局に入り、八遠有利に傾いていた。

坂柳の一手は最善手に見える。しかし、八遠がそれを上回つてい

た。

不可能はないとは豪語するだけはある。

「私と互角以上に戦うとは思いませんでした」

「いやー、それは光栄だね。……これでチェックメイトかな」
だが、愛は坂柳とほぼ変わらない実力だと考えている。10戦したとして、どちらが勝ち越してもおかしくはない。

今回は八遠が勝ったが、もう一度やつて勝てるという保証はない。「どつても楽しかった。思わず最初の目的を忘れるところだつたよ」「クラスポイントの譲渡と、譲渡された分——一人あたり150000ポイントを八遠さんに振り込む、でいいですね?」

「うん。ああ、それと葛城くんの方から集める必要はないからね。どうせ賛成してくれないだろうしね」

チエス盤を片付けている時、ふと時計を見やると既に長針が頂上を過ぎていた。

朝10時頃から始まつた戦いも、終わつた頃には1時になろうとしていたのだ。

もうそんな時間か。そんなことを思うと、突然お腹が空いてくる。それと同時に、愛のお腹が可愛らしく鳴つた。

「折角ですし、どこかへ食べに行きませんか?」

「えつ、でも私ポイント使えないよ?」

「今日は私が奢りますよ」

天使か。いや、女神か。あの味の薄い病院で食べるような料理ではなく、美味しいモノを食べさせてくれるというのか。

坂柳とはいゝ関係を築けそうだと確信を抱いた。

「坂柳さんとはいゝ関係が築けそうだね」

「……八遠さん、暑苦しいです」

出かける準備を整え、部屋を出る。

「今日から私たちは友達だね！ よろしく、有栖ちゃんつ！」

「よ、よろしくお願ひします八遠さん」

「えー？ せめて名前で呼ぼうよ」

「では、愛さんですか？」

「うんうん。その方が仲が良さそうでしょ？」

「そういうものなんですか？」

「そういうものだよ」

坂柳は愛と同じタイプの人間だ。生まれながらにして才能を持ち、何でも出来る天才型の人間。

だからこそ気が合つた。

この学校にはそういう人間もやつてくる。凡人しかいなかつた小中学校とは違うのだ。

愛は杖をつく坂柳の反対側の手を取つた。坂柳は一度驚いたように見たが、すぐに受け入れた。

今まで疎遠だつた友達という存在。ようやく手が届いたことに、愛は大きな喜びを感じていた。

空は相変わらず灰色だが、降り続けていた雨はいつの間にか止んでいた。

?? ?? ??

「先生」

「何だ？」

放課後。外は雨が降りしきり、まだ日没前だというのに、廊下は暗がりの中にあつた。

そこで綾小路は茶柱に声をかけた。

「八遠愛について何か知つていることはありますか？」

「小中学時代はずつと孤立していたようだ。それがどうした？」

「八遠は学力、運動神経共に高い能力を有している。テストで毎回満点を取つていますし、先日部活の大会で優勝したという話も聞きました」

「そうだ。そういう意味では堀北に近い生徒だと言えるな」

しかし、綾小路には疑問が浮かんだ。

クラス内では一定の友人を得ている。平田を中心としたグループに近づく様子は見せないが、一人でいることが多い人に積極的に関

わっている様子が見られている。

そういう意味では、平田や櫛田にも近いと言える。

「クラス分けは学力だけでなく総合的に判断されると言つていました」

「ああ、その通りだ。もちろん八遠も堀北も同じ面接と入試を受けている」

「だからこそ、疑問が残るのです」

「疑問だと？」

茶柱は堀北に近いと愛を評した。しかし、どう見ても堀北よりも高い能力を持っている。

それにも関わらず、堀北と同じ理由でDクラスに分けられている。

同じことで言えば平田や櫛田も当てはまっている。

「本当に『孤立していた』という理由だけでDクラスに振り分けられたのか、ということです」

現在の生活態度を見ても、BクラスやAクラス所属だと言われても遜色ない。それだけ学力も運動も協調性も優秀。それなのに、愛はDクラスに所属している。

「つまり、八遠は過去にもつと大きな闇を抱えているのではないか、と思うのです」

「残念だが、そんな情報は入っていない」

茶柱に届けられた情報は、小中と一人だつたということだけ。それ以上の憂慮点はないとされている。

「ですが、全くないとも言い切れない。八遠がDクラスに分けられた理由としては余りに不十分だからです」

「お前は随分と彼女を認めているんだな」

「須藤の暴力事件を解決した時の張り込みは一部では有名な話ですから」

綾小路はもたれていた壁から離れた。

「今八遠がやろうとしていることは知っていますか？」

「……ああ。本人から直接聞かされたからな。どうやら本気で目指しているらしい」

「茶柱先生が本気でAクラスを目指すのであれば、それは絶対に阻止しなくてはならない。もし八遠がAクラスに昇格すれば、大きな障害となることは間違いないでしよう」

「だから無理だと言つてやつたのだが、笑つて一蹴されてしまった」
雨は今もまだしとしとと降り続けている。明日も雨という予報なので、今日晴れるとということはまず無い。

「八遠愛への警戒を強めておくことをお薦めします」

「ああ。そのつもりだ」

綾小路は茶柱と別れて下駄箱へ向かう。

Dクラスは例年Cクラスにすら上がれないで卒業することが多い。

しかし、今年は優秀な生徒が集まつた。

しかし、茶柱に猛獸は飼えるのだろうか。

茶柱次第では今の空模様のような結果に終わる。

誰がどんな戦いをするのか。そして、綾小路自身を打ち倒す人は現れるのか。

僅かな期待を胸に、寮へと歩みを進めた。

7月 その1

原作のテクノブレイクが止まらないRTA、はじまーるよー。

今回は3巻部分、つまり無人島試験編を走っていきます。ようやくよう実らしくなつてきましたね。

今回の大まかな目的は、綾小路の暗躍の補佐とポイントの節約です。なので、伊吹が軽井沢のぱんつを盗んだりカードを盗んだりと言った盗賊行為は放置でいいです。

真嶋先生からの簡単な説明を受け、トイレに関してひとしきり言い争つた後、例の川のほとりのスポットに移動します。

その間、時間があるので特別試験に関して簡単にルールを説明します。

最初に各クラス300Sポイントが与えられ、このポイントを駆使して無人島で1週間過ごす、というのがメインです。そして余ったSポイントはそのままクラスポイントに変換されるので、なるべく効率よく使うことが求められます。そのためには団結力が求められるわけです。

更に、無人島の各所には『スポット』と呼ばれる場所が数ヶ所あり、今Dクラスが向かっている川のほとりもその一つです。スポットは各クラス一人選ばれるリーダーによつて占拠することができます。有効期限は8時間なので、1日に3回更新する必要があります。そのタイミングでバレないように上手く隠さなければなりません。

そうして占有できれば、一回につき1ポイント獲得できます。これもいくらかクラスポイントに反映されます。

そして、綾小路が目指すポイント獲得方法が『リーダー当て』です。試験終了後、リーダーだと思う生徒の名前を書いて提出（分からなければ無記名でもよい）します。

的中すれば50ポイント、外れれば占有によるポイントも含めて残ったSポイント以外全て無効になります。また、当てられれば50ポイント失います。

Sポイントの減点は朝と夜の一定の時間に行われる点呼への遅刻

で5ポイント、リタイアで30ポイント、他クラスへの妨害、暴力、環境破壊などでクラスまとめて失格です。

さあ、無事に到着しました。木陰になつていて夏ではありますが涼しげです。まだスポットには到着していませんが、早速第一回目の探索です。

原作では綾小路、高円寺、佐倉さんのグループでしたが、佐倉さんに代わって愛ちゃん投入です。須藤事件を光の速度で解決しているので、佐倉さんルートは既に崩壊しています。難なく入ることができるでしょう。

探索を開始すると、高円寺がどんどん先に行ってしまいます。ここで見逃すとリタイアしてしまい、マイナス30Sポイント。毎月3000ポイントのロスです。1ヶ月でスペシャル定食三人前分のロスなので致命傷です。一人前の時点では相当根に持つているのでもしそうなれば私は発狂するでしょう（確信）

綾小路には別での探索を頼み、高円寺を追いかけます。夕方までは付き合うことになるので、諦めずに追いかけます。

無事に最後まで粘れば、イベントに突入。ただし高円寺ルートには突入しないしさせません（確固たる意思）

なんとか参加するように説得し、拠点まで高円寺を連れ戻します。ただし、点呼に遅れないようにしないと—10ポイントですよ。

ちなみに、この間にも綾小路は探索を進めてくれており、原作通り葛城と弥彦の演技を目撃しています。

2日目以降も、高円寺の見張りをしつつ作業を手伝えましょう。基本的に裏でリーダー当ての担当をするのは綾小路なので、私はポイント消費を出来るだけ抑えるべく、高円寺を引き連れて探索を続けます。

ちなみに須藤の暴力事件のところでBクラスとの協力関係を結ぶはずでしたが、それすらも無くなっているので、リーダー当ての時も綾小路君は容赦なく全クラス分書いてくれます。

綾小路くん、いつの間にか愛ちゃんの掌の上を転がされててワロタ。そしてやっぱり愛ちゃんは最強、はつきりわかんだね。

無人島試験の醍醐味の一つとして、偵察が挙げられるかと思います。

というわけで私も偵察に行つてみようと思います。

Aクラスは坂柳がないので（行く価値は）ないです。既に綾小路くんはリーダーが弥彦である事を見抜いているので、今更行く理由もないし。やっぱり弥彦はアホなんやなって。今すぐ愛ちゃんと変われやオラアン！

というわけで、CクラスとBクラスの偵察に同行します。高円寺の見張りは平田に頼んでおきます。他クラスとの接触に高円寺を連れていくのは自殺行為だとやる前からわかっているので連れて行きません。平田ならちやんと遂行してくれるでしょう。

まずはCクラスの探索へ参りましょう。メンバーは綾小路と堀北と愛ちゃんと櫛田です。

ここリーダーは、数日に及ぶ無人島サバイバルを生き抜くも、0ポイントに沈む（確定）の龍園くんです。須藤のやつといい、やる事全て上手くいきませんね。何故でしようか（他人事）

まあ龍園なんて所詮噛ませ犬にすぎないので、適当にあしらつておきましょう。

お次はBクラスです。Cクラス同様須藤の暴力事件の時に、協力ルートを木つ端微塵に破壊しています。

ここで協力関係を結ぶことも考え、実際に試しましたが、結果から言つて失敗でした。

予測できていたことですが、協力関係を結ぶことによつてリーダー指名が出来ず、結果として50クラスポイント損する結果に。

なので、このまま正常な関係で今後も進めていきます。愛ちゃんとにかかれば、敵が一クラス増えたところで危機的状況に陥ることはまずないのでね。

そんなわけで仲良さげに近づいていくわけにもいかず、離れたところから草陰に隠れて様子を窺います。

ここで必要なのは「あえて見つかる」ことです。草むらでバランスを崩しまくつて騒音を発生させます。

本来であれば偵察において「バレる」というのは絶対にあつてはならないことですが、Bクラスはお人好し集団。快く受け入れてくれます。

堂々と突撃するのは堀北に全力で止められるので、この手段しかありませんでした。

そしてここで綾小路と堀北にBクラスとの最低限の交友関係を持たせます。

原作との乖離を出来るだけ抑えるためであり、Bクラスを少しでも利用するためです。

皆さんご存知の通り、Bクラスを束ねる一之瀬帆波はどうしようもない善人。万引きという黒歴史を持ちながらも、根底にある善は余すことなく發揮しています。

今回は誠に遺憾ですが、そこにつけ込みます。外道？ 何とでも言つてください。

RTAに人情は不要なんですよ（戒め）

なんか体勢が気持ち悪いとか言つてガサガサ音を立てると、Bクラスの一人がこちらに気づきます。堀北に睨めますが、頑張つて受け流してください。ドMの兄貴達は逝つてしまわないよう気をつけとください。：ヌツ！

愛ちゃん一行の存在は一之瀬へと伝わり、なんと拠点に招かれます。流石一之瀬ですね。

そこで工夫していることを色々学び、大体2、30分調査して帰ります。主に布団の下に無料で無限に支給される、簡易トイレ用のエチケット袋を敷くことだと、温水が出るシャワールームとかです。エチケット袋のやつに気づいた天才は何処だ。

帰った後は、全力で食料集めに徹します。地味な作業ですが、食糧にもポイントは溶けていくので少しでも消費を抑えるためには致し方ないことです。

木の実がある木やとうもろこし畑を何度も往復し、飽きたら釣りで休憩したり。このサイクルでクラスにめっちゃ貢献することが大切です。

愛ちゃんは食料の購入を辞退しているので、その分消費ポイントが減ります。それでも問題なく生活できるのは、日ごろの山菜定食生活の賜物ですね（）

そしてもう一つ気になるのが、龍園と葛城の交渉ですよね。愛ちゃんの根回しにより、葛城は応じにくい状況に追い込まれています。彼らに納税の義務はないとは言え、他クラスへの支出が重なるのは、派閥関係なく避けたいところ。

ただ、龍園は少しでも多くのプライベートポイントを確保したい考え。

そういう思惑が複雑に絡み合つて辿り着いた結果――。

なんと、試験結果次第に。葛城も、龍園も、それぞれの1位ファイニッシュを確信しているからこそ、大きく出たのでしょう。

Cクラスが勝てば原作と同じ額のプライベートポイントがAクラスからCクラスに流れ、Aクラスが勝てば無しに。綾小路の行動は変わらないために結果は分かり切っているので先に言つておきますが、龍園ざまあみやがれ。流石かませ犬。

交渉なんて今後いくらでもできるだろうに。

というわけで、龍園の学校生活に暗雲が立ち込める結果になりました。原作を読んでいる兄貴なら、10巻を思い浮かべて「あつ……（察し）」と声を漏らしていることでしょう。

こういうところでどんどん原作をぶつ壊していくわけですね。

某国営放送局はぶつ壊しませんので期待しないでください。

これから軽井沢のぱんつが盗まれるという事件が発生しますが、話が長くなりそうなので今回はここまでとします。

今回で得たプライベートポイントはAクラスからの150000ポイント×人数分とクラスポイントからの収入のみです。現時点では坂柳派閥は25人なので獲得ポイントは375000ポイントと9600ポイントです。

クラスポイント減つてるぞいい加減にしろ、だつて？　どうせ山内のせい（確信）

そういうわけで合計で384600ポイント獲得です。今までの

分と合わせると、778200ポイントです。進捗は3.891%、約4%ですね。まだ1／25しか終わってないとか頭おかしそうやろいい加減にしろ！

では、次回は無人島試験後編を進めていきます。果たして、どんなポイント差で試験を終えるのか、とても楽しみですね。

次回もよろしくオナシャス！

7月 その2

今日も愛ちゃんが元気なR.T.A.、はーじまーるよー。

今回はぱんつ窃盗事件からスタートです。が、騒ぎの中心は男子と女子（陽キャ）なので、堀北と一緒に下がつていましょう。（軽井沢の肩を持つ理由が）ないです。

よくよく考えれば疑問点は浮かんできますが、綾小路の計画が狂うかも知れないので口出し厳禁です。まあ野次くらいなら問題ないでしよう。変態だとかスケベだとかこの人でなしだとか。ぱんつ欲しいとねだるのはいいですが、その後碌な目に遭わないので（オススメはし）ないです。色欲魔ルートがあるので、回りたければ勝手にやつて、どうぞ。その際は問答無用で犯人にされます。

ちなみにこのルートを進むとエロゲと化すので、私はやりません。予定通り女子と男子のテントの場所を離すことで決着がつきました。綾小路がテント移動を手伝ってくれているので、応援してあげましょう。手伝いとかは（面倒なのでやる必要）ないです。

少しばかり綾小路との会話を挟み、再び食料探索へ。高円寺に関しては、ぱんつ事件を越えれば逃げ出することは無くなります。

今から戻つても2日しか遊ぶ時間がないからね、仕方ないね。普段はあまり仲が良くないメンバーとの行動になりますので、会話は慎重に行いましょう。今更好感度を下げる理由はありません。クラスメイトとして最低限の交流ができる程度には関係を持つておくことを推奨します。

あつ。今思い出しましたが、どこのタイミングで軽井沢を中心になんかがフロアマットやらコードレス扇風機やらを勝手に注文しています。そのままやらせてしまうと総計12ポイント。月々1200ポイントの損となってしまいます。

なんとしても止めたいところですが、生憎これまた運ゲー。いつもやるか分からない中、5日目までに事件現場を取り押さえられなかつた場合、かなりの損害を負うことになります。ガバを許せない兄貴はここで再走です。

ちなみに私は逃しました。毎月スペシャル定食を注文するガバを起こすのと同義だと考えると寒気がします。スペシャル定食の夢を見そう（小並感）

後悔の念に苛まれながら6日目、ここが山場ですね。時間が進むにつれて雨が強まり、夜にはかなりの雨量に。そのお陰で違和感なく堀北をリタイアさせられるわけなんですけど。

まずはいつものように探索へ。昼前に帰つて来られればベストです。ここで山内に佐倉が気になつていると吐かせ、堀北に泥を被せればくれてやると提案します。2巻が飛んでいるので、綾小路が佐倉の連絡先を持つていないので、愛ちゃんが代役を務める形になります。そして堀北を水辺に移し、Dクラスから隔離します。あとは伊吹がキーカードを盗んでくれば……OK牧場です。

ここで綾小路にバトンタッチ。マニュアル放火事件を起こしてもらいます。

龍園や葛城としてはこれでDクラスのリーダーを把握できただと思つているようですが、残念ながら堀北の体調不良は見抜けなかつたようです。雑魚め。

本来であれば止めるべきですが、ポイントの為にマニュアルも堀北も犠牲になつてもらいます。考へることが綾小路と全く同じになつてきましたねえ（諦観）

火事が原因で再び男女間で言い争いが勃発してしまいます。平田が少しばかりダメージを受けてるので、クラスメイトがいがみ合つてゐる裏でせつせと消火作業を進めます。すぐに雨が降つてくるので、それまでにはテントに避難したいです。このあとは雨の中での行動となるので、風邪を引くりスクを下げるためです。万が一風邪を引くと、ガバの可能性が著しく上昇します。見てゐる側からすればその方がメシウマですが、走者側としてはシヤレになりません。

ていうかお前ら喧嘩しそうだから……もう少し仲良くできないの？

はあ、つつかえ。

午後7時過ぎ、綾小路と共に堀北の様子を窺いに行きます。

ちょうど今堀北は伊吹と戦闘中のはずです。まあ、体調を崩した堀

北が伊吹に勝てるわけもないのに、大人しく倒れてもらいましょう。

龍園と葛城が取引を終え、明かりがなくなつたところで堀北の下へ。一度目が覚め、また氣を失つたところで堀北をリタイアさせます。綾小路についていくと点呼に遅刻して5ポイントのマイナスです。なので堀北は綾小路に任せ、キャンプに戻ります。ここまで出来れば、Dクラスの1位抜けは確定です。2位は原作と違つてAクラスですが、Dクラスとは大差という結果になるでしょう。

堀北お疲れ様でした。あとは船に戻つて楽しいクルーズライフをお過ごし下さい。

さて、無事に最終日の7日目を迎えました。本日をもつて初めての特別試験は終了です。

Dクラスは相変わらずギクシャクしていて、側から見れば最下位の雰囲気そのものでしょう。楽しげな会話が続くBクラスとは雲泥の差です。

結果発表と行きたいところですが、その前にリーダー指名を。Aクラスは戸塚弥彦。Bクラスは一之瀬帆波……ではなく白波千尋。ちゃんと考へてるわけですね。原作より深入りできない関係上、ここは綾小路でも予想がつかなかつた場所なので私が代わりに書いておきます。Cクラスは、言わずもがな龍園翔ですね。

Bクラスにスパイとして送り込まれた金田や、同じようにDクラスにスパイとして贈られた伊吹の可能性も考えられますが、流石に四方八方を敵に囮まれた場所にキーカードを持つしていくわけにもいかないでしよう。それに、あの自称王様が渡すわけもない。

というわけでこの3人の名前を書いて、本当に特別試験が終了です。お疲れ様でした。綾小路が頑張りすぎて出る幕が殆どなかつたのが残念ですが。

では、結果発表へと参りましよう。最下位はCクラスで0ポイント。3位はBクラスで90ポイント。2位はAクラスで120ポイント。そして1位は我らがDクラスで、なんと305ポイントです。

高円寺のリタイアなし、Bクラスのリーダー当てだけでなんとプラス80ポイントです。最初に貰つたポイントよりも増えているので、

これはもう八遠さん大勝利ですね。良かったね池。我慢せずに300ポイント超えたよ。

合計すると、Dクラスのクラスポイントは401ポイント。割と早いペースで復帰しています。

もしかしたら普通にクラスポイントで戦つた方が早くAクラスに昇格できるのでは……？ ボブは訝しがる。

ちなみに愛ちゃんが稼いだ150ポイントも予定通りDクラスに加えられていたら、551ポイントですからね。Cクラス昇格を早くも決めている頃です。

それにして、なぜこのことに気づかなかつたのでしょうか。もしやこれこそが最大のガバなのでは……？

ま、まあこのルートの方が難易度が高いし、その方がやりこたえがあるからね、いいもん。

ではでは、衝撃の事実が発覚したところで今回はここまでです。集中力が途切れきったのか、少しガバが見られたのが反省点ですね。あれ、運ゲーとは言え記憶していればある程度対処は可能ですね。4巻以降に活かしていきたいところです。次回は船上試験を突っ走ります。

ポイント計算は、次回に回したいと思います。クラスポイント等の計上が帰つてからになるためです。

それでは、次回もよろしくオナシヤス！

7月 裏話 その1

太陽の熱気は鬱陶しい程に増し、外に出ることすら躊躇われるようになつてくる7月。夏休みに入つてすぐ、1年生は豪華客船に乗せられて、文字通りのクルーズ旅行を楽しんでいた。

それは一時的なものであり、数日後には無人島試験が行われるのだが、一部の頭が切れる生徒以外は浮かれて遊び更けていた。
「堀北ちゃんは、ずっとここにいるの？」

「外は暑いというのに、わざわざ出る必要なんてないじゃない」「だねー。日焼けもしたくないし」

ベッドに腰かけた愛は、足をぱたぱたと揺らしながら氣怠そうに言つた。

100万単位の金額を払わなければ乗れないような豪華客船のサービスが使い放題。今頃他の生徒は船のサービスを満喫している頃だろう。

しかし、生憎2人には一緒に行く相手がいなかつた。愛からすればいないこともないのだが、相手は部屋から出ることを拒んでいた。
「堀北ちゃんは船の中を探索したいとか思わないの？」

「そんなことをするくらいなら、本を読むか勉強をするわね。というか、わざわざあなたと一緒に行く理由がないわ」

「そういうのに理由つて要らないんだよ」

その言葉を聞き入れることもなく、堀北は再び本に目を落とした。船が出港してから3日。十分に船上生活を満喫した頃だろう。しかし、この後すぐ特別試験が始まる。

それを知らせるかのように、アナウンスが入る。

『間もなく当校が管理する無人島が見えてきます。上陸する前に島の周りを一周します。是非テラスまでお越し下さい。有意義な景色が見られるでしよう』

「有意義……？」

堀北が首を傾げた。試験が始まることが分かつていれば有意義な景色の意味も嫌というほど理解できるのだろうが、現時点では何も説

明がない。真相に辿り着いたのはごく僅かだ。

「なんか珍しい野生動物でもいるのかなー？」人と獣のハーフでもいたりして」

「そんな下衆な輩には制裁を下す他無さそうね」

愛は身震いした。堀北による制裁など、恐ろしくてたまらない。「それにしても、これから何するんだろう？」

「さあ。そんなこと聞かれても、私も分からないわ」

生憎、この部屋の窓は島の反対側しか映さないらしい。ここから島を見るることは叶わない。

「でも、島に着いたつてことは船から降りるんじやないかな」

愛がそう言つた瞬間、ジャージで外に出るように放送で指示が入る。端末以外の荷物は全て部屋に置き、端末は下船する時に担任の先生に預けるように、とのこと。

「島に上陸するだけなのに、持ち物には厳しいのね」

「ただバランスをする、つてわけじゃないのかも」

「嫌な予感がするわ」

他のルームメイトが帰つてこない間に制服からジャージに着替えてしまうことにした。

「はあ、堀北ちゃんつてほんとスタイルいいよね。嫉妬しちゃうね」自身と堀北を見比べ、肩を落とした。

堀北の方が背が高いし、胸も大きい。そもそも、絶壁の愛からすれば同級生はほぼ全員自身より大きい。

「……ちょっと触らせてよ」

「嫌よ。遅れたらどうすると言うの？」

「……」

八遠愛は、やりたいことを見つけたら止まらない人間である。2000万ポイントを以てAクラスに昇格するというのもそのせいだ。

今の愛のやりたいこと。目の前の自分には無いものに触れることがだつた。ストレートに言えば、堀北の胸を揉むことである。

愛は手を合わせて頼み込む。

「お願ひ！ 先っぽだけだから！」

「その方が大問題だと気づいてるのよね？」

スーツと愛の右手が伸びる。しかし、堀北はそれを許さない。

「……ダメ？」

「ダメよ」

「触らせてくれなかつたら協力を止めるつて言つたら？」

「そこまでの重要な問題ではないでしょ？」

「重要だよ！」

もう片方の手も伸ばしたが、やはり止められてしまう。

「もし揉ませてくれなかつたら、制服のボタンを盗んじゃうよ」

「地味な嫌がらせはしないでもらえる？」

「じゃあ」

堀北は諦めたようにため息を漏らす。このままお互ひ引かなかつたら本当に遅れてしまうだろう。愛は今も諦める気配を見せない。

「……少しだけよ」

「ありがとう堀北ちゃん！ 大好き！」

小学生のような笑顔を以て、愛は至福の時間を堪能することにした。

?? ?? ??

豪華客船から降り、無人島の土を踏む。

常夏の太陽が生徒達を照らし、鬱陶しい程の熱を送つている。

予定では1週間のバカンスとなつてゐるが、そんなものは欠片もない。やりようによつては出来なくもないが、普通ならやろうとは思わないだろう。

雑談に興じる他の生徒を他所に、愛は静かに森を見つめていた。

「どうしたんだ？ 堀北。疲れた顔をしているが

「黙りなさい」

「あ、はい」

綾小路の気遣いを、辛辣な言葉で突き返した。心当たりはあつたが、あまり触れない方が良さそうだ。触らぬ神には祟りなしというこ

とわざもある。

「八遠さん、さつきのは本当に重要な問題だつたの？」

「もちろん。あのまま拒否されたら、今頃シユレックみたいな顔色でゾンビみたいな表情をしてたんじやないかな」

「想像以上に大問題だつたのね……」

こめかみに手をやる堀北とは対照に、愛はこれから特別試験へのやる気に満ち溢れていた。それと同時に、堀北の好感度がさほど下がつていなきことに喜びすら感じていた。

いよいよ、特別試験が始まるのか。記憶によれば、これから無人島で1週間生活をするのだとか。

「これより、特別試験を始める」

静まり返つたところで、拡声器を用いてAクラス担任の真嶋が言った。

無人島試験用に支給されるポイントをうまく使って、1週間を乗り切るというのだ。しかし、残ったポイントはそのままクラスポイントに加えられるために、試験は一層複雑になっていく。

確かに、池の言うように全員がポイントを消費せず1週間を乗り切つたら300ポイント獲得できる。しかし、この試験はそう簡単に出来ていい。支給されるものの中にテントがあるが、どう考えても数が足りていない。その上、40人分の食料を毎度毎度集めてくるのも不可能だ。

だからこそ、この試験では持ちポイントをどう効率よく使っていくかという力と、クラス単位での生活となるため、協調性も求められる。それに加え、追加ルールであるリーダー当てのための情報収集能力。

一見ただの無人島試験に見えて、多岐にわたる能力が要求される試験なのだ。

「八遠さん」

「ごめん堀北ちゃん。今行く

堀北に声をかけられて、既に真嶋の話が終わっていたことに気づいた。

小走りで追いつき、並んでDクラスが集まる場所へ向かう。

「特別試験かあ……。何だか、やつとこの学校の本性が現れたつて感じだね」

「そうね。特別試験を境に、クラスポイントに大きな変動があることは目に見えているもの」

一際大きな声を響かせていたのは、Dクラスだつた。活発な意見交流ではなく、ただの口論であることを除けば、希望はあつたが。

4月にポイントを全て失い、須藤を避け、低空飛行を続けているDクラス。団体行動が求められる試験において、こうなることは必然だと言える。

現に、口論の内容は『ポイントを使うか使わないか』という前提以前のものなのだ。

40人が共同生活を送るためには、多少のポイントの使用は避けられない。

内容が『何をどれだけ買うか』であればまだ良かつた。どこまでが無謀であるか弁えられているからだ。

他のクラスは移動を始めているというのに、Dクラスは一步も前に進まない。

「さつきから不満そうな顔をしているけれど、止めなくていいのかしら？」

「私が言つても聞かないでしょ。堀北ちゃんが言つても聞いてくれないのと同じ」

クラスメイトとの関係が十分とは言えない愛と、ごく限られた関係しか持っていない堀北。口論の中心となつている池や幸村、篠原、軽井沢を止めるには力不足だ。

「単純に、アレに関わりたくないってのもあるけど」

「そう」

愛は額の汗を拭い、吐き捨てるように言つた。

「ポイントは使わないどうしようもないようになつて作られてる。テントだつて足りていないし、衛生面への配慮にもポイントは使わなければならぬ。大事なのは、リーダー當てでどれだけ取り返せるかつてこ

と

「3クラスとも的中させることができれば、150ポイントね。なら、150ポイントまでは使つてもいいことになる」

「そゆこと。無駄な消費を抑えれば、もつとポイントは増えるだろうね」

体調を崩してリタイアしたら—30ポイント。10人がリタイアするだけでポイントを全て吐き出してしまう。我慢するだけでは、この試験は乗り越えられない。

「……それに、私だつてあの簡易トイレは困るし」

女子が屋外で、しかも簡易トイレを使ってお花を摘んでいる様子など、想像もしたくない。

人は1日に6～7回排泄物を排出するのがちょうど良い回数だという研究結果もある。つまり、20人の女子が毎日6～7回——これ以上はやめておこう。

「それに、簡易トイレだけが問題じやない。水や食料にも同じことが言えるわ。その度に口論をすると考えると頭が痛くなるわ……」

「だね……。ポイント云々の前に、これから7日間ちゃんと生活できるかすら不安になってきたよ……」

最終的には綾小路の暗躍のおかげでDクラスは1位で試験を終える。しかし、この状況を目にするはどうしても不安が募ってしまう。「私としてもこの試験はあまり好ましく思えない。彼らと集団生活を送りたくないもの」

「これまた随分とストレートな……」

「事実を言つているだけだもの」

「だとしてももう少しオブラーートに包もうとかしないの……？」

思つたことを口に出来るのはとても大切な能力なのだが、それが仇となることもある。

アメリカなど海外へ行けば、そういう文化が根付いている。しかし、日本には本音と建前を使い分ける文化が存在し、堀北のような人間は嫌われやすい。今の堀北が孤独でいいと豪語している以上現時点では気にする事はないのかも知れないが。

とはいって、一人でAクラスに上がるなど余りにも無謀だ。必ず他人の力が必要となるからだ。

そもそも、前例がない以上どれだけ困難な戦いを強いられるか、予想できない。必ず限界が来るということだけは分かるが。

口論の果てに、池たちがようやく出遅れたことに気づいたようだ。慌てた様子で平田に迫ると、我先にと数名で森の中へ。遅れを取り戻すために拠点となるスポット探しへ出向いた。

「じゃあ行こつか」

「そうね」

森の中に入つたところで綾小路も合流、集団の最後尾を3人進んでいく。

「なんだか厄介な試験になりそうだね」

「いきなり喧嘩していたからな。この先が思いやられる」

綾小路も2人と概ね同じ意見だつた。

しかし、悲しいことに3人ともにこの状況を開拓する力は持ち合っていない。クラス全体に顔がきく平田と櫛田だけが頼みの綱だ。「そういえば堀北ちゃん、なんか体が重そうだけど大丈夫?」

「ええ、問題ないわ」

「本当かなあ」

小声で堀北の体調を気にして声をかけると、額をペタペタと触り出した。

堀北は狼狽したが、これといって抵抗する様子もない。

「ちょっと熱いけど、本人が大丈夫って言うなら問題はないか」

「きついのならすぐに言つてくれよ」

「いつか善処出来るように前向きに検討出来たらしておくわ」

「それ絶対に言わないやつだよね」

先ほどの口論に関して愚かしいと考える堀北だが、Aクラスを目指しているため、根底にある考えは同じだ。自らのリタイアで無意味に30ポイントを失うことを良しとしない。

「頑張るっていうならいいけど。30ポイントつて結構痛手だしね」

「そこで勝敗を分けることだつてあるからな」

この特別試験然り、卒業時のポイント然り。Aクラスが独走する今、1ポイントでも多く欲しいというのが共通認識だ。

「それにしても、上のクラスを目指すつて大変だな……」

突然、綾小路がそんな言葉を漏らした。堀北のやり方も、愛のやり方も、平坦な道のりではない。

「あなたは本当に上のクラスに上がることに興味が無いの？」

「別に不思議がることじゃないだろう。お小遣いが多ければ嬉しいし、運良くAクラスに行けばいいつてくらいだ。事なきれ主義者のオレにとつてはそれくらいで十分なんだ」

そんな上辺だけの事を言つた。

愛はそんな綾小路の、堀北からの追及をいなす能力の高さに感心していた。堀北とて、勘が鋭い方だ。そんな彼女に対して、事実を交えることで自らを隠している。

「この学校に入学する人たちは、Aクラスだけの特権を活かすために入学したと思っていたのに。八遠さんはどうなの？」

「私も特権はそんなに意識してないかな。Aクラスに上がりたいっていうのは単純にそれがまだ誰も成し遂げていないからかな。ほら、世界で初めて何かを成し遂げた人つて有名になれるじゃん。そんなもんだよ」

ここにいる3人が偶然違うだけであつて、堀北の言うように、特権目当ての生徒が多いことは紛れもない事実だ。

一行が止まるごとに、道の途中で程よく開けた場所に出たことに気づいた。スポットは無いが、休むには丁度いい。

平田はここで休憩すると言うと、先程のトイレの話題を解決すべく行動を始めた。

相も変わらず堀北がその輪に参加しないので、愛も口を出さない。

「綾小路くんはトイレは必要だと思う？」

「40人いるクラスでの簡易トイレ一つは確かに厳しいだろうな。ああいうものを使ったことがない人も多いだろうし」

「だよねー。中学の時なんて10人ちょっとがトイレに殺到しただけで混雑したからね。それで数分待たされるのは当たり前だつたし」

「そ、 そうなのか……。 大変なんだな」

綾小路は驚いた表情で愛の話を聞いていた。ホワイトルームではそんなことは無かつたのだろう。

「あとはテントもそうね。 今ままだと半分くらいが野宿する羽目になるわ」

「流石に夏とはいって、 風邪を引くかもしれないな」

「そうなると結局ポイントを多く無駄にしてしまうもんね」

3人が視線を向けた先では、 平田と幸村が言い争いをしていたが、 明かに平田の方が優勢だった。

幸村も、 トイレの設置は必要経費だと薄々察知していたのだ。

幸村が折れて、 トイレの設置が確定すると、 早くも平田は次の行動に出る。

「次は……さつきも意見が出ていたけど、 ベースキャンプを決めるために僕たちも探索するべきだと思う。 どこに腰を据えるかでポイントの消費にも大きく関わってくるからね」

平田はそう言つて参加者を募つたが、 名乗りをあげたのは男子生徒二人のみ。 このままでは探索はできない。

「この中にサバイバルに精通した人とか……いないかな?」

そう平田が聞いたが、 残念なことに平田の求める人材は既に探索へ出向いている。

他には名乗り出る様子もなく、 外村という生徒が総スカンを食らつた程度。 このままでは事態は膠着状態になつてしまつ。

「あの、 私でよかつたら行くよつ」

そんな状況を開拓すべく、 櫛田が自ら志願した。

そのおかげか、 数名の手が上がる。 その中には愛と綾小路も含まれていた。

「あなた達が積極的に志願するなんて珍しいこともあるのね」

「まあ、 何もないよりはマシじやない? それに、 今の愛ちゃんはいつも増してやる気だからね!」

「本当にそならしいのだけれど……」

全員で12人。 平田はこれを4つのグループに分けるように指示

し、それぞれが思い思に作つていく。

「やつぱりあなた達は余るのね」

「堀北ちゃんが言えたことじやないよね」

「堀北が言えたことじやないな」

「私は一人でいいもの」

残り物には福があるということわざがあるが、愛と高円寺が同じグループになつたのは幸運だろう。

この中で唯一制御できると言つても過言ではないのだから。

「実に清々しい太陽だ。私の体がエネルギーを必要としているねえ」

愛は、何としても高円寺をリタイアさせまいと固く決心して探索へ向かつた。

真夏の熱は周囲の海も相まつて湿気を伴つていて、体感温度は更に上昇していく。

額には汗が浮かび、そのたびにジャージで拭つていた。そのせいで、ジャージの袖はかなり濡れていた。

「暑い……」

「暑いね……」

一方の高円寺は何故か元気。暑さを物ともせず、愛と綾小路を気にすることなくどんどん先へ行つてしまつ。

「……すまないが、高円寺はお前に任せていいか?」

「半分そのために高円寺くんと同じグループになつたつていうものだからね。任せられたよ」

綾小路は、近くの洞窟へ探索に行くのだろう。その事を察知し、綾小路と別れて一人で高円寺を追うことになつた。

そう言つている間にも、唯我独尊を体现した男は自分のペースでどんどん先へ行つてしまう。

「急がないと」

愛は高円寺を追つて先を急ぐ。

「ふむ、着いてきたのは八遠ガールだけかい?」

「うん。綾小路くんは見ていみたいところがあるつて言つたから別れてきたよ」

やはり早歩きで歩く高円寺の隣を愛もピタリとつけて進む。それでもしない限り、本当に高円寺を見失つてしまふだろう。

「ところで八遠ガール、今日の私はどうかね？」

そう言われて、隣の高円寺を見る。

カツコいいとは言えないジャージ姿。顔に浮かぶ大量の汗。高円寺の求める解答とは程遠い。だから愛は。

「うん、今日も最高に美しいと思うよ！」

そう言うのだ。そうでもなければ高円寺との付き合いなどやつていけない。この数ヶ月で学んだ事だ。

「そうだろう。この私だ、どんな私でも美しいに決まっているのさ」本人曰く『私の美は身に付けるものや身の回りのものを全て美しくする』とのこと。

愛は大して変わらないように見えるが、高円寺は本当にそう思つているらしい。

「それにも、この道つて無人島つて割には綺麗だよね」

「ここは自然の森とは言えない。学校によつて多少手を加えられていいのだろう。少なくとも日中、彷徨つて迷う確率は極めて低い。だからこそ、多少興味はあるがね」

そう言うと、高円寺は更にペースを上げる。高円寺よりも30cmほど小さい愛には、小走りでないと着いていけない速さだ。

「ちよつ、速いつて高円寺くん」

「君が小さいだけだろう、八遠ガール」

「それ言うなし！ 気にしてるんだから！ ……せめて堀北ちゃんくらいあればなあ」

下船前のひと時を思い出し、愛は一人目を伏せる。
世の中は本当に非情だと愛は改めて思った。

「何かあるといいね」

「私としてはどちらでも構わないがね」

「さては高円寺くん、リタイアしようとか思つてない？」

「フツフツフツ、流石八遠ガール。よく気づいたねえ」

「だって元からそういう人でしょ。無人島試験とか面倒だし、船に

戻つて自分の美により磨きをかけたいとか今もそんな事を考えてるんでしょ」

「高円寺のことだ。考へていることは割と読みやすい。

「私だつてそれだけを考えているわけではないさ」

「え？ ジやあ何考へてるの？」

「そこに気づいてこそ本当の天才だと私は思うのだがね」

そう思つていたが、そうではないらしい。いずれにせよ、高円寺の頭の中を知りたいとは愛は思わない。

「とにかく、リタイアだけはしないでよ。高円寺くんがマイペースで自由奔放で唯我独尊なのは分かつたけど、Dクラス全体に迷惑をかけないで欲しいな」

「迷惑？ 生憎私はそんな事を考へたことはないのでね」

「大人の世界は打算だらけなんだよ。いつまでも高円寺くんの自由が通る訳でもないし、他の誰かと足並みを揃える必要だつてある。それに、高円寺くんが社長になるんだつたら、部下のこととき遣つてあげることも大事だと思うよ」

「ふむ、八遠ガールは私に説教をするというのだね？」

高円寺の視線が愛を射抜く。

普段は見せない鋭い視線に、愛は一瞬たじろいだが、すぐに立て直すと負けじと睨み返す。

「それはDクラスのためか、それとも八遠ガール自身のためか。どちらだろうか」

「自分のためだよ。それがたまたまクラス全体のためになるつてだけ。人なんてそんなもんだからね。全部自分のため。でしょ？」

「ハツハツハツ、気に入つたよ八遠ガール。いいだろう、リタイアはしないと誓おう」

「本当だよね？」

「ああ、本当だとも。私は有言実行する男だからねえ」

そう高円寺は言つたが、かと言つて100%信用できるわけでもない。もうしばらくは共に行動するべきだと結論付けた。

「そろそろ時間じゃない？」

「そのようだ。名残惜しいが、また明日来るとしようか」

来た道を引き返してDクラスの集団に合流すると、池が平田に嬉々とした表情で迫つているとこどつた。いいスポットを見つけたという池の先導で森の中を進むと、開けた場所に出た。大部分が木陰となつており、側には川も流れている。スポットはまだ占有されていないようだ。

平田にも好感度で、Dクラスはここで活動することになる。
支給されたテントを建てて最低限の準備が整つたところで、平田が口を開いた。

「まずはリーダーを決めないとね」

リーダーはこの試験において重要な役割を果たす。

スポットの占有もリーダーが行わなければならぬし、それを他クラスに見つかれば1クラスにつき50ポイントを失う羽目になる。逆に、当てることができれば1クラスにつき50ポイント得られる。「リーダーは僕や櫛田さんのような人じやなくてあまり目立たない人がいいと思うんだ」

平田は全体を見渡し、そして続ける。

「僕はリーダーには堀北さんが適任だと思う」

少し離れた場所にいた、愛の隣に意識が向く。当の本人は少し驚いた表情を浮かべていた。

「私も賛成かな」

櫛田も平田に賛成すると、次第に他のクラスメイトも賛成し、リーダーは堀北という流れに。

「私も堀北ちゃんらしいと思うよ。へマなんてそうそうしないだろうし」

「……分かったわ。リーダーは私がやる」

「ありがとう堀北さん！」

リーダーがするべきことといえば、スポットの占有である。しかし、堀北が一人で更新するとその瞬間を他クラスの生徒に見つかって、リーダーを当てられかねない。

「じゃあ、こうやって困んでやればいいんじやね？」

「そうだね。それが一番確実なんじゃないかな」

またしても平田の同調から始まつて、それがクラスの意見へと昇華していく。

その様子を眺めていると、改めて平田のクラスへの影響力の高さが窺い知れる。現状クラス全体の流れとして完全に平田に頼り切っている節がある。

今はそれでもいいが、いつかは打開しないとクラスは機能しなくなる。

リーダーに選ばれた隣の少女に目を向けて、愛も綾小路に協力しなければならないと思わされた。

?? ?? ??

「……なあ、本当にこれでいいのか？」

「逆に綾小路くんは堂々と入れるの？ 相手は殆ど面識のないBクラスだよ？」

2日目。Cクラスのバカنسを見送った後、Bクラスが陣取るスボットを覗くために、愛と綾小路と堀北は偵察に来ていた。

櫛田でもいれば、姑息な真似をする必要は無かつただろう。

「はあ、この体勢きつつ

「もう少し静かにできないのかしら？ 見つかつたらあなたの責任よ」

「そんなこと言われても……」

残念なことに、ここでも愛の低身長が遺憾なく発揮されてしまつている。綾小路と堀北は座つて見ることができると、愛は屈んだ状態でなければ見れなかつたのだ。

そのせいで何度も体勢を直し、そのたびにガサガサという音が立つていた。

40人もいて、そんな彼らに気付かない筈は無い。

「何だ、お前たちは」

「あ、どうも。Dクラスの八遠愛です。Bクラスの様子を陰から覗き

見していただけの下つ端です。怪しい人じやないよ！」

「そういう人を怪しい人と言うんだが？」

愛は疲れたらとばかりに茂みから這い出る。それに続いて、綾小路と堀北も姿を見せる。

「3人ともDクラスの生徒だな？」

「そうだよ。ちょっと偵察にね」

「あなたのせいで台無しになつた氣がするのだけれど？」

「お前たちはここで待つてろ。一之瀬に聞いてくる」

そう言うと、男子生徒は中心部で指示を出している女子生徒の方へ走つていつた。

「最悪ね。これじやあ何も成果が得られないじやない」

「どうかな。Bクラスは結構雰囲気がいいって聞くし」

「でも、他クラスのオレたちに同じような態度で接してくれるのか？」

「そこはアレだよ。神頼みつてやつ」

「ダメじやない……」

堀北はこめかみに手を当てた。本当に大丈夫なのだろうかという不安で満たされていた。これで失敗したら、今後Bクラスの情報を得ることは難しくなる。

しばらくして、女子生徒が歩いてきた。

「君たちかな、Dクラスから偵察しに来たつていうのは」

「そうだよ。他のクラスがどうやって生活してるのかなつて。あくまでも参考のためにね」

愛は奥に見えるテントやハンモックなどを見ながら言う。

愛としてはわざわざ出向かなくとも、Bクラスが行つた対策は知っている。こうしてBクラスの前に姿を見せたのは、Bクラスから得た方法であるという事を肉付けするためだ。

それに加え、堀北と綾小路をBクラスと接触させることも兼ねている。

「だから、ちよつと見せてもらえないかなつて。いいかな？」

「もちろんだよ。一番はみんなが無事に試験を乗り越えることだからね。そのためなら、Dクラスでも協力するよつ！」

「ありがと！」

一之瀬は迷いなく言い切つた。向けられた瞳も、嘘偽りないと語つていた。

「どんなでもないお人好しね……」

「だな」

既に愛の案内を始める一之瀬を追つて、2人も歩みを進める。

飲み水やシャワーの水は井戸水を使用する事で節約したり、暑さを打ち水で凌いだりと知恵を絞つて試験に臨んでいる。

無理なく堅実にという面では、理想的だ。

「一之瀬さん」

一通り回ったところで、1人の男子生徒が一之瀬に指示を仰ぎに来た。一之瀬が指示すると、すぐにその方へ向かつていった。

「今の生徒、随分と余所余所しいわね」

「彼は金田くんつて言つてね、Cクラスの生徒なんだ。クラス内で喧嘩しちゃつたみたいで、追い出されたみたい」

「ウチのクラスにもいたよね」

「ああ」

伊吹澪。一之瀬の言う金田という生徒と同様に、クラス内で揉めたらしく、初日の夕方頃に頬にアザを作つた状態で見つかった。彼女は現在、Dクラスで保護されている。

「なるほど……龍園くんは何をしたいんだろう」

「今もポイントを浪費してバカansasを楽しんでいるわ。試験を放棄しているようにしか見えない」

「だよね。でも、一つ脅威が消えたと思うとありがたいよね」

しかし、龍園はそんな男ではない。勝ちにこだわるなど下らないと抜かしていたが、実際は誰よりも勝ちに執着している男だ。

この後も金田と伊吹のクラス全員をリタイアさせた後、一人無人島に戻つて残りの時間をやり過ごし、全クラス的中という離れ技をやってのけかけた。

まだ龍園の本性が知れ渡つていなからこそ出来た作戦だと言える。

「あとはAクラスかな。まだ行つてないんだけど、どんな感じか知つてる?」

「うーん、行つてみたんだけど何も分からなかつたよ」

「……分からなかつた?」

「うん。洞窟に拠点を置いているみたいなんだけど、入り口をビニールシートで塞いでて中が見えないようになつてるから」

「かなり慎重なのね」

坂柳不在の中、指揮を取るのは葛城だ。彼の性格を鑑みれば、それが妥当だろう。

もしこの試験に坂柳が参加していたらどうなつていたことか。

「ありがとう。とりあえず様子を見ることにするわ」

「うん、気をつけてね!」

Bクラスの拠点を後にし、今度はAクラスを目指す。場所はCクラスの拠点とは反対側に位置している。

「ごめん、私は一回戻るね」

「何故かしら?」

「エチケット袋のやつは時間かかりそうだし、早くから作業を始めた方がいいかなつて。茶柱先生にも無理強いしなきゃだし」

「そう。なら、Aクラスは2人で行くことにするわ」

「ごめんね」

愛は堀北たちと別れ、一人で拠点に戻る。

早歩きで戻ると、平田が相変わらずの爽やかな笑顔で出迎えた。

「お疲れさま。……堀北さんと綾小路くんは?」

「Aクラスの様子を見に行つたよ。先にBクラスとCクラスに関する報告した方がいいかなつて思つて戻つてきた」

「ありがとう。じゃあ、話を聞かせてくれるかな」

「うん、いいよ」

Cクラスの意味なきポイントの浪費や、龍園の独裁体制。そして、Bクラスの確実性を重視した安定感の高い生活。それらを簡潔に伝えた。

「うん、なるほど。確かにテントの下にエチケット袋を敷くというの

はアリだね。あれはポイントの消費もないから、とても有効だと思う

「見た感じ2cmくらいの厚さがあつたから、少し時間がかかりそうだね。それに、茶柱先生にも協力してもらわないといけない。早く戻ってきたのはそのためでもあるけど」

「じゃあ、早速取り掛かろう」

愛と平田は、側のテントの中にいる茶柱のもとへ向かつた。
平田が呼ぶとすぐに顔を出した。

「先生、お願ひがあるのでですが」

「何だ?」

「簡易トイレに使う袋を大量に欲しいんです」

「……何に使うんだ?」

「テントの下に敷いて、敷布団として使おうかと」

茶柱は少し思案すると、テントから出て来る。

「分かった、承認しよう。だが、運ぶのはお前たちにも手伝つてもらう

「もちろんです」

最初に集合した浜辺まで移動し、そこに設置されている本部へ。茶柱が事情を説明すると、すぐに用意に取り掛かつた。

既にBクラスが行なっていることもあり、簡単に受け入れられたようだつた。

「八遠、この案は誰のものだ?」

「Bクラスです。偵察に行つたら教えてくれたんですね」

「本当か?」

「はい。Bクラスは想像以上にお人好しクラスのようで、偵察に来た事を伝えたら簡単に受け入れてくれました」

訝しむ茶柱に愛は淡々と説明する。

「これで足りるか? 足りなかつたら自分たちで取りに来るといい」

「ありがとうございます」

段ボールいっぱいのエチケット袋を両手で抱え、足場の悪い道をひた歩く。多少の整備がされているとはい、舗装しているわけでは

ない。

「平田くん、それ何？」

「エチケット袋だよ。これをテントの下に敷き詰めれば少しばは寝心地が良くなるんじやないかって八遠さんに言われてね。それで今もらってきたところ」

拠点に帰り、大荷物を持つた平田に真っ先に気づいて近寄ってきたのは、平田の彼女の軽井沢だ。

平田の彼女というのは、軽井沢がクラス内の地位を確立するために作つた偽りの関係だ。だからこそ、2ヶ月以上が経つた今でも互いに名字呼びだ。

「へえ……」

軽井沢は見定めるような目で愛を見る。

「することがないなら手伝つて欲しいんだけど」

「……ごめん軽井沢さん、時間がかかりそうだから手伝つてくれるかな？」

「平田くんがそうやつて言うなら手伝つてあげるわよ……」

平田が段ボールを置くと、渋々ながら中からエチケット袋を取り出す。

「ごめんね」

「気にしてないからいいよ」

愛も同じようにしていると、平田に小声で謝罪される。それに返事をすると、作り方を説明する。

それを聞き、2人も同じように作り始める。
すると、それを見た女子が集まつて来る。手伝いという理由で平田に近づくためだろう。

しかし、愛としても人手が増えることはありがたい。

そのおかげで、予定していた時間よりも早く終えることができた。しばらくして綾小路と堀北も帰つてきたが、特に成果は得られなかつたという。

試験はまだ2日目だが、今のところ比較的順調に進んでいると言え
る。最初の口論のせいで不安が大きかつたが、無事に和解しこうして

軌道に乗り始めている。

このまま試験が終わればいい。誰もがそう思っているだろうが、このまま終わらせてくれないのが試験だ。5日目。そこからが、本当の勝負だ。

7月 裏話 その2

5日目早朝。突然の悲鳴に叩き起こされた。誰かと思えば軽井沢だつた。そう言えば今朝だつたかと愛は人とのように思案する。

軽井沢の下着が盜難されるという事件。Cクラスの伊吹が起きた事件で、男女関係の崩壊と特別試験が大きく動き出すキーポイントとなる。

既に軽井沢の友達が対応にあたつているが、溢れる涙は止まりそうにはない。

下着の盜難。そういう事をするのは、男子しかいないという結論に至るまでにそう時間はかからなかつた。

女子たちは平田に頼んで男子を起させると、男子たちを糾弾し始めた。4日目までの雰囲気は霧散し、重苦しい空気が立ち込めていた。

「下着泥棒が出たのね？」

「そうらしいよ」

軽井沢曰く、朝起きたら無くなつていたという。それで真っ先に疑われたのが男子という事だ。確かに世間一般を見ても、下着泥棒の犯人が男であることが多い。

しかし、世の中には様々な性癖をもつた人がいる。

ノーマルだけでなく、同性にしか愛情が湧かないという人だつていい。もしかしたら、明かしていないというだけでそういう女子がクラス内にいるかも知れない。

「下らない事をするのね」

「せつかくうまく行つてたのに、それに水を差しちやつてるから余計にね……」

当然、男子もその雰囲気を望んでいる。順調に進んでいるところを邪魔するためと考えれば辻褄が合うのだが、クラスメイトの下着を奪われたという恐怖や怒り、不信感を抱く女子と、突如濡れ衣を着せられた男子がその結果に至るのは厳しい。

しかし、男子の中に犯人がいるという考えに至りやすいのもまた事

実。そんな男子の近くにはいたくないという意見が多発し、途中堀北と軽井沢の口論もあつたが互いのテントの距離感を空けるという事で決着がついた。

そして今、綾小路と平田がその対応にあたっているところだ。

愛は伊吹が綾小路の側を離れたタイミングで声をかける。

「お勤めご苦労さま」

「別に気のことじゃない」

綾小路は杭を打ちながら言う。

「まさかこんなことになるなんてね」

「だな。昨日までは上手くいっていたから、このまま終わってくれると思つていたんだが」

伊吹を迎えた時点でそれは不可能だと愛は知つてゐるし、綾小路も気づいていただろう。

愛は離れたところで一人座る伊吹を見て、ため息を漏らした。

「やつぱり伊吹さんってスパイなんじやない？」

「さあな。八遠の言う通りなのかもしれないし、本当にCクラスと喧嘩をしただけなのかもしれない」

「綾小路くんとしてはどつちだと思つてる？」

綾小路の顔を覗き込む愛。綾小路は自らの力を隠すためか、答えをはぐらかすことがしばしばある。普通に聞くだけでは、綾小路の考えを聞き出すことはできないだろう。

「嘘はつかないでよ」

しばしの沈黙。その後、綾小路は静かに口を開いた。

「伊吹が犯人だと思つている」

「何で？」

「順調に行つてゐるDクラスを崩すためだろうな。現に男女間の溝はかなり深まつてゐる」

愛は頷く。元からスパイとして送り込まれてきたのだから、その考えは辻褄が合う。

「龍園が全員撤退させたつてことは、リーダー当てでのポイントの獲得を狙つてるわけだよね。今回の事件がどう繋がるの？」

「さあな。もしかしたら、直接は関係無いかも知れない」

順当に考えるなら、Dクラスの輪を崩すことが目的だと言える。しかし、誰が主導したのか、伊吹の独断なのか、真の目的は別にあるのか、どれ一つとして愛には見当もつかなかつた。知つてゐるのは、綾小路の暗躍によつてDクラスを勝利に導いたという事実だけだからだ。

「私たちにできることはルールの穴を搔い潜ることだけだよね」

「ああ」

今も木陰で腰を下ろす堀北に一瞬視線を送つた。

それからの探索も男女別になるなど、徹底的に区別がなされた。愛としてはあまり関わつたことのない女子生徒と組む羽目になり、あまり気乗りはしなかつた。

「最低だよね、男子」

「せつかくうまく行つてたのに」

探索に行つても、聞こえて来る声は非難ばかりで、それに夢中になつていることもあつて探索の進捗の遅さに拍車をかけていた。

「どうしよう、次私が狙われたら」

「無理無理無理！ 想像もしたくない」

雑談に耽る女子を余所に、愛は探索を続ける。確かに下着泥棒も耐え難い事件ではあるが、犯人が伊吹と分かつてゐる上にこれは一度きりのもの。それ以上に目先のポイントが最優先事項だ。

「八遠さんこんな状況でよく探索できるよね」

「あんなことが起こつたつていうのは許せないけど、だからつて負けるのもやだし」

しかし、女子たちは勝てつこないと首を横に振る。その表情は男子のせいだと言つてゐるよに感じた。

その後も、女子たちの悪態を聞きながら探索は進んだ。道中で食料を集めながら進んだが、いつもよりも収穫量は少なかつた。

ほぼ一人で行つたも同然の探索の疲れを取ろうとテントに戻つたところで、愛は言葉を失つた。

「……は？ なにこれ」

「あー、これ？ 暑いしやつてられないってことで軽井沢さんたちが頼んでくれたんだよね。ほんとありがたいわ」

同じテントで寝る、探索に行つた女子とは別の生徒が言つた。
いつも寝泊りするテントの中には、扇風機や枕など今までにはなかつた小物が鎮座していた。

「これつてもう一つのテントも？」

「そうだよ」

つまりこれは余計な出費だつたということだ。苦労して設置した袋のマットも替えられていたので、結局12ポイントの出費。

「なんでこんな無駄な買い物したのさ」

「それは軽井沢さんに直接聞いてよ。あそこのグループが勝手に決めた話だから」

「分かった。ありがとう」

テントから出て、愛は軽井沢を探す。しかしその姿は見当たらず、代わりに別の声が聞こえて来た。

「テントの中、見たのね」

「うん。堀北ちゃんは知つてたの？」

「中に入るまで気づかなかつたわ。軽井沢さん達が勝手に頼んだようね」

ポイントはクラス共有であるから、全体にその情報が行き渡らなければならぬはずだ。探索に行つた愛に知らされていないのはまだしも、ずっと拠点にいたはずの堀北すら知らないとは。

「誰かによつて意図的にこのことが隠蔽されてるつてこと？」

「そう考えるしかなさそうね」

知識を探れば、軽井沢は平田にはこのことを報告しているらしい。

だが、そこから先には発信されていない。

「……勝手に無駄遣いするなんてね。これくらい我慢できるでしょ」「あり得ないわね」

軽井沢に問い合わせたところで話にならないことが目に見えていた

愛は、今も忙しそうに指示を出す平田の元へ向かつた。

「ねえ平田くん、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい？」

「うん、でももう少し待つて」

「分かった。でも、早くしてよ。私待つのは好きじゃないから」

平田の奥で顔を歪めて睨み付ける男子の姿があつたが、愛にとつてはただの流れ弾だった。愛は犯人を男子と決めつけたわけでもないし、恨んでいるわけでもない。むしろ、女子の方が信頼できないほどなのだから。

堀北と共にしばらく川辺に座つて涼んではいるが、相変わらずの爽やか顔で平田は現れた。

「ごめんね、待たせちゃって。それで話つて何かな？」

平田が隣に腰を下ろすと、いつもより数段冷たい聲音で最初に愛が話を切り出した。

「さつき帰つたら女子のテントの中の物が増えてたんだけど、どういうこと？」

「あれは軽井沢さんたちの要望だよ」

「夜が寝苦しいからつて？」

「うん」

やつぱりか、と愛はため息を溢す。女子たちの勝手さには呆れるばかりだ。

「平田くんは軽井沢さんたちに対して念押しするようなことは言つたのか？」

「……言つてない」

愛は驚きを隠せなかつた。ルール上誰でも注文できるので、軽井沢が勝手に注文してしまつたのだと考えることはできる。だが、その後何も注意しないのは大問題だ。ここで見逃すと今後ますます態度が大きくなることは目に見えているはずだ。

「何で言わなかつたの？」

「その方が女子の雰囲気も悪くならないかなつて……」

「そうだよね、平田くんなら絶対にそうするよね」

平田は秩序を守りたがるタイプの人間だと愛は認識している。

現状、軽井沢たちはこの試験に気乗りしていない。そこへ平田が何かを言えば、表向きは平田の彼女だと聞き入れるかも知れないが、す

ぐにやる気を失くしてしまふとも考えられる。

「まあ私もそれは否定しないけどさ……」

「けれど、ポイントの使用は共有されるべき情報よ」

堀北は愛が平田の肩を持つたことが意外だつたらしく、愛の言葉に食いついた。

「もちろんそう。だけど、今この情報が広まれば混乱は更に深まる。それに、今朝ああいう事件が起きたばかりだから、この情報を公開するのは良くないって私は思うけど」

「それは……」

「だけど、このことが見逃されていいわけでもない」

「それは、そうだね」

誰かが輪を乱すような行為をすれば教師や親が怒るように、平田もこの件に対し厳しい対応を取らなければならない。

「せめてマニュアルはちゃんと管理しておかないと。軽井沢さんつて身勝手なところがあるから想定は出来たんじやないかな」

「そうだね。彼氏の僕ならそれくらいのことはすぐに分かるはずだよね……」

彼氏であるはずの平田がそこまでの考えに至らなかつたのは、軽井沢を信用しすぎたからか。

愛に代わつて、堀北が口を開いた。

「Dクラスは女子の態度が横暴な傾向にある」

池や山内、須藤と言つた3バカも自分勝手と言えるが、池は今回の試験に前向きに取り組んでいるし、須藤も暴力事件で少しは反省したことだろう。

山内に関しては空気が読めないことがあり、その上平気で嘘をつくため要注意であることには変わりはないが。

「確かに、クラスの崩壊を防ぐには大切だけど、それは目先だけを考えてのこと」

「……うん」

「将来的なことを考えると、ここで女子の身勝手な行為を放置しておけばエスカレートする可能性があるわ」

「じゃあ、みんなの前でこの事実を言えっていうこと?」

それは違うよ、と平田の言葉を否定したのは愛。

必要なのは、晒し上げることではない。再発防止をすることだ。

「軽井沢さんたちに、今後は身勝手なことをしてクラスの迷惑にならないようにと念押しして欲しいんだ。そして、次クラスに不利益になるようなことがあればすぐにクラス全体で共有する、ってね」

「つまり、軽井沢さんたちに圧力をかけるつてこと?」

「まあ、ストレートに言うとそう言うことだね。平田くんの気持ちも分からぬことはないけど、悪には毅然とした態度で立ち向かうこともりーダーには求められると思うよ」

平田は誰にでも優しい。公平性という意味ではリーダーに適しているが、優しさが裏目に出ることもしばしばある。それが今回の一件に繋がってしまったのだろう。

1年生も終わりに近づけば、堀北がリーダーの一角を担うことになる。堀北の性格は平田の弱点を補うには丁度良い人材だ。綾小路が目を付けたのは、隠蓑にすることや元来のリーダー気質もあるだろうが、こういう理由も少なからずあるのではないだろうか。

「ま、リーダーでもなんでもない私が言える話じゃないけどね」

「……ありがとう。女子たちに話してみる。これもクラスが前に進むために必要なことだもんね」

「心を鬼にして頑張つて」

これで女子が協力的になってくれれば良いのだが。

愛は雲ひとつない空を見上げた。

?? ?? ??

6日目の探索。愛は綾小路たちと共に探索に向かっていた。

綾小路が原作通りの攻略をするなら、愛の同行は必要不可欠だ。理由は単純、綾小路が佐倉の連絡先を持つていなければだ。

一方、愛は4月からコミュニケーションを取つていて、連絡先も交換済みである。結局佐倉の連絡先を渡すことのなかつた綾小路だが、

今同じ話を持ちかけたところで、流石の山内もその事実に辿り着くだろう。

ならば、同じ誘いを愛がすれば良い話だ。そして堀北を水場に移動させ、水浴びをさせれば伊吹がキーカードを盗んでくれる。

「ねえ山内くん、お願ひがあるんだけど」

「な、何だよ」

普段話したことがない愛から声をかけられ、山内は僅かに警戒する。

だが、山内のような男は誘惑に弱い。とても弱い。佐倉の連絡先をちらつかせば、堀北に泥を被せてくれることになつた。こうして尊い犠牲が生まれる運びとなつたのだ。

佐倉ホイホイに完全に乗せられた山内は、愛も引く量の泥を堀北に被せ、綺麗に背負い投げされた。頭を強打してとんでもないことになるのではないかと一瞬思ったのはここだけの話だ。

「佐倉の連絡先、くれるんだよな……！」

「もちろん」

そうは言つたが、実際のところ渡す気にはならない。佐倉と山内が二人きりになると、強姦されるのではないかと思つている。愛が本気で恨むほどスタイルの良い佐倉は、ネット上でアイドルとして活動していた。

この学校に進学してからは、校則を守つて活動は休止しているようだ。しかし、例の事件が全く解決していないので、佐倉の内面は全く成長していない。

今の佐倉では山内の誘いなど断れるはずもない。

しかし、ポイントのためならば愛は平氣で嘘をつく。そういう意味では山内と変わらない。クラスにとつて利益か不利益か、意外とそれくらいの違いしかないのかも知れない。かと言つて山内がクラスに貢献するようになつたからと言つて愛と同列になるかと言わればそういうわけでもないのだろう。

「八遠」

堀北のキーカードを見送つた後、マニュアルを燃やした綾小路に呼

ばれた。

……なるほど、そつちの顔か。
「どうしたの？」

愛はいつも通りの口調で答えた。

綾小路がついて来いとジエスチヤーをしたため、愛は従う。雨が降り始め、徐々に雨脚が強まつていく。

森の中へ入り、人気のないことを確認すると、綾小路は切り出した。
「お前はオレの作戦をどこまで見破つていた？」

「どういうこと？」

「この試験が始まつてから、オレはお前に誘導されている」「
気のせいじゃない？　たまたま攻略方法が同じだつただけつてこと
だよ」

ホワイトルームでは敵なしと言われた綾小路。ホワイトルームで
頂点ということは、並ぶ人間はいないということ。そんな綾小路の作
戦が八遠に筒抜けだつたことは、綾小路にしてみれば由々しき問題
だつた。

「例えば下着事件。お前は軽井沢と同じ部屋だつたはずだが、終始落
ち着いていた」

「それは綾小路くんもでしょ」

「さつきもそうだ。山内に泥を被せさせたのは、堀北を一人にするた
め。水場へ誘導したのも堀北の体調を悪化させるためだ」

相変わらず底の見えない瞳を愛に向けながら、淡々と続ける。

「まるで未来が見えているようだな」

「あはっ、それ茶柱先生にも言われたなあ。まさか綾小路くんもそん
な下らないＳＦを信じてるなんてね」

「まさか。オレが信じるわけがないだろ。オレは自分しか信じない。
堀北も、平田も誰も信用しちゃいない」

それが堀北に仲間が云々言う人の台詞かと思うと皮肉なものだ。

「過程は違えどお前がやつたことはオレがやろうとしていたことと全
く同じだ」

「なら私と綾小路くんは同じような思考回路の人間つてことだ。目的

のためなら他人を捨てる」ことを厭わない、そういう人間たちなんだよ、私たちは」

「そうか？ オレにはそれは見えないが」

その言葉に愛は首を傾げる。

綾小路は自身が勝つていれば良いと考える人間。愛も自分がAクラスで卒業出来れば良い人間。どちらも最後に自分が頂点にいられれば良いとを考えている。

「お前は心の底では誰かを信じたいと思っているだろ」

「何それ。私は誰も信じない。これは過去の教訓だから、絶対に搖るがないよ」

過去を振り返れば下らないことづくしだったが、お陰で今がある。「綾小路くん、これ以上の追求はしないほうがいいよ。私のことなんて誰も分からぬ。何を聞いたって答えは一向に出ないんだから。綾小路くんがつて詮索して欲しくないでしょ？ それと同じつてことだよ」

「……そうだな」

気がつけば、かなり時間が経過している。そろそろ戻らなければ怪しまれるだろう。

「最後に一つだけ。私を隠れ蓑にしないでね。堀北ちゃんがいるんだから。もしそうしたら邪魔したつて扱いにするから」

「分かった。肝に銘じておく」

愛が綾小路に背を向けて歩き出すと、綾小路は横に並ぶわけでもなく後ろをついて来る。

足元に注意を払いながら戻ると、堀北が申し訳なさそうな顔をして歩いてきた。

「どうしたの、堀北ちゃん」

「ごめんなさい、キーカードを盗まれてしまつたわ……。あの時手元に置いておかななかつた私の不注意よ……」

このままだと、CクラスとAクラスにリーダーが知られてしまい、ポイントを落とすことになる。試験終了時には100ポイントも残つていなかつる。

「これは私の問題よ。だから一人で取り返しに行く。Aクラスも私の力で上がつてみせる……。だから……私に手を貸すことはもうしないといいわ」

堀北はそう言い残すと、一人で伊吹を追いかけて森へ入つていつた。

「後で様子は見に行つたほうが良さそうだよね」

「ああ。あいつはずっと風邪を我慢しているから、間違ひなく倒れる」伊吹だつて簡単には返してくれない。記憶通り戦いが始まるだろう。そして、コンディションが最悪の堀北は間違ひなく負ける。そしてそのまま意識を失つてしまう。

「そしてリタイアさせてリーダー変更、か」

「ああ」

これで伊吹の行動は徒労となる。リーダーを外し、龍園の潜伏も水の泡と化すだろう。

「じゃあ、行くか」

「下克上の始まりだね」

放火事件で混乱に包まれるDクラスを他所に、愛と綾小路は堀北の後を追う。

雨でぬかるんだ地面は滑りやすく、かなり危険だ。

「隠れたほうがいいな」

前方に明かりが映り、急いで木に隠れる。恐らくキーカードの確認だろう。綾小路がカメラを壊したせいで龍園と葛城が足を運ぶことになつたのだ。

しばらくして、その光も遠くへ去つていった。
近くで堀北が倒れているのを確認し、近寄ると愛は堀北の頭を膝に乗せた。

「これ、結構な熱だよ」

「だろうな。1週間の我慢に加えてこの雨だ。重症化してもおかしくない」

しばらくそうしていると、堀北が目を覚ました。

「八遠……さん？」

「綾小路くんもいるよ」

「ごめんなさい……キーカードは取り返せなかつたわ……」

「一人で行つちやうんだもん。せめて私でも頼ればよかつたのに」

「だけど、もうあなた達に迷惑をかけるわけにはいかないもの……」

力なく言葉を溢す堀北に、愛は馬鹿だなあと呟かずにはいられないかつた。

「私たちちは友達でしょ？ 迷惑だなんて気にしなくていいからさ。頼りたくなつたら頼ればいいんだよ。私は堀北ちゃんを助けてあげるから」

綾小路が愛に鋭い視線を送つてゐるが、気づかないフリをする。

「堀北ちゃん、もう試験を続けるのは無理だよ」

「いいえ……少し休んだら戻るわ……。だから二人は先に戻つてて……。後少しだもの、リタイアするわけにはいかないわ……」

「堀北、無理はするな」

「無理なんとしてな……い……」

再び意識を失つた堀北。堀北は大丈夫だと言つてゐるが、誰がどう見ても試験続行不可能だ。このまま強制的にリタイアしてもらわなければならぬ。

「無理してないだなんて、説得力ないなあ……」

「八遠、お前もだぞ」

「ん？ 何のこと？」

「分かつてるだろ」

「まあね」

綾小路は堀北を軽々と抱き抱えた。力仕事は綾小路に任せたほうがいい。点呼の時間も迫つてゐるので、愛は拠点に戻ることを決めた。

「勝つたな」

雨に濡れて、ジャージも泥まみれで気持ち悪い。体を冷やしたまま

寝ると愛まで風邪を引く羽目になつてしまふだろう。

「帰つたらシャワー浴びるか」

勝ちを確信した愛は、元来た道を引き返していく。

?? ?? ??

7日目昼。前日の雨が嘘のような快晴で、夏特有の蒸し暑さが襲いかかってきた。

ようやく試験が終わり、最初の集合場所である浜辺に集った一年生たち。

長く辛い試験が終わつたこと、これから結果が発表されることもあり、些か落ち着かない様子だ。

リーダーは全クラス分記入し、他クラスからの攻撃は回避した。最早負ける要素は残されていない。

「諸君、初めての特別試験ご苦労だつた。結果発表にもう少し時間がかかるため、楽にしてもらつて構わない」

愛の一番の話し相手は今頃船で安静にしていることだろう。それが原因で一人になつてしまつた愛は、他クラスの様子を観察することにした。

Aクラスは戸塚が自慢げに葛城と会話している。中身はきっと『ざまあみる坂柳』程度のことだろう。これからざまあされるのは戸塚なのだ。

Bクラスは、試験を無事に乗り越えられてほつとしていると言つた印象か。誰にも不満の色がないことから、最終的な結果を度外視すれば最も上手く乗り切つただろう。

そしてCクラスは……。

「クククツ……」

「龍園!？」

遅れての登場だった。『ヒーローは〜』と言う言葉があるが、いつからいい身分になつたのやらと愛は一人呆れた。

1週間も大変だったなど言つているが、その本人が0ポイントで数日を過ごしたと考へると可笑しな話だ。現に、龍園のジャージは至る所に汚れが付着していて、過酷さが窺えるものとなつていた。

龍園は完璧な作戦とやらを熱弁していたが、看破されている作戦に耳を傾けることはしなかった。

「では、これから結果を発表する。4位はCクラスの0ポイント」龍園のあり得ないという表情。池や須藤の煽りもあって、滑稽さを増していた。

「3位はBクラスの90ポイント。2位はAクラスの120ポイント」

Bクラスは確かに悔しげな声は聞こえたものの、後ろ向きな声音はない。90ポイント貰えたからオッケーだと言う様子だ。

対するAクラスは、1位を狙っていたのだろう。葛城の困惑と坂柳派の野次、戸塚の喚きが聞こえた。

この時点で1位が確定したDクラスからは驚きと喜びの声、どれだけのポイントなのか期待する声が上がる。

「1位はDクラス……305ポイント」

男女問わず、大きな歓声が上がる。1位になつただけでなく、最初のポイントを上回つたのだから。

特に何もしてないだろと言いたい気分になつた愛だが、試験中の仲違いが解消されるならそれでいいかと思つた。

船に戻ると、堀北がデッキに来ていた。結果を知られ、慌てて出てきたのだろう。

「ちよつと綾小路くん、八遠さんこれどういう……」

「えっ？」

堀北は愛と綾小路に聞いたそうにしていたが、クラスメイトに取り囲まれて遮られてしまう。

暗躍を全て堀北の発案にしてくれと平田に頼んだのだ。

「いやー、良かつたね。無事1位で終わつて」

「そうだな」

しばらく堀北たちの微笑ましい様子を見守つていようと愛は決めた。

今回は嘘まみれである輪が生れたが、将来的には眞実を以てああ

ならなければならない。

しばらくして、ようやく解放された堀北が疲れの色を見せながら歩いてきた。

とりあえず座ろうかという愛の言葉で、近くのベンチに腰掛けた。
「堀北ちゃん、体調はどう？」

「大分良くなつたわ。迷惑をかけて悪かつたわ」

「ううん、迷惑だなんて思つてないよ！」

堀北が風邪を引いていなければ、リタイアの口実を考えることが困難だつただろうから、と愛は心の中で付け加えた。

「それで、この結果はどういうこと？」

「見たままだろ」

「見たままだね」

「私が言いたいのはそういうことではないの」

そう言いながら愛たちを睨む堀北。愛は笑つてそれを受け流す。

「綾小路くん」

「これのことか」

「それは……!?」

「そういうこと。リーダーは変わりました」

「でもリーダーは変えられないはずじゃ……」

「いや、違うぞ堀北」

確かに簡単にリーダーは変えられない。しかし、マニュアルにはこう書いてあつたのだ。『正当な理由なくリーダーを変更することはできない』と。つまり、正当な理由さえあればいつでもリーダーは変えられるのだ。

「なるほど、私の体調不良は正当な理由だと」

「そういうことだ」

今回の試験の全体を把握した堀北は、深々とため息を吐いた。

「あなたたちはいつからこのことを考えていたのかしら？」

「伊吹さんを見つけた時くらいからかな」

「同じくらいからだ」

「ちなみにリーダー当ては説明があつた瞬間かな。無理に我慢するよ

りもそこを狙つたほうが効率いいしね」

「今度はこめかみに手を当てた堀北。

「あなたたちを見誤つていたわ……。特に綾小路くんは確かにね。今までパツとしなかつたし」

「暴力事件が無くなつたので、綾小路が実力を発揮したのはここが初めて。堀北が驚きを隠せないのは仕方ないことだろう。

「ねえ堀北ちゃん」

「何かしら」

「折角だし、美味しいもの食べにいかない?」

「まだ体調が万全ではないのだけれど」

「大丈夫だつて! 綾小路くんも行こつ」

「お、おう」

無人島試験が終わつたが、すぐに船上試験が始まる。だが、始まるまでは浮かれてもいいだろう。

船上試験のことは始まつてから考えればいい。あのカラクリは把握しているので、後はどうすれば愛にとつて一番利益がある結果になるか考えればいいだけ。試験はこれも1週間。時間は十分にある。

ならば、試験の合間の数日間は何も考えず楽しめばいい。
「だからつて私の布団に潜り込まないでくれるかしら……!」

8月 その1

ガバにも負けず、屑運にも負けずがモツトーのRTA、はじまるよー。

ふう、なんとか無人島試験を良い結果で終わらせることができましたね。他クラスとの差も詰めることができましたし、非常に良かったと思います。

ここまで細かなガバはあつたものの、絶望するほどのガバはなかつたですね。ないです（白目）

現在は愛ちゃんたちは船の上でリッヂな生活を送っています。この施設は無料で使いたい放題なので、一生いたいところですがそういうわけにもいかないんですね、これが。始まりがあれば終わりもある、というものですから。

というわけで、前回の予告通り今回は無人島試験の次は船上試験を行います。船上試験において重要なのが、『12の干支に分けられたグループ』と『優待者』です。

その説明をする前に、運ゲーの始まりです。優待者は原作に描写されているためなることは叶いませんが、そのDクラスの優待者がいるグループは避けたいところです。理由は、所属するグループ以外への解答が出来ないからです。

被つても立ち回り次第では乗り切ることができますが、優待者を隠さなければならないこともあります。他なら全然オッケーです。あ、猿グループ、テメーはダメだ。高円寺が勝手に終わらせてしまうからな。

それでは、ガチャガチャタイム！ イクゾ～イクイク

はい、結果は猪グループです。無難なグループだと思いますね。ツマンネ

メンバーはモブばかりでしかもあまり影響はないので省きます。モブじやないキャラがいても私が記憶してないので等しくモブキャラです（無慈悲）

現在指定された時刻を迎え、愛ちゃんがルール説明を受けています。結構ルールが複雑なので、今一度確認しましよう。完璧に暗記している兄貴は飛ばして、どうぞ。

まずは基本のルールからです。

- ・試験当日の朝8時に一斉メールを送信、優待者に選ばれた人には同時にその事実も伝えられる。
- ・試験の日程は、翌日から4日後の午後9時まで。
- ・1日に2度、グループごとに指定された部屋に集合して、1時間の話し合いを行う。
- ・話し合いの内容は自由。
- ・試験の解答は試験終了後、午後9時30分から10時までのみ、優待者が誰かの答えのみを受け付ける。解答は一人一回。
- ・優待者にはメールで答えを送る権利がない。
- ・自身が配属された干支グループ以外への回答は全て無効となる。
- ・試験結果の詳細は最終日午後11時に全生徒にメールで送信する。

次に、この試験を終える4つの方法に関するです。

- ・結果1：グループ内で優待者及び優待者の所属するクラスメイトを除く全員の解答が正解していた場合、全員にプライベートポイントを支給する。（優待者以外に50万プライベートポイント、優待者に100万プライベートポイント）
- ・結果2：優待者及び所属するクラスメイト以外の全員の解答のうち一人でも不正解だった場合、優待者に50万ポイントを支給する。
- ・結果3：優待者以外の者が、試験終了を待たずに解答し正解した場合、答えた生徒の所属クラスは50クラスポイント得ると同時に、

50万プライベートポイントを支給する。優待者を見抜かれたクラスはマイナス50クラスポイントとなる。優待者と同じクラスメイトが正解した場合は解答を無効とし、試験を続行する。

・結果4・優待者以外の者が、試験終了を待たずに解答し不正解だった場合、間違えた生徒が所属するクラスはマイナス50クラスポイントのペナルティを受け、優待者に50万プライベートポイント支給すると同時に、優待者の所属クラスは50クラスポイント得る。優待者と同じクラスメイトが解答して不正解だつた場合も解答を無効とし試験を続行する。

といつた感じですね。理想はDクラス以外の優待者がいるほとんどのグループで結果3、Dクラスの優待者がいるグループで結果4、愛ちゃんが所属するグループだけ結果1となるのですが、どう頑張つても不可能です。

馬鹿野郎お前俺はやるぞ！（天下無双）と意気込む兄貴は勝手にやつてくれて構いませんが、生還者は0だということは報告しておきますね……。数十年粘ればいけるかもしませんが、そんなことをするくらいならもつと他のことをすべきです。

一応原作での結果を紹介すると、結果1が1グループ、結果2が4グループ、結果3が5グループ、結果4が2グループでした。

唯一結果1だつたのは竜グループ。龍園や葛城や堀北や平田達がいる、いわゆる主戦場です。こうなつたのは、おそらく龍園がプライベートポイントを欲しがつてているからだと思います。彼は既にプライベートポイントの有用さに目をつけていたわけですね。

ちなみに、今回愛ちゃんが所属する猪グループは結果3です。

それでは、この試験で愛ちゃんがすることを説明していきます。今回は説明ばかりでつまらないかもですが、最後までお付き合いください。

原作ではこの次の体育祭、学年末特別試験と合わせて、いわゆる負けイベとして扱われます。

それを頑張つて勝ちイベに変えていくわけです。しかし、解答は一

度きりでしかも所属するグループだけが対象なので、愛ちゃん無双が出来ません。そこで、平田を利用します。櫛田は信用できません。（初めからあてにして）ないです。原作があんな感じだし、是非もないよね。櫛田ルートは堀北を退学させなければならぬので、私にはちよつと無理です。

まず優待者を教えてもらい、そこから法則の解説（のふり）をします。龍園が動くのは最後の話し合いが終わつた瞬間なので、焦らずにいきましょう。

その法則というのは、干支の番号（干支の話のゴール順）となり、鼠から順に1～12まで存在します。そして、各グループのメンバーの並びを名字順に並び替えます。学校の出席番号によく使われるあの並びですね。この時の上からの順番と干支の数字が合致した人が優待者となっています。鼠グループの場合、数字は1なので、名字の最初の文字が一番早い生徒が優待者となるわけです。

この法則を割り出すまでは決して面倒ではないしする必要もないですが、最も面倒なのが解答なのです。

一人一回、しかも所属グループ限定とかいうクソみたいな縛りのせいで、一人で全て回答することができません。誰だこのルール作つたやつぶち○すぞ。

なので、解答をする様に頼まなければなりません。しかし、直談判に行くと彼らは間違いを恐れて解答を拒んでしまいます。そこで、平田の登場です。平田はクラス内での発言力が高く、信頼も厚い。代わりに平田に伝えてもらうことで、言葉に信憑性を持たせます。元から事実100%なのですが、

代償として愛ちゃんの活躍によつて、龍園の手でDクラスの優待者は全員陥落しますが、それでも原作に比べたら大勝利です。

Aクラスは原作よりも150ポイント多く受け取つていて、（まだ抜くことは）ないです。

ですが、そろそろ一気にBクラスに昇格しそうな勢いですね。

ですが、Aクラスに昇格してしまうと、本来の目的である『2000万ポイントを支払うことでのAクラス昇格』が出来なくなつてしま

い、タイムロスとなるので、調整と朝貢は怠らないようにしましょう。

今回私が狙う結果は、猪と竜は結果1、それ以外は結果3というものです。Cクラスから逃げるのは流石に無理でした。だつて龍園マジになつてんだもん……（諦観）

50万ポイントと300クラスポイント獲得なので、これでも十分ですがね。

結果三の方に関しては先ほど言つた通りですが、私のグループの結果1、これがかなり困難です。原作に龍園がどうやつてやつたか書いてないんだもん……。

なので、自力で進めていかなければならぬわけですね。

そしてこれのなにが面倒かというと、優待者に自身が優待者であると認めてもらわなければならず、その上で全員がその名前で投票しなければならない、という点です。

一人でも回答しなかつたり不正解が出るとダメですからね。原作でも4つのグループが結果2ですからね。なれたら良かつたんだけどなあ、優待者。これも全部スペシャル定食のせいなんです（洗脳）まあ頑張つて説得していきましょーハラショー。

とりあえず1回目、顔合わせです。

ほとんどモブばかりなので、特徴という特徴がないですね。

Aクラスは黙秘を貫こうとしていますが、勝手にやつてくれればいいです。

では初日ということで簡単な自己紹介からやつていきましょう。これ、絶対だそうです。

初日の目標は打ち解けることです。それ以上は求めなくていいんですよ。1週間もあるんですから。

え、最終日に宿題を溜め込むタイプだろつて？ なぜバレた？ まずBクラスに狙いを定めます。一番のお人好しクラスなので、そこにとことんつけ込んでいきます。

オツスオツス、オラ愛つづうんだ！ 人工知能じやねえぜ！

Aクラスの生徒も、自己紹介はしようぜと説得を続ければしてくれます。4月にサボつたやつが何言つてんだか……（呆れ）

流石にこれだけでは1時間は使いきれないでの、結果の方針を決めていきます。と言つても、全力で結果1を勧めるわけですが。

全員で優待者を答えるだけで確実に50万ポイントもらえるんだぜ！ 優待者を当てに行くと50万貰うのに10ヶ月かかるんだぜ！ なんて非効率なんだ！

それにほら、帰つたら宝くじが当たつた後みたいに自慢できるで。私だつたらお小遣いが3万あるとか言つて調子乗つてるやつに『は？ 僕なんて50万あるし』とか言つて自慢しますよ。そして自然と距離を置かれるんですね、分かります。悲しくなんてないし（泣）

ここで注意点がひとつ。ここで優待者に名乗り出させないでください。誰かが抜け駆けする可能性があるからですね。特にAクラスやCクラス、オメーらのことだよ。

なので、名乗り出でもらうのは最終回にしてください。そして優待者がいるクラス以外のみんなで端末を出して、仲良く同じ名前を書いてハッピーエンドつてね。これが誰も傷つかない『や　さ　い　せ　い　か　つ』か……。

方針が固まつたところで、2回目から最終回手前まではまあ自由ですよ。だつてこれもう勝ちじゃないつか。

ガハハ！ 勝つたな、風呂食つて飯入つてくる。

ここで皆さんに意味が分かると怖い話をしましよう。

私はあの後、やることもないのオートにして風呂食つて飯入つてたんですよ。

それで戻つてきたらなんか学校からメール来てるって言うんですよ。確か3日目、だつたと思うんですけどね……。

怖くね？ え？ 何なの？

ま、まあとりあえず開いてみましよう。

『猪グループの試験が終了いたしました。猪グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

スウウウ……

えー……つまりこれ、あれですね。誰かが抜け駆けしたってことですかね……。

ん、誰かが来ましたね……って龍園じゃないですか。

……なるほどなるほど、つまり君はこう言いたいんだな？

俺がやつたと。暴力事件や無人島試験で妨害された腹いせでやつたと。

許さん、許さんぞオオオ！ 返せ！ 私の50万ポイントを返しやがれエエ！ スペシャル定食500日分を返せやアアアア!!!! お前なんで最終日の前の日から動き始めてんだ○アツク！

しかも他のグループもいくつか被害食らってるしなあ。見たところ竜以外のDクラスが優待者のグループとそれ以外に巻き添いを食らった2つのグループのようです。竜グループは龍園が結果1にしたいらしいので被害は無さそうですが。慢心ダメ、絶対。

今のはブチギレ愛ちゃんなので、試験自体終わらせにいきますよ。最終日は竜グループだけばっち試験でもするんだな！

おい平田、竜以外さつさと終わらすぞ。えつじやないんだよ、龍園に先越されたらどうするつもりなん？

ほら、さつさと端末回収する！

……はいというわけで端末と精銳たちが集まりました。メンバーは愛ちゃんと平田、堀北と綾小路です。綾小路は平田が、堀北は愛ちゃんが起こしました。

現在深夜2時。すごく眠そうです（迫真）！

ですが私の私利私欲のためにもう少しだけ頑張つてもらいます。

平田によつて集められた6個の端末を使つて、間違いがないか何度も確認しながら作業を進めていきます。さつき特大ガバをしてかしたので、これ以上はないように気をつけなければなりません。

……つし、終わりました。4人で一人5周したので間違いはありません。あ、そうそう。送信は一斉に行いましょう。一個一個チマチマやつていると、龍園に勘づかれるかも知れないので。

おう、どうした平田。なぜ罪悪感を？……ああ、端末のこと？

それは山内が責任取つてくれるさ（適當）

それじゃあイクゾ～テボドンハツシャ

『鼠グループの『牛グループの『虎グループの……

ちよつ、うるさすぎイ！

深夜に大音量で放送と着信音とか害悪でしかなくて草。

おかげで全員深夜3時前なのに叩き起こされてるやん。流石に放送さんも朝にするか手加減してクレメンス！

まあこんな時間に解答する私もそれはそれでどうなんだろうね。あとは最終日に竜グループが結果1で終われば……ん？

あれ、結果3!?　おのれやりやがったな（憤怒）

い、今更50ポイント減らされたところで？　怖くねえし!?
はい、というわけでいきましょう。

結果発表ー!!!（○田風）

全部結果3ですね（投げやり）

ええ、こうなつたのは誰かさんのせいですからね、私は悪くないからな、こういうのは先に手を出したほうが悪いって言うんだ。

はい、最終的な結果はA、Bクラスがマイナス150ポイント、Cクラスがプラス100ポイント、Dクラスがプラス200ポイントですね。それでもAクラスは原作より50ポイント得してるんですよ
……（震え声）

プライベートポイントに関しては、Cクラスが250万、Dクラス

が350万ポイント獲得です。これは山分けしましよう。

あ（唐突）ポイントの計算は今回するとかほざいてる過去の私がい
ますが、あれは嘘だ。

今回で帰れなかつたので、次回に回します。めんどくさいわけじや
ないよ。

それでは、次回もよろしくオナシャス！

8月 その2

ガバらないようにとか言つた矢先にガバりまくるRTA、はーじまーるよー。

前回は本当に散々でしたね。あれは嫌な事件だつた……。

龍園があのタイミングで動いてくるなんて思いもしなかつたです。この辺りに来るとそこまで試走の回数を積めていないというのもガバの原因ですね。

チャートを作つて試しに走るというのを面倒に感じるタイプなんですよね……。

あとオートはあかん。

さて、今回は原作でいうところの4・5巻、つまり番外編となります。綾小路や堀北が水筒に腕を突っ込んで抜けなくなるとかいう漫才をやる回ですね。3、4巻の緊張感どこ行つたし。

今回やることは主に2つです。

1つ目は、囲碁部や将棋部などへの道場破りですね。実は前々から言われていたのですが、行くタイミングがなくてこのタイミングになつてしましました。

ま、まあ？ あんまり早く行つても坂柳が先にやつてるだろうし？

この時期が妥当かなつて私は思うんですよ（適当）

2つ目はこれが終わつてから説明しますね。

それじゃあイクゾ～イクイク

まずは囲碁部へ。金出せオラアン！

正直戦いよりベット交渉の方が重要です。勝つことは前提なので、一人当たりいくら巻き上げられるか、そこが重要です。

まあ半分なら上出来じゃないですかね。ほらほら、愛ちゃんは20

万出せるぞ。お前らチキつていいのか？ アアン？

はい、釣られましたね。それじゃあ部長さんをフルボッコにしましよう。愛ちゃんはチートなので楽勝です。坂柳よりも数段下なので余裕のよつちやんですよ。放置でいいですが、前回の私みたいになりましたくなれば椅子でふんぞり返つてればいいんじゃないですかね。

まあ囲碁とかルール分かんないんで適當でいいんじゃないかな。

はい、勝ちです。で、いくら貰えたんだ……！（金の亡者）

ちえつ、たつたの30万かよ貧乏共め。50万くらい貰えるのを期待したんだけどなあ（人間の屑）

あ（唐突）貰えるポイントは、完全ランダム制です。この人数だと少なくて10万。多いと200万程度にまで膨れ上がることがあります。30万ポイントっていうのは少ないですね。

部員数もランダムで、多いと20人を超えることもありますし、少ないと3、4人の時もあります。過疎りすぎや。

今回は8人で、1人がAクラス所属だつたようなのでこの程度ですね。

要するに外れです。

次は将棋部に向かいます。今度は神引きしてくれよな、頼むよ。

んー、部員数はそこそこですね。12、3人といったところでしょうか。同年代が活躍している影響を受けたのでしょう。いい傾向ですね（冷笑）

先ほどと同じようにでかい釣り針を仕掛け、対戦に持ち込みます。悪いがここから先は（地獄へ）一方通行だ。グヘヘ 飛車をこうしーの、これをーこうしーの、トツギーノ。そして王手です。敵将、討ち取つたり！

対戦ありがとナス。

私の勝手なイメージですが、将棋やチエスをやっている人は頭がいい印象があります。例えば○生さんとかめちゃめちゃ頭良さそうですし。

少し前に引退したお茶目な人は当てはまる印象はないですが、何気有名大学を卒業してそうです。本当かどうか知りませんが。

そのためでしょうか、Aクラスが半分を占めていました。

95万ポイント獲得です。

上の学年はクラス間の格差が大きいので、CクラスやDクラスが足を引っ張っている印象です。こればっかりはしゃーなしです。完全

な運任せですからね。

あとはチエス部とオセロ部ですか。チエスはともかく、オセロ部とか絶対廃部寸前でしょ（確信）

やることは同じなので、残りは倍速をかけて行きますかね。

その間にもう一つの8月最後のイベントについて簡単に説明します。

そのイベントとは、テニス大会です。今回はなんと全国大会ですよ。

当然のことながら、組み合わせはランダムで当日発表となります。

獲得できるポイントに関してですが、個人戦はベスト32で10万、16で20万、8で40万、4で60万、決勝進出で100万、優勝で150万です。

クラスポイントはベスト8進出で50、4で60、決勝で70、優勝で100です。

ダブルスと団体戦はベスト16で10万、8で20万、4で50万、決勝で100万、優勝で150万となっています。

クラスポイントはベスト4進出で30、勝つごとに10ポイント加算されます。

やっぱり全国大会なだけあって報酬が大きいですね。個人戦の目標はベスト8、ダブルスと団体はまあ、勝てりやいいんじやないんですけどね。

ダブルスはベスト8進出も視野に入れますが、団体戦は正直厳しいかなと。

関東勢トップ通過の意地を見せられたらしいんですけどね。では倍速が終わったので話を戻します。

意外だったのは、オセロ部の部員が10人ほどいたことです。どうやら某ゲームの影響らしいです。逆転○セロニアとかいうやつのことですか。

オセロ部の状況を別のゲーム風に言うなら『絶対逆転部活オセ○ニア』ですかね。

結局、チエス部からは30万、オセロ部からは40万頂きました。

やつぱり4月にやつてたらもつともらえた気がします（遠い目）
犯人は恐らく坂柳でしょう。

……まあ、責めることはしません。貴重な資金源ですからね。
さて、ではテニスの方へ話題を移していきましょう。

イベントの間は特に映す価値もないのにこれ光の速さで倍速です。

今回の試合会場は三重県。東京からなら新幹線とJRを乗り継いで行くのが一番なのでしようが、外部との接触を断つたためここもバス移動です。なので試合の2日前の深夜に移動です。

あとは貸し切ったホテルで最終調整を進めます。

他の部員は全国に出されたこと自体に満足しているらしく、既に満身創痍の様子。

お前らサボるなア！ 愛ちゃんのマネーのために命を削つて働けエ！

たのんます。ここ超大事なんです。このチャンスを逃すわけにはいかないんです（掌返し）

初日は個人戦から。目標はさつきも言いましたが、クラスポイントを獲得できるベスト8以上です。

1、2回戦は問題なく勝利出来ました。

次は3回戦、ここを勝てば目標達成です。この辺りまで来ると、敵の強さが地区予選の決勝を上回ってきます。愛ちゃんがクルーズ戦を満喫している間にコツコツ練習を積み重ねてきたようですが、稀代の天才愛ちゃんには及ばん！

……そう思っていた時期があつたんですよ。

超接戦です。今、私がマッチポイントで次を取れば勝ちという展開。ですが、お相手もあと2つ取れば勝ちなんですね。

正直ここまで苦戦するとは思いませんでした。

まずはしつかりサーブを決めて、返ってきた球を確実に打ち返していきます。

少しづつ右へ左へと搖さぶりをかけていくんですが、相手がめつちやしぶとい。お前ゾンビかよ？

スライスかけてみたり、ドロップボールを送ってみたりするんです
が……っ！

よし、勝てました。最後は逆サイドへ逃げる速いスピンドルでゲーム
を制しました。対戦ありがとナス！

これで最低限は達成できました。満足です。

次の相手は去年2位だった強者。ここで必ず強キャラに当たるん
ですよね。（勝てた試しが）ないです。これは負けイベと見て良さそ
うです。

では、次はダブルスをやつていきましょう。

最初の1回戦。部長、掛けよ！

お？ 部長前より上達してますねえ！ 愛ちゃんのおかげだね！
理そうですが、8は狙えそうです。

はい、倍速を駆使して全行程を終了させました。

結果だけ言いますと、個人、ダブルスはベスト8、団体戦はベスト
16でした。

まあ悪くないのではないかでしようか。

特に団体戦は初戦の引きが良く、危なげなく勝てました。まあ、2
回戦の相手が強豪校でボッコボコにやられましたけどね。いい勝負
をしていたのは愛ちゃんだけでした。

部長は、もうちょっと頑張れば全国レベルとも張り合えるようにな
るかも知れません。

普段から鬼トレとかしないのか、と思う兄貴もいるかも知れません
が、極限までしてこれです。部員の反応を見ても分かるように、去年
までは全国は夢のまた夢のようなチームでしたから。やっぱ愛ちゃん
つてしまえ（KONAAMI）

さてさて、ここでポイントの整理といきましょう。見たら3回前か
らやつてなかつたので、今回は情報量多めです。

まず無人島試験で305クラスポイントを得て、船上試験で200

クラスポイントを獲得しました。これによつて合計で601ポイントです。

このままでいいが、体育祭の時にはBクラスに上がるんじゃないかな（）ちなみにクラス変動はありませんでした。

プライベートポイントは、8月1日に401ポイント分の40100ポイント、そして坂柳から得た375000ポイント。そして今回で195万ポイントと70万ポイント。合計で2737500ポイントです。

これを以前までのものに足し合わせると、3555800ポイントです。350万ポイント強となりました。進捗は17.779%です。

かなり進みましたね。

改めて言いますと、今回得た50クラスポイントは全てAクラスに流れます。反映されるのは来月からですけどね。

それと、最後に愛ちゃんのステータスを置いておきますね。参考までにどうぞ。

それでは今回はここまで。次回もよろしくオナシャス！

氏名：八遠愛（はちとお　あい）

〈評価〉

学力：A
知性：A
判断力：A
身体能力：A
協調性：A

〈面接官からのコメント〉

入学試験において全教科満点を取り、非常に優秀な生徒であること

が窺える。また、面接の態度も素晴らしい、社会への適応力も高い。Aクラスへの配属を検討したが、別途資料を考慮してDクラスとする。

〈担任からのコメント〉

一人でいることが多い生徒に声をかける姿がよく見られ、特に綾小路清隆や堀北鈴音、高円寺六助らと仲が良い。

ただし、軽井沢恵らとの関係性の改善を強く望む。

入学してから今までほとんどポイントを使用しておらず、今後の動向に注意していきたい。

8月 裏話

無人島試験から程なくして、再び特別試験が始まった。

船上試験と銘打たれた今回の試験では、主に思考力が問われる。干支になぞらえて12に分けられたグループ。その中に1人いる“優待者”を発見するのが目的だ。

それと同時に、大量のポイントが獲得できる貴重な機会もある。

愛は今回の試験に際して、知識の存在を少しだけ恨んでいた。

知識のせいで、この試験のカラクリが分かつてしまっている。謎解きとも言える試験で初めから答えが分かつているのは興醒めだ。

とは言え、Dクラスが正解に辿りついていないのに解答すると怪しまれるのは自明の理。解を導き出した龍園も最終日に動いたのだから、それに合わせればいいだろう。

それまでは結果1を狙えばいい。こちらでもプライベートポイントが貰えるのだから、メリットがないというわけでもないのだ。

話し合いは自己紹介をして優待者が出るまで待つたり、トランプやら優待者予想やらをするだけの予定で、起伏のない展開なのでわざわざ話すまでもない。あと知っている人がほほいない。

「堀北ちゃん、ちょっとそこに座つて」

「はあ……」

唐突に指示され理由を問いたい堀北だが、聞いたところで無駄だと経験から知っている。追求せず、指示されたベッドに座ることにした。

「よいしょっと」

「八遠さん……!?」

「なんか落ち着くんだよねー……」

愛が腰を下ろしたのは、堀北の足の間。体重を後ろに預ければ、堀北の体にもたれられる。

後頭部に吐息が当たり、むず痒さを感じた。

「どいてくれないかしら」

「やだ」

足をぶらつかせ、上機嫌に言う愛に堀北はため息を漏すことしかできなかつた。

「この試験、何を問わてるか分かる?」

「思考力だと言われたわ」

「そう、つまり考える力つてこと」

一概に考えると言つても何を考えるのか。

目指す答えは、優待者の法則。現時点で愛だけが知つてゐる試験の到達点だ。

試験の答えを得た愛は、テストでカンニングをしたのと同じ。他の生徒よりも圧倒的に有利であり、勝たなければならぬ試験だ。

今すぐ猪グループの試験を終わらせることも可能だが、綾小路や高円寺から怪しまれてもおかしくない。

出来るだけ自然な勝ちを目指す。そして、この目で誰が使えるかを確かめる。

「堀北ちゃんのグループ、凄いことになつてるね」

「そうね。意図的に組まれたと言つても過言ではないわ」

その答えを聞いた愛は試すように問う。

「どうでさ、優待者の法則つてあると思う?」

「突然ね……私はあると思うわ。グループ分けが意図的に行われたものだとしたら、必ず何処かにあるはずよ」

「ふむふむ、じゃあ考えてみる?」

机の上に置いてあつたノートとシャーペンを引き寄せ、ノートに記入していく。

意外と丁寧な字は、一時期通つていた書道教室で得たものだ。

最初の出展でいきなり最優秀賞を獲得し、それ以来面白みを感じなくなつて辞めたのは言うまでもない。

「んー、堀北ちゃん、何か考えはある?」

そう尋ねると、堀北は少しの間思案する。

前日に綾小路に問われた話題を、改めて追求していく。成績は違う可能性が高いと既に出ている。

次は入試の際の評価。一致しているように見えたが、生徒が結果を

知り得ないということで可能性を消す。

その後も、新たな考えが浮いては消える。有力な案が出ることはなかつた。

「んー、すぐには出ないか」

「まずDクラスの優待者が誰なのか把握しておいた方がいいと思うわ」

「だよねえ……」

しかし、伝達するときに何処から情報が漏れるかも知れない。特に、曲者の龍園らがどこで聞き耳を立てているか分からぬ。

小さな紙などにメモをした方がいいだろう。

あとは平田に協力を依頼して、情報を集めるだけ。

「うまくいけば450クラスポイント。Aクラスを目指すなら落とせないよね」

「1年生の間にAクラスに上がる」ともあるかも知れないわね」「それ出来たら英雄じやん」

首肯する堀北に、愛は微笑みの仮面を向ける。

Aクラスの資格を持たざる者にAクラスの座を得る資格などなく。それは堀北も例外ではなかつた。

愛が百合のような空間を作つているのには、もちろん意図があつてのこと。依存されていると思わせれば、堀北も依存しやすくなる。

堀北は芯の強い人間だが、自立しているように見えて本当は弱く脆い。堀北学に認めてもらいたいからという理由で作られた模造品だ。突き放され続けた堀北には、承認欲求が人より強く現れている。春休みに和解し、それは解消されたがそれまでに呑み込んでしまえばいい。

知らぬ間に毒に侵され、墮ちていく。底無しの、墮落の沼へ。

愛が離れた時、堀北鈴音はどんな反応を見せるのだろう。

「ふあ……眠いから寝るね」

「せめて布団で——」

堀北の言葉を無視し、体を預ける。背中に柔らかな感触を受けながら、意識を闇に飛ばした。

?? ?? ??

目覚めて最初に目が映したのは、部屋の天井だつた。あの後堀北が運んでもくれたらしい。

当の本人は、机に突つ伏して眠つていた。寝落ちするまで考えていたのか、ノートが僅かに黒くなつていた。

試験まではもう少し時間がある。もう少し寝かせた方がいいだろうと思い、愛は自らが使つていた布団を堀北にそつと被せた。

時刻は7時半過ぎ。同室の女子の姿が見当たらないので、朝食を行つたのだろう。

堀北を置いて朝食を食べにいくのは流石に可哀想だ。人に見られてもいい格好になつていないので、起きるまでの間は身嗜みを整えるべきか。

秋の山を連想させる茶色の髪を備え付けの櫛で梳いていく。
入学してから一度も美容院に行つておらず、肩辺りで切り揃えていた髪は胸元まで到達している。

1ヶ月に1cm伸びると言われているので、卒業する頃には36cm。もしかしたら今の堀北と同じくらいにまで伸びるかも知れない。

今は楽でもそこまで伸びると手入れが大変そうだ。なるべく早くAクラスに昇格して、自由にポイントを使えるようにしなければならない。

それとも、結えてポニーテールにするのもありだろうか。

そんなことを考えていると、部屋で物音がした。布団らしきものが擦れる音だったので、堀北が目を覚ましたらしい。

「おはよ、堀北ちゃん」

「おはよう。今は何時かしら?」

目を擦りながら現れたが、寝起きが悪いタイプの人ではなかつた。

「7時45分だね。みんな朝ごはん食べに行つたっぽいし、私たちも準備して行こ」

「ごめんなさい、待たせてしまうかもしねないわ」

「私も手伝えることがあつたら手伝うよ?」

「でも、迷惑じや……少しだけ、手伝つてもらえるかしら」「そそ、それでいいの」

またしても1人でやろうとした堀北に無言の抗議をすると、素直に愛の指示に従つた。

いつ見ても、堀北の髪は長い。だが、すれ違ひが原因とはいえない切つてショートにすることが出来ないので、愛からその提案をすることはしない。和解するまでお預けだ。

それでも全体に手入れが行き届いており、愛は素直に感心してい

た。

「堀北ちゃん、あれから何時まで起きてたの?」

「1時くらいだった気が——」

「嘘」

鏡越しに、僅かに堀北の目が泳ぐのが分かつた。

間違つたことは言わないと自負していた堀北だが、やはり間違つていると自覚してかつ後ろめたさを感じていれば顔に現れるものらしい。

嘘を隠すことに慣れておらず、愛が問い合わせて行くとより顕著に現れるようになり、堀北が全容を口にするまでに時間はからなかつた。

「で、3時まで起きてたの?」

「……仕方ないじやない。何としてでも優待者を探し出さなければならぬのだから」

愛は呆れ顔で小さく息を漏らすと、堀北の耳に顔を近づけた。硬直した堀北をほぐすように、柔らかな口調で語りかける。

「気持ちは分かるけど、無理しそぎたらダメだよ? 走り続けるのも大事だけど、たまには立ち止まって横を見て。ちゃんと頼るべき人がいるはずだよ。堀北ちゃんはもう1人じやないから」

「……ごめんなさい、私が間違つていたわ」

「分かつてくれればそれでいいの」

墜ちるところまで墮ちればいい。

完全に愛に寄り掛かつた時、Dクラスは終わりを迎えるだろう。流石に可哀想なので救済だけはしてあげようとは思うが。

部屋を出たのは8時過ぎ。綾小路を連れて向かつたカフェの空席は僅かしかなかつたが、待つことはなかつた。

一面に張られたガラスから無限に広がる海が広がつていて、太陽の光が反射して水面が輝いている。

それも相まつて、出されたコーヒーがより美味しさを増しているようを感じる。

「夜3時まで起きていた堀北ちゃん、優待者に関して何か分かつたのかな?」

「……まだ何も分かつてないわ。ただ、干支が怪しいとは思うの」

「堀北、それは夜更かししそぎじや」

「途中で寝落ちしたらしいから、もししなかつたらオールだつただろうね」

「健康リズムにはうるさい人だと思つていたんだが」

堀北が申し訳わけなさそうに目を逸らした。いつも責められる側だからか、綾小路の口調が僅かに弾んでいるように感じる。

「綾小路くん、話し合いの状況はどんな感じ?」

「Aクラスが黙秘を決め込んでいる。それから、軽井沢が手に負えない状況だ」

「あー……確かにねえ。平田くんでもいれば楽だつただろうけど」「同感だ」

綾小路のグループは問題なく原作通りに進んでいる。

愛も綾小路に猪グループの状況を伝えた。自己紹介をして結果1を目指すことは決まつたが、そこから全く話が進まない。

初顔合わせが多いからか、話し合いが進まないのだ。

「思考力が何を意味してるのでか、だよね」

「それはどういうことだ?」

「なんていうか、グループ内で話し合いだけだと今のAクラスみたいに沈黙しちゃうところもあるでしょ? そうすると優待者が誰か以前の話になっちゃうと思うの」

つまり、優待者の発見に話し合いは必須ではないということ。ちゃんと考えれば優待者が誰かなど話し合いがなくとも見えてくるのだ。それが優待者の法則に繋がる。

「メールを見ても『厳正なる調整の結果』って書いてある。優待者が作るに選ばれてるってことだよね」

一見すると、話し合いで優待者を炙り出すことが正規のルートに見える。

優待者の法則を探し出して的中させるのは裏ルートだ。

「なるほどな、いい話を聞かせてもらつたぜ」

3人の空氣を壊して割り込んできた、1人の男子生徒。彼は先ほど空いたすぐそばの席の椅子に逆向きに座った。

「出た、龍園こけるくん」

「ジョークはその辺にしどきな」

愛の記憶が正しければ、既に龍園は2敗している。つまり全敗だ。それでも余裕の笑みを崩さない龍園には、一発逆転の秘策があるのか。

「クククツ、お前がXであることは分かつてんだよ、チビ」

「負け犬の遠吠えかな？ そもそもあの作戦は堀北ちゃんが考えたものだしね。私は天才の堀北ちゃんを手伝っているだけだよ」

ゆつたりとした時が流れるカフェだが、愛と龍園の周りだけ異様に空気が張り詰めている。

「何言つてんだ、鈴音は体調不良でリタイアしただろうが」

「そんなどからコケるんだよ、ドラゴンボーキくん」

沸点が低い龍園のことだから、胸ぐらを掴むような真似をするかと思つたが、グツと堪えていた。カフェで騒ぎを起こすようなことはするべきではないので、無理矢理押さえ込んだようだ。

「どちらにせよ、君じやDクラスには勝てない。それだけは確かだよ。Bクラスくらいなら勝てるかもだけど」

「ハツ、俺たちはBクラスみたいな低い目標は持つてねえ。Aクラスしか見てねえんだよ」

「それなのに大変だよねえ。Cクラスの足に私たちがしがみついて引

きずり落とそうとしてるわけだから」

現状、CクラスはBクラスに上がるどころかDクラスに転落しそうになっている。

Aクラスを目指すのは、夢のまた夢だ。

そう考えていると、龍園がそういうふうと言ひながら口角を上げた。
「テメエAクラスにクラスポイントを譲渡したらしいじやねえか」

「なんの話？」

「テニス部のヤツから聞いたんだよ、お前は6月にあつたテニスの大会で150ポイント手に入れてるはずだ。1年で出場したのはテメエだけだから、本来Dクラスが加算されてなきやおかしいだろうが」

「それは本当なの？」

逆になぜ今まで気づかなかつたのか不思議なほどだ。

情報を漏らした子には帰つたら罰を与えなければと思いながら、愛は首肯した。

「テメエの目的は何だ？ 2000万ポイントを集めてAクラスに上がることか？」

「もしそうだつて言つたらどうする？」

「八遠さん」

「関係ねえよ。俺の前に立ちはだかるヤツは全員ぶつ飛ばすだけだ」「あくまでもやり方を変えるつもりはないんだ」

「ああ」

それでいてくれなければ困る。変に変えられたら、知識が無駄になるから。龍園は龍園のままでいればいい。

「Cクラスなんて眼中にないから好きにすればいいけど」「よそ見してると足元を掬われるぜ」

「他人の心配をする前に自分の心配をすることを勧めるよ」「ハツ、ほざいてろ。行くぞ、伊吹」

「あ、居たんだ。スペイちゃん」

「テメツ……！」

「殴つたら訴えるよ？」

「知ってるわよ！」

厄介者の撤退を確認したところで、コーヒーを口に含む。無糖の苦味がヒートアップした心を穏やかにさせた。

「八遠さん。さつきのはどういうことかしら」

「龍園くんの言った通りだけど」

「なぜそんなことをしたのか教えなさい」

「何でつてそりやAクラスに上がるためじやん」

目的が揺るぐことはなく、達成するためならどんな手段も使う。Dクラスが敵に回ったところで、愛には敵わない。

「それは一人でつてことかしら」

「うん。堀北ちやんだつて分かつてるでしょ？ 今のDクラスはAクラスに上がる資格なんてない。だから私一人でAクラスを目指すの」未だに愛から視線を外さない堀北を他所に、コーヒーを啜る。

「Aクラスに上がりたくなつたら言つてよ、協力してあげるから」

「それは……必要ないわ」

僅かに戸惑いを見せた堀北。心当たりがあるのだろう。クラスメイトを信じたいが、Aクラスの器がないこともまた事実。

しかし、根底にあるのはそんなものではない。

「私がAクラスに上るのは兄さんに認めてもらいたいからなの。だからこれだけはあなたに頼れない」

「……そつか」

そう言つていられるのはいつまでだろう。

?? ?? ??

試験が始まつて3日。今のところ狂いなく進んでいて、明日優待者を的中させればこの試験は幕を閉じる。

法則探しも僅かながら進展を見せていた。とは言つても干支が関係ある程度だつたが。

優待者が2人しか分かつていないので、正解にたどり着くのが困難なのだろう。

この日最後の話し合いを終え、部屋に戻った愛。

1日の疲れを落とすべくベッドに飛び込んだところで、船内放送がけたたましく鳴り響いた。

『猪グループの試験が終了しました』

「は?」

想定外の事態が愛を襲い、理解に数秒を要した。

聞き間違いでなければ、猪グループの中に裏切り者が現れたということになる。

さらに、続いて3グループの試験の終了が伝えられた。そのうち2グループがDクラスなので、狙つたのだろうか。

「猪グループって、八遠さんのグループよね?」

「うん」

誰よりも曲者で、愛やDクラスを狙いそうな人間。心当たりはある。法則にたどり着いて実行したのも彼だけだ。

「とにかく、平田くんと綾小路くんと話し合つた方が良さそうだね」

「そうね」

綾小路に連絡を入れ、返信が来る前に部屋を出る。

しかし、部屋を出たところで人がいることに気づき、足を止める。

「よお、どうだ今の気分は」

不敵な笑みを浮かべた首謀者の龍園。一泡吹かせたと思つてか気分が良さそうだ。

「今まで散々好き勝手してくれたからな、そのお返しだ。ありがたく受け取れ」

「どちらかと言えば押し付けだけどね」

受け取り拒否できないしねと心の中で付け加えた。

「頑張つて優待者の法則を見つけたんだね。だけど上のクラスに上がりたいのに下から追い抜かれそうになるのを防ぐのに必死な、噛ませ犬のことを気にかけてる時間はないから」

一之瀬程度であれば勝機はあるし、実際に学年末試験では卑劣な手ではあつたが大勝している。

しかし、その程度では愛や綾小路、坂柳には勝てない。

「でも、君がこんなに早く動くとは思わなかつたよ。そこは素直に褒めてあげる」

「いつまでそうやつて余裕ぶつていられるだろうな」

「そのセリフ、そのまま返すよ」

龍園翔は信じて疑わない。どんな人間も、何度も挑めば屈すると。勝つべきは自分であると。

龍園翔は気づかない。何をしても届かない人間がいると。

龍園は愛から堀北へ視線を移す。

「鈴音、チビに随分と懷いてるじゃねえか」

「馬鹿言わないでもらえる？ 同じ部屋になつたから一緒に行動することが多いだけよ」

「龍園くんつて推理外すことが多いよね。ひよつとして頭悪かつたりする？ まあ、下らない作戦しか思いつかない時点で——」

「それ以上言つたら殺すぞ」

愛の口を遮つて、殺気立つ龍園。それでも愛は余裕の表情を崩さない。

「殺せるなら殺してみなよ。チキンな龍園くんには一生無理だろうけど。行こ、噛ませ犬に構つてる暇なんてないし」

「そうね。顔を見るだけでも不愉快だもの」

龍園が狙いを定めたのはわずか4グループ。法則を発見したのであればもう少し攻めてもいいはずだが、日和つたか。何であれ、残り——竜グループ以外は落とせる。甘えで50万ポイントを取り損ねたのは大きいが、残り6グループを逃さなければ高円寺のものも含めれば7グループ的中させたことになる。

250クラスポイントと、350万プライベートポイント。40人で山分けすれば、一人あたり87500ポイント獲得。この加算は決して小さくない。

龍園に背を向け、愛と堀北は指定した場所であるテラス席に向かっていた。

間も無く夜10時を迎えるため、夜風に当たつて感傷に浸りたいと

考える人以外は出歩かない。

愛たちは到着すると、人気の少ない場所を選んで腰を下ろした。平田と綾小路はまだ姿を現していない。

「いやー、さすがにこれは想定外だね」

「八遠さん、本当に勝てるのよね？」

「任せてよ、私だつて法則考えてるんだから。アイツに負けるなんてあり得ないから、大船に乗つたつもりで堂々としてりやいいの」法則自体は知っている。龍園は自ら導き出し、答え合わせができるいないのに対して愛は模範解答を手にしている。答えを写すだけの戦いに、敗北は存在しない。

「優待者がまだ二人しか分かつてないから、ここで聞き出せたらいいんだけど」

「僕らもちようど伝えようかなつて思つてたところなんだ」

「おつ、来た来た。まず座つて」

遅れてやつて来た綾小路と平田を、向かいの席に座らせる。「ちょっとと想定外だつたね。もう龍園くんが動いてくるなんて、思つても見なかつたよ」

「最終日が妥当かなつて思つていただけに、してやられたなあ」

平田の呟きに、愛が反応する。

「それで、最後の優待者は誰なのかしら？」

「最後の優待者は、軽井沢さん。残念ながら、さつき試験が終了してしまつたけど」

「残りの南のグループも終了している。裏切り者が正解していたらダメージだ」

綾小路の言うように、このまま試験を終えると50ポイント失い、痛手となる。

「だから、僕たちも優待者を見つけ出さなきやいけない。八遠さんも、堀北さんも協力してくれるよね？」

「もちろんよ。Aクラスを目指す為には、ここで足踏みをしている場合ではないもの」

「私も協力するよ」

二人が領くと、平田は安心した表情を浮かべる。が、すぐに真剣な表情へ戻す。

協力を得られたところで、あと1日で法則を見つけ出さなければ勝ちはないのだ。

「堀北さんたちも法則を考えて欲しい。僕たちも考えるから。もし見つかつたらいつでも言つてもらいたいんだ」

「もちろんだよ。寝る間も惜しんで考えなきや。オールしちゃうもんね！」

蒼宣言する愛に、堀北は疑惑の目を向ける。

「昨日、ちゃんと寝ろと言つたのはどこの誰だつたかしら？」

「堀北ちゃんはちゃんと寝てね！」

「理不尽よ……」

「堀北も大概——」

「何か文句でも？ 綾小路くん」

「理不尽だ……」

何にせよ、これからが山場であることに間違いない。

法則を見つけなければ負けが確定してしまう。

「二人は法則に関して何か分かったことある？」

「ううん、まだ辿りつけてないよ」

「こつちも同じ感じかな。堀北ちゃんが干支が怪しいんじゃないかなって予想は立ててるんだけどね……」

振り分けられたメンバーを五十音順に並び替え、干支の番号——鼠なら1番目、牛なら2番目——の人が優待者。少し頭を使えば簡単に辿り着きそうなものだが。

遅くとも2日目には辿り着く自信が愛はある。

ともかく、仕掛けどころは深夜だと見てている。この時間なら、誰からも見つかることなく解答できるはずだ。

その後、少しだけ意見を交換して解散。あとは、その時を待つだけだ。

部屋に戻り堀北が寝たことを確認した愛は、月明かりに向かつて冷ややかな笑みを浮かべた。

?? ?? ??

深夜2時。暗がりの中で、愛は動き出す。

「堀北ちゃん、起きて」

隣のベッドで眠る堀北を揺すり起こす。

鬱陶しそうな表情を浮かべながらも、目を擦りながら堀北は愛を視界に捉えた。

「見て、これ」

一枚の紙を渡すと明かりを点けて眺め始めた。

上から鼠グループの順で書かれており、その横に名前が書いてあり、そのうちの一人が丸で囲まれている。紛れもない優待者の法則。それが一枚の紙に記されていた。

「これは……」

「やつと見つけたんだ。いやあ、本当にオールするところだつたよ」

そう言いながら、愛は苦笑いを浮かべる。

「どうやつて見つけたのかしら？」

「干支がヒントだつて言うのは確信してた。じゃなきゃわざわざ干支を使う必要はないでしょ？」

「そうね」

「じつと見ても何も分からないし、つて思つて並び替えたたら3人と一致したからこれかなつて」

クラス順ではなく五十音順に並び替えてあり、優待者らしき人物が丸で囲まれている。

一通り見ると、堀北はルール説明の時に言われた言葉を思い出した。

「クラスの関係性を無視しろとはこういうことだつたのね……」

「そ、私もそれを思い出してこれに行き着いたからね」

無い胸を張つてドヤ顔をするが、睡魔による欠伸に邪魔をされる。

「……ずっと考えていたの？」

「だつて、勝ちたいじyan。龍園にあれだけ言つたんだし。負けたら、

恥ずかしいどころの話じやないよ』

端末を取り、平田に電話する。

寝ているだろうと思つたが、数コールほどで繋がった。

「平田くん、今大丈夫?」

『うん、まだ起きてたから』

平田も優待者の法則について考えていたのだろうか。すぐに繋がるのも納得だ。

「もしかして、優待者のこと考えてた?」

『うん、少しでもクラスに貢献したいからね』

既に十分貢献しているだろうという突っ込みを抑え、本題に移る。あのね、と言つて少し間を開ける。

「やつと優待者の法則が見つかったんだ」

『それは本当かい!?』

「……平田くん、気持ちはわかるけど今深夜だよ?」

『ごめん、ちょっとはしやぎすぎたね』

綾小路だけが起きればいいのだが、高円寺が起きると面倒なことになる。

「出来れば今からやりたいんだけど、大丈夫?」

『深夜だよ?』

「この時間だからこそだよ。昼間は誰かに見られる可能性がある。だけど、この時間帯はみんな寝ていてるでしょ?」

『そうだけど……』

深夜に起こしてしまった申し訳なさからか、消極的な平田。

「多分、龍園くんは私たちを一番警戒してる。船に乗り込んでからウザ絡みしてくることが多いから。昼間に端末を集めてたら勘付かるだろうね」

『分かつた。何個集めればいいのかな』

『竜以外の6個かな。竜は櫛田ちやんだからね』

クラス全体に顔が利くのは平田だけ。軽井沢グループとの仲が悪い愛ではこの役は務まらないので、平田の存在はかなりありがたい。綾小路くんも呼んでほしい。確認は多い方がいいから

『うん、任せて。テラスに集合でいいかな』

「そうだね。私たちは先に行つて待つてるから」

『僕たちも早く行くよ』

電話を切ると、愛は顔を堀北に向かえた。

「行こつか」

「嫌な予感はしてたのよ……」

「確認は多い方が確実だからね。多分3時くらいにはまた寝れるから」

嫌な顔を浮かべながらも、堀北は素直に愛に付いていく。

テラスは予想通り閑散としており、冷えた海風が頬を撫でていく。縁に腕を乗せ身を乗り出すと、夜空一面の星空が顔を覗かせる。太平洋のど真ん中、どこにも人工の光はなく空は幻想的だつた。

「記念に一枚撮つておこうかな」

「八遠さん、星が好きなのね」

「そ、うなんだー。真っ黒な空の中でも力強く輝く星々——いいと思わない?」

「……そうね」

興味深そうに堀北が空を見上げる。風によつて髪が靡き、それを手で押さえる。

そんな姿が星空とマッチしていた。

その場から数歩下がり、端末のカメラを向ける。そしてボタンを押すとシャッター音と共に切り抜かれた。

「……盗撮よ」

「いやいや、これを撮らないわけにはいかないって」

堀北は一瞬顔を顰めたが、愛の幸せそうな表情を見ると責める気も霧散してしまつた。

「こうやつて星空を見るの、いつぶりかなあ」

「ここに来てから見ていなかつたの?」

「引越してからかな。もともと田舎に住んでたから、夜は星が綺麗だつたんだ。けど都会に引っ越してからなかなか見れなくつて」

夜くらいおとなしくしてればいいものを、繁華街ではネオンが煌々

と輝き昼と同じような空気感を作り出すのを助長している。

おかげで、星なんてその光で焼き消されてしまう。

「でも、また見れて良かった。帰つたらまたしばらくは見れそうにないしね」

そう言いながら、愛はその景色を目に焼き付けんと再び空を見上げる。

その横顔は普段見せる子どもっぽい表情とは打って変わり、懐かしいものを見る大人びた表情だつた。

「……」

それと同時に寂しさや悲しさも内包している気がして、堀北は愛から視線を逸らすことが出来なかつた。

愛が撮らないわけにはいかないと言つたのも納得できる気がした。滅多に見れない表情。滅多に見れない光景。

どんなものでも切り取つて保存できるように、シャッターを押すことが間違いであるはずがない。

シャッター音は鳴らない。堀北は自分が盗撮ではないかと思つたが、これでおあいこだ。

平田たちはもう少し時間がかかるのだろう。到着してから15分ほど経過したが、未だ姿を見せる様子はない。

愛と同じように夜空を見上げた堀北は、不思議な感覚に襲われていることを実感した。どうしても感傷に浸つてしまふのだ。

——目標である兄。いつからか突き放され、今も和解できていない。顔を合わせる度に出来損ないだと見放され、それでも追いつこうと足搔いて。

髪を伸ばしたのも兄が好きだという話を聞いたから。周囲の人と関わりを断つたのも兄がそうしているから。

武道もやつた。勉強もやつた。常に一人で背中を追いかけてきた。

それでもこの学校でも最高の生徒会長と言われている兄の壁は遠く高い。

あの時兄に追いつくためにAクラスに上ると宣言し、実際にDク

ラスは着実に追い上げている。

けど、けれど。それは本当に自分が貢献したからか？

無人島試験では熱を出し、キーカードを盗まれ。綾小路と愛の機転がなければどうなつっていたか。

今回もそうだ。結局愛が法則に到達し、堀北は何も貢献していない。

ここまで、ただただ自分の無能さを示しているだけ。

間違っていたのだろうか、兄に追いつこうとすることなど。

本当は自分は兄に並ぶことすら許されない、矮小な存在でしかないのかも知れない。

「はあ……」

「大丈夫？」

柄にもなく、弱気なため息が漏れ出てしまう。

愛に心配そうな目を向けられ、思わず海の方へ逃げた。

「大丈夫よ」

「ほんと？ なんからしくないけど」

らしくない。愛のその言葉が何度も再生する。

そもそもらしいとは何だ。

今まで兄の真似ばかりしてきた堀北鈴音にとつて、らしいとは何を指すのだろうか。

「お待たせ、何してたの？」

「星を見てたんだ。今すっごく綺麗だから、見てみてよ」

弾んだ口調で平田に勧める。更に愛は綾小路も誘い、空を見上げた。

堀北も誘われたが、断つた。

自分が自分でなくなるような感覚に襲われたくなかったから。今までの努力を全否定したくなかったから。

3人はひとしきり見て満足すると、堀北の座る席にやつてきて椅子に腰掛けた。

「それにしても、綾小路くんが一番興味津々だなんてなんだか意外」

「こんな綺麗な星を見るのが初めてだつたんだ、それくらいおかしく

ないだろ」

「普段無表情だから、そう思われるのも仕方ないわよ」

「……そういうものなのか」

そんな会話の横で、平田が端末を取り出す。愛が指示した通り6個だ。

「えっと、法則がこれね。優待者には丸が書いてあるから、その名前を打ち込めばオッケー。打ち終わったらみんなで確認して送信すれば終わりだよ」

眠たげな頭を無理矢理動かし、名前を打ち込んで確認していく。

10分ほどかけて何度も見直す。程なくして送信可能な状態になつた端末が並んだ。

全て正解しているならば、300クラスポイントと300万プライベートポイントが手に入る計算になる。

「それじゃ、送信！」

6つの端末全てに送信完了の文字が浮かび、数瞬置いて深夜にも関わらず放送がけたましく鳴り響く。

「これで全部正解だつたら300ポイントだな」

「高円寺くんも正解だつたら350ポイントだけね」「でも、龍園くんも法則に気付いているのなら僕たちの竜グループも当てられちゃうんじゃないかな」

それでも200ポイント。決して少なくない数字だ。無人島試験と合わせて500ポイント以上取り返すことになるのだから、大勝利だと言つても過言ではない。

「それはどうしようもないわね。こちらがいくら細工しても通用しないもの」

「当事者の前で悪いけど竜は捨てるしかないか」

「仕方ないわね」

もしも龍園に櫛田の名前を当てられても、Dクラスの勝利で終わることは間違いない。

「あー、いい気分。今頃龍園くんはどんな顔してるかな」

清々しい表情を浮かべると、愛は隣の席に座る堀北の肩に頭を預け

る。

堀北が動搖し、状況の把握に時間をかけているうちに愛は寝息を立てていた。

「相当疲れていたんだろうね」

愛は夜遅くまで起きていることが苦手で、日付が変わる前には眠りについているのが当たり前だつた。

そんな人が突然夜中の3時まで起きていて、眠くないはずがない。「八遠さんは私が連れて帰るわ。同部屋だもの」

「その方がいいだろう。オレ達が背負っていくと誤解を生みかねないからな」

「そ、そうだね……」

愛をおぶり、来た道を引き返す。

静まり返っていたはずの船内は、放送による大音量を皮切りに騒然とした空気に覆われ、混乱を極めていた。

廊下に人影はないが、部屋から声が漏れ出している。

誰かに見つからないように道を急ぎ、部屋へ辿り着く。中に入ると同部屋の女子2人も目を覚ましていて、堀北と愛の姿を見るなり疑問を口にした。

「堀北さん、これ何か分かる？」

八遠さんが、という言葉が喉元まで出かかつて止まつた。無人島試験の時、堀北がやつたということにしたのは理由があるからに違いないと確信していたからだ。

「それは私達がやつたの。全問正解すれば今回の試験も勝利よ」

「ほんと!？」

堀北の背中で眠り続ける八遠に気づかず、女子生徒たちは喜んでいた。

その姿を見て、また一歩前進したのだと実感すると同時に憤りが募つていた。

これをやつたのは愛であり、この女子生徒たちでもない。なのになぜ幸せを感じているのか。

「貴方たちは何もしていないじやない。もしクラス全体で戦うことに

なつたら、勝てないかも知れない。喜んでいる場合じゃないわ」
人に言えたことではない。けれど、ぬか喜びしているのは気に食わなかつた。

愛をベッドに寝かせると、布団を被せる。

堀北もベッドに潜ると、おとなしくなつた女子生徒を気に留めることがなく瞼を閉じた。

?? ?? ??

船上試験も幕を下ろした。

最後は龍園が裏切つて、午後9時を迎えることなく放送が終わりを告げる事となつた。

結果、AクラスとBクラスは大敗。CクラスとDクラスがポイントを伸ばした。

それでも龍園はいい気分ではなかつた。

それもそのはず、Dクラスに負けたこと。櫛田が口煩く問い合わせることも相まって、余計にイラライラが募る。

「私との約束はどうなつたのよ!？」

「そんなの知るか。俺のクラスに少しでも有利に動くのは当たり前だろうが」

櫛田の要求は、堀北を退学させること。

それと引き換えに優待者であることを教えてもらい、竜グループを結果1にしようと考えた。

しかし、結局Dクラスに負けてしまつた。おそらく八遠愛のせいだ。

長期的に考えて、結果3の方が利益が大きいという結論に辿り着くのは当然。櫛田のことは二の次だ。

龍園から見て堀北はそこまで脅威ではない。他の生徒よりも高い能力を有することは明白だが、警戒するべき人間ではない。堀北は葛城と同じタイプの人間だ。彼らは真つ当すぎる。

それよりも警戒すべきは八遠愛の方だ。

あの態度は辿り着いた法則に絶対の自信を持つてゐるからこそ。
更に言えば、無人島試験のあの作戦も首謀してゐるだろう。伊吹から
聞いた堀北の様子だと、あの焦りは嘘偽りないものだつたらしい。
それに、2人は同部屋だ。堀北の体調の悪化に愛が気づかないはず
はない。

それをわざと放置したのなら……

「ククッ、面白いじゃねえか」

龍園翔は恐怖を知らない。だから、どれだけ負けても嗤う。止まることなく突き進み続ける。

彼は既に、次の戦いへ目を向けていた。

頭脳戦といいながら体育会系なRTA、はーじまーるよー！

今回は夏休み明け、つまり体育祭を走っていきます。私も愛ちゃんも全力疾走で駆け抜けていくつ！ ……ん？

原作における体育祭はこれまた負けイベで、全クラスがポイントを落とす結果になっています。

それと同時に、本格的に櫛田が堀北を退学にしようと動き出したり、綾小路が実力の片鱗を見せたりと重要な場面でもあります。

訂正、よう実は全巻大事ですね。

須藤？ 2巻？ 知らない子ですね（すつとぼけ）

では、前置きはこの辺りにして体育祭のルール説明をしていきます。

組み分けは赤組と白組、赤がAとD、白がBとCです。これ以前にCクラスに上がっているとBクラスと組むことになりますが、このRTAではAクラスのクラスポイント管理も大切となってきます。なので、Cクラスに上がってしまうと体育祭での管理が面倒になるのでその辺りの調整はしっかりと行ってください。

前回龍園がミスってたら危なかつたです。愛ちゃんに負けてばかりの龍園くんは†悔い改めて†

個人競技は1位15点、2位12点——ってそんなことはどうでもいいんです。1位で5000プライベートポイントが貰えるので、そこだけ覚えてもらえば結構です。

推薦競技ではプライベートポイントは加点されないのでクビです。さようなら。

ですが、全競技出場するようにしましよう。

最優秀生徒報酬を獲得できれば、学年別も合わせて11万プライベートポイントが手元に来るので、これも狙います。

負けるとクラスポイントが100引かれるので出来れば避けたいのですが、今回は難しい——というか無理です。体育祭だけに焦点を当てれば勝つべきなのですが、長期的に考えるとそういうわけにもい

きません。それに、ここで下手に勝つて綾小路に目をつけられるというのが最悪の展開です。主人公がラスボスとは……（困惑）

勝ったクラスへの報酬がまず味のせいでクラスの士気が低いですね。ですが、BからDまでが大混戦の今、100の差でクラスが入れ替わりかねません。

ちょうどいい機会なので、全クラスの現在のポイントを確認しておきましょう。

Dクラス：601ポイント

Cクラス：687ポイント

Bクラス：742ポイント

Aクラス：1174ポイント

このように白が負けた場合CクラスはDクラスに転落、更にDクラスがクラス別で優勝した際に手に入る50クラスポイントを加味するとBクラスへのジャンプアップも考えられます。

これには堀北ちゃんもニッコリ。

平田がこの事実に気づかないはずもなく、ちゃんと周知してくれるので低下した士気は倍以上になつて返ってきます。

Aクラスにポイントを譲渡してなかつたら、Dクラスが801ポイント、Aクラスが974ポイントでものすごい勢いで追い上げていましたね。

それじゃ企画倒れなので絶対にやりませんが（鋼の意思）

次に競技の確認をしましよう。プログラムをお家に置いてきたという兄貴の為に教えてあげる私優しいな！（自画自贊）

・全員参加種目

- ①100m走
- ②ハードル競争
- ③棒倒し（男子限定）
- ④玉入れ（女子限定）
- ⑤男女別綱引き
- ⑥障害物競争

⑦二人三脚

⑧騎馬戦

⑨200m走

・推薦参加種目

- ①借り物競争
- ②四方綱引き
- ③男女混合二人三脚
- ④3学年合同1200mリレー

いやあ、いつ見ても全員参加種目が鬼畜ですね（他人事）

ここで大事なのが、個人種目の数です。理由は言わずもがな、1種目毎に50000プライベートポイントが貰えるからですね。

個人種目は100m、ハードル競争、障害物競走、200m走、借り物競争です。

5つなので250000ポイントとなります。11万も合わせて1350000ポイント獲得できます。船上試験に比べればインパクトは薄いですが、RTA走者として少額でも取りに行きます。

茶柱先生が自由時間だと宣言しました。

大半が平田の元へ向かい、3バカたちが堀北のところに集まっています。

愛ちゃんはどうするのか——って寝てるじゃないですか。堀北のヘルプの眼差しもどこ吹く風、爆睡しています。

んー、ですが何故か汗だくですね。9月に入り、残暑が厳しいとはいえ冷房のおかげでそこまで暑くはないと思うんですけどねえ。

ただ汗だくは汗だくなんですけど、表情からして悪夢ではなさそうですね。寝言も雑音のせいで聞こえてきませんし。かと言つて読唇術持ちでもないので、読み取れません。

多分サウナに入ってる夢でも見てるんでしょう。見た目口リなりに趣味おつさんつてどゆこと……？（困惑）

愛ちゃんの新たな一面を窺い知れたところで体育館へ移動します。

赤組団長の藤巻という男子生徒から意味深なアドバイスを受けた後、学年別で固まつて話し合いをします。

おつ、今回も欠場の坂柳じやないすかオツスオツス。今度また遊びません？

坂柳とお喋りしていると、堀北がチラツチラツとこちらの方を見ています。

前回言つてなかつたですが、これは堀北の下僕化が順調に進んでいる証拠ですね。嫉妬する堀北ちゃん可愛すぎワロタ。

堀北を依存させることで、綾小路にとつての軽井沢、坂柳にとつての神室や橋本のような立ち位置に持つていきます。

駒があつた方が動きやすいのは必然ですからね。現に、船上試験以降の軽井沢の活躍は目を見張るものがありますから。伊達に人気投票1位じやない。

愛ちゃんはこの場で口出しすることはしません。そもそも発言力ないからね、仕方ないね。BとCのいざこざでも眺めていましょう。過度な干渉をしないことが決定して集まりは解散です。

さて後日。本格的に順番を決めていくようです。週に1日、2時間しかないので大変ですね。

ちなみに櫛田の動きは原作と変わりません。この女もしぶといので、一回の事故じや諦めてくれません。

なので、今回クラスとして勝ちに行くことはしません。3位くらいなら獲れるかも知れませんが、1位はキツいっすねえ……

須藤は2巻を飛ばしたといえども勉強会イベは通つてるので、ギリギリガチ恋勢です。あそこを飛ばすところで苦労します。

じやけん、下らない方針決定論争や組み分けの話し合いは倍速しますよね～

……といきたいところですが、ここで運ゲーのお時間です。それが借り物競争の組み分けです。

決定方法はじやんけん、ここを取らなければ最優秀賞はかなり厳しくなります。本番でも豪運を發揮しなければならないのですがね。イクゾー！ デツデツデデデ！（カーン）

まず予選、5人ずつ（1グループだけ4人）でじやんけんします。その後、勝ち残った8人の中から勝った5人が選ばれます。須藤は全部出るのが確定らしいので除外です。借り物競争つて運ゲーなんじゃないの、平田ア（困惑）

最初はグー、じやんけん……チヨキ、あいこで……パー

おけです。勝てましたね。ついてます。ここを突破できる確率は5分の1で、しかも綾小路と同じ組になると確定で負けるのでさらに下がります。恐るべし、主人公補正。

はい、決勝まで来れば出場できる確率が上がります。理由としましては、原作中で外村が「あそこでグーを出さなければ」と話しているからであり、取り敢えずグーだけ出しておけばあと1人、というところまで進むことができます。

あとは運ゲー、負けたらドンマイです。

ちなみに愛ちゃんは全競技出場、高円寺は不参加です。

高円寺に参加されると最優秀賞取れないかも知れないですし、須藤には一度退場してもらわないと可能性が狭まってしまうためですね。

全種目1位など、愛ちゃんには造作もないことなのですが、保険はかけておくべきです。

本番に突入する前に、偵察という名の堀北櫛田仲違いの会に参加します。まあ本当は櫛田の堀北を退学させたいという意思を強くするためなんですけどね。

朝の10時頃、綾小路と櫛田、堀北と合流して偽企画を進行します。南雲ニキとの初接触にもなりますね。ただ、本格的な戦いは月城を排除してからとなるので、それからですね。そもそもそこに到達しない可能性の方が高いんですけどね。

南雲のサッカーとか見る気ないので倍速です。あれは久〇君だったら録画も考えましたけどね。

倍速が止まりました。サッカー部の偵察が終わつた証拠です。このタイミングで即座に撤退しましょう。

移動を開始すると堀北が櫛田に船上試験のことを問い合わせ始め、高確率で櫛田に目をつけられます。用事があると言つて立ち去りま

しょう。因縁は私怨で十分やねん。（韻踏み）

さて、本番です（唐突）

練習風景とかいらないでしょ。いらないですよね？（威圧）

では、最初の種目の100m走です。

なるほど、Cクラスは木下——ではない別の陸上部の生徒をぶつけましたね。それも仕方がないことです。現在龍園から相当なヘイトを集めているのでね。

龍園は愛ちゃんを転ばせて、という堀北と同じ手を取りますが、愛ちゃんには通用しません。愛ちゃんが速すぎるからに決まつてるダルルオ！？

はい、1位です。対アリでした。50000ポイント入りまーす！

（店員風）

佐倉ビリ？ あつ（察し）ふーん。

須藤が高円寺と（一方的に）揉めていても無視です。最優秀賞を取るのにお前らは邪魔なんだよ（無慈悲）

ハードル競争も無難に1位、運動能力の高さを遺憾なく發揮出来ています。陸上部？ 知らない子ですね。

次の団体種目は原作通り進めば男子は負け、女子は勝ちという理想の展開になるので楽です。

まあ過激派なのは龍園やアルベルトくらいしかいないので。いくら天才の愛ちゃんといえども、あれは勝てないっすね（諦観）

次は綱引きつか……ツスーーー

正直キツいですね。言い方は悪いんですが、愛ちゃんは全体的にちつちやいんですね。身長も坂柳より低いですし、まない（殴りんぐ）んぐんぐんづ（汚い声）

……いくらラケットを握つてて握力があつても、体重が、ね？ ね？

？

ですがここも落とすわけにはいきません。何せ実質今回の相手は堀北兄ですからね。全競技で勝たなければ話になりません。

オラオラア、引けお前らア！！（心の声）

愛ちゃんは最前列なので変顔でもしておきましょうか。前の数人

を戦闘不能にするだけでも効果はあると思います。

よし、何とか勝利。最初の一本を取られましたが、何とか巻き返すことに成功しました。

次は障害物走、堀北が襲われる競技（意味深）ですね。

助言して回避する手もありますが、最後の1200mリレーに支障をきたすので堀北には脱落してもらいます（無慈悲）

愛ちゃんにも陸上部をぶつけてきますが、気にしなければ問題ありませんし、追いつかれなければそれでいいので簡単な話です。

退場してもらうとは言いましたが、次の二人三脚は櫛田を追い出して堀北と組んでいるのでそこだけは頑張ってもらいます。

2、3年生が競技を進めている間に星乃宮先生から湿布を貰い、痛む場所に貼つてあげます。好感度稼ぎにもなりますし、1位の可能性が上昇します。

どちらにせよ、昼には退場してもらいます。愛ちゃんにはちよろいので余裕ですね。午後の須藤の介錯は堀北に任せます。

次は騎馬戦です。原作では堀北が執拗に狙われ、そこから崩されていくのでフォローを欠かさず立ち回ることが重要です。端的に言えば、堀北には囮になつてもらいます。

愛ちゃんは上なので、馬の女子たちに指示をしながら試合を進めていきましょう。

軽井沢が上にいる挿絵？ 原作なんて既に壊れてるから……（諦観）

オラツ、行くんだよ！

よし、ハチマキゲットです。堀北はまだ狙われ続けているので、このまま狙いに行きます。

当然向こうも愛ちゃんのハチマキを狙つてくるので、その都度かわしながらハチマキを回収していきましょう。

2つ回収できれば殆ど勝てます。堀北のハチマキは取られますが、こちらの方が数が多くなりますからね。

はい、というわけで堀北の犠牲のお陰で勝てました。騎馬戦はビビつたら負け、はつきりわかんだね。

言うまでもないですが男子は龍園にボツコボコにされてました。

ちよつと男子へ！ ちゃんと戦つてよ！ （合唱祭前真面目系女子ムーヴ）

次が個人戦最後、200m走です。100mもハードルもやらせといて200mの追い討ちって、学校はSなんですか？ つまり堀北兄とSMプレイ……？ （ガバガバ理論） ボブは訝しがる。

200m走ではスピードも大事ですが、スタミナもある程度要求されると思います。前半絶好調でも後半失速したら元も子もないですからね。

ですが愛ちゃんはテニス部、体力づくりは欠かさず行っていますから、（その辺の心配は）ないです。

200m走といえばコーナリング。ポイントはインド人を右に倒し、超エキサイティングしながらコーナーで差をつけることです。意味不明です（小並感）

身長が小さい愛ちゃんは、スピードと瞬発力でカバーしていますので、短距離走は得意な競技です。

というわけで1位、やつたね！

さて次は午後の部、最初の種目は借り物競争です。またの名を運ゲーです。個→々←の能力など関係なし、TDN運比べとかどうかしてますよ。この競技考えたやつ出てこい！

まあ愛ちゃんにかかるれば余裕ですよ。イクゾー！ デツデツデデデ（カーン）

えっと……『好きな先生』

アホか!? 禁断の恋とか考えてんのか退学させる気か!? パスです！

次は……『友達10人』

綾小路が引いてたやつじやねえか。そもそも愛ちゃんに10人も友達いるわけないだろ！ グスツ

パスパス！

つて、もう2人ゴールしてるじゃないですか。運すぎだろ。

『好きな人』

微妙ですね……

つてもう一人が動き始めたからこれで行くしかないです。近くにレースを終えた綾小路がいるので彼に頼みましょくか。

私も綾小路は（キャラ性が）好きですしね。全力で走れば先にスタートした生徒も抜けそう——抜けました。重いものを運んでいたので簡単でした。

というわけで3位です。40000ポイント逃した上に1万すらも怪しい位置、運ゲーとはいえこれはキツいですね……

スペシャル定食4食分と考へると痛手ですが、競技はまだ続くので切り替えていきましょう。

お次は四方綱引きです。これは男女別で分かれて戦うやつですね。……あのー、舐められます？ 愛ちゃんがちつちやいのはこの世の真理ですが、それと非力は比例しませんからね？

愛ちゃんは筋肉質ですから。まな板になるのは当ぜ（殴

前の競技の遅れを取り戻すために、1位を取つておきたいところ。

ブルルルア！（巻き舌）

あつちよつ……

2位ですか……ちょっとキツいかも知れないです。

堀北兄は今のところ殆どの競技で1位を取つていますし、団体戦も流石のリーダー力でクラスを1位に導いています。

借り物競争に出場していなかつたことが唯一の救いですが、他にも有力候補があるので厳しいですね。

えー、引きずつているわけにもいかないので次へ進みます。男女混合の二人三脚ですね。

タッグを組むのは平田です。身長差のせいで、親子か兄弟にしか見えない不思議。

相変わらず女子からの視線がキツツイですが、勝てば大人しくなるので序盤から飛ばしていきます。

二人三脚は歩幅をそろえることが大事なので、このような凸凹コンビは不利です。

なので愛ちゃんのセンスで無理矢理補うしかないです。幸い平田は気遣いができる英國紳士ジャパニーズなので、案外相性は悪く無かつたりします。

軽く歩調を合わせ、本番に向かいます。相手はモブばつかなので勝てると思いますがね（フラグ）

まあ、余裕ですよね（フラグへし折り）

どれだけフラグを立てようが、周りが雑魚だつたら回収できなん

たよなあ……

結構な大差で勝てたので、回収の余地がなかつたですね。
さて、そろそろ堀北と須藤が帰つてくる頃だと思うんですが……

アイエエエエエエエエエ
!!?!!?!!?

いない!? 須藤がいないだと!? おい堀北、須藤はどうしたんだ!

え?
須藤には興味がない?
ウツソだろお前。

こいつ、綾小路の助言を完全に無視しやがったゾ……（困惑）
いや、ここで須藤を連れて来ないと……つて借り物競争の後にリタ
イアはしたけど元から行つてないし何処にいるか分からぬ？

外へたゞりや（絶望）

ツス———一体何がいけなかつたんでしようかねえ……

このままだと堀北の成長幅が小さくなつて駒として使えなくなる能生が非常こ高ヽんですが……

これはリセ案件……？

ですが、ここまで多少のガバはあれど特に部活は調子がいいので諦めるわけにはいきません。というわけでオリチャヤー発動！

愛ちゃん、堀北の教育係に就任します！ こうなつたら徹底的に依存させて強制的にリーダーをやらせます。

依存させれば愛ちゃんの言うことは聞いてくれますので、それを利用します。自分からリーダーをしてくれるのを、愛ちゃんから圧力をかけてやつてもらうだけなので大差ないと思います。

ただ、このルートに移行すると堀北がリーダームーヴを煩雑にしがちなんですよね……

そうなつたらその時にまた考えますが、とりあえずはこの方針で行きます。

まずは日先の問題にをどうにかしなければなりません。トップバッターが須藤ではないので、先行逃げ切りが絶望的です。なので後半追い上げを狙います。

1番目に小野寺、次に櫛田、モブくんと続かせて平田、愛ちゃん、綾小路の順番とします。

急造ですがこの采配が当たることを祈ります。

お、始まりました。

小野寺は7位スタートですか。男子もいることを考えると妥当ですね。須藤が速すぎた。

櫛田、モブくんと続いて9位でバトンは平田に。
お、2人抜かしてくれました。流石つす。

ここでバトンは愛ちゃんに。目標である3—Aは2つ前ですね。思つたより距離がありますが、追いつけなくもないですね。

何とか追いつけたので、綾小路と堀北兄に同時にバトンが渡りましたが……やっぱりそうなりますよね。

綾小路が本気を出すのは、堀北が須藤を連れ戻してくれたことによつてDクラスが強くなると予感したからです。

ですがそのルートからは外れてしまつたので、綾小路が本気を出すことはなく、6位でゴール。堀北兄は3位でした。

この時点で10万ポイントの可能性は完全に消滅、学年別も怪しく

なつてきました。

取り敢えず閉会式に移りましょう。そこで全て分かりますからね。クラス別の順位はB、C、D、Aのようです。愛ちゃんの頑張りが多少は功を奏したようです。

次に最優秀賞ですが——やはりダメでした。堀北兄でもないので、これは仕方がないですね。

最後に学年別です。ここは取つておきたいのですが……

おつ、愛ちゃんの名前があります。ギリギリ柴田に勝てたようです。

ですが、Dクラスの空気感が葬式みたいになつてます。まずいですよ！

それと同時に、須藤へのヘイトがかなり高くなっていますね。自らリーダーを志願したクセにろくに働いてなかつたからでしょう。仕方がない。

というわけでポイント整理をしていきます。

クラスポイントが551ポイントなので55100ポイント、Aクラスからの収入が 20000×30 人に増え、60万ポイント。体育祭で31000ポイントです。

というわけで合計686100ポイントで、前回までと足し合わせると4241900ポイントですね。進捗は21.2095%です。それでは今回はここまで、次回もよろしくオナシャス！

9月 裏話 その1

夏休み明けの行事といえばと聞かれて、真っ先に思いつくものの一つは体育祭だろう。最近では熱中症対策の為に時期をずらす地域もあるが、文化祭と並んで学校における9月や10月の代名詞と言えることは確かだ。

他の学校に比べて特殊な高度育成高等学校も例に漏れず、激動の夏休みが終わると体育祭開催の知らせが飛び込んで来た。

体育祭でもプライベートポイントやこの後行われるテストの点数を獲得できる。須藤などの運動能力の高い生徒はモチベーションが上がっていたが、逆に苦手な生徒は落ち込んでいた。

説明が終わってもまだ時間が余っていた。茶柱から自由に話し合う許可が降り、教室は喧騒に包まれた。

しかし愛は眠り続けていた。監視カメラの存在を知りながら。

茶柱は説明している時から気付いていたが、指摘することはなかつた。他の生徒は話し合いに気を取られて気付かない。説明を受ける時に気づいていた生徒も、見て見ぬ振りをした。堀北も須藤や池達に囲まれたせいでそれどころではなかつた。

故に愛は起きることが無かつた。

教室には夏でも快適に過ごせるように冷房が設置されている。おかげで蒸し暑さに苦しむこともないし、汗をかいて鬱陶しいと思うこともない。

しかし愛は大量の汗をかいていた。それなのに表情は至つて正常。そのせいで誰も気づくことはない。

「……なお——」

今見ている夢が悪夢ではないだけなのか、それ以外なのか。

喧騒に搔き消されたため愛の声を聞く人はおらず、真相を探ることは出来なかつた。

そんな愛も授業後には目を覚まし、堀北と共にこの後行われる集会のために体育館へ移動していた。

「八遠さん、途中で寝ていたけれど体育祭の内容は分かっているのよ

ね？」

「もちろん、最初は起きてたからね」

「あなたが授業中に居眠りなんて珍しいことがあるのね」

「あはは、最近夜寝付けないんだよね」

目の下にクマがあり、その言葉に嘘偽りはないと言うことが分かる。

そんな愛に、僅かに怒りを露わにしながら堀北は話を続ける。

「早く寝ろと言ったのは貴方よ。……その、悩み事があるのなら相談に乗るわ」

「うん、ありがと」

しかし、すぐに目を背けてしまった。不慣れさからくる恥ずかしさなのだろう。

堀北が少しづつ変わり始めていることに、愛は悪い気はしない。今まで孤独だった堀北に、心を許せる相手が出来るのはとてもいいことだ。

体育館に到着すると、藤巻という男子生徒の話の後学年別で話し合いをすることとなつた。今回共に戦うのはAクラス。坂柳が所属するクラスだ。

「あっ、有栖ちゃん！」

見つけるなり手を振つて駆けてくる愛を見ながら、坂柳は笑みを溢す。友人に会えたからか、力を認めた人に会えたからか、はたまたその後の堀北の驚きの表情に愉悦を覚えたからか。

「ここにちは、愛さん」

Aクラスのリーダーである坂柳と、Dクラスのカースト下位の愛。接点がなさそうな二人が仲良く会話している光景に、事情を知らない葛城派とDクラスは呆気に取られていた。

「有栖ちゃん、お願ひがあるんだけど

「何ですか？ 愛さんの頼みなら何でも聞きますよ？」

「最近、また溜まつてきちゃつて……」

「ふふつ、そうですか。では放課後私の部屋に来て下さい」

「ありがと。優しくしてね？」

「どうしましようか」

そう言つて、悪戯な笑みを浮かべた坂柳。

後ろで二人の話を聞いていた堀北は睨みつける。もつとも、愛の意図的な言葉選びにより耳が赤くなっていたのでただでさえ薄い効果は無くなっていた。むしろ坂柳の心を躍らせ、逆効果だつた。

「皆さんがこちらを見ていますし、今はここまでにしておきましようか」

「うわあ、私目立たない人なのにめっちゃ注目集めてる……」
わざとらしく、そう呟いた愛。

元から一定の関係があつたAクラスの生徒からは驚きはなかつた。それよりも、この奇怪な光景に強く疑問を抱いたのはDクラスだ。坂柳とは初対面だが、Aクラスのリーダーの一角であることは風の噂からもたらされていた。そんな生徒と愛が、仲睦まじく談笑している。

そこから導き出される結論は一つ。

「八遠さん、Aクラスと繋がつていたの？」

「いやいや、そんなわけないじやん。もしそうだつたら無人島試験でAクラスのリーダーの名前を書いてないし、船上試験でなんのことしてないし」

私の活躍がなければAクラスはもつとポイントを稼いでいた——
背伸びをして、堀北の耳元でそう囁いた。

「それとも私を信用できないの？」

「いえ……そういうわけじや」

「そうだよねっ」

そう言うと、堀北の目の前で笑顔を見せる。一瞬だけ顔を覗かせた悪寒の元凶の姿はどこにもなかつた。

その後は平田の尽力で平静を取り戻し、BクラスとCクラスの分裂とは対照的に円滑に進んだ。

その間愛が口を開くことは一度もなかつた。

?? ?? ??

誰にでも秘匿したい事はある。それは綾小路にも、堀北にも、櫛田にも、愛にも当てはまる。

人は皆、そうやつて関係を維持している。逆に言えば、秘密を知る事で関係性は大きく変化していく。

——良い方にも、悪い方にも。

4人でサッカー部の偵察に訪れた愛の本当の目的はそこにあつた。中学生時代の大きな闇が櫛田にはある。それを知るのは堀北と綾小路だけ。仮面を被り続けるためには二人は邪魔でしかないので、どうにかして退学させたいと考えている状況だ。

この後、堀北が船上試験での謎を櫛田に問い合わせ、対立が深まる。堀北と綾小路を退学させようと動き始めるのも丁度この頃からだ。更に、あの事件にも踏み込むことによつて、対立が如実になつていく。

愛はそれをも利用しようと画策していた。より多くのポイントをできるだけ早く得るために。そして未来の出来事を知つているというアドバンテージを活かすためにも。

いざれは櫛田の仮面を剥がすことになる。しかし、まだ早いのだ。半年後。愛は誰よりも先を見据えていた。

偵察に来て暫く、一人の男子生徒が姿を現した。南雲雅、次期生徒会長だ。

平田達よりも能力が抜きん出でているらしいが、どれほどだろうか。今後の指標の一つにもなると思い、プレーを見つめる。

トップでデイフェンスを置き去りにし、ボディフェイントでタイミングをずらす。両足共にかなりのレベルだ。シユートの威力もコースも申し分ない。

……確かに、運動能力は高い。個人の技術で見れば、全国レベルはありそうだ。

一年生で見れば、櫛田が注意人物だと言つていたBクラス所属の柴田。裏に大きく蹴り出されたボールを何度も追いかけていたために、その俊足はよく目に焼き付いた。

かなりの本数をこなしているため、体力もそれなりにあるだろうと柴田を評価する。

須藤と比べると——接戦だろうか、組み合わせ次第でどちらに転んでもおかしくない。

暫くして、十分な偵察ができたと判断した堀北が、撤収を提案した。これ以上はただの観戦になってしまいそうだと思い始めていた愛にとつても丁度いいタイミングだつた。

「ごめん、用事があるから先に帰るね」

「ええ」

一言、断りを入れてから3人の前から立ち去る。
しばらく進み、後ろを振り返る。姿は見えないが、おそらく堀北が櫛田に問い合わせている頃だろう。

この日のやるべきことを終えて脱力すると、途端に残暑が愛に襲いかかってくる。

「暑すぎ……アイスが恋しい……」

服は家から持ち込むことが許されているものの、アイスの持ち込みは流石に許されなかつた。というかそんな想定は誰もしない。

自室に恋焦がれながら、ゾンビのようなフラフラとした足取りで寮をを目指す。途中でコンビニが見えた時は立ち寄つてしまおうかと思つたが、頭を振つて自制した。

そうして暫く進んでいくと、目の前から見知った人物が歩いてくるのが目に入つた。

銀髪の天才少女、愛の唯一の友人である坂柳有栖だつた。

「有栖ちゃん！」

先ほどまでの死人のような足取りは何処へやら、途端に活力を取り戻し、坂柳の元へ駆けていく。

そんな愛の姿に、坂柳はふつと笑う。橋下や神室はいない。完全にプライベートモードなのだろう。今回も試験に参加できいために、簡単に指示だけ出して話し合いには不参加なのだと考えれば納得がいく。

「随分と汗だくじゃないですか」

「だつて、暑いし……」

少しだけではあるが走ったのも理由の一つかも知れない。
「折角ですし、何処かに入りませんか？」

「えつでも——」

「私の奢りです。その代わり、貸し一つですよ?」

「ありがと、死にそうだつたから助かるよ」

坂柳はサデイストな人間なので、貸しが少し怖いが——貴重な甘味を味わうチャンスを見逃すわけにはいかない。

友達だから大丈夫だろうと思いつつも、本当に貸しを作つてよかつたのかと、内心冷や冷やしながら近くの喫茶店へ向かう。

立ち寄つたのは、近くの喫茶店。エアコンの効いた涼しい空間は、熱波に晒され続けた愛にとつてオアシスそのものだった。案内された席に向かい合つて座り、愛は汗を拭う。やつてきた店員にアイスコーヒーを注文する。

「愛さん、Dクラスは順調ですか?」

「うん、順番決めが終わつたところだよ。私、全競技に出るからちゃんと見ててね! 最優秀賞狙つてるから、絶対見てね!」

「ふふつ、そんなに捲し立てなくてもらちゃんと見ますよ」

目を輝かせる愛を落ち着かせるように、坂柳は微笑みながら言った。

「あと堀北ちゃんのも見てあげてほしいな」

「堀北……ああ、体育館でチラチラ見てきていた」

「そう、あの子。私のお気に入りだから」

「愛さんが言うのであれば、少しは見ておきましようか」

「できれば動画に収めてくれると助かるんだけど」

「……分かりました。端末でもいいならば撮りますよ。することもな
いですし」

何故そこまで要求するのだろうかと思い巡らせて——なるほどそ
ういうことが、と一つの結論に至つて坂柳は頷いた。それに愛も頷き返し、真意を確認し合う。

敢えて事前に防ぐことはしない。そこに綾小路の狙いがあるし、何

より出来るだけ愛の知る展開の範疇で進めたい。この後何が起ころのか、という予測は簡単ではあるが、既知と仮定には雲泥の差がある。もちろん、想定外への対策も万全にする必要があるのも承知ではあるが。

「愛さん、顔が固いですよ」

言われて気付く。今日の愛の役目は終わつたのだから、少しくらい羽目を外しても構わないだろう。

あの坂柳でさえ休息を楽しんでいるというのだから。

「ごめんね、せっかく誘つてくれたのに」

「いいんですよ、愛さんには笑顔が一番お似合いですから」

「いふあいふあい」

坂柳に頬を引っ張られながら思う。入学してから今まで、2000万ポイントという目標だけを考えて思考を張り巡らせてきた。

けれど。今くらいは、等身大の八遠愛でいてもいいのだろう。一切の煩惱を捨て去つて、目の前の娯楽に浸ろう。これからのことばは未來の自分に任せよう。

運ばれてきたブラックのアイスコーヒーに大量の角砂糖とシロップを加え、愛は笑顔を作り直した。

?? ?? ??

体育祭が行われるのは9月下旬。残暑も幾分か和らぎ始める時分だと認識していたが、今年に限つてはここまで魔の手が伸びていた。競技待ちの列に並ぶ愛は、まだ走つてすらいないにも拘わらず額に汗を滲ませていた。

ふと部活をやつていな自分を頭に浮かべたが、暑さにやられて無様に保健室へ連れて行かれところまでは安易に想像できた。更に、既に保健室へと行つてしまつた高円寺と1日の大半を過ごす羽目になるとすると、思わず身が震えた。真っ直ぐに坂柳のところに逃げ込むだろう。

既に他学年の競技が始まつてゐるが、保護者がいないにも拘わらず

それに匹敵するほどの熱気を帶びていた。

一般的な体育祭と比べて、現金同様の価値を持つポイントという、学生にとつて喉から手が出るほど欲しい報酬が得られるからなのだろうか。茶柱や上級生は試験ではないと話していたが、利用価値の高い報酬が獲得できるチャンスだと考へるとそうは言つていられないのかもしない。

事実、愛も密かに熱を燃やしていた。

一つ前の競技が終わり、一年生最初の種目である100m走の時間を迎える。

移動を終え、Cクラスの生徒の方を見た。事前に誰が陸上部か調べておいたから分かったことだが、やはり陸上部の女子生徒が相手だった。

堀北と同様に愛もリタイアさせたいのだろう。

確かにあまり速そうには見えないかも知れないが——それでも舐められているようにしか思えなかつた。

順番は堀北の方が前。Cクラスの伊吹と同順だ。本人による希望なのは間違いないだろう。無人島で出し抜かれたことを根に持つているのかも知れないが、堀北はただ自滅しただけ。たまたま風邪を引いた堀北を綾小路がうまく利用しただけというのが一連の出来事の全容で、事情を知る愛からすれば、完全に騙されている伊吹の姿を見ると思わず笑いが込み上げてくる。

その2人の順番が回ってきたようで、既にスタートを待つだけの状態だつた。

ピストルが鳴り、2人がほぼ同時に飛び出す。コンディションの差もあり、一方的と言つても良い結果だつた無人島の時とは打つて変わつて2人は互角の戦いを見せていた。

一年生競技の中では今までで1番の盛り上がりを見せている。

愛の位置から見ると、堀北と伊吹はほぼ同時にゴールラインに達したように見えた。しかし、僅かに堀北の方が速かつたらしい。

堀北の方が一部分前に——やめよう、この話は余計なところにまで被害が及ぶ。

競技は進み、いよいよ出番が回ってきた。CクラスとAクラスは男子。最優秀賞を取るにはここは落とせないので、相手が男子だろうが負けは許されない。

乾いた音とほぼ同時に足に力を込める。スタートで僅かにリードを得た。そこから加速して、少しづつ引き離して、後半もあまり減速することなくゴール。

タイムは出ないが、後続とは5m程の差があつたので悪くない走りだつたのではないか。

全員が走り終えたが、Dクラスとしての成績は芳しくない。自分の成績にしか興味がない愛は全く気にしていないが、テントでの士気は少しだけ下がつている。

更にはサボつた高円寺と須藤との間でいざこざが起ころるなど、崩壊の兆しは顔を出し始めていた。

しかし、その全てを愛は無視した。愛の目標には、須藤も高円寺も障害でしかないのだから。

「八遠さん、お願ひがあるんだけど……」

次は何時からだらうかと確認しようとしたところへ、平田が歩いてきた。

言いたいことは予想がついたが、一応彼の話を聞こうと無言で続きを促した。

「高円寺くん、体調が悪いとかって言つてた？」

「ううん、知らない。けど私が見た限りではいつも通りだつたよ」

「そつか……」

「もし仮病としても本人が体調不良を訴えてるなら、私たちにできることは何もないからね」

今頃須藤が高円寺がいる保健室にいるだろうが、それも徒労に終わることは間違いない。

人間の体調は刻一刻と変化しているのだから、他人が体調を断定することはできない。医者を連れてきて、診断してもらうほかない。

「須藤くんには悪いけど、高円寺くんのことは諦めてもらうしかなさそうだね」

平田は無言で頷いた。その顔には悔しさが滲み出ていた。

「この後に影響が出ないと良いけど……。ごめんね八遠さん」

「こちらこそ、力になれなくてごめんね」

気にしないでと言い残して、他の女子に呼ばれた平田は去つていつた。

龍園の思い通りにさせるのは好きではないが、体育祭に限つては負けが勝ちなので、反撃したい気持ちを堪え、次回以降に取つておかなければならぬ。

奇しくも、龍園と愛は同じ時刻に同じ笑みを浮かべていた。本番はこれからだ。

9月 裏話 その2

続くハードル走、綱引きは1位。順調に勝ち星を重ねていく中、問題の障害物走が立ちはだかる。

堀北が狙われる競技こそがこの障害物走であり、標的にされている可能性の高い愛も警戒しておく必要がある。

今回も先に堀北が出走する。やはり隣には木下の姿があった。スタートしてすぐは木下の方が前に出ていたが、障害は堀北の方に軍配が上がる。学の真似事の成果が少なからず発揮されている、ということがだろうか。

一瞬、学のいる3年生のテントの方へ目をやつた。その表情は真顔そのものであつたが、間違いなくその視線は妹に向けられていた。一見関係性はあまり良くないよう見える。しかし、もつと高い志を持つて欲しいという兄の妹に対する本音。憧れの人追いつきたいという妹の兄に対する羨望。本質はそこにあつて、互いの不器用さのせいで関係が拗れてしまっているだけ。ちょっとのきっかけで仲のいい兄妹に戻ることができる。

原作では学がここを後に数分前だが。もつと早く気づけるよと思う一方、あのタイミングだからこそその良さもあるような気がした。

思考が横道に逸れたが、レースは堀北が最後から一つ手前の障害物を越えたところだ。

その数m後ろに木下が控えており、他2人は置いていかれる展開。一度、堀北が後ろを振り返った。僅かに減速し、1m程度差が詰まつたように見える。

本当に木下という生徒に名前を呼ばれたのか疑問だが、残念ながら愛は聴力系のチート能力は持ち合わせていない。いくらハイスペックだと自覚していても、少し耳を澄ませば必要な情報だけを的確に拾えるような耳はしていない。

その後も何度も振り返り、差が詰まる。最後の障害物を越える頃には、差は殆ど無かつた。

そしてゴール手前2、30mのところで2人の足が絡まり転倒。堀北はすぐに起き上がりつてゴールラインを越えたが、3位だった女子生徒に抜かれて2着。木下は足を引きずりながら——おそらく演技だろうが——ゴールラインになんとかたどり着き4着だつた。後で怪我の重大性を主張する時の信憑性を増すためだろう。見た限り、リタイアしなければならない程の怪我ではないよう見える。

原作通りの流れだが、一目見ただけではどちらが悪いとかは分からぬ。それに加えて愛と龍園以外はこの展開は予想外なのだから、どちらが悪いかなど確証を持つて言えるはずもない。結果的に2人とモリタイアするという事実が残るだけだ。

何度も呼ばれたから振り返つた、と本人は振り返っているが、普通に考えてレース後に要件を問いただせば良いだけで、わざわざレース中に気にする必要は無いのではないか。

レース自体は問題なく進行しているのだから、まずは目の前の勝利に向かうべきである。

この時点での堀北の未熟さが露わになつた出来事だつた。
けれども、一応様子見くらいはした方が良いかもしれない。

「堀北、大丈夫か？」

話しかけてきたのは、愛の次の走者の三宅だつた。体育祭の異様な雰囲気はそれまでの距離感をも無かつたことによるらしい。
「さつきから足を気にする仕草はしてるから、ちょっと痛めたかもね。
でも本人は少し無理してでも続けようとすると思うよ」
「そうだろうな」

無人島で、体調不良のまま6日間戦い続けた過去があるから断定できる。そうでなくとも、我の強い堀北の性格から簡単に分かることだ。

隣がCクラスの生徒なので、聞こえないように小声で会話を進める。

「堀北が何度も振り返つていたから、レース中に何かあつた可能性もある」

「もしかしたら、Cクラス——というより龍園の仕業かも知れないね。

無人島のこと、まだ根に持つてそうだし」

「Cクラスの生徒が意図的に転ばせたということか?」

「可能性はあるよ。でも偶然起きた事故として扱われるのが妥当な流れじやないかな」

感情的になつて相手に過剰な力を加えて倒したりした場合は明らかに加害者側が悪いが、今回の場合はそのような様子は見受けられなかつた。自然に見せるために練習させたと龍園が話していることからも計画的なのは確かだが、木下の意図しないタイミングだつたのかも知れないし、本当は堀北の足が木下の足に絡まつたのかも知れない。

スライディングやタックルなら判別はまだ容易だが、走つている時に足が絡まるとなると、加害者と被害者を判別することは難しい。堀北が木下に呼ばれたことも、堀北には聞こえていても応援している生徒は自身やその周りの歓声に搔き消されて木下の声など聞こえやしない。

無視し続けられた堀北の負けである。

「災難続きだな……」

「これ以上は何もないといいけどね」

当然三宅もそう思つてゐるようだが、中学時代に関わりがあつた経験からこれだけでは終わらないと確信してゐるのだろう。表情が一層険しくなつていた。

それからしばらくして愛の出番になつた。

スタートと同時に、一斉に飛び出す。

最初の直線でいきなりハードルが3つ待ち構えている。2番目のハードルだけはくぐらなければならず、ここで減速する上、最後のハードルを越えるための速さが足りなくなる。一步ほどリードを取つたが、身体の小ささがここで発揮されるのは些か不満だつた。運動が苦手な生徒が悪戦苦闘しながら何とか通過したところを、それでも問題なく越えていく。

直線が終わるとレーンがなくなり、順位がはつきりと分かるようになる。

この時点では愛は先頭。2つ目の障害も問題なく越えたが、Cクラスとの差が広がることはなかつた。

「八遠さん」

最後の障害へ移る途中。堀北にも行われた例の名前呼びが始まつた。Cクラスが――というよりも龍園が――やりたいことは把握しているので、無視して走り続ける。

「八遠さん！」

3つ目の障害を越えてもなお、愛は反応しない。声に苛立ちや焦りの色が見え始めてきた。

それでも愛は、まるで聞こえていないかのように走り続ける。

愛にとつて、凡人は興味の対象外だ。決して自惚れているわけではなく、自分が優秀で才能溢れる少女だと自覚しているから。

「八遠さん！」

だからこんな茶番に付き合う義理はない。それなりのプライベートポイントを払つてくれない限り、決して興味を示さない。

「八遠さん！」

ゴール直前。最後に疲れ切つた体から絞り出された叫びが聞こえた。

それでも振り向くことはなかつた。

走り終えた愛は、肩を揺らすCクラスの生徒のもとへ向かつた。「レース中しつこく呼んでたけど、何か用事でもあつた？」

「……別に、何でもない」

「その割には随分と必死そうだつたけど？」

「何でもないって言つてるでしょ！」

まるで怯えるように、愛から離れていつた。

この後、それなりの制裁が加えられるのだろう。だがモブAが龍園から暴力を受けたとしても、愛にとつて全てどうでもいいことなのだ。自分には関係ないから。これからに何も影響を与えないから。

障害物走までを終えてここまで問題なく原作をなぞつている。それでいて愛はポイントを伸ばし続けていて理想的な展開だった。
――ここまで順調。そう、そう思つていたのに。

そ

「須藤くん？ 彼はもうダメよ。退学してもらうほかないわね」

昼休みも終わりに差し掛かった頃、愛の計画は崩壊した。人気のない校舎の影の下で、堀北はそう言い切った。

「……」

「それに、わざわざクラスポイントをAクラスに譲渡してまで一人でAクラスに上がるをするあなたの言うことは、悪いけど信じられないわ。合同で集まつた時もあなたは坂柳さんと仲良くしていたわよね。それをAクラスの人たちは把握していたように思えるわ」

周りに人がいないのがせめてもの救いだつたか。他のDクラスの人が聞いていれば、更に動きにくくなるだろうから。

「Aクラスと内通しているのは明らかよ」

これは1番の身内の失敗——いや、愛の失敗だ。

愛は睨みつけてくる堀北を見て思つた。

順調に思えた教育——調教だったが、思つていた以上に足りていなかつた。より正確に言えば、須藤の重要性を理解させきれていなかつた。

堀北の代わりに須藤、池、山内に勉強を教えた。暴力事件に至つては話し合いすらもさせなかつた。

効率を求めすぎたことが仇になつてしまつたらしい。須藤は期待通りの成長をしなかつたし、堀北は変な所で銳かつた。

方針を切り替えよう。クラス順位は捨てる。最優秀賞を目指して取れるだけのポイントを確保する。

須藤の復帰はポイント稼ぎに欠かせない人材だつただけに、この欠損は痛い。

いくら愛の身体能力が高いといえど、男子種目に参加することはできぬし、須藤の方が力は上。残念だがその分野においては負けを認めざるを得ないので。

この体育祭はやり過ごす。痛手は最小限に抑える。今後を見据え

た上で、現状での最善策だった。

体育祭が終えた後は、堀北の育成だ。葛城に付き従う戸塚のように、堀北を愛の下僕にする。命令すれば一つ返事で行動に移してくれるだけの存在になつてもらつて構わない。2000万ポイントが貯まれば堀北は捨てることになるが、その後は知った話ではない。妨害した罰だ。

当然2年生に上がれば生徒会の一員として働いてもらうことになる。

側から見れば自立し、成長しているように見える。実際は愛の指示に従う犬でしかない。これが理想……いや、絶対条件だ。

なるべく早く堀北を忠犬に仕上げる。ある程度調教は進んでいたが完璧でなかつただけ。決して不可能ではない。万が一無理そなうら、強引な手段を使うことも辞さない。

「そつか、じゃあいいや。須藤くんが帰つてこないのは仕方ない。勝ち目は無くなつたけど、残りの体育祭を楽しもうか」

そう言う愛の目はやはり笑つていなかつた。それを察知した堀北は、この時になつてようやく自らの過ちを悟つた。

そしてそれが、手遅れであることも。

だが結局、何を間違えたのかは分からず仕舞いだつた。

?? ?? ??

「負けてしまいましたね」

「仕方ないかな。私一人の力だけじゃどうにもならない状況だつたし」

保健室前で合流した愛と坂柳は体育祭を振り返る。

結果的にA、Dクラス共に惨敗。けれども赤組としては勝利を収めたため、クラスポイントの大きな変動はなかつた。

元から負けで終わる予定だつた愛としては想定通りだつたわけだが、それと同時に自らの甘さを認識した。

天才的能力と原作知識があつても、ボロは出てしまう。ただ、1

年生の初秋という比較的早い段階で学べたのは逆に良かったのかも知れない。

「先輩方に助けられて、被害がほとんどなかつたのが救いだね」「愛さんはとても頑張つていましたよ。最優秀賞おめでとうございます」

「学年別だけどね……」

そこに関してはあまり満足な結果ではなかつたが、坂柳に褒められると無条件に嬉しさが込み上げてくる。

「よお、チビ共」

その声で頭が冷えたのが分かつた。龍園翔は最悪のタイミングで現れた。

「船上試験の時は随分と調子に乗つてたが、今回は俺の勝ちだな」「この結果は想定内だから問題はないよ」

「ハツ、随分と強がるじゃねえか」

「ただ、今回は素直に負けを認める」

「——あ?」

「けどまあ、龍園くんのおかげで大事なことに気づけたからね。次の試験が終わつた頃にはクラスに入れ替わつてるんじゃない?」

「当然それは、愛個人としての敗北宣言だつた。

「納得行かねえな」

「もしかして龍園くんは『くつ……、殺せ!』みたいなのを所望で?」

「お前如きに欲情するヤツがいればいいがな」

「この世を探せば絶対何処かにいるし!……いやでも気持ち悪いからやめて欲しい」

「ぺつたんで悪かつたな。一之瀬みたいに中3の時に急いでかくならなくて悪かつたな。何してもダメだつたんだから諦めろ。」

「声に出ないよう、心中でそう叫びながら睨む。しかし龍園は気にするそぶりを見せらず、視線を隣の坂柳に移した。

「で、このチビの甘い蜜を吸つてるAクラス様はどんな気分だ?」

「私は何とも。今はまだ準備期間ですので」

坂柳陣営は順調に拡大が進んでいると話を聞いている。無人島試

験と船上試験での連敗が効いているらしい。

坂柳としても葛城中心に進めた体育祭は負けて欲しかつたのだ。

結局クラス順位は全クラス思い通りになつたということだ。先輩の頑張りで、組としては勝利したA、Dクラスの方が勝つたと見ても良いほどだ。

「ですがそれももう終わりです。次からは私が主導します」

「宣戦布告つてヤツか？」

「二度もAクラスの座を譲る気はありませんよ？」

「そこに私も加わつたら、いよいよ勝ち目はないね。その頃にはうちのクラスはBクラスに上がつてるだろうし、ボコボコに叩いても良いんだよ？」

綾小路という存在がいるので、意外と返り討ちに遭うかも知れないが。むしろその可能性の方が高いだろうか。それもそれで面白そ�である。

「それと私の名前をしつこく叫んでた陸上部の子、あれ何がしたかったの？ 隨分と必死だつたけど」

「お前をリタイアさせようと思つてたんだがな。堀北が釣れただけでも十分な成果だ」

「その子はそのあとどうなつたのさ。木下つて子は龍園くんが痛めつけて怪我を悪化させたって聞いたけど」

「別に何もしてねえよ。特に故障した様子もないのに次学校に来たら松葉杖ついてたなんて変な話だろうが。前払いしたポイントは返させたがな」

「龍園くんにしては優しいですね」

これで、3月の退学者投票の候補に名乗りを上げたかも知れない。

陸上部の子からすれば、自身も同じように痛めつけて欲しかつたのだろう。そういう性癖とかではなく、木下への落とし前がつかないから。

坂柳の表情を見るに、皮肉を込めた結果が今の発言だつたのだろう。

「じゃ、これからもお互い頑張ろうね」

「そんな悠長なことを言つてられるのも今のうちだがな」

「またね、ドラゴンボーイくん」

「テメエ……！ いい加減にしろよ……！」

青筋を浮かべ、怒りで震える龍園。殴りかかってこないのは、この瞬間を監視カメラに記録されていることを分かつていていたからだつた。「Xといいテメエといい……次言つてみろ、タダで済むと思うなよ」反撃をすることはせず、龍園は立ち去つた。

「やつぱり龍園くん弄りは楽しいなあ」

「ふふつ、面白い反応でしたね」

今回はカメラが抑止力になつたが、死角になる場所はいくらでもある。手が出ないと限らない。

「有栖ちゃんは不用意に言わないようにね」

「それくらい分かつてます。安直に身を危険に晒すほど愚かではありますから」

坂柳がそう言うのであれば大丈夫なのだろうが、本当に殴られた時のことを考えるとどうも落ち着かない。

「うつかり口が滑つたら助けてくださいね？」

「言われなくとも守るけどさ……」

「はい。一番頼りにしていますから」

そう言つて、坂柳はからかうように笑つた。

誰かに頼られるというのは初めての経験だが、案外悪くない。更に言えば耐性がないので割と危ない。

「何があつても有栖ちゃんは私が守るからねつ！」

「クラスが違うんですから、無理はしないでくださいよ？」

「じゃあ早くAクラスに上がつて有栖ちゃんと同じクラスになればいいじやん」

今まで友達はおらず、親からの愛情も注がれてこなかつた愛の中で、確実に坂柳の存在は大きくなりつつあつた。そしてそんな自分を受け入れていた。

「待つてますから」

「絶対だよ？ 上がろうと思つたらクラスに入れ替わつてたとかやめ

てよ」

「当然です」

Aクラス昇格への気力が湧いてくるのを感じる。まずは堀北を躊躇なればならない。坂柳のためならば堀北を犠牲にする覚悟はできていく。

「そういうば

「……な、何？」

坂柳の表情が変わったのを見て、愛は体を硬直させた。これはあれだ、よからぬ事を考えているときの表情だと一步後退りした。

「借り物競走のお題は何だつたんですか？」

「べ、別に普通のやつだし」

「その割には随分と取り乱していたようでしたよ」

「そんなところまで見なくてもいいじゃん……」

「ちゃんと見ていてと言つていたのはどこの誰でしたつけ」

完全に退路が塞がれていた。全て洗いざらい話すほかに生き残る道はなかつた。もつとも、その道も無事とは言い難い。坂柳が魔王か何かに見えた。

「1枚目が『好きな先生』でしょ。そして2枚目が『友達10人』。私には高すぎる壁だつたよ……」

「1枚目は分かるのですが、2枚目は……？」

「察して。察してください」

「何ですか？ 愛さんの口から言つてくれないと分かりません」

「ぐすつ……有栖ちゃんがいじめてくる……」

いくら坂柳とはいえ、あんまりな仕打ちだつた。

「分かりました。愛さんが可哀想なので、友達がいなかつたのだと勝手に解釈しておきます」

「酷い！ 死体蹴りなんて酷すぎるよ！」

膝から崩れ落ちた。坂柳のSつぶりはある程度は理解していたはずだが、想像以上だつた。

「で、3枚目は何だつたんですか？」

「教えないし……私をいじめる悪い子には教えないし……」

「ふふつ、反応が面白いのでついやり過ぎてしましました。では、『好きな人』に綾小路くんを選んだ愛さんは——」

「待つて!? その情報はどこから漏れた!?」

坂柳有栖はどうやら、敵を倒したら死体蹴りをした上で燃やし、残った灰をコンクリート漬けにして海に捨てるタイプの人間らしい。徹底的の度を超えてしまっている。

「クラスメイトの一人が借り物競走の手伝いをしていたんです。たまたまですよ」

「運命ってやつはこれほどまでに残酷だつたんだね……」

仕組んだとしか思えない神の悪戯に、愛は嘆くしかなかつた。

「で、でも綾小路くんはたまたま近くに居ただけだから! 有栖ちゃんのことが一番好きに決まつてるじゃん! もちろん友達としてだけ!」

「では堀北さんは?」

「嫌い」

「即答ですか」

今までいい感じの駒にはなる人という評価だつたが、今日の一件で確定した。堀北鈴音は八遠愛の計画の障害となる人物。ならばそれを取り除くのは当然のことだろう。

堀北自身は支配下における使があるので、完全には排除しないが。「堀北ちゃんのせいで今日の予定が全部狂つちやつたからね。今日から私のおもちゃに就任したんだ」

「堀北さん、どうなつちやうんでしょうか」

「どうなつちやうんだろ。でも、堀北ちゃんはそれを所望らしいから」「楽しみですね」

堀北は我的強い人間だが、これから真逆に変わつてしまつ。愛にとつても未知の領域であり、余計に好奇心を駆り立てていた。

「そろそろ帰りましょうか。今日は私の奢りで、一緒に食べに行きませんか?」

「えつ、いいの!?」

「はい、もちろんです。愛さんは誰よりも頑張つていましたから。私

からの最優秀賞です

「ありがとう！ 有栖ちゃん大好き！」

抱きしめたい衝動に駆られたが、ぐつと堪える。その代わりに、空

いている手を取った。

並んで、橙の空の下を進む。繋がれた手からは人肌の温もりを感じる。

誰からも愛されてほしいという願いを込めて付けられたはずの名前。しかしそれに反して愛とは程遠い人生を送ってきた。

最近になって、ようやく思い出してきた気がする。

誰かと他愛のない会話をすること。誰かとボードゲームをすること。誰かとご飯を食べること。その価値を。

どれだけ天才でも、一人では決して成し得ないことだ。

「有栖ちゃん」

「どうしましたか？」

「……ううん、なんでもない」

声をかければ、返事がある。そんな当たり前のことをすらも、親にはしてもらえなかつた。

「ありがと」

隣に坂柳がいる事を確認するように、もう一度握り直した。

10月

最近予想GUY続きなRTA、はーじまーるよー！

今回は6巻の内容へと行きたいところですが、メインであるペーパーシャツフルは11月から12月にかけてのイベントなので今は中継ぎタイムです。7月からずっと忙しかったからね、仕方ない。とはいっても10月にもやることはあります。RTAだから当たりめえダルルオ！？

まず一つ目が部活動です。そう、今月は新人戦が行われるのです。新人戦自体は9月から行われているのですが、全国大会で活躍した愛ちゃんは予選全スキップ、いきなりトーナメント戦です。

今回もシングルス、ダブルス共に出場します。新人戦ということでダブルスのコンビは同学年から選ばれるのですが、今回はAクラスの子と組みます。多分これからはずつとこのペアだと思います。他のクラスの子は何故か組みたがらないんですよね、不思議です。

この新人戦でもシングルスもダブルスも優勝すれば50クラスポイントと10万プライベートポイントを獲得できます。

ではまず3回戦までをさくっと倍速で進めていきましょう。

はつきり言つて相手は全国大会よりもレベルが低いので問題ないかと。

あれから愛ちゃんはさらに強くなつて、球の切れ味が増しました。ディ○バルドみたい！

相変わらずサーブは遅めなんですがね。190kmのサーブとかどうやつてやるんだよ。（愛ちゃんの貧相な体で出来るはず）ないです。

ですがそれは他で補つてやれば大丈夫です。ラインスレッスルのところに打ち込んで返つて逆をついたり、ドロップを加えて前後に搖さぶつてやつたりすれば問題なく突破できますからね。

はい、終わりました。

残る準々決勝以降は少し間が空くので、次は学校で動いていきます。

まず、このタイミングで生徒会長が堀北兄から南雲に交代します。なのでこ→こ←で堀北兄へ接触を試みます。武術を学ぶというのが主な理由ですね。

ここで習得しておくと、堀北の躊躇や須藤の育成、2年生に上がった後に大いに役に立ちます。

愛ちゃんは力が弱いというデメリットを抱えているので、克服しようという魂胆です。

政権交代のタイミングを狙つた理由ですが、単純に時間を作りやすいからです。生徒会長が何をしているのか知りませんが、交代前に交渉に行つたら突っぱねられました。悲しいなあ。まあ堀北兄は綾小路にご執心のようですからね、仕方ない。

オラア！ 道場破りの時間じやア！

はい、無事に稽古の約束を取り付けることに成功しました。

なんだか、放課後に汗まみれの男女が二人きりで組み合つていてるつてえっちですね。えっちいですね。（迫真）

当然夜には自主練です。いくら天才の愛ちゃんといえども、テニス界にはテニスの天才がいるわけで、彼らを越えるためにはそれ以上の努力をしなければなりませんからね。これもAクラスに上がるためです。

お、堀北じゃないっすかオツスオツス！

体は大丈夫なのかつて？ 大丈夫つすよ、0円でも全然やつていけてるんで。これでも試走はそれなりにしてるんでね。

あ、心配なんですか。ふーん、それなら堀北の手料理で手を打つてやろう。あ、いいんすか！ でもポイントはよこせ？ ジヤあいいです。（真顔） ポイントだけは譲れねえんだよ！

おつと、説得が始まりましたね。大人しくクラス全体でAクラスを目指せ、ですか。

ごめんね、今RTA中なんで。そうですね、完走した後なら考えてやらんこともないけどね。多分そつちなら1年生中には終わるでしょ。（適当）

そうですね、ここがチャンスです。殴り合いの方向へ誘導しましょ

う。相手を支配するのは暴力が一番手つ取り早いって堀北も言つてたからね、仕方ない。

おつ、戦闘ですか？ 錢湯ですか？ （激寒ギャグ）

思つたより早かつたですね。堀北つてこんな須藤みたいな子でしたっけ。（困惑）

原作がラノベなのにフ○ム並みに戦闘に手が込んでるつてマジ？ オラツ、早くアーマー〇コアの新作出すんだよ！

ていうかさあ、愛ちゃん疲れてんのにガチでくるとかお前人間？ 堀北兄から武術を学び始めたおかげで若干対応できますが、愛ちゃんじやなかつたら即墮ちだつたゾ……。

ですがここで堀北に勝てれば堀犬化ホリケンに大きく近づくことができるんで、愛ちゃんには頑張つてもらいましょう。あと堀北の手料理もかかつてますし。

必殺、愛パンチ！ うーん、絶望的にダサい名前ですね。そしてめつちや弱そう。

とりあえず堀北を押し倒して馬乗りしておきましようか。

防戦一方に見せかけて、愛ちゃんの小さい体を生かして懷に入り込みます。後は後ろにベッドがあると思つて押し倒せば……つてそつから反撃してくんの！？

逆に投げ技を食らつちやいましたね。ですが何とか抜け出せたようです。テニスで鍛えた軟体と体力を舐めるんじゃねえッ！

よし、堀北にも疲れ見え始めてきました。体力勝負であればこちらが有利です。テニスつて案外体力使うからね、当然です。

おつ、偶然か愛ちゃんが自主練に使つていた壁が堀北の真後ろにありますね。これを使って追い込んでいきましょう。今度はこちらから仕掛けます。

ここだあああアアアアア！！

つし、堀北のお腹に蹴りが入りました。咳き込む堀北も中々よいぞ。このまま壁ドンしちゃいましょう！

一生懸命に背伸びしながら迫る愛ちゃん可愛い……可愛い？ 冷たい表情しながら、心のどこかで「足疲れた……」とか考へてる

と思うと可愛い。

はい、ではこれから堀北ちゃんの躰に入ります。まずは胸倉を掴んで言葉で責めていきます。変に隠すよりは、計画を堂々と吐き出してしまいましょう。

はい、反論しようとしたな、グーパン入ります。

こうやつて暴力を使つて堀北を精神的にも肉体的にも追い込んでいきます。

運良く、今は夜なので気付かれることもありません。体育祭での恨みは大きいぞ、堀北ア！ おっぱい揉ませろやア！

ここで愛ちゃんの指示には従うことと愛ちゃんの計画には反抗しないことを約束させます。当然録音も忘れないようになります。帰つたらその部分だけを切り取つて他は削除します。他の部分が残つてたら愛ちゃんが退学になるかもしれないでの必須です。

ああ、あと堀北に口止めもしておいてください。現時点ではあまり信憑性はないですが、念のためです。

これらのことと約束させたら解放してあげましょう。うーん、涙目の堀北ちゃんもそりますねえ。（愉悦）

というわけでこれからは堀北の手料理を頂けることになりました。しかも全額堀北持ちつてマジ？

え、失望したわ外道め、だつて？ これRTAだぞ？ 何言つてんだお前。（真顔）

ああ、安心してください。堀北が頑張つたらちゃんと褒めてあげますよ。それに手料理は週1にしておいてあげますよ。……なんですか、私にもそれくらいの良心はありますよ！ RTAに関わるところではちょっと心を鬼にしてるだけです！

というわけで、堀北の復活を待つて堀北の部屋に上がり込みます。

うわあ、部屋超綺麗じやん。さては私よりも生活力あるな？ すげえ……。養え（豹変）

そういうえば愛ちゃん汗だくなんで一回家に着替えを取りに帰りますね。えつ、ここで入るのかつて？ 堀北と一緒に入ろうと思つてたんですけど……。

あつ、もちろんOKですよねよかつた！

んじやちよつと待つてくださいねただいま。（超倍速）

堀北と風呂に入る準備ヨシ！（現場猫）

あつ、年齢制限食いたくないので倍速しますね。入浴シーンだけでも見せろ？ は？ お前らホモなのに何言つてんの？（圧倒的偏見）

はい、サービスはありません。（無慈悲）

というわけで堀北の手料理を頂きましょう。時刻は午後9時を回った辺りなので軽めです。

……愛ちゃん幸せそうな表情してますね。いつも山菜定食見てるから余計に美味く感じるんでしょうね。

はい、では堀北の今後について話し合いしますか。進路相談みたいですね。（適当）

とりあえずしばらくは原作通りリーダーとして頑張つてもらいます。特に、須藤の育成には力を入れてもらいたいところですね。自分で犯した罪の責任は取つて貰います。須藤のような尖つた人材は一定の範囲では使えるので、（手放したく）ないです。あ、山内はお呼びじゃないです。

あとは、綾小路の言動は逐一報告して貰いましょう。今も互いに干渉しないという関係は続いていますが、既に原作は崩壊してしまってるので綾小路の動きが変わる可能性が高いからです。

体育祭のリレーで活躍しなかつたというのは実はかなり大きな影響を与えてます。おそらく佐藤の連絡先は今でも知らないでしょうし、池や山内とはそれなりに仲良くしていることでしょう。

また、龍園の言う『X』の候補でも優先順位はかなり低くなっています。逆に愛ちゃんがめちゃめちゃ狙われてる説。

とにかく、これから綾小路の行動は未知なので堀北に報告してもらおうというわけですね。

あとちよつとでも逆らう動きを見せたら圧力をかけます。これか

らは容赦なしです。体育祭で余計なことしなきゃ良かつたのにね。

そんなこんなで堀北についても運良く早い段階で解決できそう

ので再びテニスの方へ戻ります。

さて、準々決勝ですが、お相手はそんなに強くなかったです。

ストレート勝ち出来たので倍速しますね。

ダブルスもそんなに大したことなかつたです。愛ちゃんが特に可愛がっている子なので、それなりに強いです。部長といい勝負しそうなくらいの実力はあると思います。

さて次の準決勝ですが……見たことある顔ですね。6月に一度対戦したことがあります。その時は勝ちましたが、どうやらリベンジに燃えているご様子。

あんたどこ中、と聞かれたのですが……愛ちゃんの中学校とか知らないそもそもそもそも部活何やつてたかも知らないので、パソコン部だつたとでも言つておきましょうか。なんかめっちゃキレてるけどどうしたんでしょう。

相手のサーブからですね。

ふむ、相手は愛ちゃんの身長の低さが攻略の鍵だと考えたのか、結構左右に揺さぶってきていますね。

……届かなかつたですね。なるほど、戦い方は分かりました。その辺の対策もしているので問題ありません。

まずサーブを返してポジションを真ん中寄りに。左側に打ち込まれたので、一旦返します。出来るだけ引っ張るようにして、相手の左側のコートへ返します。これもちゃんと拾いましたね。ここで一度ドロップショットを入れます。拾え……ないです。取り返しました。

まあ、こんな感じでやれば勝てるんじゃないですかね。もちろんタイミングをずらしたり、クロスラリーをしてみたりと変化はつけますが、基本的な攻略はこれでいいかと思います。

あとは、際を狙つて打つてみたりすれば勝てるかと思います。
……はい、勝てました。さつきの相手よりは手強かつたですが、愛ちゃんの敵ではなかつたです。

ダブルスに関しても同じような感じだつたのでさらつと流しています。

残るは決勝なんですが……あまり絵面が面白くないのでこれも流していいですかね？

え？ 1ゲームだけ実況でもしろ？ 仕方がないですね、1ゲームだけですよ？ 見せてあげますよ私の神実況を！

こほん。えー、サーブは愛ちゃんからですね。お相手さんがリターンしてきましたので打ち返します。数回クロスラリーを続けまして……逆側へ流します。かなり際どいところでしたが、お相手さんが返してきたので今度はその反対側へ返します。また拾われたので、全力で逆側へ打ち返して15ー0ですね。

……これ、まだやるんですか？ 勘弁してください。

私が実況すると、感動のあまり周りが静かになってしまうことが分かつたところで、残りは倍速します。

はい、特に見せ場なく終わりましたね。まあダブルスもモブちゃんの実力不足感は否めなかつたですが無事に優勝しました。ですが全國となるとちょっとキツいかもしないので、これからも厳しく鍛えていこうと思います。

これで無事、クラスポイント100ポイント、プライベートポイント20万ポイント獲得です。お疲れ様でした。

そして10月の末には、ペーパーシャツフルの組み合わせを決める小テストがあります。

今回も例に漏れず、満点からの100000ポイント確保をしてください。

そんなこんなで今月のやることは終わつたのでポイント集計をしましよう。

現在のクラスポイントが551ポイントなので、55100ポイントト。

テニス優勝による20万ポイント。

Aクラスからの振り込みで2万ポイント×33人で66万ポイント。

そして体育祭の後に行われた期末試験分の1万ポイントです。合計すると91万5100ポイントでした。

現在のポイントは516万7000ポイント、進捗は25.835%です。

やつと4分の1に到達したところで今回はここまで、次回もよろしくオナシヤス！

10月 裏話

自分が天才であり不可能はないと自負している愛だが、弱点がないわけではない。

あまり恵まれた体つきではなく、どちらかといえば非力な方である。

例えば須藤に力勝負を挑めば当然負けるだろうし、それ以前に他の女子に負けることもあるだろう。

筋力トレーニングをして体を鍛えようにも、0円生活では栄養失調になりかねない。ハイリスクなのだ。

しかし、技術でカバーすることはできる。

先日、堀北学が生徒会長を辞した。彼は武術に精通しており、愛が挑めば即座に返り討ちに遭うことは目に見えている。

いくら天才でも、結局天才でしかない。

天才だからと言つて、常に頂点に君臨できるわけではないのだ。

生徒会長が南雲に代わり、理事長が一時的に月城に交代することで高度育成高等学校は武力に対して甘くなる。

高い戦闘力を有していれば、その間は有利に事を運ぶことができるようになる。現状だと愛はその手を使えず、逆に非力であることを利用されてしまうかもしれない。

「堀北先輩、今お時間はありますか？」

「ああ。……お前はDクラスの八遠だつたか」

こうして愛が堀北学に接触していたのも弱点をカバーするため、そして選択肢を増やすためでもあった。

「ご存知だつたんですね」

「よく鈴音と行動しているだろう。それにお前は目立つことばかりしているからな。嫌でも耳に入つてくる」

「確かにそうですね」

心当たりしかなかつたので否定する。とぼけたところで意味はないだろう。

「で、要件は何だ？」

「堀北先輩に武道を教えてもらいたいと思いまして」

「……何故だ？」

「堀北先輩は色々な武術の段位者だと聞いています。それに、生徒会長が南雲先輩に交代するので」

「確かに南雲は実力主義の面を強めていくと話していたが……なるほどな」

学は納得したように小さく頷き、愛を見下ろした。

「残念ながら私にはそちらの方面は一切手を出したことがありませんから。それに、南雲先輩に反対しても無駄なのは目に見えています。であれば適応するほか道はありません」

「なるほど。お前の言い分はよく分かった」

見定めるような鋭い目だが、愛は決して視線を逸らすことなく見つめ返す。

「だが……いや、分かつた」

「どうしたんですか？」

「教えるのはいいが悪用はするなと言おうと思つただけだ。ただ、卒業してからはどうしようもできないからな」

「あはは。しませんよ、そんなこと」

「ならない。だが、力を持つということには責任が伴うことは忘れるな」

「もちろんです。あくまでも自己防衛のために使うだけですから」

現2年生や来年度入つてくる新1年生、そして同級生たちとの戦い。今後特に、龍園などは容赦しなくなるだろう。

それに、坂柳を守ると約束したからには何があつても遂行しなければならないと考えている。

「それで、時間はどうするんだ？」

「平日は空いているので、その時間にでも」

「週5日、ということか？」

「もちろんです」

愛は力強く頷く。しかし、学の表情は僅かに曇っている。何故だろうかと愛は首を傾げた。

「本当にそれでいいんだな?」

「はい、大丈夫ですけど」

「ならない。だが、体調管理だけは怠るなよ」

「分かつてます」

0ポイント生活を続ける愛の身を案じてくれていたのだろう。

それよりかは愛が倒れた時、学のせいになつてしまつという可能性が頭を過つたからなのだろう。

だが、愛はこれまでテニスに必要な体力づくりを0ポイントで行つてきた。体調管理には自信があつた。

「では、明日から始めるということでいいな?」

「はい。よろしくお願ひします」

愛は一礼して、踵を返した。

?? ?? ??

学との特訓が始まつて1週間少々。部活の大会の時期と重なつている愛は、暗くなつてからもテニスの練習に没頭していた。

正確に、壁の同じ場所へ何度も打ち込んでいく。まるで機械のように。

しかし愛は決して満足しなかつた。夏の全国大会での敗戦が頭から離れなかつたのだ。

初めて4ヶ月程度だつたから仕方ない、とはならない。今までそれで負けたことがなかつたのだから。書道もピアノも、それだけの月日があれば最優秀賞を取ることは可能だつた。

それが小学生の頃で、相手も経験が浅かつたからなのかもしれない。しかし負け無しだつたことは事実なのだ。

「これじゃ勝てない……!」

相手はテニスの突出した才能があつたのかも知れない。それと同時に、膨大な量の練習と経験を積んできたのだろう。

技量は自身の才能で補えても、経験はどうしようもない。部活の練習では実戦形式の練習を増やした。少々物足りないが、こればかりは

どうしようも無い。

技術に関しては、放課後に学との武術の鍛錬を始めたため部活に参加できず不足してしまう。それを補うためこうして励んでいたのだ。

初めて負けたことによる屈辱。そして勝ちへの執念。それが愛を突き動かす原動力だつた。

「八遠さん……？」

しかし、いるはずのない誰かの声によつて一時中断を余儀なくされた。

「こんな時間に何してたの？ 堀北ちゃん」

「それは私の言葉よ」

「いや、テニスだけど……。もしかして、堀北ちゃんはテニスを知らない？」

「そういうことじゃないわよ。分かつて言つてるわよね？」

ベンチに腰を下ろしラケットとボールを隣に置くと、堀北にも座るように促す。

水分補給に取り出したペットボトルはやはり水だつた。十分に飲んだあと、愛は口を開いた。

「もしかして、ご飯ちゃんと食べてると気にしてる？」

「……違うわよ」

「おつ、図星？」

「……倒れられたら困るじゃない」

「堀北ちゃんがデレた！」

「何を言つているのよ」

堀北は呆れてため息を溢した。

「じゃあ堀北ちゃんが手料理を振る舞つてくれるなら考えてやろうじやないか」

「……八遠さんの分の食費は自分で払いなさいよ」

「えつ」

「えつ、つて何よ。あなたの分まで用意するとなると食費が増えるに決まつているじやない」

「払わないけど」

「Aクラスに上がりたいから、かしら」

「そうだよ」

今更隠す必要はない。迷わず肯定した。

「Aクラスを目指したい気持ちはわたしにも分かるわ。けれど、一人で上がろうとする理由だけは分からないの」

Aクラスに上るのはクラスポイントによるもので十分狙える。堀北にとつて、それでもプライベートポイントにこだわる愛の動機は分からなかつた。

「別に大した理由じゃないよ。誰も達成したことがないって聞いた時、なら自分が“最初”にならうと思つただけ。サッカー選手になりたいって思うのがかつこいいからっていうのと同じようなものだよ」「けれど、クラスポイントでDクラスからAクラスに上ることもまだ達成されていないわ」

「そうだね」

確かに堀北の言う通りだ。Dクラスは落ちこぼれが集まる場所であるが、今年は違つた。愛や綾小路、高円寺など、明らかにDクラスにいるべきではない器の生徒がいる。

初めての快挙を達成するには十分な環境が揃つっていた。

「けど、それじゃダメなんだ」

「何がダメなのか私には分からないわ。どんな方法であれ、Aクラスに上がることには変わりないもの」

「本当にそう思う?」

「どういうことかしら」

ちよつと待つてねと一言断ると、愛はジャージを羽織る。10月下旬の夜風は汗をかいだ愛の身体を冷やしてしまつていた。

「堀北ちゃんはさ、5月の最初に茶柱先生が話していたこと覚えてる?」

「もちろんよ。……忘れもしないわ」

落ちこぼれが集まるDクラスの中でも、クラスポイントを全て吐き出したクラスは今年が初めて。

このクラスが落ちこぼれ中の落ちこぼれだと遠回しに言つている
ようなものだつた。

「今、綾小路くんとかがAクラス昇格を目指して動いてる。でもそれっておかしな話だと思わない? 一部の人だけが頑張つて、後の人はそれについて行くだけ」

「けれど無人島ではみんな——」

「あれくらいは誰でもできる。ちょっと探索に行つて、帰つてきたらのんびりする。それだけだし。なんならそれすら上手く行つてなかつたよね」

「……」

「ポイントで食料は買えたから、実際の生活よりは楽だつた。軽井沢さん達なんて余計なものを買つてたでしょ。無人島試験なんて言つてるけど、そこまで過酷じやない」

風邪を引いていた堀北でも6日目まで参加していた。雨が降らないければ、最後まで参加できただろう。

それに加えて、ポイントの管理は主に平田が行つていた。他の生徒は平田の指示に従つて探索に行くだけであり、綾小路がいなければ最下位だつた可能性が高い。

「無人島試験に勝てたのは綾小路くんのおかげ。船上試験は私が頑張つたおかげ。どうせ他の子は何もしていないのにまるで自分が勝つたかのように思つてるんじゃない?」

「それは……」

堀北の脳裏に浮かんだのは、3日目の深夜の光景だつた。同室の女子生徒は勝ちが確定したことに喜んでいた。気持ちは分かるが、彼女らは何も貢献していない。確かにそれに憤りを感じていた。

心当たりがあつた堀北は思わず目を逸らした。

「何をしてない子がAクラスで卒業して好きな進路を選べることに私は納得がいかない」

Dクラスの生徒が30人Aクラスで卒業するよりも、坂柳がAクラスで卒業する方がよっぽど価値がある。そう愛は考えていた。

「……理解できないわ。あなたのやつていることは裏切りに等しいわ

よ

「へえ、堀北ちゃんはそう思つてたんだ」

「たとえ能力がどれだけ低くても、彼らは試験に真剣に向き合つているわ」

「あの堀北ちゃんがそんなことを言い出すなんてね。4月の時は一匹狼だったのに。誰に影響されたんだろ」

からかうように愛が言うと、堀北は顔をしかめた。その話はするなと言いたげだつた。

「けど、人はそんなにすぐには変われないんだよ。実はちょっとだけ分かるなつて思つてるでしょ」

「……っ」

最初の中間試験で、堀北は須藤たちを切り捨てようとしていた。愛と綾小路の助け舟のおかげで無事乗り越えることができたが、もしいなかつたら3人は退学していたに違いない。

元々、堀北はそういう人間なのだ。一人になることを選んだのも堀北の目に学がそう見えたからであり、その期間の方が圧倒的に長い。いくら変わろうとしても、すぐに変わることができるのはない。

「それでも許せないわ。これはあなたのためよ」

「……」

しかし愛が唯一見誤ったのは、堀北の精神面の強さだつた。いくら搖さぶりをかけても、堀北は折れることはなかつた。

「あははっ」

「何がおかしいのよ」

「堀北ちゃんのいいところ、ようやく見つけた気がする」

堀北は天才ではない。愛からすれば、凡人の集団の中で頭半分ほどだけ抜け出したくらいの存在でしかないと思っていた。

しかし、決して諦めない心の強さだけは本物だつた。

——だからこそ、征服のしがいがあるというものだ。

愛は立ち上がり、堀北を見下ろす。

「どうしても止めたいんだつたら、力ずくで止めてみてよ。暴力は人を支配する1番手つ取り早い方法なんでしょう?」

「……つ、それは」

「じゃあこうしよう。私と堀北ちゃんはこれから、暴力で勝ち負けを決める。簡単に言えば殴り合いだね。堀北ちゃんが勝つたらクラスポイントでAクラスを目指することにする。けど、堀北ちゃんが負けたら私はプライベートポイントでのAクラス昇格を目指す。そして負けた方はこれから卒業まで、勝った方の言いなりになること」

「……分かったわ」

躊躇いながらも、堀北は肯定の言葉を口にした。愛は満足そうな表情を浮かべると、堀北と距離を取つた。

「……まさか、あなたと戦うことになるとは思わなかつたわ」

「そう? いつかこうなるとは思つてたけど」

「違うわ。試験で戦う可能性はあつたかもしれないと思つていたけれど、こうして拳を交えることになるとは思わなかつたのよ」

愛と相対する堀北が一步分の距離を縮めるが、愛は変わらず笑みを浮かべて堀北を見つめ返している。

「じゃあ堀北ちゃんはまだまだつてわけだ」

「ええ、そうね。私は未熟者よ」

堀北の目はしつかりと愛を捉えている。何があつても屈しない、そんな決意を感じた。

「けれど、それは今のは——つ!」

堀北が慌てて回避行動を取つたが、読まれていたのか既に目の前には愛の拳があつた。咄嗟に目の前で腕を組み衝撃に備える。

愛の一撃を耐え凌ぎ、堀北は反撃の時を探る。

「それじゃダメなんだよ、堀北ちゃん」

愛は堀北に一步、また一步と迫る。次の攻撃に備え、堀北は警戒体制を崩さない。

「向上心があるのはいいこと。けど、堀北ちゃんが階段を上がつている間に他の子も同じように登り続けているんだよ」

「私がそれ以上のペースで登ればいいだけの話よ」

「その通り。でも大変じゃない？ 急ぐのって。階段を登るだけでも疲れちゃうのに、一段飛ばしで上がると余計に体力を使う事になる」「それでも構わないわ。私はそう決めたの」

兄である学に追いつくため。実力を証明するため。自身の人との接し方に誤りがあつたことを認め、変わろうとしている。当然それが平坦な道ではないことを堀北は理解している。

「もしも楽に階段を登れる方法があるとしたら？ もしもゴールまでの近道があるとするとなるなら？」

「——つ」

「みんなが一生懸命登つていてる中、自分だけ楽できるとするなら？」

堀北ちゃんはそれでも地道で苦しい道を選ぶ？」

「どういうことかしら？ そんな方法、あるわけないじやない」

「それはどうかな？」

愛は堀北の目の前まで迫ると、歪んだ笑みを浮かべた。

「私の言いなりになればいい。堀北ちゃんは私が言うことだけを聞いていればいい」

「冗談はやめてもらえるかしら。それは私の実力ではないわよ」

「それは本当かな？ 無人島試験の時のこと、もう忘れたの？」

「……」

風邪を引いてリタイアした後。堀北は何もできなかつたのにもかかわらず、クラスのヒーローだと祭り上げられた。忘れるはずもなく、堀北は口を開くことができなかつた。

「堀北ちゃんは基礎能力はあるからね。天才の私の指示に従つていれば、もつと持て囃されるだろうね——」「ふざけないでくれるかしら！」

突然、堀北の右腕が愛を強襲した。瞬時に愛は回避行動を取つたが、頬をわずかに掠める。

「あなたは自分がAクラスに上がることができればいいだけでしよう！？ 今まで少なからずクラスに貢献していたわ。だから協力していた。けれど、Aクラスにポイントを横流しているようなあなたの

言うことなんて聞けるわけないじゃない！」

堀北は叫んだ。ここで愛を自由にさせると暴走してしまうと思ったから。先程見たあの笑みは榎田が本性を現した時のものと同じようなものだった。

「ふふっ、堀北ちゃんって本当に正義感だけは一人前だよね」「それの何が問題なのかしら」

「わかつてないなあ」

「——うつ!?」

今までとは桁違いの速さで堀北の懷に潜り込むと、腹に一撃を叩き込む。何もできずに吹き飛ばされ倒れ伏す堀北の前髪を掴み、顔を持ち上げると、愛は子供に言い聞かせるように囁いた。

「過程はどうあれ、最後に勝つた方が正義なの。堀北ちゃんがいくらヒーローを気取ったところで私に勝てなきや意味がないんだよ」「分かつて、わよ……！」

痛む体を言い聞かせ、堀北は立ち上がる。距離を取つた愛はそれを笑みで歓迎した。

「さすが堀北ちゃん。まあ、こんなに簡単にくたばつてもらつちゃ困るんだけどね」

「ちなみにあなた、何か習つていたのかしら？」

「何も習つてないよ。最近ちょっと勉強はしてるけど」

「明らかに少しやつただけでできる領域を超えているわよ」

「そんな常識、私に通用すると思わないでよね！」

地面を蹴り、駆け出す愛。同じくまつすぐ向かってくる堀北が突き出す拳を、身を翻して躰すと空いた背中に蹴りを放つ。しかし堀北もギリギリのところで回避すると反撃を仕掛けてくる。

「ぐつ!？」

何度も戯れを繰り返したあと、腹に蹴りを入れて愛は堀北を壁に押し付けた。

「堀北ちゃん、もう降伏しなよ。私には勝てないから」

「……つ」

「気づいてたでしょ。ずっと弄ばれてるつて」

初めから疲れていた愛の方が不利だった。しかし、蓋を開ければ一方的な展開が続くばかり。

「これ以上の抵抗はやめて、私の言うことを聞いて。これ以上堀北ちゃんを傷つけたくないから」

「……それは本音かしら」

「さあね」

このまま抵抗を続けても、堀北に勝機がないのは目に見えている。であれば、一度降伏して、反撃のタイミングを窺えばいい。

愛が目的を達成するためには特別試験で勝つことが重要であり、Bクラスまでは押し上げてくれるだろう。

「……分かったわ。好きにすればいいじゃない」

「それでいいの」

愛が力を緩めて解放すると、堀北は力なく崩れ落ちた。

「なんでそこまでして抵抗するんだか……」

「今のあなたに言つても分からぬわよ」

「ふうん。ま、興味ないから聞こうとは思わないけど」

なんとか立ち上がった堀北だったが、ふらついて再び倒れそうになる。

「……さうね」

秋の冷たい風が肌を撫で、時の流れを感じる。互いに言葉を交わすことではなく、虫の鳴き声と堀北の荒い息遣いを耳に入れながら、来月の戦いに向けて脳を回転させるのだった。

* * *

「ただいま！」

「ただいま、じゃないわよ」

愛は自身の部屋には戻らず、堀北の部屋に上がり込んでいた。

「大丈夫、明日は休みだから」

「そういう問題ではないでしょう？」

「ＪＫなら無意味にお泊まり会するから確かにそういう問題ではない

ね

「はあ……」

諦めたように堀北はため息を漏らした。良くも悪くも愛は一度やると決めたら絶対に引かない性格だということを堀北は分かっている。意地を張つて言い返すだけ無駄なのである。

「着替えはどうするつもり？」

「持つてきてないよ。堀北ちゃん家にお邪魔しようと思つて出たわけじゃないからね」

「そうよね……」

堀北と激しく戦った上、その前には自主練に励んでいた。そのおかげで身に纏つている服は汗に濡れている。公園から戻つてくるまでの間に体は風で冷やされてしまつてはいるはずだ。さほど遠くないとはいえ、今の状態で冷たい風が吹く外を歩かせるわけにはいかなかつた。

「極めて遺憾だけれど、今日は私の服を貸してあげるわ」

「えっ、ほんと!?」

「本当だから、早く入つてきなさい」

「せつかくだし、一緒に入らない?」

「入るわけないじやない」

「堀北ちゃんが一緒にに入るつて言つてくれるまで入らないから」

「ほんと強情ね……」

またしても堀北が折れる形となり、二人で風呂に入ることになつた。

「やっぱり狭いじやない」

「私の部屋の湯船は広いからいけると思つたんだけどな……」

「大きさは変わらないわよ」

「私が小さいつて言いたいんだね！」

「別にそこまで言つてないわよ……」

一人で使うことを前提に作られた湯船では向かい合つて浸かることができなかつたので、愛が堀北に背を向けてもたれることで入ることに成功した。

「うんうん、座り心地は抜群だね。特に背中の辺りが」

「あなたの脳は時々思春期男子になるのね」

「違うよ。これは……憧れだね」

「それっぽくごまかしても無駄よ」

「胸大きくなつたでしょ」

「ストレートな表現もやめなさい」

途端に目を光らせ、堀北に向き直つて手を伸ばしてくる愛の手を抑える。

「私の成長分を奪うなんて……酷い！」

「この世には個人差という言葉があるのよ」

「やめて！ 現実を突きつけないで！」

風呂で暴れる愛を抑えながら、堀北はふと疑問に思つた。

「八遠さんはどうしてDクラスになつたのか心当たりはあるのかしら？」

「突然だね。……心当たりはないよ。私は私に正直になつていただけだし」

「櫛田さんと同じだと思つていたけれど……どうやら違うようね」

「櫛田ちゃん……？」

「いえ、こちらの話よ」

能力の傾向だけ見れば、愛と櫛田は同じようなタイプだと言える。欠点と言える欠点がなく、オールラウンダーな人。中学時代に起つた事件が櫛田がDクラスになつた大きな原因だ。

同じように愛にも櫛田と似たような過去があるのかもしれないが、愛と同じ学校だという生徒は現れていないし、そういう事件があつたという話も聞いたことがない。

「堀北ちゃんつてなんであの時間に外に出てたの？」

「少し風にあたりたかったのよ」

愛から問い合わせられ、堀北は答える。

「ほうほう、私が聞いてあげようじゃないか」

「あなたのせいで全て無駄になつたわよ」

「解决了ようで何よりだよ」

「解決自体はしていないわね」

実際、堀北はDクラスをAクラスに導く方法を模索しているのであって、自身がAクラスに上がる方法を探しているのではない。しばらくは愛の指示に従うことにはなるが、いずれ彼女の野望を打ち砕かなくてはならない。Aクラスが——特に坂柳が——一枚噛んでいることもあり、簡単にはいかなさそうである。

「私思つたんだけど、堀北ちゃんつてお姉ちゃんみたいだよね」「は？」

「私より背が高いし、結構文句言つてくるし。でもなんだかんだ言ってノリいい時もあるし」

「私はあなたみたいな妹は勘弁よ」

「そう言いながら本当は好感度高いやつだよ」「ありえないわね」

「あと胸が大きい」

「そういう発言は控えなさい」

「堀北ちゃんにしか言わないもんね」

「余計にタチが悪いわよ……早く体を洗いなさい」

やつぱりお姉ちゃんみたいと騒ぎ立てる愛に体を洗わせようとするが、愛の髪がかなり伸びていてことに気づいた。ポイントを使わない生活をしているのであれば、確かに美容院にもいけないだろう。

「八遠さん、かなり髪が伸びたわね」

「そりなんだよね。でも今までずっと短めだったし、伸ばすのもアリかなって。堀北ちゃんはバツサリ切ろうと思わないの？」

「別に思わないわ。この髪型は気に入っているもの」

「堀北ちゃんもイメチェンしたら？」

「そのうち、ね」

そこで会話が終わり、愛は黙々と髪を洗い始めた。堀北はその様子を見つめていたがやはり、愛の体はかなり鍛えられていると思った。無駄な脂肪がなく、引き締まっている。おそらく、テニスの試合に勝つためにトレーニングを積んでいるのだろう。

今まで才能だけで勝ち続けていたと思つていただけに、かなり意外

だつた。

「ん？ どうしたの？」

「何でもないわ」

たとえポイントでAクラスに上がるにしても、なるべく早くというのは悪手なのではないかと堀北は思った。仮に3年生になるタイミングでAクラスに移動したとしても、その後維持できなければその努力は無駄になる。

一方卒業直前であれば、逃げ切り濃厚のAクラスか逆転確定の他クラスに移動すればAクラスで卒業できる可能性が高くなる。

「八遠さん、背中を洗つてあげるわ」

「ありがとう、堀北ちゃん」

手のひらにボディーソープを出してもらい愛の背中に広げる。手を背中に滑らせると、体温が直に伝わってくる。

「終わつたわよ」

「ありがと」

洗い終わつた愛に変わつて、堀北は自身の髪を洗い始める。

「やつぱり堀北ちゃんの髪の毛つて長くない？」

「確かに長い方ではあるわね」

「洗うの大変じゃないの？」

「確かに大変だけれど、ずっとこの髪型だからもう慣れたわよ」

「すごいなあ。私だったらすぐに切りに行くもん」

確かに堀北にもそういう時期はあつた。けれども、切るわけにはいかない理由があつた。そうして長く伸びた髪と付き合つているうちにすっかり慣れてしまつたのだ。

「最初はあまり好きではなくても長く関わり合つていくことで意外と好きになる、そういうものよ」

「そういうもののなんだ」

その後、同じように堀北の背中を洗つた愛が前も洗うと言い出したのを全力で止めた後、最初と同じ体勢でしばらく浸かつた後風呂を出た。

「やつぱり少し大きいわね」

「でも堀北ちゃんのいい匂いがする」

「恥ずかしいからやめなさい」

手が袖から出切つていないし、丈も合っていない。しかし、いつもと違う匂いが全身を包み込むのは案外面白いと愛は思った。

「じゃあ堀北ちゃん、早速お願ひがあるんだけど」

「……何かしら」

「お腹が空いたから堀北ちゃんの手料理が食べたいな。あ、逆らつちやダメだからね」

「お願いとは名ばかりね……」

「そういう話だから」

あまり乗り気ではなさそうではあつたが、出てきた料理は意外にも本格的だつた。

「簡単なものだけれど」

「私から見たら十分豪華だよ！」

「0円のものだけで作つたものよりは豪華になつてもおかしくないわね」

「流石に高いものを要求したら私も罪悪感を感じるからね」「あら、あなたにそんな感情があるだなんて意外ね」

「あるし！ 私を何だと思ってるんだ！」

そんな軽口を叩きながら、堀北が作つた料理に箸をつける。

「美味しい」

「よかつたわ」

「毎食作つて欲しいくらいだね」

「あなたの罪悪感とやらはどこへ行つたのかしら？」

「それ位美味しいってことだから」

当然ではあるが、学食の山菜定食を食べ慣れている愛からすれば普通の食事ですら美味しいと感じてしまう。流石の愛でも本能には抗えなかつた。

「それじやあ、堀北ちゃんにやつてもらいたいことだけ伝えておこうかな」

「それはAクラスに上がるために、ということかしら」

「そういうこと。私がAクラスに上がりたいっていうのもあるけど、クラスとして上に上がっていくためにも必要なことだと思うから頑張つて」

堀北にはDクラスをまとめるリーダーを務めてもらうこと。特に須藤に関しては注意してもらうこと。それから綾小路の動きを報告すること。

「なぜ綾小路くんのかしら？」

「綾小路くんが何をしだすかわからないからね。堀北ちゃんも感覚でわかってるかもしれないけど、彼の実力は私にも未知数だからね。今のところ私の邪魔をできるのは綾小路くんだけだと思つてる。お互に不用意に干渉しないようにしようねって話はしてるんだけど、保険の意味も込めてね」

「……理あるわね。わかつたわ。メールで報告すればいいのね？」

「その通り。でも履歴とかはちゃんと消しておいてね。他の人にバレたくないから。あとということ聞かなかつたらさつきみたいに痛い目を見る事になるからね」

「そこまで言わなくてやるわよ」

「そう思つてたら思いつきり裏切られたから今こんなことになつてるんだけどね」

「……」

兎にも角にも、脳内で次の特別試験のシミュレーションが出来たとしてもイレギュラーな動きがあればやり方を変えざるを得なくなるかも知れない。危険なのは綾小路だけではないが、今のところ最も監視しやすいのが綾小路だというだけである。龍園も同じように観察したいが、今の独裁状態では付け入る余地がない。

「他に指示はないのね？」

「これから指示は次の特別試験が始まつてから。まだ内容が明かされていない以上、どうすることもできないからね」

「分かったわ」

「もしかしたら堀北ちゃんも一緒にAクラスに上がるかもしれないから頑張つてね」

「クラスポイントで一緒に上がれるといいわね」

「つれないなあ」

今こうして反抗している堀北はいつまで見られるのかわからないが、なるべく早く従順にしなければならないと改めて決心した。

「じゃあそろそろ寝よっか」

「そうね」

皿洗いを済ませ、ベッドに入る。どちらかがソファーで寝るわけでもなく、二人で一つのベッドを使う。

「狭くないかしら……？」

「大丈夫、船で慣れてるから」

「毎晩私の布団に潜り込んできたものね」

「私の本能が堀北ちゃんを欲して仕方がなかつたらしい」

「悪巧みをしたような表情で布団に入つてくるあなたなら見たわよ」

「なぜバレた……？」

「そういうことは案外バレるものよ。学校でもそうだつたでしよう？」

確かに、小学校での悪戯は見つかりやすい傾向にあつた。やることが子供だからだろう。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

そうして、二人は眠りへと落ちていった。

11月

学生の悪夢が襲いくるRTA、はーじまーるよー。

今回は6巻のメイン、ペーパーシャツフル試験です。綾小路が幸村と三宅、長谷部、佐倉と清隆グループを結成する大事な時期となつていますが、おそらく今回はそんなイベントは一切発生しません。（慈悲）

体育祭で全力を出していよいよに注目を集めわけがないですからね、仕方ない。むしろ綾小路としては願つたり叶つたりなのでは？

そして、愛ちゃんとペアを組む相手が誰なのかも注目点です。今後に大きな影響を与えるからですね。

あれ？ ペーパーシャツフル試験ってどんな試験だつたつけという兄貴もいると思うので、私が簡単に説明して差し上げましょ。

まず最初に小テストを行い、その結果によってクラス内で二人一組のペアを結成します。そしてその後の本試験での二人の合計点を競うというものです。そしてこの試験ではどれか1科目でも2人の合計点が60点以下になる、または2人の全科目の合計点がボーダーを下回ると退学となります。まあ入試の合格ラインのようなものですね。

愛ちゃんほどの学力があればボーダーなんて、無いも同然ですからね。

更に、この試験ではテスト問題を自作し、他のクラスに出題するというかなり大変な試験となっています。その数400問！ 8科目あるので、1科目あたり50問ですね！ いくら作問が面倒くさいからって、生徒の負担大きすぎじゃないですかねクオレハ……。私が愛ちゃんの立場だつたらブラック企業の上司みたくクラスメイトに指示を出しまくつてサボりますね。

え？ お前にそんなコミュ力ないだろつて？ うるせえブドウジユース浴びせるぞ。

説明はこれくらいにして現在の状況を説明しますと、事前に行われ

た小テストの返却中ですね。ここで先程私が行つた特別試験の説明と試験に挑むペアが確定します。場合によつては駒にできるのでかなり重要なポイントです。ちなみに綾小路は佐藤とペアを組んでいましたね。

というか読者兄貴たちは佐藤のこと覚えていらっしゃるですか？ 体育祭での綾小路の走りに惹かれており、佐藤ルートを一瞬匂わせていたけれども結局何もなかつた子です。まあ苗字が佐藤でパツとしないのでも忘れていても仕方がないのですがね。本RTAでは綾小路は体育祭で真面目に走つていないので、好意を抱くことすらなくフェードアウトしていくと思います。船上試験で名前だけの友情出演をしていた子でも1年経つて出番をもらつているのに、この扱いの差は何でしょうか。悲しいなあ（他人事）

そんな佐藤のことは置いておいて、愛ちゃんの相手について少しだけお話ししておきます。

愛ちゃんの成績はトップなので（確定事項）、ペアは須藤と山内、池の3バカの誰かである可能性が最も高く、次点で井の頭です。井の頭は一巻の最初で一番最初に自己紹介させられていた子です。臆病な性格なのに最初に自己紹介をさせるなんて鬼！ 悪魔！ ちひろ！

3バカの頭脳はDクラスの中でも頭ひとつ抜けており、愛ちゃんの相手はこの中から選ばれる可能性が非常に高いです。

この中で一番の当たリは須藤です。堀北に彼の教育をお願いしていますが、ペアになることで自然な流れで愛ちゃんが関わることができます。須藤じやなかつた時も接触しろよつて思うかもしれませんが、そんな時間はありません。愛ちゃんがいくら天才でも分身はできませんからね、仕方ない。

次点で池ですね。池の行動基準は極めて単純なので、非常に扱いやすいからです。そして一番事故率が低いです。

山内はハズレです。正直愛ちゃんが教育するのが無駄なくらいどうしようもないです。間違いなく3バカの中で一番馬鹿なのは山内であり、しかも矯正しようとする3月に退学処分となるので愛ちゃん

んの努力が全て水の泡になってしまいます。まあ今後のことを考えなくていいという点では捨て駒としては便利かもしませんが……。本音を言つてしまえば、3人ともいらないのですけどね。偉い人が言つていました。やる気のある無能は殺せ、と。わかりやすいのがAクラスの戸塚ですよね。あれほど見事にやる気のある無能を体現した人はいないですよ。逸材です。

堀北ちゃんはやる気のある有能とやる気のある無能の間くらいだと思います。これから成長に期待ですね。

さて、ペア発表の時間になつたので話を戻します。山内以外山内以外山内以外山内以外……。

いや山内かくい!!

おつかしいなあ、原作では成績が一番悪かつたのが須藤だったのてつきり須藤と組むのかと思ったのですが……。ですが原作同様堀北須藤ペアには変わり無いようなので大丈夫でしょう。綾小路も変わらず佐藤のようです。これが主人公補正つてやつか……。

運悪く山内を引いてしまつたので、とりあえず退学にならない程度に勉強を教えてあとは捨て駒として使うことにしましょう。

今回の試験では櫛田絡みのことを中心に進んでいくので、愛ちゃんは深くまで踏み込めません。まあ堀北にそれっぽくアドバイスをしておいて、櫛田を警戒してくれるように誘導はしておいた方がいいかもしれませんね。櫛田絡みのことは極力原作と変わらないように気

をつけてはいるのでおそらく大丈夫だとは思うのですが。

というわけで、愛ちゃんの今回の立ち回りは勉強会の主導と問題の作成ですかね。それに加えて、今回は時間に余裕があるのでBクラスにコネを作つておきたいと思います。2月や2年生に向けてという点もありますが、一番は一之瀬を利用するためです。悲しいことに一之瀬はあまりにもお人好しすぎるるので、利用するにはもつてこいなんですね。

ただ、残念ながら原作ほどの関係まで持つていくのは厳しいと思います。時期が遅すぎたのが悪い。

では早速、勉強会を始めます。テスト本番まで時間があるとはいえ、3バカの学力にはあまりにも問題があります。

メンバーは愛ちゃん、堀北、3バカに加えてアテのない綾小路というメンバーです。あとは平田たちと合同勉強会をやつたりやらなかつたりという感じです。

堀北が今日は数学にしないかと提案してきたので、これを了承します。国語や社会は最悪テスト直前に暗記すればある程度点は取れる一方数学は小学校の頃からの積み重ねで成り立つてるので、これは妥当な判断と言えますね。

以前のテストでの状況も踏まえて3バカに中学生レベルの問題を解かせましたが……。これは酷いですね。幼稚園からやり直した方がいいと思います。（辛辣）

池は多少成長が見られましたが、他の二人に至っては未だに連立方程式を解けていないです。あれ、確か6月のテストの時も連立方程式解けないとか言つていませんでした……？

これには愛ちゃんと堀北も揃つて頭を抱えています。同情せざるを得ません。

速度の定番『はじき』すら覚えていないようなので、基礎の基礎から教えることにしました。堀北が。愛ちゃんは池用に別で問題を作つて解かせています。池は流石にそのレベルは大丈夫でした。円周率を知つていることを須藤と山内に自慢していましたが、何もすぐねえぞそれ。3・14じゃマウント取つたつて言わないからな。

3・14159265358979323846……くらいまでは

言えるようになつてから出直してきてください。あ、ちなみに私はまだ言えますからね。時間だけはあつたので。（醜い争い）

なるほど、池は因数分解ができないようなのでそこから教えます。私は1次関数からだと思っていましたが。兄貴たちも因数分解程度は流石に分かりますよね？

このように、勉強会では何を教えるかをこちらで選択することになります。ここで選択を失敗すると退学者が発生する可能性がありますし、最悪愛ちゃんが退学してしまうかもしれません。（3敗）

教える内容を選択したらあとは見ていくだけなので、その間にBクラスについて少しお話ししておきますね。

原作では須藤の暴力事件の時から続く協定があり、良好な関係が築けていました。しかし、今のところBクラス絡みのイベントはかなりスルーしているので、現状だと敵です。その代わりAクラスとはいい関係なのですが。こらそこ、ズブズブな関係とかいうんじゃない。

ではなぜBクラスとの関係にこだわるのか、ということなのです。が、兄貴は9巻の内容を覚えていりますでしょうか。そう、坂柳による一之瀬いじめの回です。

この回では、Bクラスのリーダーである一之瀬を精神的に追い詰めてBクラスを崩壊させようとしたのですが、結局綾小路が解決していました。私が何度も試走した結果、AクラスとBクラスの差がいくらあっても坂柳は一之瀬潰しを行つていました。

BクラスとDクラスの関係がよくないと綾小路が一之瀬を助けられず、一之瀬は退学してしまいます。これが後々大きな影響を及ぼすことになるので、なんとしてでもBクラスとの関係は築かなければなりません。そして一之瀬をうまいこと使つてあげよう、という魂胆です。救いなのは、クラスぐるみで仲良くする必要はないということです。愛ちゃんや綾小路が一之瀬との関係が良好であれば9巻は乗り切れますし、Bクラス全体を動かすことはできますからね。

ここで大事なのが綾小路の一之瀬に対する評価なわけですが、この時彼は一之瀬を助ける以外にも櫛田が持つている情報の質も確かめ

ていました。つまるところ、そこまで高くなくもいい、ということです。むしろBクラスのリーダーという時点でそこそこの評価は受けているはずなので、軽く接点を作つてやれば綾小路は動いてくれます。

一之瀬のことを道具としてしか見てない綾小路、酷すぎやしないですか？（他人事）

今回のペーパーシャツフル試験の組み合わせはAクラス対Bクラス、Cクラス対DクラスなのでBクラスは敵ではありません。距離を詰めるなら今のうち、というわけです。

無人島試験では、全く接点のなかつたDクラスに自分たちの工夫を快く教えてくれましたし、今回もいけます。

オツスオツス、一之瀬ネキiriゆ？

ちーつす、話すのは無人島試験以来っすかね？

あのお、お願ひなんですが、一緒に勉強会しません？ 別のクラスの人たちと一緒に勉強すれば集中力上がると思うんですけどお、どうつすかねえ？（物理的上目遣い）

……はい、アポが取れました。BクラスとDクラスは原作と違つて交流があまりないのでそれを逆手に取つた感じですね。あまり仲良くなれない人と一緒に勉強すると、話すこともないし集中せざるを得ないよねつてことです。

これでDクラスとBクラスの平均点が上昇するのでWin-Winですね。その分Aクラスには頑張つてもらわないといけませんが。試験まであと3週間ですので週1回、つまり3回行います。なんかクラスとしてやろうぜっていう話になつたので、いくつかのグループに分かれて、それぞれの場所で行うことになりました。

何度も言うように一之瀬はお人好しなので、こうなるのは必然とも言えますけどね。

では、今月やることをあらかた説明したところ試験終了まで時間を飛ばします。勉強しているところを見続けるの、楽しくないつしょ。はい、無事に勝利しました。これでCクラスから100クラスポイントを獲得し、更にAクラスとBクラスの対決はAクラスに軍配が上

がつたので、一気にBクラスにジャンプアップしたということになります。

ここで各クラスのクラスポイントの変動を体育祭時点から確認しておきましょう。

Aクラス：1174ポイント→1024ポイント→1124ポイント（Aクラス維持）

Bクラス：742ポイント→692ポイント→592ポイント（Cクラスへ）

Cクラス：687ポイント→587ポイント→487ポイント（Dクラスへ）

Dクラス：601ポイント→551ポイント→651ポイント（Bクラスへ）

現時点で、Aクラスとのポイント差は473ポイント。学年末試験の直接対決でおそらく負ける上、部活でのクラスポイント横流しがあるのではまだ大丈夫だと思いますが、今まで通りに行くともしかしたら危ないかもしれません。差が200ポイント以内になつたら対策を講じなければなりませんね。

まあそれはその時の私に丸投げしておきましょう。（現実逃避）では、今回獲得したポイントを整理しておきます。

クラスポイントが551ポイントなので55100ポイント。坂柳からは3万×35人で105万ポイント。テスト満点報酬で10000ポイント。

合計で1115100ポイントですね。累計では628万2100ポイントで、進捗は31.4105%です。では、次回もよろしくオナシャス！

11月 裏話

「寒くなってきたなあ……」

11月に入ると、突き刺すような冷たい風の存在感が大きくなつてくる。登校中に上着を羽織つたりマフラーをしたりする生徒が目立ち始める中、当然のように愛は冬用の制服のみである。

「そうね。もう11月だもの」

「うへえ、ここからさらに寒くなると思うと気が滅入っちゃうよ」「八遠さん、寒いのが苦手なのかしら？」

「ちよつとだけね。毎年体中にカイロを貼り付けて、こたつに潜り込んで乗り切つてきたけど、しばらくはできそうにないしなあ」

それはちよつとどころではないのではと堀北は思ったが、口には出さなかつた。

「にしてもどうしようかなあ」

「ペアのことよね」

「そうそう。まさか山内くんとは思わなかつたよ」

愛も堀北も成績は上位——愛は常に首位——なので、須藤ら3バカの誰かになることはほぼ必然と言える状況ではあつたが、それを加味しても愛は山内がペアということに頭を悩ませているようだつた。

「山内くんつてあんまり評判良くないじやん?」

「それはそうね。池くんや須藤くんは改善の兆しが見えてるけれど、山内くんはそれが見られないもの」

残念なことに山内は少しばかり空気を読むことが苦手な生徒だった。須藤は堀北の努力に加え、もともとバスケには熱心だったことから変わり始めている。池は同じクラスの篠原のことが気になつていいらしく、こちらも状況は好転しつつあつた。

「けれど、ペアになつた以上少なくともこの試験中は向き合わなきといけないわよ」

「わかってるよ。わかってるけどなあ」

この後も山内が改善することもなく、3月には退学してしまうことを見ついている以上、愛からすれば山内に対してもこうするというこ

とにあまり前向きではなかつたのだ。

「まあいつもみたく勉強会すれば多分なんとかなるつて」

「それが妥当ね。例の3人を呼べばいいのよね？」

「そゆこと。あと綾小路くんも暇そうにしてるだろうし呼んであげてよ」

「……そうね」

綾小路は相変わらず3バカと会話している姿を見かけるが、それ以外の人と話しているところはあまり見ていない。3バカを集めたらいよいよ綾小路の会話の相手がいなくなってしまう。

「まあ、退学にならないようにだけしてあとはほどほどに頑張りますかね」

「ここで勝てばBクラスにジャンプアップできるかもしないのだから、あなたは取れるだけ取りなさい」

「大丈夫だつて。元から全教科満点のつもりだから」

「……」

自信満々にそう言つて、本当に満点を取つてしまつところが愛の恐ろしいところだ。勉強に絶対の自信を持つてゐる堀北だが、愛には勝てないのでないかと思い始めていた。

「まあ任せときなつて。勝つ確率上げる方法はあるから」

一人だけ最終目的が違う愛が本当にそんな作戦を実行するのだろうかと思つたが、堀北はそれを口にはしなかつた。

* * *

放課後、堀北が愛に連れられてやつてきたのはBクラスの教室だった。

ここに秘策があるのだろうかと疑問符を浮かべる堀北をよそに、愛はBクラスの生徒に話しかけていた。少なくとも、昨日の状況を思い返すほど試験本番が不安になるのは確かだつた。須藤と山内の学力が中学生レベルですら怪しいなどと分かれば、そう思うのは仕方ないだろう。

先が思いやられため息をこぼしていると、前方から快活な声が耳に入る。

「あれ、八遠さんと堀北さん？」

愛が探していた人というのが、目の前にいる一之瀬だつた。

「一之瀬さん、今ちよつと時間ある？」

「うん、全然大丈夫だよ」

そう言うと、愛は一之瀬を連れて屋上の方へ歩き出したので、堀北もついていく。

屋上につながる扉の前まで来ると、愛は足を止めた。

「ここなら人が来ないから大丈夫かな？」

「それで、私に用つてなにかな？」

「BクラスとDクラスで、合同の勉強会を開けないかなつて思つて」「どうしてかな？」

現状として、クラス内でグループが出来始めクラスごとで勉強会が始まっている。そんな中わざわざ合同で勉強会をする意味に堀北は疑問を抱いた。直接対決はしないとはいえ、互いに敵対関係であることをには違いないからだ。

「一之瀬さんもわかつてるとと思うけど、この試験の結果は今まで以上に重要で一番形に見えるつていうのはわかつてるよね？」

「あはは……、そうだね」

愛が言う通り、BクラスからDクラスがおよそ150ポイント以内にひしめき合っているために、今回の試験のあとクラスに入れ替わる可能性がとても高い。

「特に、一之瀬さん達BクラスはAクラスに負ければ即Cクラス落ち。なんとしても避けたいのは事実だよね」

「うん。だからみんな、今まで以上に必死に頑張つてる」

「私たちは勝てばCクラス、一之瀬さんたち次第ではBクラスに上がることだつてできる。だから負けるわけにはいかないんだよね」

当然今まで試験に真剣に取り組んでいたのは事実だが、クラスの昇格や降格を目の当たりにして今まで以上に頑張らなければならぬ状況に置かれている。

「そこで、合同勉強会につながるつてわけ。普段あまり関わりのない人たちと同じ勉強会に参加することで集中力を上げると、対決はないけど入れ替わるかもしれない状況下にある現状を逆手にとつて、モチベーションアップにつなげる。これが狙いだよ」

確かに、愛の説明は理にならなかった。今回の試験の対戦の構図、それぞれのクラスが置かれている現状、そこからくる対抗心を利用する。しかし――。

「八遠さん、それは良いけれど私たちがBクラスに上がる可能性を狭めていないかしら？」

「そう言いたい気持ちはわかるけど、そんなに急ぐ必要はないと思うよ。それに、Bクラスが勝てばAクラスとの差も縮まるし、Bクラスが勝つても利益はあるよ」

「言われてみればそうね……」

この合同勉強会に、愛の一人勝ちを早めてしまう要素があるのではないかと堀北は思ったが、勝った時の見返りが大きすぎる今回の試験で合同勉強会をしない手はなくなっていた。

「その話は平田くんにしてあるのかな？」

「もちろん。快く賛成してくれたよ。だからあとはBクラスの賛成待ちつてところかな」「その話を持つててくれたのはありがたいけど、なんで私たちなのかな？」

「なんで、つて？」

「Aクラスでも良かつたんじゃないかなって。八遠さんはAクラスと仲が良さそудだし、でもDクラスの大半がそうじやないよね。交渉するならそつちの方が良かつたんじゃないかなって」

愛が坂柳と親しげにしているのは有名な話であり、何より噂ではあるが愛が手に入れたクラスポイントがAクラスに流れているのではないか、と言う話もある。堀北はそれが事実だと知っているが、あまり接点がないBクラスの一之瀬が事実かわからないのは当然と言つてもいい。しかし踏みどまらせるのには十分だつた。

「それも考えたけど、AクラスとDクラスの組み合わせは危険すぎる

んだよね。Aクラス側がどう思つてゐるのかは知らないけど、例の噂が
流れてからAクラスへの印象はあまり良くないみたいだから。それで面倒ことが増えて困るだけだからね。それなら変な噂も何もないBクラスの方が都合が良かつただけだよ」

「なるほどね。わかつた、その案に乗るよ」

こうして、DクラスBクラス合同勉強会の開催が決定したのだった。

結果から言うと、合同勉強会は成功だつた。全3回のうち1回目が終わつただけではあつたが、それぞれが集中して取り組めていたように思えた。

場所の確保という問題は、クラスを3つに分けることによつて解決した。更に、こうすることによつてグループをローテーションすることで3週間の間同じだけの効果が期待できる。茶柱や星之宮に掛け合つて、教室を一つ借りれば準備は整つた。

愛と堀北が教えていた3バカに関しては、前日に勉強する分野を指定し、分からなかつたところを後日解説するという方法を取つた。

しかし、堀北は不満だつた。当然、勉強会にはない。

「ねえ八遠さん」

「……なに?」

「なに? ではないわよ。私が言いたいことわかるでしょ?」

「まあ、うん。わかるけど」

堀北は納得がいかなかつた。愛が主導して企画したはずの合同勉強会が堀北の手柄にすり替わつていたのだから。

無人島試験の時と全く同じである。

「おかげでBクラスの人たちからも余計な感謝をされてしまつたわ」「感謝に余計なんてないぞ、堀北くん」

「私は何もしていないので、これは余計よ」

身に覚えのない感謝をされたところで、困惑するだけだ。なぜ感謝

されているか分からぬのだから当然だ。

「だつて堀北ちゃん、クラス内の地位が欲しいんでしょ？ だつたらちよど良くない？」

前回の体育祭での失敗を取り戻すためにも、堀北は一定の成果を上げなければならぬということは事実だつた。

「けれど、こんな形では欲しくなかつたわ」

「まあまあ、そんな贅沢は言わないでつて。これで発言もしやすくなると思うから」

堀北は頭を抱えた。話が何一つ通じていない。しかし、今から抗議したところでこの問題が解決できるはずもなかつた。愛はしつかり、平田や一之瀬にも堀北がやつたことにしてくれと頼み込んでいたのだから。

いくら頑張つても、あの二人の発言力には抗えるわけがない。急に色んな人から話しかけられても、対話の苦手な堀北には一苦労だが、慣れていくしかないと諦めた。

「なあ、あの勉強会つて堀北が中心になつたつて本当か？」

「ええ、そう――」

「ううん、私が考えたの」

隣の席の綾小路が、登校して一番にそう尋ねたため、堀北は定型文で返そうとしたところ愛に遮られた。しかも、事実を口にしたので堀北は余計に驚いた。

「そうなのか？ 平田から堀北が企画したと聞いたんだが」

「あれは嘘。手柄を堀北ちゃんにあげたんだよ。黙つていてもバレそうだつたしね。それに、無人島試験の時には綾小路くんも同じことしてたし」

「それはそうだが……」

「それに、綾小路くんなら言わないでしょ？」

愛と綾小路はお互に邪魔をしないと取り決めをしている。だから愛は綾小路には伝えてもいいか、と思つたのだ。

「そうだな」

それきり、この場で綾小路はそのことに追及することはなかつた。

「ちなみに、堀北ちゃんは勉強会で何をしてたの？」

「主に問題作成ね。かなりの量だから苦労しているけれどね」

「結構余裕そうじやん。ちゃんと高得点は取れるのかな？」

「当たり前よ。そんなことで点数を落とすような勉強をしたことはないもの」

「まあ、私に勝てるかつて言われたら別の話だけどね」

「……」

余裕 そうな笑みを浮かべる愛を堀北は睨みつけた。しかし、実際に今まで勝てた試しはない。満点以外を取つたことがないのだから、引き分けが限界だ。

「まあ、退学にならないように頑張つて。堀北ちゃんに退学されたら困るからね」

「……八遠さんもよ」

「おつ!? 堀北ちゃんが『デレた! 綾小路くん、堀北ちゃんが遂に『デレ』——いたあああああああああつ!』

いつかの綾小路のように、コンパスの針を突き立てられた愛の絶叫がDクラスの教室に響き渡つた。

「八遠、ちょっといいか」

昼休み、山菜を求めて食堂へ向かおうとしたところ、綾小路に声をかけられた。

「どうしたの?」

「少し話をしたいと思つてな」

「ふうん? 綾小路くんからそうやつて声をかけてくるなんて珍しいね」

6月に不干涉の約束をしてから、二人で話すのは久々だ。

「せつかだし、食堂で食べながら話そうよ」

「堀北はいいのか?」

「堀北ちゃん、今日は弁当つて言つてたから。それにいつも一緒にい

たら落ち着かないでしょ？」

「そうだな」

愛の言葉に、綾小路は同意した。

「まだ山菜定食を食べているのか？」

「もちろん。目標を達成するためには外せないからね」

「随分とストイックだな」

「そうかなあ？ 舌が慣れてきたからか分からないうけど、最近は普通に美味しいなあって思い始めてきたから、そんなに苦痛じやないよ」「……そういうものなのか」

「そういうものだよ」

食堂につき、同じように食べにきた生徒の列に並び、順番を待つ。しばらくして、愛の番がくると——注文すらしていないのにも関わらず愛の目の前に山菜定食が現れた。

「は？」

その光景に綾小路は思わず驚いた。ポーカーフェイスが一瞬崩れかけるほどには驚いた。

「夏休み明けくらいからこうなつたんだよね……」

「多分、厨房から列に並んだ私を見つけて『山菜の子が来たぞ』って報告が入つて、私がここにくる頃には出せるような状態になるよう準備しているんだと思う」

「有名人だな……」

「あんまりうれしくはないんだけどね……」

相変わらずの山菜定食を受け取った愛は、綾小路に席取つておくねと一声かけて去つていった。

「お客様、注文は？」

「あ、ヒレカツ定食でお願いします」

「ヒレカツ定食1つ！」

山菜定食の味は少し気になるところではあるが、注文しようという気は綾小路には起きなかつた。

「綾小路くん、ここー！」

揚げたてと思われるヒレカツ定食を受け取り、愛が消えていった方

へ向かうと綾小路を見つけた愛が手を振つて綾小路を呼んでいた。

「ヒレカツ定食かあ、美味しいそうだね」

「いるか？」

「ううん、大丈夫」

愛は堪えた。時々堀北お手製の夜ご飯を食べているとはいえ、食堂の有料ご飯を食べてしまつたら戻つて来れなくなると思った。山菜定食ですら美味しく感じる今の愛の舌にヒレカツ定食を与えたなら、美味しさのあまり狂つてしまふのではないかと思つた。

「結局山菜定食つて美味しいのか？」

「んー、わかんない。私は美味しいと思うけど、普通の人が食べたら不味いって思うんじゃない？　でも、最近はよもぎの天ぷらとかたまに見るようになつたよ。あれは普通に美味しいと思う。ソースでもいいんだけど、個人的には塩が一番合う。あとは——」「わかつたわかつた

山菜定食トークが止まらなくなると悟つた綾小路はその話を途中で止めた。

「ごめん、本題とは全然関係なかつたよね」

「その話はまた今度に聞くことにする。八遠に聞きたかつたのは、合同勉強会のことだ」

「勉強会？」

「ああ」

ヒレカツと白米を口に運び、飲み込んだところで綾小路は口を開いた。

「あの勉強会の意味はなんだ？」

「意味？」

「そうだ」

「意味つて言わなかつたつけ？　集中力とモチベーションアップのためつて」

「それは表向きの理由だろう。それだけならDクラス内だけでもできるはずだ。実際、この前の期末試験はいつも通りに勉強会をしたがみんな真面目に取り組んでいたと思う」

実際のところ、無人島試験、船上試験を経て試験に対しても面目に取り組んでいる生徒がほとんどだ。今回の試験も区分上は試験なのだから、今まで通りの勉強会でも十分に効果は期待できると考えていた。

「それなのに、お前はBクラスとの合同勉強会を選んだ。その理由はなんだ？」

「……綾小路くん、鋭いね。さつき刺されたコンパスの針よりも鋭いよ」

「話を逸らさないでもらえるか？」

「Bクラスにコネを作つておく必要があつたんだよ」

「Bクラス、というよりも一之瀬か」

「うん。最近一之瀬さんに関してあまり良くない噂を聞いたからね」「よくない噂？」

「実は犯罪歴があるんじゃないかなってね」

「あの一之瀬がか？」

一之瀬といえば善性の塊でお人好し。犯罪というものは対極に位置しているのでは、と綾小路は思った。しかし、そういう人間が闇の一面を抱えているというケースが少くないのもまた事実。

「噂だし、確かじやないんだけどね」

「それとお前が一之瀬に接触することになんの関係がある？」

「一之瀬さんが退学してしまう……そんな可能性があるんじゃないかなって」

「退学だと？ 話が飛躍しすぎて理解が追いつかないんだが」

「噂は真実だろうが嘘だろうが、本人に大きな影響を与えることになる。いくらメンタルが強そうな一之瀬さんでも、犯罪者扱いされたら堪えるんじゃないかなって思う」

「納得がいかないな。一之瀬のクラスメイトなら助けようとすると思うが」

「私はそうは思わないけどね」

一之瀬はクラスメイトを不安にさせないようにと強がつて一人で抱え込んでしまう人間だ。当然、Bクラスの生徒では役に立てない。

一度口に出してしまえば楽になるケースも多いので、原作の綾小路がやつたように強引に話させる必要がある。

「とにかく、それで一之瀬を助けようつてことか？」

「そういうこと。退学されたら困るしね」

「一之瀬は優秀だからな」

「その通り」

愛としては来年以降の学年単位での争いに向けて、一之瀬は確保しておきたいのだ。

「八遠、今お前が矛盾したことを話していることに気づいているか？」
「そんなの知ってる。けど、これは必要なことなんだよ。というか、綾小路くんもなんとなくわかるでしょ。南雲先輩が生徒会長になつたことで起こる変化に」

「まあな」

須藤の暴力事件や体育祭での激走がないとはいえ、学がその足で1年生の無人島試験や船上試験を視察しに来たことや入学試験での全教科50点という不気味な結果さえあれば、綾小路の能力を高く買つてもおかしくない。

「とにかく、一之瀬さんは今後のためにも欠かせないから退学だけは避けなきやいけない。もちろん、綾小路くんも協力してくれるよね？」

「分かつている」

6月に取り決めた約束は所詮口約束でしかないと、綾小路からすればいつでも破ることができる状況にはある。しかし、軽井沢や櫛田のことなど、対応しなければいけないことが山積みのため、愛を敵に回すことは適切ではないと判断した。

「綾小路くんつて、私がやろうとしてることに賛成？ それとも反対？」

「お世辞にも賛成とは言えないな。オレも堀北と同じようにクラスポイントを集めてAクラスを目指さなければならぬ状況にあるからな」

「堀北ちゃんのお助けマンみたいな感じ？」

「そういうことにしておいてくれ」

「じゃあそういうことにしとく」

できれば2年生に進級するまでにAクラスに移籍したかつた愛だつたが、現時点で500万ポイントしか貯まっておらず絶望的だつた。下級生が入学する半年後を思い浮かべ、愛はため息を吐いた。

師走の時期が迫つてきたある朝。Dクラスの教室は異様な空気に包まれていた。

「なあ、俺たちDクラスを脱出できるのか？」

「できるつて！ Cクラスなんかに負けるわけねえだろ!?」

「うんうん、3人とも珍しく真面目に頑張つてたからね」

池、須藤、山内の3バカと愛は、堀北を囮むようにして集まつていた。クラス変動の可能性が大いにあるとだけあつて落ち着かない様子で、それは堀北も同じのようであつた。

事実、Aクラスを最も渴望しているのはこの堀北と言つても過言ではない。

「おいお前ら、席につけ」

そんな喧騒の中でも、茶柱の声はよく響いた。各々の席に座ると、早速声を上げたのはやはり池であつた。

「センセー、テストの結果つて今日発表ですよねー？」

「ああ。今から発表する」

「俺たち、昇格できますか？」

「まあ落ち着け池。それも今から発表する」

前方の黒板にテストの成績と退学者、そして勝敗が掲示される。

一番上には、指定席だと言わんばかりに八遠愛の名前がある。

「成績は自分で見てくれ。それに退学者はなしだ。ここまででいまだに退学者が0のDクラスは初めてだ」

「それ本当ですか!?」

「ああ」

確かにいつもの問題よりは少し難しかった、というのが愛の感想だつた。今回はCクラスが相手だつたから良かつたかもしれないが、AクラスやBクラスを相手にしていたら退学者が出ていた可能性があつた。

「そして、DクラスはCクラスの成績を上回つた」

「僕たちの勝ちつてことですよね？ 先生」

「ああ、そうだ平田。良かつたな、Dクラス脱却だぞ」

DクラスがCクラスに勝利したことによつて、Dクラスは100クラスポイントを追加し、一方のCクラスは100クラスポイント引かれる。差は36ポイントしかなかつたので、茶柱のいう通りDクラスを脱却したことになる。

「更に、Aクラス対BクラスはAクラスの勝利となつた。これにより、DクラスはこれよりBクラスとなる」

「うおおおおおつ！ 僕たちすげえじやん！」

「ああ、今までDクラスからBクラスにまで上り詰めた代は一度たりともなかつた。これは誇れることだ」

熱狂するDクラス——Bクラスであつたが、堀北は冷静だつた。

今回Bクラスに昇格できたことは喜ぶべきだが、Bクラスとは60ポイントしか差がない。それに加えて目標のAクラスまでは500ポイント近い開きがある。まだまだ気を抜けないと思つた。

「だが、ここで気を抜けば再びDクラスに転落する可能性もある。浮かれて いると掬われるぞ」

「分かつてますつて。でも俺たちならAクラスも夢じやない！ そうだよな、平田！」

「そうだね。今の調子なら十分狙えると思うよ」

入学して約半年でここまで巻き返したのだから、そう思うのは当然のことだ。

しかし愛はそんな彼らを軽蔑の目で見つめていた。

八遠愛という人物を、綾小路はいまだに把握できなかった。

無人島試験の時には、綾小路が考えていた作戦を見透かしたかのような動きを取り。直後の船上試験では、図つたかのようなタイミングでグループ分けの法則に至った。自身が正解で間違いという可能性を全く考えていない日だった。

——綾小路くん、ちゃんと足下は注視したほうがいいですよ。

体育祭の後、坂柳はそう忠告した。足下——つまり綾小路に近いところに気をつけろということだった。真っ先に浮かんだのは愛の顔だつた。

その中での、今回の動き。堀北の発案だと聞いた時は成長を感じた。しかし、愛は自らの口で自身がやつしたことだと明かした。

綾小路はこの合同勉強会が一見クラスの益を考えての行動かと思つたが、坂柳の言葉を信じるのであれば裏に重大な意味が隠されているということになる。

坂柳を信じるわけではないが、真意が気になつた綾小路は昼休みに愛に声をかけた。

一之瀬が目的らしいということは聞き出せたが、愛から出た言葉は曖昧だつた。

愛の口から放たれた一之瀬は犯罪者であるという可能性。そして退学。

綾小路としても一之瀬の退学の阻止だけは概ね賛成だつたが、それ以外が不自然なほど曖昧で辷々しかつた。

それに加え、異様なほど愛が櫛田を避けているということも気になつた。

入学当初、学年全員の連絡先を交換すると息巻いていたが、櫛田自身が嫌う堀北は別として愛とも交換できていなかつた。それに加え、余計な会話を拒まれているという。

この学校で櫛田の本性を知る人物は、綾小路と堀北だけである。愛が櫛田を避ける理由が一つとして見当たらぬのだ。

櫛田は入学以前に愛との面識はなかつたと話す。本能で危険を感じているのか、それとも……。

綾小路はその考えを切り捨てる。身体能力が極めて高い人間はいるけど、超能力を持つた人間は存在しない。SFが現実に起ころるなど、ありえない話である。

愛が一之瀬を助けようと画策しているのも全て、自身がプライベートポイントでAクラスに上がるためだ。綾小路は愛がそうすることに対しても、特別反対しているわけではなかつた。

愛がAクラスに上がつて坂柳と手を組んでも結構。綾小路はそれでいて、二人まとめて倒すつもりだ。負けたらそれで、あの男を否定することができる。失敗が確定したとしても、愛が貯め続けたポイントを活かす場面は必ずある。

将来的に牙を剥く可能性はあるが、現時点では優先順位は低いと考えている。それよりも優先すべきは櫛田の退学。

現に今回も問題をすり替えようとしてきており、クラスに直接的な害を与え続けている。結局それは叶わなかつたわけだが、堀北がどうやつて乗り越えたのか、それを知るべく綾小路は歩き出した。

12月

真夏に真冬を駆けるR.T.A.、はーじまーるよー。

前回は、ペーパーシャツフル試験を経てBクラスに昇格したところまで進みました。

今回は原作の7巻と7・5巻の前半部分にあたる12月部分を進めていきます。

12月といえば、龍園たちがXを探すために色々するところですね。主に軽井沢をいじめたり綾小路にいじめられたりします。

つまりこの間には特別試験は一切なく、話の中心も綾小路と軽井沢を中心に行開されていくため、愛ちゃんは完全に蚊帳の外です。

まあここで龍園に目をつけられると色々面倒なので前回の合同勉強会を提案したわけですね。主役は堀北に押し付けてやりましたがね。

しかし、当然愛ちゃんも龍園の言うXの最終候補には残ります。実際にはXは綾小路なのでハズレですけど。

とはいえたクラスの動きは把握しておきたいところなので、ある人物と接触するために図書館に訪れることがあります。

目的の人物は高確率でミステリーソノラムが置かれている棚付近にいるので、その方向に向かいます。

はい、いました。椎名ひよりです。彼女は現Dクラスの生徒であり、癒し枠です。なんであんな野蛮なクラスの中にこんな子が紛れ込んでるんや（困惑）

彼女は唯一龍園の傘下に入つていらない唯一無二の人材で、ある程度仲良くなるとポロッと情報を落としてくれることがあります。（椎名は本の話でもしどとけば勝手に仲良くなるのでこの問題はそんなに難しい話では）ないです。この後も、仲を深めるために定期的に図書館に行つてあげてください。

試走して分かつたことですが、龍園は基本原作と同じ行動を取る一方この時期だけこちらの活躍次第で動きを変えてきます。具体的には、綾小路よりも暗躍したかどうか、です。

特に、体育祭で綾小路の仕事を奪いすぎると龍園が綾小路ではなくこちらをロックオンしてきてその対応に追わされることになります。なのでRTAする際には体育祭の時には絶対に何もしないようにしますよう。（事後報告）

あつ、（唐突）皆さんはミステリー小説は読みますか？ 私は『モルグ街の殺人』と『オリエント急行の殺人』を買ったはいいものの今のところ読むことなく棚に放置しています。

（椎名は本の話でもしとけば勝手に仲良くなるのでこの問題はそんなに難しい話では）ないです。

そんな感じで数日消化すると、教室に龍園たちが現れます。今回の目的は高円寺のはずですが……愛ちゃんも呼ばれましたね。とりあえず堀北を連れていきます。原作だと須藤もついてきますが、堀北と須藤の仲は原作ほど深くないのでついてきませんでした。ここで須藤が着いてくると色々厄介なので、万が一着いていくと言い出したら全力で止めてください。記録が大幅に遅れる可能性がある上、最悪の場合再走案件になります。

綾小路は着いてきますが、他のクラスメイトは平田に任せておきます。このタイミングで念の為に坂柳に連絡しておきます。『龍園に呼び出されて草』……と。

原作だとここでは高円寺がXである可能性を探る場面になるのですが、今回はおそらく愛ちゃんが本命と思われます。まあ一番訳の分からないことをしてるのが愛ちゃんですししおすし。ってあれ、坂柳一人で来たってマ？

原作だとドラゴンボーイって連呼して蹴り飛ばされそうになつてましたやん。それを橋本が庇つてくれたんだけどなあ。（困惑）

坂柳がこっちを見て何かを言いたげですね。どうやら、愛ちゃんが守ってくれるやろ（楽観）つて思つているらしいです。おね口リじやなくて口リ口リの時代かクオレハ……。

原作だと2ドラゴンボーイで蹴りが飛んできましたが……うおつ！？

1ドラゴンボーイで蹴りとか聞いてないんだが？ なんとか愛

ちやんが盾になることで守れましたか……これは結構なダメージが入つてますね。堀北兄から武道を学んでおいて良かつたですね。打撲だけで済みそうです。当たりどころや転び方によつては折れてしましからね。こうなると大幅ロスなので当然再走です。ここまで来るのでかなり時間がかかりますので、再走となると精神的なダメージは大きくなります。今回はそこまで影響はなさそうですね。よかつた。

とりあえず高円寺が白であることが確定したようなので、このまま解散しようと——つてまあ止められますよね。愛ちゃんはまだ白だと決めきれていないようです。寒いんだよあくしろよ（せつかち）でも愛ちゃんも白なんだよなあ。正直に言うと、龍園は詰みです。既に綾小路に泳がされてるわけだし。

軽井沢とは一切面識ないし、いくら愛ちゃんを疑つても綾小路しか釣れないしね。返答は適当でいいでしょう。

ただし唯一の懸念点が須藤で、万が一居合わせていると龍園にAクラスとの取引を暴露されてしまうと先程言つたように再送案件になる可能性が出てきます。

さて、龍園から解放されたことで今月最低限やらなければならぬことは全て終了した訳ですが、これはRTAなので時間を無駄にするわけにはいきません。

堀北兄から稽古をつけてもらう日に、あの話を切り出しましょう。南雲のことです。

堀北兄としては南雲が好き勝手やるのは気に食わないようなので、その対応を綾小路に依頼していましたが、その一部を愛ちゃんが請け負おうというわけです。

進行具合の把握も理由の一つですが、2年生編は綾小路が1年生のホワイトルーム生から逃げ続けること、そして南雲下ろしがメインとなつてくるからです。月城は綾小路がどうにかしてくれるからね。南雲は任せろ。ハンバーグ用のミンチにしてやる。（過激派）

堀北兄が愛ちゃんのことをある程度評価してくれていれば、堀北兄が愛ちゃんに協力を依頼してくれます。

……はい、ちゃんと上手くいきましたね。ただし、こちらから2年生に接触することは極力避けたいと思います。ただでさえ綾小路と会うだけでもリスクが高いのに、愛ちゃんも追加となると誰かが退学してチャートが破綻してしまった可能性がありますからね。何ならしばらくしたらみんな寝返っちゃいますし。緑の悪魔に『根性が足りてないようです。重点的に鍛えましょう』って言われちゃうゾ。

まず愛ちゃんがやることは堀北の生徒会入りです。堀北は愛ちゃんに逆らえないので、サクッと済ませたいと思います。

冬休みに突入したら、堀北ちゃんに話があると連絡を入れます。そして堀北の部屋にお邪魔して生徒会入りの話をします。最初は渋りますが、堀北兄と電話を繋ぎ、直々に話をしてもらいます。それでもダメなら暴力に頼りましょう。（短絡的思考）

原作ではここまで渋つていましたが、今回はうまくいくはずです。

堀北には南雲と一之瀬の動向を探つてもらいます。南雲は言わざもがなですが、一之瀬とは直接コミュニケーションを取つてもらいます。Cクラスに降格したことなどから一之瀬のメンタルがかなり不安定であることが予想されます。前触れもなく退学されるとこれまたチャートの崩壊に繋がりますので、堀北から説得してもらつたり愛ちゃんからも直接退学を考え直すようにお願いしたりしてください。ちよつと短いですが、今回はここまでとなります。

今回獲得したポイントは、クラスポイントが651ポイントで65100ポイント、坂柳からは 300000×35 人で105000000ポイントで合計1115100ポイントです。

累計で739万7200ポイントで進捗は36.986%です。では、今回はここまでです。次回もよろしくオナシヤス！

12月 裏話

12月に入り、Dクラスは晴れてBクラスへと昇格した。とはいって、教室が変わったわけでも、席が変わったわけでもなく意外と実感は伴わなかつた。Cクラスが違反行為をして100クラスポイント失つたとはいえすぐ後ろには一之瀬たち元Bクラスがおり、依然予断を許さない状況にあることは間違いない。

そんな中、愛はとある人物と接触を図るために図書館を訪ねていた。向かう先はミステリー小説が所狭しと並べられている棚。そこに椎名ひよりはやはりいた。熱心に本を探している蒼白の髪の少女は、現Dクラスの生徒である。

「椎名ひよりちゃんだよね？」

「はい、そうですが……。あなたはあの八遠愛さんですよね」

「正解」

あの、とはなんだと思った愛だが、それは口にしなかつた。有名人だという自覚はあつたし、それだけのことをしているという心当たりはあつたからだ。

「どの様な用でしようか？」

「たまには本でも読もうかなつて。椎名ちやんが本が好きなのは聞いたたし、せつかくならおすすめを紹介して欲しいかなつて思つて」「なるほど、分かりました」

わずかに目を輝かせながら、椎名は愛に合いそうな本を手に取つていく。

「八遠さんはミステリー小説を読んだことはありますか？」

「実はないんだよね……」

「ではアガサ・クリスティーの『そして誰もいなくなつた』がおすすめですよ」

「あつ、名前は聞いたことがあるかも」

世界的ミステリー作家の代表作である作品。定番だからこそ面白いのだと椎名は言つた。

「あとは『モルグ街の殺人』も合うと思います。この作品は推理小説の

原点とも言われていて、展開は王道ですがわかりやすく入りやすい
と思いますよ」

手に取つて分かつたが、短編小説らしい。数十ページで話が終わる
ため、確かに読みやすそうである。

「なるほど。じゃあ両方とも読んでみるね」

「そう言ってくれて嬉しいです。私はいつもここにいるので、よけれ
ば読んだ感想を聞かせてください」

「うん、そうするよ」

そうして手続きをして、昼休みが終わるまでの間愛は読書に没頭し
た。

話が中盤に差し掛かつたところで本を何冊も抱えた椎名がやつて
来て、一番上から順に読み始めていた。思わずそれを全部読むつもり
なのかと聞いたところ、もちろんですと返ってきた時は正氣かと疑つ
てしまつた。

しかし人にはそれぞれ没頭できることがあつて、椎名にとつてのそ
れが読書なのであればそれは苦行ではないのだろう。

では、愛にとつて没頭できることは何だろうか。今まで色々なこと
を試してみたが、何でもすぐにマスター出来るためにすぐに飽きてし
まう。

継続できることの要因の一つとして、成長を感じることが挙げられ
る。今までできなかつたことができるようになつて達成感を覚える。
すると、人は更なる向上心を抱きのめり込んでいく。

愛は今まで色々なことに手を出してきたが、どれもすぐに上達して
しまう。成長を感じることは大切なのだが、その過程での苦労も必要
だ。つまり何の苦労もしていない愛には達成感を得ることはできな
かつた。

いざれにせよ。今は没頭できことがある。それからのことは後
でじっくり考えればいいだろう。

そんなことを考えていたら昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り、
愛は現実世界に戻ってきた。

ちょうど終盤に差し掛かるところで時間を迎えてしまつたため、続

きが気になつて仕方がなかつたからだろうか。この日の授業はいつもよりも早く終わつたような気がした。

「……時間ですか。読書をしていると、あつという間に時間が過ぎてしまいりますね」

「たしかに。こんな感覚は久しぶりかも」

「そうなんですか。意外です」

「意外?」

「はい。私が見る限り、八遠さんは常に楽しそうにしていますから。八遠さんのことはあまり知らないので、間違つていたらごめんなさい」

椎名の言うことは正しい。中学生までの目標もなく何となく過ごしていた日々とは大違いである。

友達は当然おらず、むしろどこか避けられているようだつた。「できるヤツ」はちやほやされるが、「できすぎるヤツ」は避けられてしまうらしい。レベルが高すぎる相手には挑まない。そういうことなのだろう。

「間違つてないよ。高校生活は楽しめてる」

「よかつたです」

授業の開始時刻が刻一刻と迫つてゐるため一度お別れとなつた。本の感想を語り合う約束をし、愛は教室に戻つた。

そして放課後、いつものように堀北と家に帰ろうとした愛だつたが。

「八遠、ちょっといいか」

それは出待ちしていた茶柱の手で早々に打ち砕かれることとなつた。

「何の用ですか?」

「着いて来い」

「はあ、わかりました」

堀北に先に帰るように伝え、いつの間にか移動を始めた茶柱を追いかけるように愛は急いで歩き始めた。

行き着いた場所は生徒指導室。半年ぶりだつた。愛を座らせ、対面

するように自身も腰を下ろすと茶柱は口を開いた。

「ここでこうして話すのも久しぶりだな」

「そうですね。あの時はプライベートポイントでAクラスを目指すのはやめた方がいいと言われた気がします」

「気がする、ではない。そう言つたのだ」

そうでしたつけ、とわざとらしく愛は咳く。茶柱がそう言つたことははつきり覚えていたが、愛からすればあまりにもくだらないことだつたので引き出しの奥の奥に入り込んでしまつっていたのだ。

今思えばプライベートポイントを2000万集めるのはあまりにも苦行だつたし、ここまでこの学校の試験を経験してきてクラスポイントを集めた方がAクラスを目指すには適している。

だからと言つて、もう一度1からやり直すとして方針を転換させるのかと問われれば愛は首を横に振るだろう。

クラスポイントを手に入れられる機会は限られており、そのタイミングを逃さず最大量集めるだけの作業になりかねないからだ。ただ、これは記憶持ちだから言えることであつて普通であれば当てはまらないかもしれない。しかし愛は当てはまらない方の人間だ。模範解答を片手にテストに臨んだところで、それに従えば確実に100点を取ることが出来るが、それが果たして楽しいのかと言わされてハイという人間はない。

「この前の特別試験ではかなりクラスに貢献していたようだな」

「何のことですか？」

「話は聞いている。現Cクラスとの合同勉強会の発案者はお前だとな」

「星乃宮先生から聞いたんですか」

「ああ。お前の手柄にしないようにと頼み込んでいたらしいな」

一之瀬経由だろう。そういうえば勘は鋭かつたな、と愛は他人事のようと思つた。

「それは認めますが、それが何か?」

「Dクラスは今月Bクラスに昇格した。そしてBクラスとCクラスは

それぞれCクラス、Dクラスに降格となつた」

思えば5月の時点ではBクラスとは700ポイントほど離れていた。しかしそのポイント差は縮まり、ついにひっくり返した。茶柱からしたら、トラウマにも等しい過去を忘れることができる千載一遇のチャンスのはずだつた。

「あの時全てのクラスポイントを失ったDクラスがこれほどの早さで息を吹き返すなど誰も想像していなかつた」

「そうでしようね。今までDクラスがCクラスに昇格したこと 자체が珍しいとのことでしたから」

「ああ。しかし、疑問も残る。半年前、私とお前はここで話をした。その時お前はプライベートポイントでAクラスに移動すると言つていたな。だが振り返つてみればどうだ。無人島試験でも船上試験でも体育祭でもペーパーシャツフル試験でもお前は結果を残している」「知らない人からすれば、私がDクラスに貢献しているように見えますね」

茶柱は静かに頷いた。

無人島試験でリーダーの名前を書いたのも、船上試験の法則を見つけたのも愛だ。体育祭はクラスとしては負けたが、愛個人の成績は学年1位だった。

ペーパーシャツフル試験でも同じことが言える。

しかし、愛は自身のクラスがAクラスに昇格することを良しとしない。それでは目的は果たせないからだ。

これからはAクラスを抜かないようにポイントを調整しようとしていることは、茶柱も分かつていた。

「現時点で我々とAクラスのポイント差は473ポイント。決して楽ではないが、お前が2000万ポイントを集めめるよりは現実的だと思うが？」

「方向転換をしろ、ということですか？」

「端的に言えばな」

Aクラスとは若干離れているとはいえ、今までのペースを考えればその方が楽だということは明白であつた。

「無理な話ですね、それは」

「そうか」

しかし、愛がそれを拒否することは想像に難くなかった。茶柱は愛の返事を軽く流す。

プライベートポイントを使ってクラス間の移動をすることを日論む生徒はかつてにもいた。成功までの道筋が見えていたのか、はたまた考えなく突っ走っているのか。愛の能力からして前者だと茶柱は結論づけたが——何よりタイミングが最悪だった。

入学者名簿に目を通した時、平田や堀北、櫛田、高円寺といった能力が高い生徒がDクラスに集まっていることが分かった。

0ポイントからのスタートとなってしまった時は諦めかけたが、長

年の思いは簡単には燃え尽きなかつた。
坂柳理事長が特別な生徒だという綾小路とオールAの愛がいたため、逆転の目はあると考えていた。

しかし愛は茶柱を裏切るような形でプライベートポイントでのAクラス昇格を宣言した。

残された綾小路に期待するしかない——そう思っていた。だが今、DクラスはBクラスに昇格している。

「だが、お前がAクラスに昇格するという点では変わらない」

「そうかもしませんね。ですがそれではつまらない、そう思いませんか？」

「つまらないだと？」

「試験ごとに数百単位で動くポイントを自分のところに集めればいいだけですから」

作業ですよ、そんなものと愛は当然のように言つてみせた。

「ですが、2000万ポイントを集めるためには多少知恵を働かせなければならぬ。急ぐほどに、さらに高度なものをお要求される。クラスポイントよりは難しいんですよ、これが」

「感想など求めていない」

「でも茶柱先生が求めているものはここにはありませんよ」

茶柱も愛も、Aクラスに昇格したいという点では一致している。しかし手段は決して相容れないものだつた。

「悲しいですね。目的は同じなのに、ここまで分かり合えないなんて」

「……ああ、そうだな」

「私が勝手にAクラスを目指すこと自体は何も問題ないと思うんですけどね。何かやらかしても私が自滅するだけです。でもクラスポイントでとなるとAクラス昇格目前で大きなミスを犯したら……一生ものの後悔だと思いますけどね。そう思いません? 茶柱先生」

「……」

「何度も言いますが、私のやり方を変えるつもりはありません。止めなければ私が20000万ポイントを集めること先にAクラスに昇格させてくださいね。……方が一そんなんことになれば、無理矢理下げますけどね」

「そんなことができるってでも?」

「クラスポイントを上げることと逆のことをやればいいだけですから。手を抜いてクラスの意向に背けば、あれよあれよという間に下がっていく。増やすよりは簡単ですよ」

愛は生徒指導室を後にした。茶柱はそれを見送ることしかできなかつた。

「……やはり私はあの罪を一生償つていかなければならないのだろうか」

か

一人残された茶柱は、力なくそう呟くことしかできなかつた。

* * *

師走の季節は早くも中盤へ差し掛かり、寒さがより一層強まつてくる中、いよいよ冬休みが目前に迫つてきた。

学校の規則により帰省は出来ないものの、特別試験はなく完全なオフとなる。年内の特別試験は全て終了しているため、Bクラスの空気の緊張感は和らいでいた。

しかし、そろそろ龍園たちがアクションを起こしてもおかしくないと愛は考えていた。Xの正体である綾小路を炙り出そうとする時期がちょうど今のはずだからだ。

現に、Cクラスのつきまといを受けているという報告が一部生徒から上がっている。愛もその一人だつたが、付き合うだけ無駄だとわかれきつていたため無視を決め込んだ。他の生徒に比べて、自宅に籠つたり部活をしたりしている時間が圧倒的に長いという恩恵もあつたかもしれない。それでも部全体に悪影響が出かねないほどのストーキングを受けた時は、ミスを装つて急所にテニスボールをぶつけておいた。誰が何と言おうとミスである。

しかし愛には待つことしかやることがなく、気が抜けているのも事実だった。

いくら最速を目指そうにも、あらゆる手を使えるわけではない。詐欺をすれば当然処罰を受けるし、常にポイントを稼げる場があるわけではない。カジノがあればなあと思ったが、日本ではまだ合法ではないし高校生がやるべきことではないだろう。

愛ができることと言えば、特別試験でできる限り多くのポイントを集めることだけだ。

この日も、いつものように晩御飯は何にしようかなあと考へながら帰宅するため荷物をまとめていた。

「ちよつと失礼するぜ」

Bクラスの穏やかな空気を一瞬にして張り詰めさせた、鋭い一声。龍園翔だつた。彼は石崎やアルベルトら取り巻きを連れてやつてきており、Dクラス内の緊張は一気に高まつた。

「どうしたのかな、龍園くん」

「別に俺がこのクラスに遊びに来たつて問題ねえだろ？ 同級生なんだからな」

「そうだね。でもこの学校では事情が変わつてくる。君がこうやつて訪ねてくるのも初めてだしね」

クラスの代表として危険な来客の対応をする平田。他のクラスメイトはただ見守つているだけだつた。というよりも、見守つているのが最善だつた。

Bクラスを一瞥した龍園と視線が合つたことを愛は感じたが、気づかないふりをする。

その視線は最終的に高円寺へと行き着いたが、本人は気づいていないのか気にしていないだけなのか、荷物をまとめて教室を後にしようとしていた。

当然龍園がそれを許すことではなく、高円寺の行手を阻んだ。

「私になにか用かな？」

「ああ。あと八遠、お前も来い」

突然の指名に、隣の堀北が驚きと疑いの眼差しを向けた。その後に、それ以外のクラスメイトからの視線も集まつた。『高円寺とセツトだしな』と言わんばかりの目が、何十個も向けられた。

「八遠さん、あなたまた何かしたの？」

「何もしてないそもそも『また』って何!?」

「あなたいつも落ち着きがないじやない」

「やることがいっぱいあるだけだし！」

愛は鞄を持ち、教室を後にする。一瞬のうちにDクラスの生徒に囲まれ、逃がさないという意思をひしひしと感じた。

「高円寺くん、なんだがＳＰに守られてるみたいだね！」

「年上の女性だつたら最高だつたんだがねえ」

「それ多分下心丸出しの男が集まつてくると思うな」

ある意味で身の安全は保障されていそうではある。

最序盤で地下牢獄にぶち込まれるファンタジー世界の主人公のようでもあるなあ、と思いつながら龍園の後ろをひた歩く。

「龍園くん、どこに向かつてるの？」

「話がしやすい場所だ。この辺は人が多いからな」

「人通りの少ない場所……。もしかして私、襲われちゃう？」

「俺がそんなことするわけねえだろ変態が。ペドフイリアでもない限りお前を襲うヤツはいないだろ」

「ジョークに対してもんまりな言い草すぎる……ッ！」

メンバーが特殊すぎるが故にこれといった会話や有力な情報が溢れることもなく、並木通りから少し外れた人気のない場所に誘導された。

「ちょっと待ちなさい。あなたたち2人に何か用かしら」

「クク、やはり釣られたか」

そこに堀北と綾小路も合流する。平田はいないようだ。別段仲が良いわけでもないので、いてもいなくてさほど変わらないが。別でやることがあるのであればそちらに取り組んでもらつていた方がありがたい。

「それで、話とは何かね？　この後も予定があるから早く行きたいのだが」

「ハツ、そんなに焦るんじゃねえよ。俺が聞きたいのはBクラスを裏で操っているヤツのことだ。それとお前らには借りがあるからな」「借り……？　身に覚えがないね。高円寺くんは？」

「私も何のことかさっぱりだね」

「干支試験ではお前らのせいでポイントを取り損ねたんだよ」

「あつそうなんですか。……おつと落ち着きたまえドラゴンボーグくん！　ここで暴力に頼つたら退学処分になつてしまふかもしけないよ……つと、か弱い女の子相手に突然の一撃は卑怯じやないかな？」

 それは言うものの、生徒会長の稽古のおかげか不意打ちでも見切れ るようになつてきたので当たることはほぼないのではないかと思う。 全力の綾小路を相手にしたら流石にひとたまりもないかも知れないが。

「もう一度口にしてみろ。次はぶつ殺すからな」

「きやーこわーい」

 この学校だからなどに関係なく、いくら人気のない場所でも人を殺すという行為を容易に行えるわけがない。

 「とはいえ龍園くん、やり方が汚いというか、小賢しいというか、小物臭いというか、何というか……」

 「俺はただ手段を選ばないというだけだ」「よりかませ犬感が増したッ！」

「お前、龍園さんのこと好き放題言いやがつて……！」

 「落ち着け、石崎。このチビがこうして吠えていられるのも今のうちだ、好きにさせておけ」

「は、はい」

その割にはドラゴンボーイと呼んだら蹴りが飛んできたではないか、というツツコミは心の中に留め、話を先に進めることにした。

「それで、私たちを呼び出した理由って何？」

「お前らのクラスの中に裏でコソコソ動いている奴がいるからそいつを突き止めに来たんだよ。同じことを2度も言わせんじゃねえ」

「ふむ、だとするとなおさら私が呼ばれた理由がわからないねえ」

「そうか？ 高円寺。俺からすればお前にも可能性があると思つてるが」

「干支試験の時はあの集まりに参加して時間を取られるのが嫌だつたからねえ。カラクリは丸わかりだつたからすぐに終わらせただけのことだよ」

愛に手鏡を持たせ、髪のセットをしながら高円寺は話を進めていく。

「私はこのクラスがどうなろうが気にしないのでね。たまにこのリトルガールとのお遊びに付き合う程度さ」

「幼女ちやうわい。あと見にくになら自分の端末を使ってほしいな」しかし悲しいことに話は進んでいくが髪のセットはそうはいかなかつた。愛と高円寺の身長差のせいだつた。

「つまり私は無実というわけさ。もつと調べたいのであればいくらでも調べてもらつて構わないが、全て無意味だということは先に伝えておくことにするよ。では私はこの辺りで帰らさせてもらうよ。この後も用事があるのでね」

「ああ」

「そんなに簡単に帰させていいんですか、龍園さん!?」

「こいつはXじやねえからな」

「あつじやあ私もこの後用事あるから……」

「チビは待て」

「私調べでは私はチビではないから帰るね！」

「オカルト雑誌よりもあてにならん調査で誤魔化そうとするんじやねえ」

「オカルト雑誌よりはあてになるでしょうがつ！」

突つ込む部分を間違えたような気がしなくもないが、早く帰りたい愛としてはこの状況をどう打開するか真面目に考えていた。勢いで坂柳を呼んだが……。これは時間がかかるやつだ。

「おやおや、男数人で女の子を取り囲んで何をするつもりですか？」
「はつ、人聞き悪いな坂柳。聞きたいことがあつただけだ。手荒な真似をするつもりはねえ」

「ますます怪しいですね」

「八遠、お前が呼んだな？」

一字一句その通りであったが、そのまま肯定すると負けた気分になると思つた愛は適当な言い訳をすることにした。

「この後遊ぶ約束してただけだし」

「初耳です」

「らしいが？」

「君たち実は仲いいとかないよね？」

「アホか（ないですね）」

否定した割には声が被つている。アニメでよく見るリア充のやりとりだな、と愛は心の中で笑つた。

確かに一人で来いとか大人数で来いとか何も言つていない。龍園がなにか面白いことしようとしてると言つただけだ。
……大人数で来る要素しかないな。愛は反省した。

「ところで、龍園くんが探してるXってどんな人なの？」

「Xは体育祭で俺の邪魔をした。しかしそいつは簡単に仲間を切り捨て、目的のためなら手段を選ばねえ。俺と考えが近いヤツだ」

なるほど。私ではないな。愛は改めてそう思うと同時に、少しだけ安堵した。

「私はどちらかというと表立つて動いている方だと思うけどね。船上試験の時からずつと私なんじやないかとか疑つてるみたいだけど、それは大きな間違いだよ」

愛がそう言うと、龍園は不敵な笑みを浮かべた。

「俺は一度たりともXが一人だと言つた覚えはねえがな」

「ふうん？」

意表を付かれたが、確かに龍園が言うようにXが一人だとは一度も聞いていない。愛も綾小路も裏でかなり動いているため、その仮説は正しいと言えるだろう。

「初めに違和感を覚えたのは5月。須藤に暴力事件を起こさせようとした時のことだ。あの特別棟に監視カメラは一切なかつた。だが実際は須藤の正当防衛を示す証拠が提出された」

愛は龍園の話を静かに聞くことにした。どこまで情報を得ているのか、そして現時点でのれだけやれるのか、見定めたかつたからである。ここにいる他のメンバーにある程度の秘匿情報が漏れたところで、あまり問題にはならないと判断したということも大きい。

「無人島試験でもだ。お前は鈴音と同じ部屋だつただろう。鈴音は試験開始時点であまり体調が優れていないように見えたが、お前はそれを指摘しなかつた。結果的に鈴音はリタイアしてリーダーは変更。俺たちの読みは外れた」

「堀北ちゃんが初めから体調不良？ 私にはそうは見えなかつたよ」「嘘つけ。いつもはあまり汗をかかない鈴音が一目見てもわかるほどに汗をかいていただろうが」

「えつそんなどこまで見てるのストーカーじゃんこつわ」

流石の愛でも引いた。おそらく原作の須藤ですらそこまで見ない。「確かに八遠さんは私の体調不良に気付いていたわ。けれどリーダー変更は元々私が考えていたものよ。もし続行が困難なほどまで体調が悪化した時のために、代わりを綾小路くんにお願いしていたの」「伊吹は取り返すのに必死だつたと話していたがな。体調不良で体力が限界つて時にそんな演技ができるとは到底思えねえがな」

確かに、ここまで話をしているとかなりの情報を集めていることはわかる。しかし直接Xにつながる情報はまだ出てこない。

「ククク、この謎のXはじっくり炙り出す」とにしてやるよ。ネタは十分集まっているからな」

綾小路を誘き寄せるために軽井沢を使つたことを考へると、もし同

じ方法を取るのであれば堀北あたりが狙いか。

いずれにせよここまで来ると予測することしかできないため、確証を持つて動けないと言うのは痛い。

「少しよろしいですか？」

「ここまで沈黙を貫いていた坂柳が初めて口を開いた。

「私も以前からBクラス内にDクラスの邪魔をする生徒がいるという話は聞いていました。その結果Dクラスだつた愛さんたちはBクラスに、Cクラスだつた龍園くんたちはDクラスへと落ちてしまつたわけです。Xを炙り出す以前に、ドラゴンボーアさんはすでに負けてしまつて——」

ドラゴンボーア、と言う単語が聞こえた瞬間、龍園が坂柳との距離を詰め容赦なく蹴りを放つ。愛も同時に動き出し、間に割つて入つて攻撃を防ぐ。できるだけ力を分散させようとは努めたものの、体格差から来る衝撃の重さには耐え切ることができず弾き飛ばされる結果となつた。

「いつたあ、腕が千切れるかと思つたよ」

「愛さん、大丈夫ですか？」

「うん、ちよつとヒリヒリするくらい」

生徒会長から武術を学んでいなければ、本当に腕が折れていたかもしないと思う程度に、龍園の一撃は愛にとつて重く感じた。それを受け流すことができたのは成果が出ているということでもあつた。

「あなたの今の行為は大問題よ、龍園くん」

「大丈夫、堀北ちゃん。今は重要な話じやないから」

龍園に詰め寄ろうとする堀北を制し、話の脱線を防ぐ。

「話を戻しますが、結果的にDクラスはXに敗北し窮地に立たされているわけです。このようなことをする前にやるべきことがあるのでは？」

「いや、現状はXを探し出すことが最優先だ。そいつらを潰してしまえばBクラスは終わりだからな」

「なるほど、Dクラスのリーダーはあまり賢くないようですね。それが分かつただけでも十分です」

「それはお前だ、坂柳。葛城を利用して契約を結ばされたんだからな。それにお前もチビとも同じような契約があるんだろう?」

「確かにそうですね。そもそも前者は葛城くんがその考えを示したわけですし。それに後者に関してはAクラスも愛さんもどちらも損するような内容は一つもありませんよ?」

前者は葛城派の失脚につながると思えば坂柳にとつてはそこまでデメリットではないのだろう。

「龍園くんは本来得られるはずだつたクラスポイントを自ら手放し、その結果今あなたたちはDクラスに転落している。到底正しい判断だつたとは思えないわね」

「そうか? これで俺たちはクラスポイントを200ポイント得られたも当然なんだぜ? しかもそれはAクラスが失脚しない限り永続的に続く。どこかの誰かがAクラスにクラスポイントを貢いでいるおかげでしばらくは安泰だろうがな」

これでDクラスは、仮にクラスポイントを全て失つたとしても最低限の収入が保証されることになる。とはいっても、眞の目的はそこではないだろう。

「龍園くん、今日はもういいでしょ。これ以上は平行線だよ」

「ああ。今日のところはこの辺りでいいだろ。行け」

「よおし、有栖ちやんどこ行く!?

「ものすごいテンションの変わりようね……」

堀北が頭を抱えているのをさし置いて、愛は坂柳と共にこの場を立ち去つた。

初夜の道場に掛け声が響く。窓の外は闇夜に染まり、隔離されたような感覚に陥る。

すっかり日常となつた学との稽古は、始めた頃と比べて様になつていた。とはいっても勝てるわけではなく、才能ある人が努力したらどうなるのかという問い合わせになつていた。

愛がこの領域に到達しようとしたら、学以上の鍛錬を必要とするだろう。もつとも、そこまでのレベルを要求しているわけではないのだが。

稽古の最中は、無駄な言葉は発さない。ありすぎる身長差のせいでまともなメニューはこなせないが、それでも当初の目的は達成しつつあつた。

「鈴音は最近はどうだ？」

稽古後、水分補給をしながら学は愛に訊く。ここ最近、ほぼ毎回だ。「数日では変わらないですよ。ですが少しずつリーダーの自覚が出てきたのか、積極的に話をしに行く時もありますけどね」

「そうか」

「あなたの妹はここに来てから見違えるほどに変わりましたよ」

「・・」

学が妹を遠ざけるのは、自らを目標に設定して欲しくないからだ。兄は妹の才能をちゃんと評価しているし、それ相応の人間に成長できると期待している。それこそ、自身を越えていけるほどに。

一方妹は兄を目標にし、兄を評価して力を積み重ねてきた。

「あなたが堀北ちゃんの何を認めないのかなんて知りませんが、今の堀北ちゃんが先に進むためにはあなたとの和解が必要なんです」

「そこに至るかどうかは鈴音次第だ。己の過ちに気づけるかどうか、そこに全てがかかっている」

・・この2人は不器用すぎる。あまりにも。されど、愛は深く介入することはできない。

「まあ、よその兄弟の話に赤の他人の私が踏み入るのはおかしな話なので、言いたいことは言わないでおきますけどね」

「ああ。そうしてくれ。：そうなつたら、大事な忘れ物をしてしまうかもしれないからな」

これは2人の問題であり、八遠愛の問題ではないのだから。

＊＊＊

龍園がBクラスに乗り込んでから数日後。今年最後の登校日の放課後、愛は屋上へと続く廊下に一人で龍園の待ち伏せをしていた。目視で茶柱と学を確認できる位置だ。

目的は龍園への接触。

龍園はやはり、最初に綾小路を潰す選択をした。愛とは違ひ綾小路は龍園を誘導していたので当然といえば当然である。

愛はここで龍園の今後について問うておく必要があつた。このまま身を引くのか、それとももう片方のXを潰しに来るのか。龍園を度外視できるかどうかという問題は、現状の課題にどの程度リソースを割くことができるかという点で重要だった。

しばらくして、予定通り綾小路に叩きのめされた龍園がこちらに歩いてきた。

「その様子だと、X潰しには失敗したようだね」

「ああ。俺はX一人ごとに完膚なきまでに返り討ちにあつた。表に残り続ける理由はどこにもない」

「今まであれだけ威勢が良かつたのに、いざとなるとあっさりと引き下がるんだね」

「まあな」

いつもの王様気取りな龍園ではないせいか、かなり会話がしづらい。それだけ綾小路に植え付けられた恐怖は龍園にとつて大きなものになってしまったということだ。

「もう一人のXとやらは諦めるのかな?」

「いずれにせよ、この体たらくではそんなこと出来やしないからな」「引く、というのはリーダーを降りるだけ? それとも——」

「ここを出していくつてことだ。今までやつてきたことが全てアйツの手のひらの上だつたんだからな。どうでもよくなつた。お前も俺を引き止めるつもりか?」

「別に。私にはやらなきやいけないことがあるから、龍園くんが諦めずにX潰しを続けるのかどうするのか気になつただけ」

愛は一息ついて窓の外を見やる。清々しいまでの、晴天だつた。

「けどちょっと失望したよ。諦めないことが君の美德だつたのに、い

「こうなるとすぐ辞めてしまうなんてね」

「勝手にそう思つておけ」

「私から聞きたいことはそれだけ。じゃ」

間もなく、新たな年を迎える。クラス情勢が大きく変わり戦いもまた新たな局面を迎えることを感じさせた、龍園のあつけない幕切れだつた。

1月

課題が無限湧きするR.T.A、はじまるよー！

前回は龍園のX潰しが終わって本格的に南雲対策に向けて動き始めたところでしたね。

今回は8巻部分、つまり混合合宿試験のところを走っていきます。混合合宿試験ってなんぞいというそこの兄貴のために、簡単にですが説明して差し上げましょ。

今回の試験の舞台は林間学校、要するに山の中ですね。冬に行うことで蚊への対策を行う姿勢、そこに痺れる憧れるウ！

期間は7泊8日で学年を超えて活動することもあるということなので、特に2年生相手には神経を使う必要がありますね。

まず林間学校に到着したら男女別で6つのグループを作ります。グループ自体は学年別ですが、クラス毎という縛りはないので必然的に他クラスの生徒と同じグループになります。ルールにも2クラス以上の生徒が存在していなければならぬとがあるので、全員同じクラスというわけにもいきませんね。

授業をはじめとした基本的な生活はこのグループ単位で行うことになります。つまりあの子のあんな姿やこんな姿を……グヘヘ。失礼、少し取り乱してしまいました。

次にこの試験での成績の評価についてですが、『道徳』『精神鍛錬』『規律』『主体性』の4項目だそうです。それを試験最終日の総合テストで評価します。内容はこの時点では明らかになつておらず、何周かしているガチ勢兄貴はわかるかもしれませんが試験内容はランダムとなっています。なのでどこで手を抜くか、ということはあまり考えない方がいいと思います。ただ、種類自体はそこまで多くないので真面目に取り組んでいれば何ら問題はないと思います。

グループについて補足ですが、学年毎に作ったあとは上級生のグループと合流して最終的に1年生から3年生までが入り乱れたグループが男女別で6グループ出来上がることになります。

また、試験の報酬ですが同じグループの1年生から3年生までの試

験の平均点で評価され、1位のグループにはプライベートポイント1万ポイントとクラスポイント3ポイント、2位には5000ポイントと1ポイント、3位には3000ポイントが各生徒に配布されます。4位以下になると逆にポイントが引かれ、4位ではプライベートポイント5000ポイント、5位ではプライベートポイント1万ポイントとクラスポイント3ポイント、6位では2万ポイントと5ポイントとなっています。

学年別のグループ内に存在するクラス数に応じてポイントに倍率が付与され、これらの報酬が最低1倍、最大3倍になります。なお4位以下には適用されないとのこと。その辺りには謎の配慮があるようです。また、学年別グループにおいて10人より超えた人数に応じて報酬が1人あたりプラス10%されます。つまり最大15人で1.5倍され、理論上4・5倍のポイントが手に入るというわけですね。

また、学年別グループ内で責任者——いわゆるリーダーを選出する必要があります。責任者は得られる報酬が2倍になる代わりに、学年混合グループで最下位になると退学しなければならないというデメリットがあります。目先の報酬に気を取られてばかりいると事故つて退学する羽目になるので、くれぐれも自己責任をお願いします。

(2敗)

とはいえすぐ『最下位ね、はい退学グッバイ』となるわけではなく、最下位となつた学年混合グループに所属する3つのグループの平均点を下回つたグループの責任者が退学となります。まあよっぽど退学することになることはないと思うのであまり気にしなくてもいいと思います。

また、退学者が出たグループは1人につきクラスポイント1000ポイントを失うことになり、仮にそのグループに同じクラスの生徒が6人いた場合そのクラスは6000ポイント失うことになります。仮に4000ポイントしかなかつた場合、未払いの2000ポイントは次にクラスポイントが加算されるときに精算されます。例えば1200ポイント加算されたとすると、クラスポイントは0のままであと800ポイント払えとなるわけですね。

まあここまでしないとハメようとする輩が現れるので妥当ですね。

それでもいるんですけどね、南雲くん。

退学の回避には2000万ポイントが必要なわけですが、愛ちゃんが払うわけがないので忘れてください。

試験の内容はこんな感じですね。あれ、簡単につてなんだっけ……。

到着まではもう少し時間があるので、ここで平田が出てきてグループ分けについて意見を求めてきました。ポイント分配とか言つてることあげるわけねえだろ俺のものは俺のものお前のものはお前のものだぞわかってんのかオイ。

グループ決めについて堀北から連絡が来たりしていますが、実際のところ他クラスとの兼ね合いもあるので現時点でこうじや、とすることは難しいです。

とはいえたののようなメンバーが最も良いかという基準はあります。それはコミュニケーションのしやすさです。想像してください。同じグループに高円寺がいる状況を。すぐくやりにくいですよね。実際綾小路も苦労してましたしおすし。

やはり共同生活をすることになる以上、衝突は避けたいですからね。

……ようやく到着ですね。ここからは男女別の行動となり、女子はなんちやらホールに集められました。ここでグループ分けを行うようです。

まずは学年別のグループを決定していきます。

男子側でも同じですが、まずはAクラスが14人のグループを1つ作り、1人だけ受け入れる体制を作ります。

ただ、コレが決まらない。損得よりも好き嫌いで動きがちになつてしまふからですね。女子は繊細な部分が多いからね、仕方ないね。ちなみにここに入るとある問題が発生するので一旦スルーです。

その問題とは一之瀬のことについてです。何度も説明していますが、来月までに交流を深めないと一之瀬が退学して詰みます。

共同生活（健全）ができるこの試験は仲を深める絶好のチャンスと

いうわけです。

そんなわけで、神室がやたら一之瀬を嫌うのでこの条件を満たせません。これがなければこのグループも選択肢になつたんですがね。しばらくしてAクラスの大集団は決まりましたが、他は進みませんね。一之瀬がなんとかまとめようとはしてますが簡単な問題じやないですよね。

今は一之瀬に任せて少し今後のことについて話しておきますか。まず一之瀬問題はこの試験でミスしない限り退学は防げます。綾小路が少しでも仲良くなつていればその分確率は上がります。

次に堀北生徒会問題ですが、堀北兄が卒業するまでに和解してないと失敗に終わってしまうので次回解決します。もし失敗したら再走……とまではいきませんが大幅なロスです。これまで既にいくつかのロスがある場合は再走が無難です。

もう一つ。現時点ではどうすることもできないのですが、4月に入つてくる新1年生と過去に因縁やらなんやらがある場合があります。これも運ゲーですが場合によつては再走です。ひどいものだと宝泉くんがやたら因縁つけてきて、ことある毎に戦闘に突入してしまいストレスマッハになつたものがあります。見分け方としては接触していく回数しかないので、兄貴たちの目にかかるつてます。たまに利用できて逆に短縮につながる場合もあるので、発生したからといって必ずしも悲観する必要はないです。

うーん、やはり難航していますね。仕方がないので、魔法カード『堀北』を発動します。堀北に一之瀬の手伝いをさせることによつて一之瀬の負担を軽減しつつ、堀北のリーダー意識向上を図ります。

ついでに、堀北にグループ編成の希望でも出しときましよう。あとは放置しておけば、時間経過で勝手にグループ決めが完了します。無事にグループが決まりましたね。途中で坂柳が勧誘に来ていたようですが、しつかり断れています。

あとは適当に他のグループも決めて無事終了しました。対戦ありがとうございましたって言いたいところですが、まだ試験始まつてすらないという……。

それと責任者ですが、ここは一之瀬にお願いしましようか。他クラスからも一定の支持があるのでね。その方がグループもまとまりやすいと思います。

残すは上級生グループとの合体ですが、現時点ではネームドが橘書記と朝比奈くらいしかないので適当でいいです。あと責任者じやないからそもそも決定権がないというね。

一応メンバーの確認でもしますか。愛ちゃんと一之瀬、堀北に椎名……。ふむふむ、あとは中国から来たという王美雨ワシ メイヨウことみーちゃん、堀北と仲良く転倒していた木下くらいですかね。まずはここ二人に仲良くなつてもらわねば。（他は知ら）ないです。

仲間の上級生グループも決まつたようですがあまり大事ではないのでここはスルーで。

さて、翌日から早速授業が始まるのですが、初日は基本的にはオリエンテーションですね。あとは持久走。冬の天敵です。愛ちゃんは楽勝かもしだれませんが、私は学生時代最後尾でヒーヒー言いながら走つてました。そこのみーちゃんみたいに。

そして隣には一之瀬もいますね。やはり一之瀬はおっぱいのついた天使だつた……。羨ましいぞ。そこ代われエ！（血涙）

愛ちゃんは先頭を独走していますね。テニス部つて普通に持久走早いですからね。野球部やサッカー部並みに速い。試合時間が長いからか意外と体力使うんですよね、あれ。

あと一之瀬の一之瀬がすぐ一之瀬つてるツ！（語彙力）
これは絶景ぜつけ――。

失礼、取り乱してしまいました。

授業風景はあまりにも地味なので、全倍速でお送りしていきますね。（例外あり）

さて、授業も全て終わつたので早速一之瀬と仲良くなりに行きますか。

一之瀬ネキお疲れーっす。……いやマジでお疲れの様子ですね。まあグループ決めの進みが悪かつたからですね。ドンマイ。

持久走速いね？ いや、どうもつす。あつ、テニス部なんで、ハイ。

持久走速いね？ いや、どうもつす。あつ、テニス部なんで、ハイ。

私ならこうなる自信しかないですが、愛ちゃんなら大丈夫そうですね。

おつ、風呂ですか、いいですね。

それにもこうしてみると愛ちゃんと一之瀬の恵まれ方の差が物凄いですね。ちょっと可哀想になってきたなあ。

風呂から上がったあとは名前がわからない3年生が親睦を深めたいとのことでトランプを持ち出してきました。南雲も同じようなことしてたけど、この人は単純に仲良くなりたいだけのようですね。南雲？ とりあえず綾小路にシバかれてもらつて。

流石に一度に全員ができるはずもないのに、交代しながらやるようですね。

ここは適当にやつてもらえればいいので倍速をかけます。

どうやら最初は固かつた雰囲気もいい具合に和らいできたようですね。参加していない人もいるので完全にとは言えないですね。今回は一之瀬と仲良くするのが最優先なので問題ないです。

綾小路のグループのように高円寺や石崎のような厄介な人は今の所いなさそうですが、やはり女子ということもあってか体力的に厳しい場面がちらほら見受けられますね。

5日目まで倍速しましたが、この日は駅伝のコースを歩くというもので距離は往復12kmです。男子が18kmなので短くはなつているものの、山岳地帯のためアップダウンが激しく、体力の消耗がかなり大きいですね。

折り返し時点で残り時間がおよそ1時間20分というところ。人間の歩く速さは大体時速4~5km程度といわれているので、体力や高低差を考えると時間が足りない状況です。特に王みーちゃんがキツそうですね。堀北ですら息が上がっている状況なので、相当過酷なんでしょうね、このコース。ですが間に合つてもらわなければならぬので走らせます。昭和の熱血顧問ばりのテンションでいきましょう。

その前にまずは休憩を提案します。10分だけですが、水分補給をしたり息を整えたりしてもらいます。愛ちゃんは余裕そうですけど

ね。その代わりこの後頑張つてもらうからな……！

帰り道も多少愚痴はありましたが無事に帰つてこられたようですね。よかつたよかつた。

さて、そろそろ5日目が終わりそうなわけですが、一之瀬とはどんな感じでしようか……。

まずまずですかね。ただ、これではまだ確実に成功するとは言えないと。一之瀬が綾小路に過去を自白できたのは、一之瀬が綾小路に好意を抱いていて、自身の忘れ去りたい過去を吐き出す相手に相応しいと感じたからです。

一方今の一之瀬とはただの友達程度の関係でしかありません。もう1、2ランクほど上を目指していく必要があります。

ただ、正直なところそこまで持つていく時間がないんですね。この試験が終われば敵ですし、接触できる機会も激減します。なのでこの試験中に一之瀬が自白してもいいと思わせることができるレベルまで引き上げ、しばらくの間持たせる必要があります。

そこで、愛ちゃんの暗めな過去をこのタイミングで話すことによつて一之瀬からも話しやすくします。もちろん過去の話はでつち上げですけどね。

原則として消灯後は外出禁止となつていますが、上級生はそんなことを一切気にすることなく密会とかしてますし問題ありません。

というわけで、行くゾー！（デツデツデデデデ カーン！）

はい、なんかいい感じに○☆H A ☆N A ☆S H I ☆したことにより一之瀬の好感度が上がつた気がします。なんかいい感じにしんみりしてあるからいけるいける。まあ愛ちゃんの話全部嘘なんだけどね。テヘペロ

とりあえずやることはやつたので、最終日まで飛ばし飛ばしで行きますか。

まずこのタイミングで坂柳が動き出します。今回ばかりは敵対してしまいますが、必要経費つてことで許してもらうて。それと同時に一之瀬のメンタルがすり減り始めるので、フオローをしてあげましょ。弱つているところにつけ込むことで一之瀬退学回避フラグが立

ちやすくなります。

というわけで最終日です。この日は総合テストが行われる日でしたね。

試験内容は『禅』『スピーチ』『駅伝』『筆記試験』ですか。原作と同じですね。候補数自体多くないのでこういうことはよくあります。『禅』は姿勢を崩さずそ心を無にしておけば低い点を取ることはないですね。

『スピーチ』は持ち前の声のデカさと勢いで乗り越えましょう。
えつ、他に言うことはないのかつて？　え、うん。ないよ。

『駅伝』は12人で12kmを走ります。中継地点が0・8km毎にあるのでそこでリレーを行う感じですね。スタミナには自信があるので前半に運動が苦手な生徒を配置し、最後に堀北と愛ちゃんでゴリ押し逆転を狙います。堀北が1・6km、愛ちゃんが2・4km走り、他是0・8kmという振り分けのようです。人数が少ないというのは一見デメリットに見えますが、得意な人が長く走れるという観点から見ればそうでもないという。

始まつたはいいものの、連絡手段がないので順位がわかりませんね。唯一わかるとすれば、愛ちゃんがいる地点での往路の順位です。それ以降は戻つてくるまではわかりません。

ふむ、最下位ですか。最初にロケットスタートを決めたチームもあるようなので、逆転は可能ですね。

また時間が空いて、愛ちゃんの番が来ましたね。

4位ですか。しかし、2位、3位との差はそこまでなく、1位も1分程度先にいるだけなので逆転できますね。

まずはバトンをもらつてすぐに3位に浮上してそのまま2位を追いかけます。背中は捉えているので、抜くのは時間の問題ですね。1位はまだ見えませんが、すぐに視界にとらえることでしょう。

1位は最後の中継地点を超えたあたりで確認することができます。大体20秒ないくらいですかね。どうやらそこそこ速い生徒だつたようですが、残り100mで抜くことができました。

またもやあふれる才能を発揮してしまいましたねクオレハ……。

筆記試験はいつもの満点なので省略しまして、結果発表へいきましょう。

男子の結果はいいとして、女子の方から見ていきましょう。まずは学年混合の方ですが、こちらは2位でしたね。なのでプライベートポイントが18000ポイント、クラスポイントが3人合わせて11ポイントとなりましたね。ちなみに案の定橘書記がいるグループが最下位で、責任者に道連れにされました。カワイイソス。下級生に買収された上級生っていうのも情けない話ですけどね。

というわけで今回はここまでとなります。

今回獲得したポイントは、クラスポイントが651ポイントで65100ポイント、Aクラスからが 300000×40 人で1200000ポイント。ついに全員から得ることができるようになりましたね。まあすぐに38人になるんですけどね。()

そして試験で得た18000ポイントで合計が1283100ポイントとなります。

合計は8680300ポイント、進捗は43・4015%です。いよいよ折り返しが近づいてきましたね。では、次回もよろしくオナシャス!

1月 裏話

年が明け、愛たちが連れてこられた場所は林間学校だつた。

しかし、林間学校とは言えその規模は大きく、広大なグラウンドと校舎が2つ。その他にもいくつかの施設が存在しているようだつた。バスから降りると男子とは別れ、愛たち女子は分棟に誘導される。ここでまず、試験を行う際に共に行動する『グループ』を結成することになる。最初に学年毎にグループを作り、その後そのグループを3学年で1つにする。結果はどうやら、このグループ毎で決定されるらしい。

愛はグループ分けで一定の働きかけを考えているが、何も決まつていない現段階では静観する事に決めていた。愛が狙っている人物はただ一人で、最後まで余ることがほぼ確定していたからである。

愛はその人物さえ同じグループになることができれば他は誰でも良かつたので、8割ほど進んだら、あるいは一之瀬の所属グループが決まりそうなタイミングで声をかければ良いと考えていた。

「グループを決め始めた頃かと思いますが、皆さんにお伝えしたいことがあります」

まず学年毎に分かれてグループを決める事になつたのだが、早々に坂柳が動きを見せた。全員の注目が集まつたことを確認すると、坂柳は続きを話し始める。

「ご覧の通り、私たちはAクラスが9人のグループを1つ作ることに決定しました。なのであと6名お待ちしております」

そのグループには坂柳を始めとして、神室などAクラスの主力が集まつてゐるようだつた。愛としてはこのグループに入ることも一つの手段だ。

「一つ言つておくけど、Cクラスの人たちは一切受け付けないから」

「どういうことかな、神室さん」

「一之瀬、あんたのことが信用ならないのよ」

「ちよつと待つて、帆波ちゃんが信用できないつてどういうこと!?」

「早速雲行きが怪しくなつてきたな、と思いながらも愛はこのままこ

との行く末を見守ることにした。

「一之瀬、あんた大量のポイントを持つてるでしょ」

「……もしそうだとして、それが何か関係あつたかな？」

「大アリよ。もしCクラスに何かがあつて……例えばAクラスでの卒業が厳しくなつたりしたときに、自分だけそのポイントを使ってAクラスに逃げようとか考えているのでしよう?」

「違うよ。私はもしCクラスから退学者が出たりしてポイントが必要になつた時のために一時的に預かっているだけ!」

「そうだよ! 帆波ちゃんなら大丈夫だつて、みんなで決めたんだから!」

一之瀬に加勢している生徒は確かに白波だつたか。一之瀬のことが好きな生徒、という印象だ。他に特筆すべき点はない。

「そうかしら? 私は到底信用できなけれどね。他人に金を預けるようなこと、できるわけがない」

確かに、現在の一之瀬の評価は『お人好し』というものが最も優勢だ。しかし、いくら一之瀬のような人間でもどこかに必ず悪の部分があつて、どこかのタイミングでそれが爆発するかもしれない。

それまでただの一般人だつた人が突然巨万の富や名声を得たことで傲慢な部分が表に出てくるという話もよくある。

しかし一之瀬の場合は過去に万引きを犯したことがある、というものだ。動機は妹が欲しかつたものをどうしてもプレゼントしたいというものなのでこの話とは少しズレてしまうし、一之瀬の裏の部分はもつと別のところにあるという可能性もある。

「でも、帆波ちゃんは今までそんなことしなかつたし――」

「本当にこれからもそのポイントを私利私欲のために使わないと言えるわけ? 人は極限まで追い込まれた時に本性を表す。そんな時でも一之瀬は自分を犠牲にして、クラスのためにそのポイントを使う。そういう言い切れるわけ?」

「もちろんだよ! 今まで一緒に戦つてきて、そだつて自信を持つて言える!」

「たかが9ヶ月で、そんなに信じきつてしまふなんてね。とにかく、あ

んたちたちが一之瀬のことをどう思つていようが、その疑惑がある以上信用することはできない。これが私たちAクラスの考え方よ」「で、でも——」

「千尋ちゃん大丈夫だよ、私は気にしてないから。千尋ちゃんがそう言つてくれるだけでも十分だよ」

一之瀬は何ともないと取り繕うとしているが、内心は穏やかではないだろう。善人として過ごしてきたのにも関わらず、ここにきて真逆の評価を突きつけられたのだから。

さらに万引きの過去を想起させているとすれば、それは悪循環の始まりだろう。

「というわけです。6人はBクラスとDクラスから受け入れます。希望者は早く名乗り出ることをお勧めします」

一瞬、坂柳が愛に視線を送つたが、愛はそのグループに加わる予定はない。

「ふん、そんなのこっちからごめんだし！」

白波が坂柳にそう言い放ち、この件は一旦終結を迎えた。しかし、問題はまだまだ山積みである。真鍋が軽井沢とは組みたくないと言えば、伊吹は堀北だけは無理と愚痴を零す。

「愛さんは私のグループには入らないのですか？」

「まあね。今回は別で見張つておきたい人がいるから」

「そうですか、それは残念です。今回も敵同士ですが、お互いいい成績を残すことができるよう頑張りましょうね」

「頑張ろうね」

その見張つておきたい人である一之瀬は、今もグループ決めに奔走していた。自身のクラスであるCクラスからの協力は得られているものの、Aクラスの生徒をはじめやBクラス、Dクラスの一部の生徒との連携はうまく行っていないようだった。

このままだと時間がかかりすぎてしまうことが予想される。

「堀北ちゃん、一之瀬さんの手伝いをしてきてほしい。このままだといつまで経つても終わりそうにないから」

「わかつたわ。一応、あなたの希望を聞いてもいいかしら？」

「一之瀬さんと同じチームになるようにしてほしい。よかつたら堀北ちゃんも同じチームでどう?」

「……考えておくわ」

現時点で一之瀬と堀北の交流は無人島以外では無いに等しいが、あの2人なら上手いことまとめてくれるだろう。

しかし、しばらく観察していると時間がかかることには変わりがないことがわかった。ここで騒いでもいいことは何もないのにな、と難航しているグループ決めの様子を眺めながら愛はため息を溢した。

林間学校での1日は生活そのものが特別試験ということで、朝から予定が詰まっていた。

まず朝6時すぎに備え付けのスピーカーから大音量の音楽が流れ強制的に目覚めさせられる。その後、点呼をして清掃を行う。

寮のように掃除機があるわけではないので、一人一人に配られた雑巾で床や壁を掃除することになる。1グループが担当する範囲は広く、想像以上の重労働だった。

数日前まで別の団体が使っていたのか、それとも学校側が常に手入れを行っているのかはわからないが、汚れの残りやすい隅、物と物や壁との隙間に埃が溜まっているということはなかつた。

決められた時間いっぱい掃除を行い一息つけるかと思いきや、間髪入れず座禅を行うために部屋を移動する。そして担当する先生からいくつかの説明を受ける。

座禅を行う座禅堂では立っているときでも座っているときでも、左右どちらかの手で握り拳を作り反対の手でそれを包み込む。そしてそれを鳩尾の高さに持っていく。これが叉手という基本の姿勢だといふ。

また、座禅とは瞑想の1つで、精神統一のために行われるのだとう。禅は禅宗の修行の最も基本のものだ。禅とは、心が動搖しなくなれる状態を意味する禪那の略語であるのだという。

心の動搖が解消されると判断力や一貫性の向上が期待できる。これは今後の特別試験だけでなく、社会に出てからも重要な要素でありアドバンテージになりうる。

座禅を行う際はあぐらをかき、足は太ももの上に乗せる。これを結跏趺坐けつかふざといふ。

そして心は無にする。自身という存在を捨て去り、物体が座つているという感覚が大事なのだという。

禅を行う時間は線香が燃えている時間とされる30～40分。しかし、今回は初回であるため5分で終了した。

座禅が終わると朝食の時間だ。今回は学校側が用意してくれたのだが、次回以降は自分たちで用意しなければならないらしい。料理を苦にする生徒は少なそうだが、約40人分の食事を用意しなければならない以上、重労働になることは間違いない。そういうことを苦手とする生徒が多くいることが予想されるため、その過酷さは想像以上になるだろう。

その後行われる授業では、午前中は基礎体力作りの持久走を行うようだ。苦しそうな生徒が多く見受けられたが、部活動にかなり力を入れている愛にはウォーミングアップになる程度だった。

ただペース配分は自由とのことなので、途中から単独でペースを上げて走ることを決めた。

山の中で走ることは都会の真ん中で走るよりも数倍心地よかつた。それはこの場所が広々としていて、空気が澄んでいるからだろう。呼吸のたびに取り込まれる冷えた空気は極上の燃料だった。

周回数を重ねるごとに他の生徒の息遣いがシャットアウトされていく。自身の呼吸と森のさざめきを重ね、感覚が研ぎ澄まされていく。どれだけ走ったか、何周したかなどどうの昔に忘れてしまったが、愛はどこまでもいける気がしていた。

そんな時間も終わりを迎える。朝食もそうだったが、学校での食事と比較して内容は健康志向なものになつていて、それが物足りないという声を聞くが、山菜定食勢からすれば十分豪華で濃い味付けに感じた。

もしかすると、今までの山菜定食はこの試験のためにあつたのかかもしれない。

「八遠さん、持久走速かつたね、びっくりしちやつた」

「あはは、走つていたら気持ち良くなつちやつてこここの空気が綺麗だからついい」

「そうだよね。学校で走る時とは違つたかも」

「中国から来たという王美雨ことみーちゃん走つていた一之瀬も似たようなことを感じていたらしい。」

「空気が綺麗だからかもね。いいリフレッシュになつたかも」

「随分と試験を楽しんでいるようね」

「あ、堀北さんここ空いてるよ」

「ありがとう、一之瀬さん」

そこに堀北も加わり、3人になる。

「実際試験なんて楽しむくらいのつもりでやらないと精神的にキツイでしょ」

「すゞいなあ、その考え方。私にはちょっとできないかな。にやはは」

無人島試験の頃までの一之瀬であれば可能だつたかもしけないが、5月からポイントを減らし続けた結果Cクラスに降格してしまったためだろう。

これまでクラスを引っ張り続けてきた立場だからこそ、人一倍責任を感じているに違いない。

「緊張しすぎも良くないからね。頑張りすぎると痛い目に遭うから」

「体が固まりすぎては本来の力を発揮できなくなるものね」

「そういうこと」

愛が樂観的に見えるかもしれないが、ちゃんとミスがないようにと気をつけてはいる。それでAクラス入りが遅れては今までが無駄になつてしまふからだ。

「皆さん、お疲れ様です」

「お疲れ〜」

続いて椎名も合流する。椎名は空いていた愛の隣の席に座つた。

「最初はどうなることかと思いましたが、今のところはなんとかなっていますね」

「一之瀬さんのおかげだよ」

「そんなことはないよ」

一之瀬は謙遜しているが、このグループをうまくコントロールできているし雰囲気も悪くはない。一之瀬と同じグループになる上で不安要素だつたAクラスは今回はない。

リーダーの動きができるのが一之瀬だけでなく堀北もいたのも功を奏していると言える。

櫛田と同じグループがいいなどと言っていたのを止めておいて良かった。堀北からのアプローチがなくても、愛が櫛田の過去を知っていることがバレない動きは変わらないので、ここでグループが違うからといってこの先に大きな影響を及ぼすとは考えにくい。

「堀北さんはさ、あの状態のクラスをどうやってここまで立て直したの？」

会話が途切れたタイミングで、一之瀬は堀北にそう切り出した。

堀北は頭を悩ませた。

このクラスの課題が解消されたわけではない。マイナスがゼロになつた程度で、生徒の能力値はCクラスの方が上である。

現在のこの結果がどこに起因しているかといえば、その大部分は愛と綾小路によるものだつた。

変に綺麗事を口にしても、一之瀬への嫌味にしかならないと判断した堀北は一之瀬に残酷な現実を突きつける選択をした。

「私たちのクラスは立て直しに成功したわけではないわ。今でも団結力で言えば一之瀬さんたちの方が上だとはつきり言えるもの。私たちが結果を出すことができているのは個人の力が大きいわね」「……そつか。夏は堀北さん大活躍だつたもんね」

一之瀬はクラス一丸となつて試験に取り組み結果を残したいと考えている。しかし、自分たちの上を行つたクラスはその真逆を行く戦いを続けてきているのだという。

文字通り、眞面目な人ほど痛い目を見る理不尽がそこにはあつた。

「確かに堀北さんたちみたいに最後は個人の力が必要なのかも知れない。いけど、私は今のやり方を変えたくない」

一之瀬からすれば、今の言葉は一つの宣言だつたのかも知れない。しかし、その眼からは不安や戸惑いが、その声からは震えが、確かに感じ取ることができた。

「Cクラスの人たちには相談したの？」

「ううん、してない。ここで弱音を吐いたらダメだなつて」

確かに、リーダーが揺らげばそれは水面の波のように広がつていく。

しかしそれが仇になつているのではないかと愛は考えた。Cクラスが徐々に後退していく原因も、一之瀬にあるのではないかと。

「一之瀬さんは強いね」

愛は一之瀬を擁護する選択をした。一之瀬が前に進むためには、過去との決別——つまり一之瀬のリセットが必要だという結論に至つたからだ。

これから活発になるであろう一之瀬潰し。本人からすれば辛い時期になるだろうが、ここを越えなければ一之瀬帆波が前に進むことはない。

それに、まだほぼ他人の域を出ない今それを話したところで、考え方を改める可能性は低い。

「にやはは、そんなことはないよ」

一之瀬には変わつてもらわなければならぬ。ただのお人好しから一之瀬帆波へと。

そうしなければ、使い物にならないから。

午後は座学だつた。外を見やると男子が持久走を行つてゐる。男女では午前と午後の日程が入れ替わるらしい。

今回は初日ということで何を学ぶかという説明を受けた。ここで

は、試験の評価項目の一つである『社会性』について学ぶことが大半だ。学校で行われる授業をここでも行うというわけではないらしい。『社会性』ということは、将来働く際のルールやマナーといったことがメインとなってくることが予想される。下級生である1年生からすれば、先輩という目上の人と共同生活を送ることを考えると『社会性』を学ぶ機会は至る所にあると言える。

そして夕方に2度目の座禅を行い、夕食を終えると消灯时刻の22時までは自由時間だ。

2、3年生の先輩が部屋にやつてきてババ抜きすることになった。

全員が一斉に遊ぶことは不可能なので、各学年から3人ずつ参加するということになった。

愛は一回戦目から参加することになった。3年生からは佐藤、上田、深見という生徒が、2年生からは安藤、木村、服部という生徒が参加し、1年生は愛の他には一之瀬とDクラスの木下が参加するようだ。

ペアになつているカードは1組だけあり、4枚からのスタートだ。トランプを選ぶ順番は時計回り。右隣に一之瀬が座つているため、愛のカードを一之瀬が選ぶことになる。

最初の2巡は動きがなく、3巡目以降になつて手札を減らし始める生徒が現れる。愛の手札は順調に減つているとは言えず、1人抜けたあとようやく2枚とることができた。

その後もペアがなかなかできなかつたものの、下から3番目、つまり7番目に上がることに成功した。

最後に残つたのは一之瀬と佐藤だつた。

「一之瀬さんつて彼氏とかいないの？」

「いないですよ～」

「でもモテるんじゃない？」

「そ、そんなことないですよ」

佐藤が恋バナを振ると、途端に一之瀬の目が泳ぎ始めた。確かに一之瀬はモテる要素しかないよな、と心の中で佐藤に賛成する。

美少女と言える分には顔がよく、性格もいい。さらには身長もそれなりにあり胸がデカい。とてつもなくデカい。

あんなのダメ男製造機だろ、と言いたくなる要素しかない。少なくとも、愛はダメ人間にさせられるだろう。

一之瀬は好きな相手がどんなにパチンカスでヤニカスだつたとしても『ごめんね、ごめんね』って言いながら世話してくれるタイプだ。……ごめん、一之瀬。

「あっ」

「ふつふつふ、私の勝ちー！」

結局、佐藤の猛攻に耐え切ることができず一之瀬は敗北してしまった。

その後もこんな調子でババ抜きと恋バナで盛り上がり、一之瀬が過去何度も告白されていたことや堀北が実はブラコンであることがバレかかたりしていた。確かに仲が深まつたような気がしたところで初日が終了した。

2日目から4日目まで同じような日程で試験は進んでいった。

しかし5日目の持久走はいつもとは異なるものだった。

「今から皆さんには駅伝で走るコースを下見してもらいます。ルートは責任者に配布したのでグループ全体で共有しておくこと」

一之瀬にそのプリントを見せてもらう。コースは山の中を往復する12kmで、かなりのアップダウンがあることが見受けられる。道は舗装されているようだが、足にかなりの負担が予想される。実際にこのコースを走るとなると、距離以上に疲労が蓄積することは容易に想像できる。

「また、この地点に昼までに戻つてこられなかつた場合は減点されるので、それまでに戻つてくるように」

時間はおよそ3時間ほど。距離だけを見れば不可能ではないが、アップダウンがどれだけダメージを与えるかによつては時間ギリギ

りか最悪足りないと、いう事態に陥るかもしれない。時間設定はかなりシビアだ。

心配事といえば、みーちゃんら運動が苦手な生徒だ。仮に足が痛み歩けない、となつた場合に背負っていくことができれば問題は解決できるが、最も余力があると思われる愛が小柄なせいでそれが難しい。実際、折り返し地点にたどり着くのに半分以上の時間を要してしまつた。高低差が思つて以上にあり、ダメージの蓄積が早かつた。

「今から急いだらギリギリ間に合うかも知れないと……」

「これではペースを上げるのは難しそうね」

実際みーちゃんの足は限界を迎えているのか震えている。もしかしたら豆ができていいかも知れない。

「一回休もう」

「……そうね。時間はギリギリだけれど、そうするしかないわ」

結果、出発する頃には残りは70分しかなくペースを上げ続けなければならぬ状況になってしまった。

しかしみーちゃんの足のダメージは取れず、堀北がおぶつていくことになつた。

みーちゃんは申し訳なさそうにしていたが、駅伝でリタイアするよりはマシなので受け入れてもらつていて。

とはいえた堀北一人で背負い続けるのも限界があるので、定期的に一之瀬や木下のような運動ができるメンバーと交代している。

幸いにも帰りは下りの方が多く行きよりも早いペースで戻ることができ、時間になんとか間に合わせることができた。

「ありがとう、2人のおかげで間に合つたよ」

「いや、むしろ私なんて何もしてないよ。小さいから誰かを背負つていくなんてできないしね」「ううん、時間に間に合わせるためにどうすればいいか、一緒に考えてくれるだけでも嬉しいの」

Cクラスは普段どのような戦い方をしているのだろうか。一之瀬の返答は疑問を抱かせる言い回しだつた。

その後の昼食でも、一之瀬は浮かない表情だった。愛の知らないところでAクラスからの攻撃が始まっているのかわからないが、今までくることといえば一之瀬の負担をできるだけ減らして良い成績で終えることだけだ。

そしてあつという間に夜が更ける。消灯時間の22時を過ぎて、愛は眠い体を起こした。それはある人物と話をするためだつた。

外に出ると、昼間は心地よかつた寒さが凶器と化して全身を襲う。山間部で標高もそれなりにあるためか、体感温度がより低く感じる。寒さ対策として上着を羽織ってきたものの、睡魔を消し飛ばした極寒はそれすらも意に解さないらしい。

天を見上げれば、普段は見ることのできない美しい星空が広がっていた。冬の大三角がはつきりと見える。

草木の揺れる音や虫の鳴き声以外の雑音がないこの空間でしばらく景色を楽しんでいると、土を踏みしめる音が聞こえてきた。

それは今回愛が呼び出した人物——一之瀬帆波が発しているもので間違いなかつた。

「どうしたの？　こんな時間に2人で話がしたいなんて」

日中ならともかく夜に人気のない場所で2人きりだ、いくらこの数日で打ち解けたとはいえ一之瀬が警戒しているのも無理はないだろう。

「あはは、そんなに警戒しなくてもいいよ。取引だとかそんなことするつもりないからさ」

「そもそもこんな時間に抜け出しても大丈夫なのかな……」

「大丈夫だよ。堀北先輩とかもこつそり抜け出して話してるみたいだし

し

「ほ、ほんとかなあ！」

愛は学校側は仮に気づいていたとしても気付かぬふりをしているのではないかと考えている。秘密裏の取引や駆け引きもまた、特別試のではないかと考へている。

秘密裏の取引や駆け引きもまた、特別試

験の要素の一つだからだ。

今回はそれとは外れるが、同じように見て見ぬ振りをされるだろう。

「雑談はこの辺りにして本題に入ろうか。見られても困るしね」

「そうだねっ」

何か覚悟を決めたかのように息を一つ吐くと、ゆっくりと話し始めた。

「一之瀬さんはさ、私がなんでDクラスだつたのか考えたことはある？」

「……あるよ。八遠さんだけじゃなくて、堀北さんや平田くんたちもDクラスにいるのが不思議なくらいだもん」

数値として現れる部分だけを見れば、Dクラスに振り分けられるべきではない生徒がこの年は多いのは事実。愛はその最たる例だつた。しかし彼らにはDクラスに振り分けざるを得ない理由がある。

「今からする話はそこに関わってくる話。ちょっと昔のことだけどね」

「……それ、私に話しても大丈夫？　いつも一緒にいる堀北さんとかではダメかな」

「この数日、一之瀬さんと関わってみて大丈夫つて思つたから話をしようつて決めたから」

そう伝えてもまだ腑に落ちない顔をしていた一之瀬だが、引き下がる様子のない愛を見て、しばらく考えた末に首を縦に振った。

それを確認して、愛は話を進める。

「あれは小学生の頃。昔からなんでもできた私には友達はおろか話す相手もいなかつたんだ」

「ちよつと想像がつかないね」

「不気味に見えたんじやないかな。考えていることが理解できなくて」

ただ勉強や運動ができる程度であれば良かったが、愛は様々なことに手を出しては受賞し表彰されていた。最初こそ祝福されたが、次第に恐れられていった。

「最初は誰とも関わらないようにしていたんだけど、段々そうはいかないようになつてきてね」

「それつて……」

「いじめつてやつだね」

八遠愛への恐怖は次第に排除へと変わつていった。誰が主導したかはわからない。次第に、教室にそういう空気が蔓延していつたのだ。

「上履きが消えた。教科書が消えた。机や椅子が消えた。いじめとしてはありふれたものだつたね」

「怖くなかったの？」

「怖がる理由がないもん。少なくともあの世界の中では私が一番優れているという自覚があつたからね。可哀想な子達だなあつて思つてたよ」

原動力が恐怖であることがわかつていて、愛が萎縮する必要性はどこにもなかつた。軽蔑しか、心には残らなかつた。

「言葉じやダメだつて思つたのかわからないけれど、だんだん殴られたり蹴られたりということが増えていつた。5年生くらいだつたかなあ」

一之瀬は悲しげに顔を伏せ、相槌を打ちながら話を聞いていた。
「1年くらいは抵抗せずに我慢していたんだけど、やがて限界が来てしまつた」

「つまり……」

「そう。6年生に上がつてしまらくして、いつものように殴りかかるうとしてきた子にやり返してしまつたの。家からカツターを持ち出してね」

「……つ」

「当時のことはよく覚えてない。今までの恨みが溢れてきて、自己防衛に必死だつたのかもしれない。もしかしたら本気で殺してやるつて思つていたかもしれない」

だが当時ニュースで取り上げられるることはなかつた。学校が圧力をかけたのだろうか。

「Dクラスになつたのは——」

「そう。平たく言つてしまえば殺人未遂。私の、一生許されない生涯付き纏う罪だよ」

一通り話を終え、愛は悲しげな表情を浮かべる。

一瞬、一之瀬の方に視線を向ける。暗闇と前髪のせいで表情は見て取れなかつた。

「……ごめん。こんな話聞かせて」

「ううん。大丈夫」

2人が沈黙し、聞こえるのは葉音や虫の鳴き声だけになる。それらが何曲か歌い上げたような錯覚を覚え——ようやく一之瀬が口を開いた。

「八遠さんは前を向いて歩き出しているんだからすごいよ」

「でも時々夢に出てくるんだ。私が実行しているところを俯瞰してい

る夢を」

その時、愛は何か柔らかく暖かなものに体が包まれる感覚を得た。一之瀬が愛を優しく抱きしめていたことに気付いたのは、数秒経つてからのことだつた。

「大丈夫、八遠さんなら乗り越えられる」

「……ありがとう」

愛から離れた一之瀬が手を差し伸べてくる。

「夜も遅いから、早く戻ろつ。試験はまだまだあるから頑張らないと

！」

「うん、そうだね」

その手を取り、愛と一之瀬は歩幅を合わせて来た道を戻る。突然建物の玄関前で一之瀬が足を止め、それに気づかなかつた愛は手を引っ張られる。

「今から八遠さんのこと名前で呼んでもいい？」

「……うん」

「改めてよろしくつ、愛ちゃん！……にやはは、少し恥ずかしいな」

「よろしくね、帆波ちゃん」

恥ずかしそうに目を逸らす一之瀬を見て、今日話をして良かつたと

愛は改めて思った。

最終日。総合テストを終えて、生徒は校庭に集められた。夕方に差し掛かり寒さが気になるが、全校生徒を揃えることができるのはここしかなかつたのだろう。

そしてここで昼に行われた総合テストの結果発表が行われる。

「堀北ちゃん、予想は何位?」

「1位と言いたいところではあるけれど、上級生の結果次第ではどうなるかわからないわね」

坂柳擁するグループはやはり強力で、駄伝では1位を取つたが他の種目ではどうかと言われれば微妙だ。

「でも最下位はなさそまだから一安心かな」

「あとは他の1年生グループがどうかよね」

堀北は心配そうに他のグループを見回す。確かに、南雲の策略に気付いていなければ不安になるのも仕方がない。南雲が堀北兄を追い込むために橋を退学させようとしているなど普通は気づかないだろうから。

「とにかく、他の1年生グループが最下位グループの中で最も低い成績を取つていないうことを祈るしかない」

「そうね。もしDクラスから退学者が出るようであれば、その時は受け入れるかどうか考えなければならないわ」

退学を回避するためには2000万ポイントに加えてクラスポイントも要求される。愛にとつても、クラス全体にとつても大きなダメージになることは間違いない。

「でも、今回はBクラスから——ううん、1年生からは退学者は出ない」

「そう言い切れるのは何故——」

「これより試験結果を発表する。私語はやめなさい」

堀北が何か言いかけていたが、それは教師の言葉に遮られてしまった。

「まずは1週間、」苦労だつた。今日までの学びを通して様々なものを得られたと思う。それらは今後の学校生活にも活かしていつてもらいたい」

壇上の教師が挨拶を口にし、いよいよ結果発表へと移つていく。まず男子。1位は二宮倉之助という生徒がリーダーのグループだ。ここは堀北兄が所属しているグループで、順当だという空氣だつた。チラリと堀北の様子を見ると、その表情に変化は見られなかつた。この結果が順当だと考えているのか、はたまた興味がないのか。愛は深く考えることはせず視線を戻した。

そして綾小路のグループは3位。綾小路グループ消滅によつて幸村との関係性がそれほど築けていないことが原因で原作の2位から順位を落としたのだろう。それでも上位に留まるあたり、機転を利かせていたのかも知れない。

それよりも、これから女子の結果発表の方が重要だ。堀北兄に気持ちの悪いニヤついた笑みを浮かべている南雲が何をしようとしているか、堀北兄は気づき始めている。

堀北も様子がおかしいことに疑問を抱いているようだが、まだ真相にはたどり着いていなさそうだ。

そして女子の結果発表。1位は綾瀬夏という生徒がリーダーを務めているグループだ。1年生グループのBクラスには櫛田など数名が所属しており、かなりポイントを稼ぐことに成功したようだ。

そして愛たちは2位。納得できる順位には収まつただろう。

「最低ラインといつたところかしら」

「上級生の結果も影響するからなんともいえないけどね」

結果上では2位だが、学年別ではわからない。1位と逆転しているかもしれないし、他のグループに抜かれているかもしれない。

いずれにせよ、今回の結果は十分成功に値すると言つてもよかつた。

そして結果発表は進み、最下位の発表。残念なことに退学者が出る

らしい。

3年の猪狩は、自身が責任者が務めるグループがボーダーに達していないということを聞いて、顔を歪ませた。

「責任者の退学は決まつた。あと問題となるのは……」

「誰かが道連れになるのか、だね」

3年の男子生徒、確か副会長だった男が南雲に詰め寄る中、道連れとして猪狩はある生徒の名を口にする。

「橘！ コイツが足を引つ張つたせいで私たちのグループはこんな結果になつたのよ！ 当然橘も退学に決まつてるじゃない！」

「橘書記が……！」

「南雲と堀北兄はこの試験の結果で戦つていたんだ」

「綾小路くん、それが橘先輩の退学にどうつながるのよ」

綾小路がやつてきて、前生徒会長と現生徒会長の間で行われていたことについて話し始めた。

「南雲が堀北兄に戦いを挑んだんだ。どちらが優れているか、とな」

だが、南雲が堀北兄に直接妨害行為を働いても堀北兄の退学が認められるはずもなく、男子グループでの妨害はグループ決めの段階で失敗に終わる可能性が高い。

そこで考えたのが、女子グループで橘を退学させポイントを支払わせることで実質的な勝利を目指すことだつた。

「堀北兄は確実に橘が退学することを防ぐ。Aクラスはクラスポイントを落とすことになるし、そうなると他のクラスにもチャンスが生まれる。橘の他のグループメンバーは全員南雲にポイントで買われているのだろうな」

協力したメンバーが所属するクラスも当然クラスポイントを失うが、南雲からプライベートポイントを受け取つていているためここで差が生まれる。

プライベートポイントは初めに茶柱が話していたように、文字通り何でも買うことができる。クラスポイントも大事だが、プライベートポイントを保有していればしているほど逆転の一手の幅が広がる。

猪狩を引き入れたということは、猪狩には退学のデメリットを超え

るポイントを使って取引した可能性もある。

学年全体を掌握すると、このような強引な手を打つこともできると
いうわけだ。

Aクラスに昇格した後はAクラスで卒業したいと考えているので、
またコツコツと貯めていく必要があるだろう。

「……兄さん」

「兄がAクラスで卒業できるのか、不安なのか？」

「……いえ、兄さんは必ずAクラスで卒業するわ」

そう言う堀北の表情を目にして——愛は目を逸らした。

2月

救済を押し付けるRTA、はーじまーるよー！

前回は林間試験をやつたところでしたね。

今回は一之瀬潰しが行われる2月を走っていきます。

……おつと、教室が少し騒がしいですね。近くにいる堀北にでも話を聞いてみましょうか。

なあなあ、今日なんかあつたん？ 平田と軽井沢が別れた？ ほーん。

なんの騒ぎかと思いましたが、ここでついに平田と軽井沢の破局報道でしたか。確かに側から見れば衝撃ですよね。

ただ、この2人の交際は軽井沢の地位確保のために成立したもので、当初の目的が達成された以上続ける意味を失っていました。それに加えて今の軽井沢は綾小路大好きちゃんになってしまっているので、平田と付き合っている状況が足枷になってしまっていた可能性もあります。

話は変わつて今回の一之瀬潰しですが、実は裏で南雲と坂柳が繫がつているんですね。坂柳が一之瀬の過去の話をどこから拾つてきたのかは知りませんが、これを利用してCクラスを壊滅させたい坂柳と一之瀬を完全に自分のものにしたい南雲の利害が一致したということが今回の事件に繋がっています。

なので愛ちゃんからそれとなく止めようとしても無駄になつてしまふんですね。

では愛ちゃんが解決に向けて何をするのかといえば、まず綾小路に協力するようお願いするところからです。

原作では綾小路は自ら動いていましたが、それは一之瀬と一定以上の関係性があり助けるだけのメリットがあるからだつたんですね。

ですが現在綾小路と一之瀬にほとんどつながりがありませんのでこのままでは動いてくれません。一応神室が綾小路の部屋に押し入るイベントで綾小路は動かざるを得なくなるわけですが、愛ちゃんからもお願ひすることでより確実に行動に移してくれるようにするわ

けです。

なので綾小路を稼働させるところから始めていく必要があるんですね。

そして綾小路には噂の応酬を学校が介入せざるを得ないほど大きなものにしてもらいます。要するに原作と同じようなことをしてもらうというわけですね。これよりいい方法が思いつかなかつただけだろおたんこなすが、だつて？

そうだよ。（開き直り）

坂柳に辞めさせることも無理なので、なんだかんだこれがベストなんですよね。

そんなことを話していたら、同じ日の放課後に坂柳がBクラスにやつてきました。愛ちゃんの方に視線が集まつた気がしなくもないですが、坂柳の今回の目的は別の人なのでここはスルー。

そして山内の名前が呼ばれると朝以上にクラスが騒然としました。そりやあそうでしょう、あの山内ですからね。坂柳とは一生接点が生まれることはないと思われてもおかしくはないです。

なんやかんやあつて山内が坂柳に連れて行かれ、なんの目的か気になるところですが知りようもないのであつさりとその話題はされなくなりましたね。

さて、放課後の愛ちゃんはいつも通り部活動に励んでいるわけですが、今日はお客様がいるようですね。突撃隣の晩御飯でもしましょうか。

神室ネキ何してんすか？　え？　なんでもいいでしょ、つてそりやあそれは自由だけどさあ……。

あ、もしかしてテニス部に興味ある感じ？　なら体験しちゃいなＹ

○☆

えー、違うんかい。神室ネキとも仲良くなりたいんだけどなあ。

愛ちゃんみたいなタイプ苦手なん？　でもこの前坂柳みたいなのも無理つて言つてたやん？　じゃあどういうタイプなら好きなん？

ちえつ、教えてくれないんかい。

……まあ別にいてくれても構わんが、邪魔だけはするなよ？ 愛ちゃんとの約束だゾ☆

……一之瀬は犯罪者？ 林間試験の時もそんなこと言つてましたねえ。で、なんかそういうデータあるんすか？

まあ噂だしそういうデータはないんですけどね。

え？ もう行くん？ 体験入部は——あつ、結構ですかそうですか。

神室は結局帰つていきましたが、何がしたかつたんでしようかね一体。

という冗談はさておき、現在Aクラスは例の噂を広める段階まで進んだということですね。

この辺りから一之瀬のテンションが目に見えて下がつてくるので、状態確認の意味も込めて何度も接觸しておきましょう。ついでに接触（物理）もし t（殴

そして数日後、ついに寮の郵便受けに『一之瀬帆波は犯罪者である』と書かれた紙が投函されているのを確認できました。これが2月11日で、その3日後がバレンタインですね。この辺りから一之瀬が休み出しますので突撃していきます。

しばらくはこうして一之瀬の様子を確認しておきましょう。ここが最後の好感度上げポイントなので、逃して一之瀬退学または廃人ルートだなんて勘弁ですからね。

ちなみに2月のイベントはこの一之瀬潰しだけかと思つたかもしれませんが、普通にテストがあります。愛ちゃんは当然100点なんですが、それでもありますね。

そのテストの前に仮テストが行われるわけですが、ここで追加の噂が流れます。この中身はランダムですが——Oh……愛ちゃんに関するものもありますね。

『八遠愛はAクラスに移動するために部活動で得たクラスポイントをAクラスに渡す代わりにプライベートポイントを受け取つて』ですか、なるほどなるほど。誰がどうみても事実ですねこれは。

ただ、ここで慌てるのは早計です。クラスメイトからこれは事実か

と問い合わせられますが『嘘だッ!』と答えておきましょう。

この騒動が収束するまでこの事実を隠し通すことに成功すれば、クラスマイトからの疑惑も無くなりますからね。むしろ好都合だつたりする。

他にも綾小路が軽井沢のこと好き説とか色々ありますね。なお実際は軽井沢が綾小路のことを好きなだけの模様。

そして坂柳に入れ知恵された山内が噂の対象になつた人を煽つていくわけですが、愛ちゃんが教室に入つた瞬間に早速来ましたね。

体育祭で個人総合取つたり表に出ている実績を使って山内を返り討ちにしましよう。これで山内はあたおかという印象付けに成功したのでこの後退学していただきます。（ニツコリ）

なお救いはありません。

さて、他の面倒ことは全て綾小路に押し付けて、一之瀬のお世話に行きましょう。目的は2つです。

1つは一之瀬に過去を吐かせることで『犯罪者の一之瀬帆波』を受け入れてもらうことです。原作でも綾小路くんが『心を叩き折つた』と表現していますが、こうすることで折れた箇所は再びそくならないように強固になります。

『老朽化した家を建て直したけど、前より耐震性能下がつちゃった☆』とか言われたらブチギレ案件でしょう？ そういうことです。

これによつて坂柳のダイレクトアタックを耐え凌ぎ、優勝していくわけですね。

それ以上は学校が介入するのを祈るしかないでの運ゲーになりますが、この様子であれば問題はないでしよう。

それから数日が経過して、一之瀬が風邪で休み始めて3日目です。綾小路は5日目から一之瀬のメンタルブレイクを始めていましたが、今は愛ちゃんと作業を分担しているので時間に余裕があります。そのため、こうして少し早めに行動に移すことができるというわけなんですね。ちなみにここで一之瀬が自白してくれなかつた場合、大幅なタイムロスになる可能性が高いためほぼほぼ再走です。（2敗）

成功する確率を高めるためにも、2日の前倒しは必要というわけな

んですね。

突撃するのは原作通り昼休みにしましよう。綾小路も言つていませんが、人がいないタイミング、というのが大事なのでね。

さてはお前、綾小路がやつたことそのまんまやつてるだけでチャート考えてねえなって思いました？ 正解です。（涙目）

だつて仕方ないじやないですか。綾小路の考えはかなり合理的ですし、成功率も高いんですもん。

というわけで昼休み、早速一之瀬の部屋を訪問します。ここで大事なのは『待つてるよ』など一之瀬に登校を催促するようなことは言わないということです。

一之瀬はいい子なので、当然学校に行きたいという気持ちを抱いています。でも、噂が事実でクラスメイトや仲の良い生徒から冷たい目で見られたらどうしようという感情もあるわけです。何より、現在は中学校時代のトラウマが表に出てきている状態なので、待つてるなどと口にすれば一之瀬はみんなに迷惑をかけてしまつてていると思い込み、より登校する確率が下がってしまいます。また、当然ですが過去の話をストレートに聞いてはいけません。

一之瀬からそういう類の話題を振つて来た場合のみにしておきましょう。

これらの注意点に気をつけながら一之瀬の精神を破壊していきます。

ちなみにタイムリミットは次の水曜日です。なので大体1週間くらいですかね。なぜ水曜日なのかというと、原作をしつかり読んでいる兄貴たちなら当然わかっているかと思いますがその2日後に学年末試験があるからです。金曜日だけ登校したとしても、試験があるからだと思われかねないからですからね。というわけで弁当を持って一之瀬宅に突撃イ！

一之瀬ネキオツスオツス、風邪治つた？ 熱下がつたか、良かつた良かつた。せつかくだし少しおしゃべりしていこうぜ。退屈つしょ。
あ、気分じやない？ そつかあ。とりあえず風邪が良くなつてきたのはよき。

会話はこの辺にして、時間ギリギリまで玄関前に居座つておきました。そして時間になつたら、また来るねと言つて学校に戻ります。去り際に来なくて大丈夫だから、みたいなこと言われましたが知りません。次の日も行きます。

……はい。流石に土日には行きませんでしたが、結局水曜日になつてしましましたね。

今日ダメならセカナあ……。

……。

おつ、来ましたね。一之瀬が聞きたいことがあると言い出しました。これで一之瀬蘇生フラグが立つたことになります。

『聞きたいことがあるの』という類の台詞を引き出せなければ失敗です。諦めましょう。

先ほどかなりのタイムロスになると言いましたが、どの程度かといふと現時点では2年生の夏～秋頃に完走できる予定ですが、このロスで場合によつては1年以上遅れます。

一番厄介なのがAクラスからのポイント供給がストップすることなので、一之瀬の救済をしなかつたせいで坂柳が愛想を尽かしてポイント供給を止めやがつたことがあるんですね。次の学年末特別試験でAクラスと当たれば良いものの、他のクラスと当たった場合数ヶ月も止められることになり、途中で諦めました。

チエスとか他ので戦えよとか言われるかもですが、特別試験じやないどダメみたいです。どうしてなんですか。（血涙）

要するに、一之瀬潰しを防ぐことで一之瀬を駒にできますし、あえて坂柳と対立することで逆にご機嫌になるのでそれを狙つた形になります。なんだよあの戦闘狂……。（呆れ）

そんなことを話しているうちに、一之瀬の自白が終わりましたね。これで次の日学校に来ることでしよう。

あとは一之瀬が坂柳を論破し、学校の介入によつてこの事件が終われば終了ですね。

そんなこんなで翌日です。

おつ、朝からなにやらイベントがあるようですね。

どうやら愛ちゃんと一之瀬が寮のエントランスでばつたり遭遇したようです。ちゃんと制服を着ているので、登校する決心がついたようですね。これでリセしなくても良くなつたので安心です。

学校に着くまで、ひたすら一之瀬に感謝されましたが無事到着です。今日のどこかのタイミングで坂柳がCクラスに突撃すると思うので、そのイベントが発生次第野次に行きましょう。

AクラスからCクラスへ移動する以上、ちょうど向かう様子が見られるのでその後ろを着いて行きましょう。

はい、昼休みに入つてついに坂柳が神室や橋本、その他諸々を連れてCクラスに凸するのを確認したので、少し離れて追いかけます。……はい、無事一之瀬は万引きの告白に成功しましたね。これで一之瀬の退学、廃人ルートは回避できましたね。

それにしても、万引きがトラウマになつてた人がいる裏で平然と入学初日からコンビニで酒の万引きをしてる人もいるつていうこの状況、なかなか面白いですね。それだけなんんですけども。

まあ何はどうあれ、無事学校の介入も入りCクラスはAクラスに勝利できました。めでたしめでたし。

これ以上はいてもどうしようもないのをさつさと引き上げましょう。

教室に戻ると坂柳から電話がかかってきます。ここで次の特別試験の順位で競おうぜとか言つてくるのでこれを了承します。

おそらく綾小路にも同じようなことを伝えていると思うのですが、直接対決的なやつはどうするんでしょうね。坂柳のことなので多分その辺はうまいことやるんでしょう。知らんけど。(適当)

とにかく、今回はここまでです。

特別試験はなかつたので、クラスポイントは前回の林間試験の加算分を合わせて676ポイントなのでプライベートポイントは67600ポイント。Aクラスから120万ポイント。そしてテスト恒例、満点記念の100000ポイント。以上ですね。

合計は9957900ポイントです。進捗は49.7895%、ほ

ぼ50%です。

それでは今回は以上です。次回もよろしくオナシャス！

2月 裏話

立春にあたる節分を越え暦の上では春を迎えたが、依然として厳しい寒さが続くある日。

いつも通り登校した愛だったが、教室の扉をくぐつて喧騒の中に飛び入ると違和感を覚えた。どこか色めき立っているような、そんな雰囲気だつた。

愛は違和感の正体を確かめるべく、自身の席で勉学に励む堀北に声をかけた。

「おはよう、堀北ちゃん。なんか騒々しいけど何かあつたの？」
「平田くんと軽井沢さんが別れたらいいわ。勉強に集中したいけれど、教室全体に響くように話すものだから嫌でも耳に入つてくるのよ」

「な、なるほど……」

呆れた笑いをして、愛は池の方を見た。確かに、この騒がしさの中でもその声ははつきりと耳に届いてしまつていて。本人に影響がなければいいが。

「入学してすぐ付き合い始めていたし、不仲の噂もなかつたからちよつとびっくりする気持ちもわかるけどなあ」

それに加え、平田の女性人気が高いこともその要因の一つとして挙げられるだろう。

「ちなみにどつちが振ったの!? 平田くん？ 軽井沢さん？」

「あなたもそつち側だつたわね、そういうえば……」

林間試験での一幕を思い出してか、堀北はそうため息を漏らしたあと『軽井沢さんよ』と答えた。

「へえ、なんか意外だなあ。平田くんに振られる要素なさそうに見えるけど」

「だから余計に賑やかなのでしようね。平田くんと付き合うことをステータスとしていてもおかしくなさそうだもの」

「私だつたら別れないけどなあ。そして堀北ちゃんに自慢しまくる」「あなたが平田くんと付き合つていなくて心の底から安心したわ」

顔を覗めてそういう堀北を見て、愛は挑発的な笑みを浮かべた。

「嫉妬？」

「そうだと思うならあなたのその目はレプリカなのでしそうね」

「確かめてみる？」

「は、離れなさい……」

愛が堀北の瞳を覗き込むように見つめる。唐突に触れてしまいそうな距離まで近づかれた堀北は頬を赤く染めて目を逸らした。

「堀北ちゃんはかわいいなあ」

「それ以上からかうのはやめなさい……！」

「はーい」

シャーペンを握る力が強くなつた堀北を見て、これ以上は反撃の可能性能があると判断し愛はここで引き下がることにした。

「例の噂はおそらく今日だけだから、我慢するしかなさそうね……」

「だねえ」

再びノートと教科書に向かい始めた堀北を邪魔するのは申し訳ないと想い、それ以上会話を続けることはせず自身の席へと戻つた。

* * *

「おじゃましまーす」

平田と軽井沢の破局騒動の日から数日後の放課後、愛は綾小路の部屋を訪れていた。

やはりというか、その部屋は余計なものはなくスッキリとした印象を受けた。愛の部屋も似たようなものであるが。

「飲み物はお茶かコーヒーがあるがどうする？」

「コーヒーハーにしようかな。砂糖多めで。あ、あと牛乳あつたら入れてほしいな

「注文が多いな……」

愛がそう注文すると、綾小路は自身の麦茶とともに運んできた。

コーヒーを一口含むと愛は顔を歪めた。

「これ苦いんだけど。ちゃんと言つた通りにした?」

「一応そのつもりなんだが……。追加するか？」

「自分で入れてくる。砂糖どこにある？」

「そこの棚だ」

「りょーかい」

砂糖の入った瓶を両手に抱え、大きじの軽量スプーンで砂糖を掬つて入れてを繰り返す愛を見ながら、綾小路は麦茶を啜る。WHOが定める1日の砂糖摂取量を大幅に越しているであろう甘つたるいそれは、もはやコーヒーではないのではないかと綾小路は思つたが、人の好みに口を挟む必要はないだろう。

「よし、おつけい」

そうして完成したコーヒー（らしきもの）を一口含み、愛は満足げに頷いた。

愛は時々その見た目に反した言動をすることははあるが、それ以外はまだ子供な部分もあるのだなと綾小路は思った。

「早速だが本題に入つてもらつてもいいか？」

「そうだね。長居するのも良くないだろうし」

いくらクラスメイトといえども、女子が男子の部屋にいるという状況は誤解を招く可能性がある。愛が戻ってきて早々、綾小路は話を進めることにした。

「最近綾小路くんは一之瀬さんに関する噂を聞いたことはある？」

「一之瀬は犯罪者だというやつか。Aクラスの生徒とBクラスの生徒がそのことについて揉め事をしているところは目撃したぞ」

「そこ、そのことなんだけどさ。出どころはAクラスだろうとは思つてているんだけどね。要するに一之瀬さんを守るのを手伝つて欲しいんだ」

林間試験の時、Aクラスは一之瀬への敵意を見せていた。それに

『一之瀬は犯罪者である』という文言は変わつていない。

学年全体にその噂が広がり始めたのは林間試験が終わり、2月に入つてからのことだ。試験での神室の一之瀬排除宣言も忘れ去られた矢先の出来事だった。

「なぜオレが？」

「どうしても綾小路くんの協力が必要なんだ。それに、これは綾小路くんのためもある」

「オレのため？」

「そう。でもそのうち綾小路くんも協力せざるを得なくなるから、気にしないで」

「……どううことだ？」

「有栖ちゃんの真の狙いは一之瀬さんじやなくて、綾小路くんだつてこと」

「オレ？ ちょっと理由がわからないな」

体育祭で綾小路は全力を出していないし、そのせいか坂柳と綾小路の接触は果たされていない。坂柳が一方的に綾小路のことを知っているという状態をここまで引きずつてしまつていてことになる。

ホワイトルームの最高傑作たる綾小路と戦いたいという欲求が抑えきれなくなつたがための今回の騒動という解釈もできる。巻き込まれた一之瀬が少し気の毒ではある。

一旦、解決への道筋を愛は綾小路に説明した。学校側はある程度の噂の流布は黙認するだろうということ。学年中に様々な噂を流し、事の規模を大きくすることで学校が介入せざるを得ない状況を作り上げること。

「綾小路くんはプライベートな情報はほとんど持っていないんだろうから、その辺りは心当たりのある人に聞いてほしい」

こんな説明なくとも、綾小路なら自らたどり着くだろうが。なるべく知っているルートから外れてほしくないと、綾小路ではないが一度裏切られているため、念には念を押して。

「八遠が一之瀬を救いたいのはわかつた。だが、お前がそこまで一之瀬に肩入れする理由がわからないな」

「一之瀬さんが生徒会に入れたのは知ってるよね？」

「ああ。生徒会長が南雲に変わった後だつたな」

「一之瀬さんは学先輩が生徒会長を務めていた頃から加入を希望していたみたいだけど、実現はしてなかつたんだよね」

「南雲の手にかかるのを防ぐためか？」

「実際に本人に聞いたわけじゃないけど、私はそうだと思つてる。多分、他にも希望した人はいたと思うけど、同じような理由で認められなかつたんだと思う」

2年生の全てを掌握し、3年生を都合よく動かす力を有する南雲であれば、1年生を堕とすことも時間の問題。生徒会加入の条件はおそらく『南雲に対抗できるか』というその一点。

原作で須藤の暴力事件の解決後、学は綾小路に生徒会に入らないかと問い合わせていた。目立ちたくない綾小路はこれを拒否していたが、この時点で綾小路が南雲に対抗しうる人物であることを見抜いていたのだろう。

「だけど、一之瀬さんだけは南雲が生徒会長になつてからも生徒会に入るために交渉した。スタートが同じBクラスであること。その後がAクラス、Cクラスと対照的だからこそ、手がかりを掴みたかったということもあつたのかもしれないね」

「つまり一之瀬は南雲に弱みを握られていると？」

「おそらくね。他の人間を操るならそれが手つ取り早いし」

逆らつたら弱みを暴露するぞ、と脅された日には従わざるを得ないだろう。そうしなれば、自分の居場所がなくなつてしまふという恐怖に苛まれながら。

「今回の一件で傷心中の一之瀬に南雲が甘い言葉を投げかけるとする。そしたら一之瀬は完全に南雲の私物になつてしまふだろうね。そうなると、この前の林間試験みたいに私たちに牙をむく可能性がある。特に一之瀬はCクラスのリーダーで、クラスメイト全員からの信頼を集めているから、実質私たちの代のクラスの4分の1が南雲のものになると言つても過言じやない」

「これからも林間試験のようにクラス混合の試験が行われる可能性は大きいにあるからな」

愛の言うようになるかどうかはCクラス次第ではあるが、どちらにせよ背後に南雲がいるというのは思う以上に厄介なのだ。

それにCクラスは一之瀬の意見が総意になりやすい。方針が正しかろうがそうでなかろうが『一之瀬が言うならきつと正しいのだろ

う』と何も考えず賛成に票を投じる機械人形だらけのクラスだ。

一之瀬を手中に収めるとCクラスは駒として使いやすくなる。黙つて南雲に明け渡すわけにはいかないのだ。

「少額だけど、プライベートポイントを支払つてもいいんだよ？」

「Aクラスはいいのか」

「違うよ。Aクラスはちゃんと目指してる。その上で、支払つてもいいと言つてるんだよ」

目を細め、真剣な表情で綾小路を見つめる。綾小路に一之瀬の必要性が伝わればいいのだが。

「わかつた。協力しよう」

「ありがとう。ポイントは——」

「いや、大丈夫だ。今はそこまで必要としていないからな」

「ほんとにいいの？ 後で足りなくなつたから貸してなんて言われても知らないよ？」

「問題ない。消費は極力抑えている」

「ふうん。ならいいけど」

どうせ綾小路のことだ、その辺りも初めから計算の内なのだろう。

「じゃああとは任せた、綾小路くん」

「いいのか？ オレに一任して」

「私にはわかるんだよ。綾小路くんが全然本気を出していないことくらいね。体育祭の時も明らかに手を抜いていたでしょ」

「なぜそうだと言い切れるんだ？」

「龍園をボコボコにした犯人が綾小路くんだからだよ。さらに言うなら、龍園の取り巻きもまとめて倒していくんじやないかな」

綾小路の目が一瞬興味深そうに開いたのを愛は見逃さなかつた。しかし綾小路はほぼ表情を変えることなく淡々と会話を続ける。

「そうか？ 須藤かもしれないだろう」

「いやいや、須藤くんが龍園くんの心をへし折るのは無理でしょ。あの時の龍園くん、全てを諦めたような感じだったからさ」

「……会つたのか」

「忘れ物を取りに戻つたら、たまたまね」

「たまたま勝てただけだ。オレだって無傷で済んだわけじゃない」

「重傷の龍園くんとは違つて無傷だつた気がするけど？」

綾小路がホワイトルーム出身であるということを、愛が知らない前提で話を進めているのだとしてまだ能力を隠そうとしていることに疑問を抱く。綾小路は茶柱からの圧力を受けてAクラスを目指すことを強要されているはずだし、少しずつその力を使い始めていることは間違いない。隠すことにもメリットはあるし、愛がどうこういう問題でもないのだが。

いずれにせよ今問い合わせても平行線のままなのは目に見えているため、愛はここで引き下がる選択をすることにした。

「今日はそういうことにしておくよ。一之瀬さんのこと、頼んだ」「ああ。あともうひとつ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「うん、何かな？」

「今回の山内と坂柳の件、お前は一枚噛んでいるのか？」

「いいや、私は何もしてないよ。流石にそこまでは私も関わってないしね。今はBクラスの一人だもん」

今回の、というのは先日坂柳が山内を呼び出した件についてだろう。

そもそも一之瀬潰しに全く加担していないので綾小路の懸念は杞憂だ。ただ、山内がターゲットになつたことには心当たりがある。

愛は時々山内がいかにどうしようもない男か語つたことがあるのだ。

それはペーパーシャツフル試験の時のことだ。二人1組で挑むその試験のペアとして山内が選ばれた。

成績上位者である愛は体裁上山内に勉強を教える必要がある。

そのため愛はわざわざ時間を作り山内が少しでも良い点数を取れるように配慮していたのだが、本人にあまり危機感がなく楽観的で愛任せだった。

むしろ美少女と一人きりというシチュエーションに興奮していたのかわからないが、チラチラと愛に向けて気味の悪い視線を送りつけ、ご飯に誘つてきた。それにどまらず連絡先の交換を求めるなど

それはもう二度と思い出したくないようなひと時だった。

山内に彼女がきてほしくないのであえて言わなかつたが、愛を見る目に下心が見え見えなのでやめた方がいいと思う。

「そ、そうか。ありがとう」

「いいよいよ。何か聞きたいことがあつたらいつでも聞いてね」「ああ」

「一之瀬帆波は犯罪者である」か……」

愛は郵便ポストに入れられていた一枚の紙に描かれたその一文を小さな声で読み上げた。

部屋に戻ろうと思つたらロビーが騒々しかつたため、近くの人には何があつたのか聞いたらこれだけが書かれた紙が入つていたというわけだ。

「最近、一之瀬さんに関する噂が絶えないわね」

共に帰宅してきた堀北がそう呟いた。堀北が言うように、林間試験が終了してから一之瀬に関する噂が続いている。あくまでも噂であるため出どころの特定は難しく、そもそも内容の正確さに欠けるので対処のしようがない。

「差出人が書かれていないからどのクラスの仕掛けかはわからないけど、本格的にCクラスを倒しに動き出したみたいだね」

「八遠さんはAクラスからは何か聞いているのかしら」

「ううん、何も。というか仮に犯人がAクラスだとしても失敗させないために私には話さないとと思うよ」

「それが普通ね」

今回の事件も、噂が收まりかけたタイミングで起つた。犯人はまるでこのことが事実だという確信があつて、忘れられないようにしようと/or>しているようだつた。

「堀北、八遠、何があつたんだ？」

「この紙が郵便受けに入っていたのよ。綾小路くんのところにも同じように入っているはず」

そう言われ、綾小路が郵便受けの中身を確認しに向かう。

「これのことか」

案の定、戻ってきた綾小路の手元には一枚の紙があった。そして同じ内容が書かれている。

「当の一之瀬はどう思っているんだろうな」

「今まで無視をしているのだから、今回もそうする可能性が高いわね」

「書いた本人が確信を持っていたとしても、私たちからしたら到底信じられないことだもんね」

一之瀬が問題ないと判断すればそれまでであるし、学校も介入のしようがない。行き過ぎた善意はお節介にしかならない。内容の信憑性の低さがかえつて壁となっていた。

今は一之瀬を助ける大義名分が欲しいところだ。

「オレたちは今は外野の人間でしかないから、何かすることはできないぞ」

「まあね。帆波ちゃんが一人で解決してくれるのが一番手っ取り早いし」

それは犯人である坂柳も十分理解しているだろうし、神室を接触させたことも綾小路を巻き込むためだと言える。

綾小路なら一之瀬が病んで南雲のものになることを防ぐことができるだろうし、気を引くこともできるだろう……そう考えての今回の出来事なのだとしたら坂柳の綾小路への感情、相当重いぞこれ。

推測だけで坂柳に対してドン引きしていると、ロビーが騒々しくなった。入り口の方へ目を向けると、渦中の人物である一之瀬がいた。

クラスメイトの一人が一之瀬に紙を手渡す。一之瀬を取り囮むCクラスの面々は、心配そうに見つめている。

その間も一之瀬は紙に描かれた内容を何度も読み返していた。まるで今自分は夢を見ていて、本当は違う内容が書かれているんだと言

い聞かせていいようだつた。

「……これがポストに？」

ようやく顔を上げた一之瀬は紙を渡した少女にそう問い合わせた。

「うん……ひどいことをするよね。多分1年全員に……」

そしてCクラスの生徒の一人である麻倉が学校に報告することを提案したが、一之瀬はそれを断つた。

学校に報告して沈静化を求めれば、自身にとつて都合の悪い噂であると認める事になる。そしてそれは噂の内容が真実、またはそれに近い内容であると認めたと解釈されてもおかしくない。

他人に迷惑をかけることを嫌う一之瀬には、無視を貫き耐え続けるしか道はないのだつた。

そんな一之瀬らCクラスの様子を見ていると、そことは別の方向から視線を感じた。愛たちの背後、少し離れたところで神室がこちらを見ている。

「どしたの」

「アンタには用はない」

「まあまあ、そんなこと言わずにさ。お茶とかどう？ 奢られるからさ」

「当たり前のように払わせないでちようだい」

「冗談だつて！」

デートのお誘いに失敗した愛は、クラスメイトを諫めてこの場を離れる一之瀬を眺めながら神室に問いかけた。

「これ、やつたのAクラスでしょ」

「だとしたら何？」

「いや、別に。有栖ちゃんはそういうことすると思つてたから」

坂柳有栖という人間は敵には容赦がないことは分かつていて。というか自分が天才であることを見せつけて満足するタイプなので、それが一之瀬であれ例外ではない。

Bクラスから陥落した一之瀬を、それでも狃うのは4クラスのリーダーの中でも最も崩しやすいからだ。

龍園は綾小路に敗れこそすれど力はあるし、汚い手をよく使う。堀

北は後ろに綾小路がいる。

一之瀬はクラスの成績が下降中ということもあり、すでに終盤のジエンガくらい脆くなっている。

他に付け加えるなら、万引きという明確な弱点があつた。

要するに、一之瀬は恰好の的なのだ。

「それで、アンタは坂柳を止めるつもりなの？」

「そういうつもりはないよ。ただこのまま帆波ちゃんを壊されると面倒だから」

「どういうこと？ 一之瀬は敵じゃない」

この学校ではクラスが異なるということと敵であるということはイコールである。

Bクラスである愛にとつてCクラスの一之瀬がどうなろうと知つた話ではないし、再起不能になつてくれているのであればその方があります。

「有栖ちゃんから聞いたんだけど、新しい生徒会長が帆波ちゃんを自分の所有物にしようとしているらしいから」

「……何それ」

「生徒会長の目的は知らないけど、帆波ちゃんを通じて上の学年からの妨害が入つてくるのは避けたいんだよね」

「坂柳はそのことも考えている……とは思えないわね」

「有栖ちゃんは真正面から生徒会長を倒しにかかりそうだしねえ」

杖をついて激しい運動ができるように見えるが、坂柳は頭脳派筋だと愛は勝手に考えている。

特に綾小路のことになるとその傾向がより顕著になる。

ちよつと綾小路の名前を出すだけで『戦いたい』と言われてしまうと、イメージが180度変わりかねないのでやめてほしいところだ。「夢げに微笑んで言うんだ、『邪魔する人は全員ぶっ殺しますよ』って

「絶対にそんなことは言わないわよ」

要するに、坂柳にとつて問題がなくとも愛はそういうわけにもいかないということだ。

ただでさえポイントを集めるためにやらなければならぬことが

あるし、進級したら厄介な新入生に時間を割かなければならぬのだ。南雲の相手をしている暇はない。

そもそも南雲が生理的に無理なので関わりたくない。山内と一緒に退学してほしい。

ようと思う。

「それにも意外ね、アンタも坂柳と一緒に計画しているものだと
思つてたけど」

「あつそう」「いくら和とて」Eミ「ンははたれだい」

」 純文綴りしてないな さて和と有相の人の關係を云ては

何かの危機を察してか神室は逃げるようになこの場を去つてしまつた。

無実を証明するために神室にもわかりやすく説明しようと思つて
いたのだが仕方がない。

すでは嵐が過ぎ去り、いつも通りの風景は房でたロヒーを愛も後にしてた。

2月15日。前日の14日はバレンタインデーであり、各地でリア充がチョコのプレゼントを行つていた。ポイントの消費を封印している愛にはそのような高級な行事を行えるはずもなく、いつもと変わ

そんな地獄のような1日を終えると仮試験という現在の実力を図るという目的のためだけに行われるテストの日がやつてきた。

それから一之瀬が学校を休んだという情報を耳にするまでに時間はかからなかつた。

本人は体調不良を理由に欠席しているが、かれこれ1週間ほど休み続けている。

間違いなく身体的な体調は回復しているのだろうが、精神的な方だらうか。

ともかくここまで予定通りであることに安堵しつつ、愛は人通りの少ない昼休みを使って一之瀬の部屋を訪れた。

「帆波ちやーん」

インターホンを鳴らし、中にいるであろう一之瀬に声を掛ける。

「愛ちゃん……？」

「心配で来ちゃつた。少し話をしたいな

「ごめん。また今度でもいいかな」

予想通りの、拒絶反応。それに構わず愛は一之瀬に話しかける。

「明日は来れそう？」

「どうだろうね……」

「やつぱり例の噂が原因？」

なるべく優しい口調でいくつか話しかけてみたが、噂関連の時だけ沈黙しそれ以外には返事があつた。それでもはぐらかされてしまつたが。

その後昼休みいっぱいまで玄関に居座り続けた。

「明日も来るね」

「大丈夫だから。少ししたら学校に行くから。だから、もう来ないでくれるかな……」

愛は何も言わずに学校へと戻った。

翌日も、その翌日も、一之瀬が休んでいることを耳に入れた上で愛は一之瀬の部屋を訪れた。その度に拒絶され、部屋を訪ねた。

「ねえ、愛ちゃんはどうやって立ち直つたの？」

いつものように玄関を背に昼ご飯を頬張つていると、一之瀬の方から話しかけられた。

「私だって完全に立ち直れているわけじゃないよ

「そうなの？」

「私がやつたことは普通に殺人行為だしね。私は誰かに打ち明けて許

してもらつてるだけ

「でも私なんかが許されてもいいのかな……」

「こんな私のことを許して受け入れてくれたのは他でもない帆波ちゃんなんだよ。帆波ちゃんにも許される権利はある」

一之瀬帆波はCクラスのリーダーであり精神的支柱でもある。クラスメイトの誰からも信頼されていて悩みも数多く聞いてきた。

だが、一之瀬が頼ることのできる人物というものはいない。どんなに苦しいことも、辛いことも全て飲み込んで隠して明るく振る舞い続けなければならない。

その末路が今の一之瀬だ。

「私ね、万引きをしたの」

一瞬にも、永遠にも思えた静寂の後一之瀬はゆっくりと話し始めた。

妹が欲しがつていたヘアクリップを盗んだことを。

一之瀬家は、母と帆波、妹の3人暮らし。娘の生活を守るために働いていた母親は、妹の誕生日に当時流行っていたヘアクリップをプレゼントするために今まで以上に働き、倒れた。

結局入院することになり、収入源は途絶えた。ヘアクリップは買えなくなつた。

一之瀬帆波は妹の笑顔を取り戻すためにヘアクリップを盗んだ。そして程なくして母に見つかり、店に謝りに行つた。

時計を確認すると、すでに昼の授業が始まっている時間だつた。愛は構わず一之瀬の懺悔に耳を傾け続ける。

一之瀬にはこんなことで立ち止まつてもらつては困るのだ。

一之瀬に無事に万引きの過去を暴露させることに成功しました。

次の日に一之瀬が登校すればいいのですが、もし引きこもつた場合再走ですかね。

南雲からの妨害で達成時期が大幅に遅れてしまうのでね。

まあ暴露させた上で部屋に籠つたままという事例は今まで一度もないでの大丈夫だと思います。

翌朝、愛はいつもより落ち着かない朝を迎えていた。

目が覚めた時、愛は大量の汗をかいていた。

どんな夢を見ていたのかは覚えていないが、体が恐怖を訴えている。

「またか……」

そしてこれは初めてではなかった。定期的に、何度も、この現象に襲われていた。

この学校に来るまではこんなことはなかつた。

布団から這い出て水道の蛇口を捻り水分を補給する。

汗で張り付くパジャマを脱ぎ捨て、汗を拭いて制服を着る。

「今日はちゃんと来てくれるよね、帆波ちゃん」

出どころ不明の不安に苛まれながら、朝食の準備をする。

消費期限の切れた菓子パンの半分と水道水。

Aクラスに上がるためだからとポイントの使用を自ら禁止してい るため、所有量に反して極貧生活を送っていた。

授業中は流石にお腹が空くし、昼以降も山菜定食だけで持ち堪えら れるはずもない。

「未来のことが見えるとかわけわかんないよ……」

高校生になつてからなぜかこれから起ることがわかるようになつたし、それに基づいた行動を取らされる。愛の意思に関係なく。与えられたレールに沿つて与えられた業務をこなしているだけで しかない。

「Aクラスに上がつたら、解放されるのかな」

そうであつて欲しいと願うが、確証はない。

完全に腹が満たされていないが、今日の朝食はこれで終わりだ。0円コーナーに並ぶ商品には限りがある。一人当たりが買える量

にも限界がある。

こんな生活でなんとか生きていけている現状が奇跡だと感じるこ
とも少なくない。

「だめだよ私。今日は帆波ちゃんが来るかもしれないんだから」
鏡の前で自らの表情を確認してから家を出る。

エレベーターのボタンを押し、降りてくるのを待つ。

しばらくしてやつてきた箱の中には、一之瀬が乗っていた。

「お、おはよう愛ちゃん」

「おはよう帆波ちゃん」

愛は心の中で安堵した。

一之瀬帆波が登校を決意してくれたことによつて、また一つ閑門を
通過できたような感覚になる。

「久しぶりに顔が見れて嬉しいよ」

「にやはは、今回は助けられちゃつたね」

一之瀬は恥ずかしげに頬を搔いた。

その表情を見るに、万引きの過去を乗り越えることができたのだろう。

「もしかしたら今日、坂柳さんが私たちのクラスに来るかもしない」
どこか遠くを見つめながら、一之瀬はそう呟いた。

「私をさらに追い詰めて心を壊そうとしているんだと思う」

何もなければ、今日の昼休み。坂柳はクラスメイトを引き連れてC
クラスを訪れる。

ロビーを出て外に出ると、雲の切れ目から差し込む太陽がいつもよ
りも眩しく感じた。

「でも大丈夫！ みんなには正直に話すよ

「怖くない？」

「もちろん怖いよ。でもCクラスのみんなならちゃんと受け入れてくれ
れるし、何より——」

一之瀬は愛の前に躍り出ると、白い歯を見せて言った。
「愛ちゃんがいるからっ！」

3月 その1

主要キャラが闇堕ちするRTA、はーじまーるよー。

前回は一之瀬の廃人化を回避したところでしたね。

いよいよ1年生編最後の3月に突入していきますが、今月は特別試験が2つもあるので今回はまずそのうちの1つ目、クラス内投票試験を行っていきます。

まあ平田が闇堕ちして山内が消えるだけなんですが、初見さん。

ではまず試験内容を確認していきましょうか。ちょうど茶柱先生が説明するところですしね。

まず生徒全員に賞賛票と批判票が3票ずつ与えられます。他クラスへの投票権についても、賞賛票のみ1票投票できます。これを被りがないように投票します。最も賞賛票を集めた人にはプロテクトポイントという退学を取り消すポイントが与えられます。山うて——最も批判票を集めた人は退学します。以上。

首位と最下位が決まるまで投票は繰り返されるので、20000万ポイントを支払わない限り誰かの退学は不可避というわけですね。

特別試験の概要を説明した茶柱先生が教室を後にすると、不安から教室が騒がしくなってしまいました。つまり今騒いでいる人は退学するかもしれないくらい嫌われている、または能力がないと自覚しているということですね。（適当）

愛ちゃんは絶対に退学することはないので呑気に須藤と高円寺の言い争いを見ています。

この世界線の須藤は原作で心を入れ替えるチャンスを剥奪されてしまっているので、それなりに運動ができるバカ程度の人間になってしまっています。まあバカで運動もできない最強の山内様がいらっしゃるので、須藤の退学はないでしょうけど。

投票は4日後なので、それに向けてクラス内でグループを作る動きが始まっていますね。確実に自分に票を入れてくれる人がいた方が安心できますからね、当然でしょう。

おつと、あそこにいるのは綾小路ガチ恋勢ことカルイザワ＝サン
じやないですか。せつかくなのでちょっとかいでもかけにいきましょ
う。

オツスオツス軽井沢さん。

普段あまり喋らないからって飛び上がるほど驚かなくても……。
背後にきゅうりを置かれた猫じやないんですから……。

今度の特別試験に向けて、何かしているんですかね。

グループを作っている、と。

そら（退学したくないし） そうよ。

愛ちゃんはグループ作る気ないんですけどね。

そもそも作る意味がないんですね。テストはいつも満点だし、特
別試験も真面目に取り組んでいるので。先月変な噂が流れましたが、
今までの態度から大きな問題にもならなかつたですし。

つまりグループ作りは時間の無駄というわけなんですね。

ところで軽井沢さん、綾小路くんとはお付き合いしてるんですか？

……あの、リアクション激しそぎないですか？ 出川〇郎になろう
としてるんですか？

なんでかつて言われてもそりや、最近仲良くしてるところ見るし何
より綾小路を見るときの顔が完全にメスなんですよねヒューヒュー。
この前噂にもなつてましたしね。

ああ、まだそこまでは行つてないんですね。確かに綾小路は恋愛と
か疎そうですもんね。なんでそんな人好きになつたんすか？
あ、メス顔した。

堀北と違つて武力制圧されないので楽しいですね。

軽井沢がいい感じの茹でだこになつたところで、応援コメントを残
して立ち去つておきましょ。もともと彼女には用はありませんか
ら。

さて、次はカフェテリアに向かいましょ。

諸事情により今まで数えるほどしか足を運んだことがないこの場
所ですが、今回なんとテスト満点者だけコーヒー一杯無料キャンペー

ン開催中らしいです。

貰えるものは貰つておけの精神。

坂柳はすでに到着しているとのことなので、早足で向かうと神室と橋本もいました。こちらを見た瞬間顔が歪むのやめた方がいいです よカムロリサン。せつかくの美人顔が台無しになっちゃいます。

こうして集まつたのは他でもない、特別試験で坂柳がどんな行動を取るのか気になつたためです。

こちらは山内退学で確定しているので……。

ふうん、葛城ねえ。本当は？

戸塚ですよね。ぶつちやけ他を退学させる意味がないですからね。坂柳派を退学させれば信用を失いますし、葛城は能力だけはあるので。まあ龍園のところに行つちやうわけですけども。

で、Bクラスへの介入とかはどうするつもりなんでしょうか。坂柳としては戦いたくて仕方のない綾小路が退学するのは困るでしょうからね。

適当なスパイを犯人として吊り上げたい……ですか。

大槻は原作と変わりませんね。ただ、綾小路をスパイに標的させるのかどうかで話は変わってきます。もちろん愛ちゃんでも構いませんしね。

むしろ後者の方が堀北の運ゲーを挟む必要がないので助かります。どんどん堀北の下方修正が行われている気がしなくもないですが、これもRTAのためなので仕方がないです。

なので後者を提案します。そしてこれが無事に採用されました。

そしてスパイもとい退学者ですが、山内を推しておきます。ペーパーシャツフル試験で手を抜きまくつてクソほど足を引っ張つてくれたのでね。

あと単純に生理的に無理なので。（辛辣）

これでAクラスの方針は確定しました。このタイミングで、堀北にクラス内外で怪しい動きがあればすぐに報告するよう連絡しておきます。

今回は綾小路——というかその傘下の軽井沢にも協力してもらい

ましようか。

同時にクラス内で動きがあれば教えて欲しいとお願ひしておきます。

次なる問題は一之瀬を中心とするCクラスと龍園を中心とするDクラスです。

皆さんは無人島試験のことを覚えているでしょうか。まあ覚えていないと思うので私から説明して差し上げましょう。

原作ではこの時に龍園と葛城は無人島試験の専用ポイント『Sポイント』を龍園クラスから葛城クラスへ譲渡する代わりに、毎月プライベートポイントポイントを受け取る契約を交わしました。

が、今回龍園のポジションに愛ちゃんが居座っているため、この契約のAクラスから現Dクラスへのポイント移動は現DクラスがAクラスに勝利した場合に成立するものでしたが、現Dクラスは0ポイントで敗北しています。

ここでその影響を受けるのが現Cクラスで、退学者を出さないための2000万ポイントの一部を現Dクラスから譲り受けているんですよね。

つまり現Cクラスから退学者が生まれるか一之瀬が南雲と付き合う羽目になる可能性が結構高いです。

もし後者の展開になつてしまふと2月の頑張りが全て水の泡なのでなんとしても避けなければなりません。

ぶつちやけ龍園はどうでもいいんせめて一之瀬だけでも助けたい。主に私のために。

というわけで一之瀬と連絡を取りましょう。

『体育館裏』……と。

嘘です嘘です。一之瀬を怖がらせるわけにはいきません。

『今日の放課後私の部屋来れる?』

『うん、大丈夫だよ!』

というわけで一之瀬が愛ちゃんの部屋にやつてくることが確定しました。

(けつ穴は確定して)ないです。

というわけで一之瀬が愛ちゃんの部屋にやつてきたわけですが、やはり何もないねと言われてしまいました。

だつて仕方がないだろ〇円生活してんだぞこちとらよお！
つてそんなことはどうでもいいんですよ。

一之瀬はこの試験どうするんですか。退学者出しちゃうんですか。
……まあそりやあそうよねえ。一之瀬だつたら出したくないつて
言うと思つていましたよ。

かといつて愛ちゃんが直接助けてあげられるわけじやないですか
どね。

えつ、ポイント沢山持つてるだろつて？ うるせえここまで来て再
走しろつて言うんかこの畜生めが。

ちなみに確認ですけど今いくらくらい足りてないん？

600万ですか……えつ600万！？

原作のおよそ1・5倍じゃないですか。どうしてこうなつたんですか！

まあこの際そんなことはいいんです。600万をどうやつて集めるかですが……。

うーん、どうしましようか。上級生はこれから最後の特別試験に向けてプライベートポイントの貯蓄が必要らしいですし、同学年となると見返りが必要となります。

くじ引きで誰かに退学してもらうのが一番楽なんですが、そうするとやはり一之瀬のメンタルは崩壊し廃人と化してしまいます。原作のようにBクラスをキープできていればよかつたのですが、現在Cクラスまで下がつてしまつていますからね。

Cクラスの賞賛票は十分金になるんですが、払える人がいないという悲しい事実。

強いて言うならAクラスなのですが、あそこは統率が取れすぎて他クラスの票が不要なので断られてしまうんですね、悲しい。

仕方ないです、こちらからポイントを貸し出すことにします。それと賞賛票を愛ちゃんに10票と綾小路に10票、あとは山内以外で危険そうな須藤と池にも10票ずつ投票させるようにします。

弱者にも手を差し伸べていくスタイル、これは聖人ですね間違いない。成人はしてないですけどね。（激ウマギヤグ）

現在個人で1000万近いポイントを有している愛ちゃんであれば、この程度の脳筋プレイも造作ないのです。

賞賛表に関しては誤って愛ちゃんが1位になつてしまふと学年末試験後に綾小路が退学してしまうので、それだけは避けなければなりません。

代わりに愛ちゃんと付き合えや。

という個人的な欲望は引き出しの奥にしまつておいて、代償として毎月一人当たり5万ポイント、クラス全体で200万ポイントを返済することを要求しておきます。

Cクラスはクラスポイントを600ポイントほど有しているので、問題なく返済できると思います。

なお、生活が苦しくなるなどの言い訳は受け付けておりません。そのような発言は1年間0円生活を送った後にしてください。金が使えるとか贅沢だなお前らア！

おやおや、歓喜のあまり一之瀬が愛ちゃんに抱きついて涙を流していらっしゃる。

なんと尊い百合の花であろうか。

あつでも身長が小さすぎて一之瀬の胸を顔面に押し付けられる構図になつてているのは許せんちよつとそこ代わりやがれ。

というわけでCクラスから退学者が出ないことが決まったので龍園には退学してもらいます。お疲れ様でした。

流石にこれ以上原作を維持するのは無理があります。

それでは投票日2日前の夜まで時を進めます。

このタイミングで、綾小路から連絡があります。山内が櫛田経由で愛ちゃんを退学しようと動いている、とのことです。

どうやら以前流れたクラスポイントの横流しの噂を使って愛ちゃんへの不信感を高めているようです。

大体クラスの半分ちょいといつたところでしようか。意外と順調ですね。

それでは山内を処していきましょうか。

次の日のS H Rの終了後、話があると言つて全員を残らせます。堀北が。

はい、山内公開処刑のお時間です。

一旦堀北に任せて山内がAクラスの指示を受けて愛ちゃんを退学させようとしていることを告発してもらいます。

本当は愛ちゃん単独で処刑しても良かつたのです。

しかし年度末の堀北兄妹和解イベントが発生しない可能性があつたので、急遽堀北兄にお願いしてバフをかけてもらいました。

……あーあ、結局平田おこだ。

せつかくなので平田もボコボコにして終わるとしましょう。

Aクラスは戸塚弥彦。

Bクラスは山内春樹。

Cクラスは退学者なし。

Dクラスは——龍園翔。

結局Dクラスは龍園を救う方法は見つけられませんでしたね。ドンマイです。

本来は原作からあまり外れたくないですが、山場は超えたので問題ないと思います。

他は予定通りって感じですね。綾小路もしつかりプロテクトポイントを獲得できたので大成功と言つていいと思います。

こんなところで今回は終わりにしたいと思います。

次回は1年生最後の大イベント、学年末試験を走つていきます。龍園を失ったDクラスがどんな戦いをするのか、見ものですね。では、次回もよろしくオナシャス！

3月 その2

いよいよ1年生編もクライマックスなRTA、はじまるよー！

前回はクラス内投票試験で3人の退学者が出たところでしたね。そして今回はいよいよ学年末試験です。やつと1年が終わるんですね……。（遠い目）

では早速今回も試験の内容を確認していきましょう。

今回は『選抜種目試験』という名前で行われます。

簡単にルールを説明しましょう。

10枚の白いカードになんでもいいので種目を書きます。なんでもとは言いますが、ある程度メジャーなもの限定ですけどね。

なお、この提出する10種目のうち5種目を『本命』とし、実際にはここから選ばれます。

そして対戦相手が選んだ5種目と合わせて10種目の中から7種目が選ばれ、戦うという感じです。

この試験には『司令塔』と呼ばれる役割が存在しています。司令塔はクラスメイトの代わりに問題を解いたりするなど試験に介入することができます。

また、司令塔は勝利すると個別にプライベートポイントを与えられる一方、敗北すると退学となってしまいます。

また、司令塔は対戦クラスを選択できたりしますが、愛ちゃんは司令塔にはなれないでの諦めます。

クラスポイントの移動についてですが種目ごとに勝ったクラスに負けたクラスから30クラスポイントが移されます。

7種目を終えて勝利した種目数が多い方のクラスには追加で100クラスポイントが付与されます。

ここで現在のクラスポイントを確認しておきますか。

Aクラス（坂柳クラス）：1140ポイント

Bクラス（堀北クラス）：676ポイント

Cクラス（一之瀬クラス）：584ポイント

Dクラス（金田クラス）：475ポイント

Aクラスが抜けていて、それ以外は団子状態といった様相ですね。おそらく今回の試験で順位の入れ替わりが発生することでしょう。

種目を決定する際には次のようなルールがあります。

マイナーな種目、複雑な種目は不許可となる場合があります。

同じ内容の種目は1つしか採用できません。テニスを例に挙げる
と、シングルスで1種目作成した場合、別の種目としてダブルスを採
用することはできないと言うことです。

時間がかかりすぎる種目や時間制限のない種目は採用されない可
能性があります。

出場人数は各種目1人以上20人以下で、同じ人が2種目以上に出
場することはできません。ただし、全員が出場してしまった場合に
限って2種目目に出場が可能です。

司令塔は全ての種目に関与できる権利を持ちます。その方法は各
種目によつて異なり、種目を決めるクラスが決定します。

大まかなルールは以上となります。

何言つてんだ意味わかんねえよつて兄貴は、2つのクラスがそれで
決めた種目で戦う試験だと理解してくれればいいです。

さて、ちょうど茶柱先生の説明が終わりました。これから作戦会議
ですが、平田は死んだ魚のような目をして動きません。

ここは堀北に働く、愛ちゃんは補助に回ります。原作に比べて
リーダーシップを發揮できない状態にあるので、それを補つてあげる
必要があるわけですね。

しばらくはこの状態で作戦会議を進めていきます。兄からのバフ
が継続中の堀北がなんとかしてくれます。

あとはどうにかしてくれアニキ！ って感じですが、堀北にとつて
兄は偉大な人物なのでどんな綺麗事でも間に受けて勝手に成長して
くれます。ちょろい。

なので、よっぽどボロクソに言われない限りは多少なりとも成長し
てくれます。

メンタルブレイク中の平田は原作通りの綾小路と堀北にも任せま

す。愛ちゃんはほとんど平田と関わっていないので、特に力になれるわけでもありませんしね。

あと堀北には本命種目の分析でもしてもらいましょう。綾小路に飯を食させて読ませた例のアレです。

羨ましい、私にも堀北の手料理食わせろやああああ!!!!

……失礼、少々取り乱してしまいました。

ここで愛ちゃんの存在によつて生じる影響を説明しておきます。

選ぶ種目の候補はクラスメイト全員への得意な競技のアンケートから絞られますが、愛ちゃん一人の影響は微々たるものです。なので競技自体は原作とは変わりません。

ですがAクラスへの影響というのは結構あります。坂柳を経由し、一定の交流があるからですね。

Aクラス生徒の得意分野や苦手分野はある程度把握でけていますのでこれも利用しながら確実に取りにいく種目、捨てる種目を選定していくきます。

例えばBクラスの苦手分野である筆記系の種目。Aクラスは現代文、社会、数学、英語のテストを種目に選んできていますが、その中でも取れそうな種目とそうでない種目はあるわけですね。

英語は8人、数学は7人を要求してきているわけですが、ここに戦力を割きすぎると他の種目に有力メンバーを回せなくなります。

なので仕方がないと割り切る種目は決めておく必要があるわけですね。

例を挙げるとBクラスは勉強よりも運動に優れた生徒が多いです。要するに尖っている人が多いのです。

わかりやすいのが須藤でしょう。彼は運動能力は優れていますが勉強は苦手です。

一方のAクラスは運動も勉強も一定の能力を有した生徒が多いです。しかし、逆に何かに突出して高い能力を発揮できる生徒は少ないです。

再び須藤を例に挙げますと、バスケでは彼の右に出る生徒はいくらAクラスといえど存在しません。

まあでもバスケは団体戦なので負ける時は負けるんですけどね。この試験はそういうところを的確に突いていけるかどうかにかかるでいるわけですね。

また、いくら高水準なAクラスの生徒といえど得意不得意は存在します。

そう言つた意味で愛ちゃんの持つ情報は有益になります。

Aクラスが提出した種目は『チエス』、『フラッショ暗算』、『囲碁』、『現代文テスト』、『社会テスト』、『バレーボール』、『数学テスト』、『英語テスト』、『大縄跳び』、『ドッジボール』です。

このうち本命であろう5種目は原作の葛城の話も加味してチエス、フラッショ暗算、数学テスト、英語テスト、現代文テストです。前者4種目は実際に原作で実施されたので確定でいいと思います。

残り1枚ですが、念の為偵察をしておこうと思います。葛城によれば大縄跳びやドッジボール、バレーボールはろくに練習をしていないということですが、バタフライエフェクト的な何かで本命が入れ替わっていても不思議ではありませんからね。

実際に本命の中身が入れ替わったという事例も耳にしていますので、その対策も怠りません。

……結局Aクラスが提出した体育系種目の練習をしている様子は見受けられませんでした。

バスケやテニスはやつていたんですけどね。

Bクラスが選んだ種目は『英語』、『バスケット』、『弓道』、『水泳』、『テニス』、『卓球』、『タイピング技能』、『サッカー』、『ピアノ』、『じやんけん』です。

本命はバスケット、弓道、水泳、テニス、タイピング技能とすることにしましょう。

理由としてはそれぞれ得意とする生徒がいるからですね。

バスケットは須藤。弓道は三宅。水泳は小野寺。テニスは愛ちゃん。タイピング技能は博士こと外村。

須藤は原作よりも能力が劣っているので落とす可能性もありますが、それ以外の種目で愛ちゃんが挽回すればいいだけの話ですから

ね。

ではちょうど平田が復活したので試験へ向かいましょう。

ここから私は基本見ているだけになります。愛ちゃんは司令塔でもなんでもないですし、運悪く愛ちゃんに適性のない種目が選ばれる可能性もありますからね。

ちなみにですが、選ばれる種目は最後のチェス以外は完全にランダムです。なので原作のような結果になるとは限りません。Aクラスに勝つかもしれませんし、大差で負けるかもしません。

そこは神のみぞ知る、と言つた感じでしようか。

まず選ばれたのは『タイピング技能』です。先述の通りBクラスにはパソコンにめっぽう強い外村がいますから、問題なく先制できるでしょう。

Aクラスは吉田という生徒を選びましたが、結果は外村の勝利でした。

続いての種目ですが——テニスが選ばされました。

必要人数は4人の勝ち抜き戦で、2ゲーム先取した生徒の勝利となります。

また、1ゲーム毎に90秒、1試合ごとに120秒のインターバルがあります。

これは愛ちゃんの長所を最も発揮できるように設定したものです。団体戦だと他のところで負けてしまった場合愛ちゃんを投入した意味がなくなってしまいますからね。

司令塔である綾小路も1人目に愛ちゃんを選び、残り3人は名前もよくわからないモブ生徒を投入してきました。

ただ、見てみると3人の生徒は能力が高いといえません。愛ちゃんなら1人で4人抜きできるだろうという熱い信頼を感じますね。

相手の1人目は……知らない人ですね。

ちょっと遊んであげてもいいのですが、一応特別試験なので普通に勝ちに行きます。

Aクラス側は見ている感じ初心者なのですが、ある程度は打ち合えるようです。でも愛ちゃんの敵じやねえんだよなあ!?

はい、ストレートで一人目撃破です。お相手はヘロヘロのようです
が、こちらは全く息切れを起こしておりません。

そりやあ、全国レベル対初心者ではこうなるのも必然というものです。

続いて2人目は……同じ女子テニス部の生徒のようです。
なんかラスボスと戦う前の主人公的な雰囲気出してるのなんなん
ですかね。

愛ちゃんはただの口利き少女JKだぞ。魔王要素のカケラもない
じゃないですか。

話を聞く限り、相手の生徒が愛ちゃんからポイントを奪った回数は
数えるほどしかないそうです。なんだコイツ化け物かよ。

1人目の時は撃ち合いだけで勝てたので変化球を駆使したりはし
なかつたのですが、ここからはそういうわけにもいきません。

左右に動かしたり手前に落としたり、奥を狙つたりして相手を走ら
せ、体力を削つていきます。

本当ならサーブでゴリ押ししたいのですが、小柄な愛ちゃんではそ
こまでのパワーは出力できませんでした。かなしい。

おつ、2戦目も勝てましたね。まあ1ゲーム目が終わつた時点では息
が荒くなつていましたからね。

続いて3、4人目ですが、こちらはどうやら男子テニス部の生徒の
ようです。

男ですから、当然身体能力はあちらの方が上です。なので先ほどよ
りは強敵でしょう。

ですが、逆にいえばそれだけの違いしかありません。全国レベルか
らは数段落ちる相手ですので、ボコボコにして終わりです。対戦あり
がとうございました。

これで2種目目が終了しましたが、残念ながら愛ちゃんの出番はも
うないのでさっさと飛ばしてしまいましょう。

最後にチエスが行われますが、RTA的には結果だけわかれば十分
なので飛ばしてします。

ちなみに、行われた種目は現代文テスト、弓道、英語テスト、数学

テスト、最後にチエスでした。

特別試験の結果は……3勝4敗でAクラスの勝利となります。上出来ですね。

負けイベなのでこれ以上の成績は見込めません。残念。

Aクラス対Bクラスの戦いは以上ですが、せつかくなのでCクラス対Dクラスの様子も見ておきましょか。

この戦いにおいて大きく異なるのはDクラスの龍園の不在です。なので司令塔は金田のままでし、下剤を使うということもします。

ん。

ただ、種目選択はやはりアルベルトや石崎など運動能力に秀でた生徒が多いことを考慮して柔道や空手といったものが見られます。

ですが、龍園の退学のダメージは大きく、柔道や空手で勝利するも5勝したCクラスの勝利となりました。

どうしてもアベレージではCクラスの方が有利ですからね、仕方ない。

この結果、クラスポイントは次のように変動しました。

Aクラス（坂柳クラス）：1140ポイント→1270ポイント

Bクラス（堀北クラス）：676ポイント→646ポイント

Cクラス（一之瀬クラス）：584ポイント→744ポイント

Dクラス（金田クラス）：475ポイント→415ポイント

したがつて、一之瀬クラスがBクラスに復帰し、愛ちゃんたちはCクラスへ落ちるという形になりました。

といつたところで今月は終わり——ません。
春休みにもやることがあるので、3月編、もう少しお付き合いください。

それでは次回もよろしくオナシヤス！

3月 その3

1ヶ月に3パートもかかる前代未聞のRTA、はーじまーるよー。
前回は学年末試験が終了し、これで1年生編も終わりかと思わせた
ところで延長戦に突入したところでしたね。

今回は11・5巻の前半部分を消化していきます。

初めに、卒業式の見学をします。

学センパイ、アザースとしか思っていないですから、声だけかけて
ここは終わりです。いくらこの学校の卒業式といえど、お偉いさんの
お話を聞くだけですからね。そんなのを聞く気は端からないですし、
これをBGMに解説するのもキツイです。

なので、卒業式に関してはあまり話すことがないんですね。

……おつ、やつと堀北兄と話せますね。南雲との話がなげえんだ
よ。

なになに、鈴音をよろしくですって。

これはあれですか、カツブルが親への挨拶に向かった時に言われる
アレですか。でことは堀北は愛ちゃんの嫁でじやあ坂柳や一之瀬と
はどうなつてあばばばばば！（爆散）

失礼しました、持病の発作がつい出てしました。
話を戻します。

堀北兄が言うようにもうしばらくは堀北によろしくする必要がある
わけですが、この後二人が和解してくれないとガチで再走案件で
す。

何せこのままだと堀北のショートが押めなげふんげふん、2年生編
を戦っていく上で能力が不足して計画通りにいかないことがある可
能性が高いです。

問い合わせても意味ない人なのは理解しているので、この話はここまで
にしておきます。

あとは今までの感謝とか伝えて別れます。
最後にーーおつと、一之瀬に遭遇しましたね。ですが、他愛のない
話をして終わりのようです。まだイベント続くかと思つたやんけや

やこしいなオイ。

さて、今月もテニスの大会があるのでサクッと済ませちゃいます。ちなみに今回の愛ちゃんですが、前回の学年末試験のテニスがいい感じのウォーミングアップになつて非常に調子が良いです。しかも3年生が引退しているので、優勝もあり得ます。

ただし、今回の大会では個人戦と団体戦のどちらかにしか参加できないようなので迷わず個人戦を選択します。

団体戦を選んで味方がクソ雑魚だつたら再走になっちゃいますからね。

それにもらえるポイントも変わりませんし。

今まで決勝にすら進出できていなかつた愛ちゃんですが、2歳上がいなくなつた今であれば全国制覇も難しくありません。

負けた相手みんな2歳上ですしね。あの世代バケモノすぎます。

というわけで決勝まで進めちゃいましょう。

相手は年上のえつちなお姉さんのようです。

動くたびに激しく揺れる球への憎悪を力に変えて先行ワンキルしていきましょう。

まずはラリーで相手の戦闘力と愛ちゃんの調子を測つていきます。

先述の通り愛ちゃんは絶好調、相手の夜の戦闘力は53万ですね。変身（脱衣）を3回残している模様。エツツツツツ！

テニスにおいて大事なのは試合の主導権を握ること。先行逃げ切りが重要つてわけです。

無難なショットで相手のミスを待ちながら、相手のミスショットを逃さないようにします。

そうして点差を広げ、精神的に追い詰めていきましょう。
……地味な絵面なので倍速しますか。

初めは地味ですが、こうやつて確実にリードを奪つていけば相手は点を取り返すためにリスクキーな選択を取らざるを得なくなります。

そうなつてくるとコート外へのショットが多くなり、さらにリードが開きさらに焦つて……という悪循環が出来上がるわけですね。

そんなことを言つているうちに1セット目も6ー1となつていま

した。

ここまで非常に順調ですね。

ですが一つ厄介な点があり、それが相手のサーブです。

どうやら相手の選手は胸以外もかなりデカく、サーブの威力がかなり高いです。

愛ちゃんがチビなだけだろとかいう意見は口に出してはいけません。いいですね？

しかもサーブは愛ちゃんの弱点でもあるので、少しでも気を抜くと一気に主導権を持っていかれそうになります。

当然愛ちゃんが小さいのはこちらも承知していますから対策もしてあります。

まずは瞬発力の強化です。

リーチが短いのであればスピードで補うしかないでの、瞬発力の強化は4月の頃から行っています。

そしてもう一つが堀北兄との特訓（意味深）です。いや深い意味なんもねえよ。

当時は愛ちゃんの戦闘力強化と説明した記憶がありますが、実はテニスの舞台においても好影響をもたらしています。

一つ目に、体幹の強化です。

愛ちゃんは運動能力には長けていましたが体幹は人並み程度でしたので、これを堀北兄に強化してもらっていました。

これによつて多少無理のある体勢からでも球を返すことができるようになつています。

次に、単純な球威の向上です。

チビでひ弱な愛ちゃんでしたが、武術を習得することでその部分が多少改善されて重い球を打てるようになりました。

堀北兄には感謝しかないです。どもです。

と、そんなことを話しているうちに1セット目が終わりましたね。

これで2セット目を取ればストレート勝ちとなります。

ではこの調子で2セット目を……取りました。

7—4だったので、ちょっと危なかつたですね。

これで全国制覇、クラスポイントを100ポイント獲得できたのでAクラスに付与してもらいましょう。

これでAクラスからもらえるポイントが来月以降40万ポイント近く増える計算です。

では次に一之瀬に会います。

主な理由としては一之瀬の状態を確認するためです。主にメンタル的な部分で。

原作では特別試験で龍園にボコボコにされてメンタルブレイクしていた一之瀬ですが、今回は龍園が退学した影響で一之瀬は勝利しBクラス復帰となつたわけですからね。

当然その心境も変わつて いるだらうというわけです。

では一之瀬を自室に呼び出しましよう。題して1年間お疲れ様でした会。参加者2名。

……おつ、ちょうど予定が空いているようなので今から来てくれるとのことです。

オツスオツス。

飲み物は水、H₂O、DHMO、解凍した氷から選んでください。頭が混乱しながらもどれにするか迷つてる一之瀬氏、かわいいですね。グリフィンドールに1万点。

ちょっと考えて、全部水だということに気づいたようですね。かわいい。（脳死）

水を飲んで一息ついたところで、この前の特別試験についての話題を振りります。

思つた以上に苦戦していたようです。一之瀬も選ばれた種目次第では負けていたかもしないと話していますしね。

ですが個人的には仕方ないと 思いますけどね。

アルベルトに柔道で勝てとか言われてもまず無理です。

それでも勝つべきところでしつかり勝つところは素直に称賛すべきだと思いますけどね。

……助けられてばかり？

まあ、うん。それは……。

一之瀬を偉人で例えるならそうですね……ジャンヌ・ダルクとかですかね。クラスメイトはみんな「一之瀬の言うことなら死んでも頑張るぜ!」みたいなのばつかりな印象です。死んだら頑張るもクソもないやんけ。

反対に頭を使つてあれこれ考えることに長けた人物——諸葛孔明のような参謀がいないというのが課題でしょうか。

最悪クラスのカースト上位数人で話し合いしてそこで出た意見をクラスの方針にしちゃつたりしてもいいと思いますけどね。議会制民主主義的なあれ。

……おかしいな、なんだかいい印象が湧かないぞ。

まあちよつとは検討してみてもいいんじゃないですかね。三人寄れば文殊の知恵って言いますし。

クラスメイトの預かり知らぬところで勝手にそういう組織作つても一之瀬の提案つて言つとけばみんな納得するつしょ。

まあまたなんかあつたら助けてあげますよ。多分。

では一之瀬と別れたところで……連絡が来ていますね。誰からでしょうか。

おつ、坂柳からですね。ケヤキモールに来いとのことです。この後雨が降る予報なので、傘を持つて向かいましょ。

目的地まで向かうと坂柳と神室、橋本の3人が待つっていました。
……なんですか、圧迫面接でもするんですか。

というのは冗談で、単純におしゃべりがしたかつたようです。つまり愛ちゃんに会えなくて寂しかったんですねはいかわいい。

神室と橋本がいる理由は不明ですが、まあいいでしょ。不審者でもないですしね。犯罪者は混ざってますけど。

ここでの話題はこの1年の振り返り。どうやら、本当にただの雑談のようですね。

あとは綾小路から少し距離を置くとかどうとか、原作で既に開示されている情報ばかりでした。

R T A的には美味しくないのでスキップスキップ。
こつちにもなあ、撮れ高つてもんがあんだよ!

では最後に、堀北兄を見送つて終わりにしましようか。

これで1年生編のイベントは最後ですが、ここで堀北が髪の毛を切った状態で現れないと再走です。

なので皆さん、祈りましょう。

このイベントを越えなければ2年生には進級できません。

頼む、堀北来い！ 来なかつたら堀北を殺して私も死んでやるッ！

おっ、来ましたね。あとは髪の毛を切っているかですが……。大丈夫ですね。2年生に進級できます。（1敗）

では、堀北兄妹の感動的和解シーンをバックに現在のポイントを確認していきましょう。

クラスポイント676ポイントでプライベートポイントが67600ポイント。Aクラスから120万ポイント。

一之瀬クラスに600万ポイントの出費。

よつて所持ポイントは5225500ポイントで進捗は26.1275%です。

なお今回使用したポイントは3ヶ月かけて返済してもらう事になつてるので、実質的な所持ポイントは11225500ポイントで進捗は56.1275%となります。

では、2年生編突入となる次回もよろしくオナシャス！

3月 裏話 その1

3月に入り、暖かくなってきた頃。

それに釣られるようにしてクラスの雰囲気も緩んできた。

一之瀬漬しとそれに伴う噂の流行、そして学年末試験の終了。それに加えて学年末特別試験まではもう少しはある。

が、つい先ほどそういうわけにもいかなくなつた。

クラスの空気は一変、緊張感に満ちていた。

それもそのはず『クラス内投票試験』で退学者が出てしまうのだ。試験内容は至つてシンプルで、自身が持つ賛成票と批判票を3人ずつクラスメイトに投票する。

そして他クラスからの投票も合わせて最も多くの批判票を集めた生徒は退学。

最も多くの賞賛票を集めた生徒には、プロテクトポイントという退学を取り消すポイントが与えられる。

生徒はみな退学の危機がすぐそこに迫つているとあつて殺氣立つてゐる。

例えば仲のいい生徒と同盟を結んだり、仲の悪いクラスメイト同士で小競り合いをしたり。

愛の目の前でそわそわしている生徒も前者のうちの一人だつた。

「軽井沢さん、こんなところで何してるの？」

「ひやあああああ！」

「そんなに驚くこと……？」

愛と軽井沢は普段から会話をする仲ではないため、話しかけられて戸惑うのはわかる。

それを加味しても驚きすぎではないか。

まるで幽霊に遭遇したみたいな。

「え、ええええつと八遠さんどうしたの？」

「まずは落ち着こう。はい息を吸つて、吐いて。もう一回吸つて、吐いて」

そのまままだどう考へても会話が成立しそうになかったので、一旦

落ち着かせる。

「こんなところで何してたの？ 誰かを待つてたりする？」

「べ、別に何もないわよ」

「綾小路くんとか？」

「ち、違う！ ……違うって」

違うというのであれば一度その話は横に置いておこう。

「それにしても学校側も酷い試験考るよね。今まで退学者がいないので強制的に退学者を出させますだなんて」

「ほんとよね。信じられない」

軽井沢は目立つ立場にいる以上、人気もヘイトも集めやすい。

不安げに髪を触る彼女の心情は何となく理解できた。

「それで今は仲のいい子とグループを？」

「そんな感じ。自分には絶対に投票しないって子がいるだけでも安心だしね」

「私には無理そうだなあ……」

Aクラスのことだけしか考えていなかつた愛はクラスメイトとの交流をあまりしていない。

今のようにたまに話すことはあれど、裏切らない友人というのはいない。

「あんたは大丈夫なの？」

「一応それなりには頑張ってるつもりだし。体育祭とか、テストとか賛成票は仲の良い人に投じればいい。

誰に批判票を入れるかとなると、評価基準は少し変わってくる。

もちろん気に食わない人で良い。だが仮にその人が高い能力を有していた場合以降の特別試験で痛い目を見ることになる。感情論のみで投じると、痛い目を見るかもしれないのだ。

ゆえに結果を残している愛は批判票候補になれど投票される確率は低い。

「Aクラスに上がるということを考えたら、同じくらい嫌いな人を比べて優秀な人とそうでない人だったら優秀な人を残すよね」「……そうね」

この試験の本質は自分が退学しないように立ち回るのではなく、誰を退学させるかにある。

自分以外の誰かを退学させれば必然的に自分は生き残る。むしろ後者の方が安全と言える。

「ところで、綾小路くんとはうまくいってるの？」

「ふえ!? な、何もないから!」

特別試験の話題に飽きた愛が再び恋愛話を振ると、軽井沢はたちまち顔を赤くさせた。

「ちなみに付き合ってるの?」

「付き合っていないわよ! あ、綾小路くんが私のこと好きなのはただの噂だから!」

「それはね。じゃあ軽井沢さんは綾小路くんのこと好きなの?」

「そ、それは……。き、嫌いではない……し」

あ、ダメだ。顔が大好きですと言っている。

文字通りのツンデレという感じ。

だが落ち着け軽井沢、その先は地獄ぞ。

そう言いたいが、恋は盲目と言うし、もう手遅れなんだろうなと愛は思う。

「ぶつちやけ綾小路くんのことどう思つてるの?」

「いつも何考えてるか分からないし、無表情だし。でも約束はちゃんと守ってくれるしカッコいいし。でもたまに常識知らずで抜けてるところが可愛くて——」

「そつかあ。良い方向に行くといいね。応援してるよ

「……ありがと」

これは長くなるなと思ったので、話を遮つて強制的に終わらせた。愛には少しカロリーが高い話だった。

* * *

「これはまた、面白い試験が始まりますね」
「クラスから一人退学者を選ぶ試験だもんねえ」

軽井沢と別れたあと、愛は坂柳と共にカフェを訪れていた。

ちょうど、学年末試験で満点だった生徒を対象にコーヒー一杯が無料になるキャンペーんが行われていたためだ。

当然満点の二人は、タダでコーヒーを飲むべくこの店を訪れていた。

しばらくは世間話をしていたが、話題性に富んだ投票試験の話へと次第に移つていった。

「いいよねえ、Aクラスは楽そうで」

「そうでもないですよ」

いつもと変わらぬ口調で言う坂柳は、カフェラテを小さな口に流し込んだ。

「有栖ちゃんの中では誰を退学させるか決まってるんでしょ？」

「はい。葛城くんにしようかと」

「おいおい、いくら八遠といえどそれを話しても良いのかよ」「何か問題でも？」

「まあ私はクラス全体を動かせるほどの影響力は持つてないからね」
あの眩しい頭の男を思い浮かべながら、橋本の疑問に答える。

それと同時に、坂柳の言葉が偽りだと見抜く。

坂柳がそんなにあつさり終わらせるわけがないというのはこれまでの付き合いで十分に理解していた。

「葛城くんのは嘘だね」

「どうしてそう思われたのですか？」

若干声を弾ませた坂柳が次を急かす。

「葛城くんは確かに有栖ちゃんと敵対関係にあるから選びそうだとは思うけど、でも退学させるには惜しいよね」

「そうですか？　いつ彼が攻撃してくるかわかりませんから、今のうちに退学させておいた方がいいと思いませんか？」

「今の状態からどうやって反撃するのさ」

葛城と戸塚だけが現状坂柳派に属していない。しかし愛へのポイントは同調圧力に負けて払つている。

また、無人島試験で敗北を喫した葛城に対しても坂柳は愛の協力も相

まつてAクラスの地位を確実なものにしていた。

いくら葛城が反抗しようとしてもこの実績差では協力しようと思う生徒は現れないだろう。

「本命は戸塚なんだよね」

「ええ、その通りです」

「じゃあなんでわざわざ葛城くんの名前を出したのさ」

「万が一戸塚くんが他クラスから賞賛票を集めてきた場合、葛城くんが退学することになってしまいますから」

「まあ戸塚くんにそんなことができるかつて言われると……」

「あくまでも万が一に備えてですよ。それにその方が反応を楽しめますしね」

絶対それが本音だろうなという確信はあつたが、口にはしなかった。

坂柳に奢つてもらつたブラックコーヒーの味に顔を顰めながら愛はBクラスの方針を考える。

この試験は退学者ゼロに対する特例措置として行われることになつてているのだが、愛はクラスの足を引っ張るのにちょうどいい試験と考えていた。

目の前の坂柳も、戸塚の退学を逆らつた末路としての見せしめになると考へていて違ひない。

「らしいやり方だねえ」

ストレートに言えば、性格の悪いやり方。

持つてきたシユガーパーを投入しながら、愛はそう返答した。

「あんた、本当に性格が悪いわね」

「仕方ありません。これは必要な犠牲ですから」

言わないようにしてていたのに、神室が愛の努力を台無しにしていく。

「これでよし」

味の調整を終えて、ほつと一息ついた愛はクラスの方針を考える。

この試験は自らが退学しないように立ち回るのではなく、他の誰かを蹴落とすように立ち回る必要がある。

今クラスメイトが行つている、グループを作つて批判票を投票しないようにする行為は最適解ではない。

「愛さんはどうする予定なのですか？」

「今考えてるとこ」

正直誰でもいいのだが……こゝはやはり山内しかいないか。

元々突出した分野はなく、運動でも勉強でも全く成長が見られない。あと気持ち悪い。

「きーめたつ」

「どなたにされるのですか？」

「山内くん」

「ああ、あの」

「そうそう」

坂柳と山内には面識があつた。山内を数日の拷問ののち市中引き回しと火炙りの刑に処したくなるところだが、当然坂柳の策の一つなのでグツと堪える。

山内が自らアクション起こせるわけがないのだ。

「山内？ 誰よ」

「先月少しだけ利用させてもらった方です」

「……」

思い当たるところがあつたのか、神室は何も言わなかつた。その表情は少し歪んで見えた。

「であれば、彼を利用しても？」

「煮るなり焼くなりしてどうぞ」

山内がどうなるうと知つたことではない。

「フフ、ではそうさせてもらいます」

Aクラスの方針は後日坂柳の考えも合わせて決めるとして。あとは一之瀬たちがどう乗り切るか、それだけだ。

『帆波ちゃん、今時間ある?』

『私は大丈夫だよ！』

『じゃあ体育館裏に来て』

『ええっ！？』

『嘘だよ。今から帆波ちゃんの部屋行くけどいい？』

『ごめん、部屋片付けるからちよつと待つて！』

『準備できたら教えて』

『りよーかいつ！』

龍園たちがどうするのかはさておいて、一之瀬がどうやつて足りないポイントを補填しようとしているのかだけは把握しておく必要があつた。

龍園は無人島試験での敗北によつてポイントの獲得手段を失つており、その影響で一之瀬は退学取り消しのために不足しているポイントを得る手段を失つてしまつている。

またしても南雲との恋愛を条件に救済されてしまうのは愛としても非常に困る。

『準備できたよー！』

一之瀬の部屋の前に到着して少しして、その連絡が届いた。

インターホンを鳴らすと、私服姿の一之瀬が現れた。

それなりの厚着なのにラインが……ッ！ と心中で歯軋りしながら愛は一之瀬の部屋へと上がつた。

「麦茶でいいかな？」

「味のある飲み物ならなんでもいいよ」

「許容範囲がすごく広いね」

一之瀬は苦笑いを浮かべながらお茶とお菓子を準備していく。

「これくらいしかなくてごめんね」

「いやいや全然。私からしたら有料のものは全部高級品だから」

誤つてお菓子を購入しようものなら、愛は夜な夜な頭を壁に打ち付けることになるだろう。

「んー、塩美味つ！」

「独特な感想だね……」

「ここまで塩を感じたのは実に久しぶりだね」

「0ポイント生活つてそんなに大変なんだ」

「そりやあもう大変よ。時々、なんで私は無事なんだろうって思うし「想像以上に過酷だね!?」

改めて、お金の偉大きさを痛感するばかりである。

Aクラスで卒業した後の就職先として石油王はあるのか、確認をとつてみたいところだ。

「ふおし、ふあんふあいにふあいひほうふふあ」

「口の中のもの飲み込んでからにしようね」

「ふあいっ！……ゲホッゲホッ！」

「落ち着いて食べればいいのに……。大丈夫？　お水持つてくるね」

そう言つて背中をさすりながら水を差し出してくれる一之瀬はやはり聖人だ。

「ごめん、迷惑をかけちゃつた」

「気にしないで。それよりも普段は見られない愛ちゃんの一面が見れて満足！」

それはそれで恥ずかしいのでやめていただきたいと愛は切に願つた。

「それじゃあ本題に入ろつか」

「今度の特別試験のことだよね？」

「そう。帆波ちゃんはどうやって退学者を出さずに乗り越えようと思つてるのが気になるからね」

「にやはは、バレてたか」

「うん。バレバレ」

愛の言葉に笑つて返事をする一之瀬だったが、当然現状だと退学者を出してしまうことになる。

Cクラス全員のプライベートポイントをかき集めても2000万には到底届かない。

「今のところポイントは足りてる?」

「ううん、全く」

「具体的には?」

「600万ポイント弱は足りてないかな……」

「そつか、結構足りないんだ」

「そう……だね」

一之瀬の表情が曇る。もしもポイントを借りるのであれば南雲から。

しかし、その代償はあまりにも大きい。

「これも全部私のせいだよね……。クラスを導けなかつた私の責任」

「そうかな」

「だつて愛ちゃんや坂柳さんは4月からものすごくポイントを増やしているから」

「いや、私は特に何もしてないけどね」

「そんなことないよ。愛ちゃんはいつも活躍してる」

確かに体育祭でポイントをかつさらつて行つたり、テストで満点を取つたり駅伝で無双したりしているがその程度だ。

「きっと私はリーダーに向いていないんだと思う」

一之瀬の言葉を否定することはせず、続きに耳を傾ける。

「私つて人より優しすぎるからさ。坂柳さんや堀北さんみたいにみんなを力強く引っ張つていけないんだよね」

一之瀬が言つたことは尤もだろう。リーダーは一定の非難を受けながらも、結果のためには非情な決断をしなければならない場合がある。

そう言う状況で、一之瀬はあまりにも弱すぎる。

クラスメイトを大切にしたいと言う気持ちが強過ぎて最適解を選べない。それが一之瀬の決定的な弱点だ。

「帆波ちゃんにしかない強みもあるよ」

「本当?」

「もちろん」

「・・ありがとう」

愛がフォローを入れると、一之瀬の表情が少しだけ明るくなる。

「……ちなみにアテは?」

「南雲先輩、かなあ……」

やはりといった感じではあるが、愛も一之瀬の立場で退学者を出す

ことを禁じられた場合同じ選択を取つてゐるだらう。

「けど、あの生徒会長全くいいイメージないんだよねえ。この前の林間試験然り。帆波ちゃんには申し訳ないかもしけないけど『クズ』つて表現が一番似合つてる」

もしも一之瀬が南雲の女になつたとして。いくら南雲がそういう一面を見せたとしても一之瀬は優しすぎるが故に抜け出すことは難しいだらう。

それに、一之瀬はとても優秀だ。南雲に明け渡すわけにはいかない。

端末を操作し、ある画面を見せる。

「私は今これだけのポイントを持つてゐる。これだけあれば退学は阻止できると思う

「いやでも……」

「勿論ポイントは後から返してもらうよ。あと、他クラスへの賞賛票は私の言う通りに振り分けてもらおうかな」

「でも……」

それでも渋る一之瀬に、呆れてため息をこぼす。どこまでもお人好しだ。

「いいから首を縦に振る！ 友達が困つていたら助けるのが常識でしょ？」

「ありがとう……！ ほんとに、ほんとうにありがとう……！」

大粒の涙を流す一之瀬が愛の正面から抱きついてくる。

本当にたまたまなのだが、身長差もあってか愛の顔面に一之瀬の大福が押しつけられる形になつてしまつた。

窒息しそうになるが、その分一之瀬の匂いと柔らかさは一生分感じられたと思うので我が生涯に一片の悔いなしといつたところか。とにかく、愛は満足だつた。

＊＊＊

山内春樹という男はどうしようもない男である。

入学初日から、ピノキオなら壁を突き破っている勢いで嘘を吐きまくつたこの男は、気持ち悪い方の変態でもあった。

胸がデカいからという理由で佐倉の連絡先を求めたり、先月はただの噂を信じ込んで教室内で大声で吹聴して回つて空気を乱したりした。

極め付けには、入学当初からの成長が全く感じられない。

暴力事件というキーイベントを剥奪された須藤ですら若干マシにはなつてきているというのに、この男はその兆しが全くない。

挙げ句の果てには、ペーパーシャツフル試験で全てを愛に任せつきりにしようとしていたほどだ。

「山内くん、眞面目に勉強しないと私たち退学になっちゃうよ？」

「へーきへーき、八遠が満点取つて俺が少し取ればセーフなんだかう。それより遊びに行かね？」

「ダメだつて！ もし退学になつても取り返しはつかないんだよ？」

「へーい」

と言つた具合に。当然毎回である。

挙げ句の果てには無断欠席をした。

おそらく榎田なら制御できていただろう。

この山内という男の性癖が巨乳なのが全て悪いのだ。

この頃から、この試験で山内を追放しようと心に決めていた。

勿論録音済みである。

この場で反撃に出なかつたのはこの録音データを公開する際に愛の被害者感をより際立たせるためだ。

攻勢に出たのは投票日の2日前。山内が愛の噂を流し始め、クラス内に蔓延してきた頃を選んだ。

「悪いけれど、帰るのは少し待つてもらえないかしら」

ただし、先鋒は堀北である。

愛一人で片付けてしまつてもよかつたのだが、このイベントは堀北にとつても重要である。

何せ、今の堀北は兄の鼓舞を受けて立つていてるのだから。

「私なりに、この試験にどう向き合つていくかずっと考えていたわ」

入学時よりも従順になつたクラスメイトは誰一人として帰ることなく、堀北の話に耳を傾けていた。

「そして、一つの結論に至つたわ」

少し間を置いて、堀北は続ける。

「この試験で誰が退学すべきか。それは山内くん、あなたよ」

「は、はあ!? 何で俺なんだよ！」

「それは今から説明するわ」

突如自身の名前が挙がつた山内は取り乱しながら言い返す。

それに冷静に対処する堀北を見ながら、兄との和解は出来そうだと愛は胸を撫で下ろした。

予定通り堀北が山内の悪行を晒し上げ、協力者だつた櫛田にも厳しく問いかけていた。

「はいはーい！ こつちにちゅーもく！」

「どうしたんだね？ 八遠ガール」

「みんなに聞いて欲しいものがありまーす！」

堀北の話がひと段落したタイミングで、右手にレコーダーを掲げた愛が突然立ち上がつた。

そして注目が集まつていてることを確認して、それを再生する。

流れたのは、ペーパーシヤツフル試験の時の愛と山内が勉強をしている際の会話。

なんとか勉強をさせようとする愛と、面倒がる山内。

堀北による追及もあり、山内に向けられる目はさらに冷たくなる。

「思つたけどさ、山内くんつて私を退学させようとしてるよね。この時といい、今回といい

「そ、そんなわけないだろ！」

「でもさ私、山内くんに2回も退学させられそうになつていてるわけ。私、そんな人がいると落ち着かないよ」

本当に山内が愛を退学させようと思っているわけがない。本当に思つていたとしても、山内では愛を退学させることができるのはない。

だが、愛の話に嘘はない。

「私は堀北さんに賛成。こんな人と同じクラスつてだけで吐き気がする」

「お、おい・・・！」

「八遠さん、以上かしら」

「うん、みんなの参考になればいいかな」

「これ以上話すことのない愛は大人しく席に着く。

「以上が私の見解よ。最後に、ここにいる全員の意見を聞かせてーー」

「ちょっと待って堀北さん」

「何かしら」

「話を進めようとすると堀北に待つたをかけたのは平田だつた。

「話の腰を折らないように聞かせてもらつたけど、僕はこんな形でのやり方はおかしいと思う。仲間同士で蹴落とし合うなんて間違ってる」

「それ以外に方法はないわ。この試験に抜け穴なんてない」

「それは平田の悪あがきだつた。」

「この先必ず起ころる現実から目を背けたいだけの、わがまま。

「受け入れられるわけないじゃないか。僕はただ・・誰ににも欠けてほしくないだけなんだ。山内くんだけ、綾小路くんだけ、退学を望んでいない。望む退学なんてあるわけがない」

「平田くん、一回落ち着こう。論理が破綻しているよ」

平田と堀北の押し問答に愛が割つて入る。

「みんな退学を望んでいないのなんて当たり前だよ。高校中退なんて学歴、残したくないでしょ。だから蹴落とし合うんだよ。自分が退学したくないから、代わりに誰かに退学してもらう。そうすることで自分を守るんだ」

「そんなの、おかしいよ・・・！」

「おかしいと思うのなら、解決案を提示すること。これ常識」

愛がそう言おうが言わまいが、平田はおそらく理解している。この状況を回避することは不可能であり、自分が無茶苦茶なことを口走っていることを。

「これ以上は意味ないね。堀北ちゃん、意見聞いてやおう」

「そうね。私の意見に異論がある人は——」

しかしそれは『ガタン！』という音によつて再び中断されることになる。

「止めろと言つているんだ」

先ほどよりも数段低い平田の声。

善人平田の思わぬ本性に、教室が騒然とする。

「じゃあ代わりの方法はあるの？ 特別試験のルールを変更するの？ 退学者救済の2000万ポイントは用意できるの？」

「この話し合いは間違つてる」

「おい私の質問に答えてくれーい」

躊躇なく圧を振りまく平田と、それに怯まない愛。

教室内の誰もが、行く末を固唾を飲んで見守つていた。

「じゃあ当日まで何もしない？ みんな退学の危機に震えながら当日を迎える？ 私はそれでもいいけど」

平田が修羅の表情で愛との距離を詰めていく。

「それに私はこの情報は開示しておくべきものだと思ったから今こうして話してるんだ」

「黙れ……」

「でも実際この問題を解決しておかないとこのクラスは上を目指すことはできないと思うんだだけ——」

「八遠、ちょっと黙れよ」

「無理。というか人のお話は最後まで聞こうねって習わなかつたの？」

教室内が静まり返り重苦しい空気に包まれる中、愛は通常運転を貫く。

「僕のクラスに退学していい人なんていないんだよ」

「ごめんな、私の中ではいるんだわ」

しかしこの状態でふざけるのはやはり無理があつたようで、平田に胸ぐらを掴まる。

身長差のせいで顔が天井を向いていて恥ずかしいし苦しい体勢なのでやめてほしいところなのだが。

「いい加減にしろよお前。口を開けば不快なことばかり」

「平田くんが勝手に不快に感じてるだけでしそうが」

平田の拘束を振り解き、距離を取る。

「平田くんは何かを勘違いしているぞ?」

「そんなことはない」

「いや、決定的な間違いをしているね」

それは小学生や中学生による排斥と社会で行われる排斥の根本的な違い。

「平田くんの過去に何があつてそういう思考になつてんのか知らないしどうでもいいんだけど、これをいじめだと思っているのならそれは違う」

平田が一步近づいてくる。

愛は口を止めない。

「子供のいじめは感情的なものばかり。好き、嫌い、楽しい、怖い。全て幼稚な感情から発生する無意味な行動」

平田が鬼の形相でさらによづいてくる。

愛は話を止めない。

「でも、これは違う。能力の低い人間を排除し、組織の健全化を図る行為。組織全体に悪影響を及ぼす行為を行う人間を排除しなければ、大多数の平和は守られない」

「だけど、寄つてたかって一人を攻撃するのはおかしい!」

「私もそうなりかけたんだけど。君は私のことは守つてくれないよね。いやまあ守つてほしいとは一ミリも思つてないんだけど」

要するに、今回はクラスの輪を乱すいじめっ子を排除する行為に等しいというわけだ。

「それに、暴力でなんでも解決できると思うなよ」

再び掴みかかろうとする平田の腕を押さえ込みながら、愛はAクラス行きはいつになるのだろうかと思案する。

平田があまりにも暴れるので、背負い投げをして大人しくさせたように思う。

「一人の人間も守れないような男が情けなく喚くな」

冷たい表情で平田を見下した愛は、すぐにいつもの表情に戻してクラスメイトに呼びかける。

「というわけでみんな、投票先はよくよく考えてねつ！ それじゃあまた明日！」

愛は、重苦しい雰囲気に似合わない晴れやかな笑顔で教室を後にしてた。取り残されたクラスメイトは固まつたままだつた。

＊＊＊

投票日当日。

教室の空気は今までないほどカオスだつた。

今にも発狂しそうな山内と負のオーラで溢れる平田。それに寄り付かないようにする他のクラスメイトといつも通りの高円寺。

「おはよう堀北さん」

「おはよう。あなたは随分と余裕そうね」

「まあね。私が退学するわけないし」

「強気ね」

愛は一之瀬にポイントを貸し付ける代わりにCクラスからの賞賛票を得ることにした。

その数30。

愛を退学させなければ70票近くの批判票が必要だが、他クラスからの組織票がなければ愛が退学になることはまずない。

「そもそも、私が平田くんか山内くんの3択の時点ではほぼ確定みたいなもんでしょ」

「……それはそうね」

結果を残してきた愛と、リーダーの平田。そして足を引っ張る山内。誰が退学するかは明白だ。

Dクラス——龍園は何か手を打つてているのか、そこだけが気になるところ。

だが、それを気にしたところで結果が変わるものではないのは事

実。

その時が来るまで愛は山内に話しかけることにした。

「おはよ、山内くん」

「お、おはよう」

通常運転の愛に対して山内は貧乏ゆすりをして落ち着かない様子だ。

「山内くんは退学回避できそう？」

「あ、当たり前だろ……！」

渦中の二人の会話に、全クラスメイトが聞き耳を立てている。

それを感じ取り、ニヤリと笑みを浮かべたのは愛の方。

「ちなみに私は批判票には山内くんの名前を書いたけどね」

「うう。君の敗北は決まっているようなものさ」

「何言つてんだよ高円寺。俺は退学にはならねえって」

高円寺の煽りに山内はそう返すが、その表情には力がこもつていなかつた。

「そうかなあ。みんな山内くんの名前を書いていると思うけど」

「そんなことはないよ。退学するのは僕だ」

どこからともなく現れた平田がそう言う。

投票日前日、平田は批判票に自分の名前を書くようにお願いしていたが……それは達成されそうにない。

「いや、平田くんは退学しないよ。ほら」

愛が端末を操作し、ある画面を平田に見せる。

そこには、平田を信じて賞賛票を入れてほしいと言う旨のメッセージがあった。

「平田くんはこの前あんな醜態を晒してしまったわけだけど、それまでに勝ち取ってきた信頼を覆すには至らなかつたようだね」

「だねえ。こんなメッセージを見せられれば多くの生徒は同情する。むしろ賞賛票が増えたんじゃないかな？」

「そんな……」

そうなると、退学候補者はさらに絞られる。

「ちなみに、ずっと震えてるのは山内くんだけみたいだけど？」

「八遠、お前は心配じやねえのかよ!」

「いや全く。だつて私は特別試験や定期試験でそれなりに結果を出しているし。Aクラスを目指せるこの状況でわざわざ私を排除しようだなんて、頭おかしいんじやないの?」

あと危険なのは池や須藤といったあたり。

しかし、愛が流した録音データの影響もあり彼らへの否定的な感情は多少薄れているようにも思える。

「……へつ」

挑発とも取れる愛の言葉に、山内は鼻で笑った。

「もういいか。話しちゃつてもさ。俺は退学しないんだよ」

「ほう? 理由を聞こうか」

「いいぜ、教えてやるよ」

高円寺が興味を示す。

「何人俺に批判票を入れたんだろうな。20人か? 30人か? ひどいよな。でもいいぜ、今回は許してやるさ」

ひどいのはお前の方だと教えてくなる気持ちを抑え、最初で最後の山内の活躍を見守る。

「このクラスで退学候補って数人だよな。俺が寛治、須藤、高円寺、綾

小路に八遠。でもどれだけ賞賛票を集められるんだろうな」

「少なくとも私は10は堅いね。でも君がそんなに取れるのかな。ちょっと想像がつかないんだけど」

「そうさ。取れるんだよ」

「仲のいい友人が同情で君に賞賛票を入れても、精々4、5票だろう。それでも問題ないと言えるのかな?」

「いいんだよ、それだけあれば。そう、無駄なんだよ!」

山内が拳を突き上げる。

その目はどこか虚ろだ。

「俺はさ、坂柳ちゃんに賞賛票を20票もらうつて約束してるんだよ。つまりクラスの大多数が俺に批判票を入れても退学にはならないんだよ!」

「で、証拠は?」

「は？」

「まさか口約束？」

「そうだよ。それの何が問題なんだよ」

愛は思わずため息をこぼす。

どこまでも無知で、どこまでも無能。

それが山内春樹という生徒なのだと改めて実感した。

「どこかで遊ぶ約束ならそれでいいかもしないけど、今回のは君の退学がかかってるんでしょ？ だつたら書面か録音か何かで形に残しておかないと。そんなんじゃ簡単に裏切られるよ？」

「坂柳ちゃんが俺のことを裏切るわけないだろ！」

「ぶつ、あはははは！ よりにもよつて私にそれを言う？」

「どうした。何がおかしい」

ついに吹き出して笑い声をあげる愛に、状況を飲み込めない山内はそう問いかける。

「君は有栖ちゃんのこと何にもわかつてないんだなって。しかも私たちが仲良いのは割と有名な話だと思うんだけど？」

「そんなことはわかつてるんだよ！ でも大丈夫なんだよ！」

「有栖ちゃんはそんな口約束は守らない。少なくとも君のことは捨て駒程度にしか見ていないと思うよ。好意を寄せられてるなんて勘違 iiしてたみたいだけど」

そして、運命の時はあつという間に訪れる。

「山内。もう少し静かにしろ。お前の声が廊下にも響いていたぞ」

茶柱が教室にやつってきた。つまり、これから結果が発表されるということ。

「待たせたな。ではこれから結果を発表する。まずは賞賛票の上位3名から」

教室が静寂に包まれる。

まもなく退学者が発表されるのだから、可能性が低けれど自分かもしれないと思つてしまふのは致し方ないか。

「3位は櫛田桔梗」

安心してか、櫛田は一つ小さく息を吐いた。

「そして2位は……平田洋介」

「……つ」

やはり、平田は賞賛票を多く集める結果になつた。

やはりこの1年の働きは先日のマイナスを大きく上回つっていたようだ。

「1位は——お前だ、綾小路」

「なんですか!?」

予期せぬ名前だったからか、山内が反射的に声を上げた。

「批判票の間違いではないんですか!?」

「いや。賞賛票の1位で間違いない。それも56票という素晴らしい結果だ」

「あなた、何をしたの?」

「いや、オレは何もしていない」

綾小路の言葉に訝しげな目線を向ける堀北だが、今回綾小路は本当に何もしていない。

今回何かしていたのは、その反対側に座る愛と坂柳の二人だ。

「そして最も批判票を集めたのはお前だ、山内」

「嘘だ!」

「いいや、35票の批判票が集まっている」

「き、きんじゅうひょう!?

「すごいな……大人気だ」

原作の33票をさらに上回る好記録を叩き出した山内は、無事に退学が確定した。

「嫌だ、なんで俺が退学しなければいけないんだ!」

とうとう発狂し始めた山内を遠目から眺め、近くの席でなくて本当によかつたと安堵した。

「なんで! なんで! なんでこんなふざけた試験で!」

それに関しては割と共感できるが、特別試験を中止させるのにプライベートポイントがどれだけ必要かわかつたものではない。

「退室だ、山内」

その後も山内は無駄に抵抗を続け、周りの生徒が哀れみの目を向け

ていた。

ともあれ無事に山内が退学したため他のクラスの動向が気になるところで、解散となつてすぐ坂柳と会うことを決めた。

坂柳とは学校の入り口で合流した。

周りの生徒は退学を免れた安堵からか談笑する姿を多く見かけ、山内の発狂を一生分見届けた身としては非常にありがたかった。

「試験お疲れ様でした。それにしても山内くんのことは大変でしたね。こちらのクラスまで声が聞こえてきましたよ」

「それは本当に申し訳ない。でももう退学だから、これからはその心配はなさそうだけどね」

おい山内、他クラスにも迷惑をかけているぞ。責任を取つて退学しろ！ あ、もう退学していたんだつた。

「Aクラスは予定通りだつたね」

「ええ。戸塚くんに退学していただきました。彼は最後まで葛城くんに傾倒していたようでしたし、ちょうど排除できて助かりました」

「それはよかつた」

1階の掲示板に張り出されていた試験結果を思い出しながら話を続ける。

「Cクラスは退学者なしだつたね」

「そうですね。愛さんの協力もあり、2000万ポイントを支払つて退学を取り消すことができたようです」

愛が一之瀬にポイントを貸したことと、Cクラスは退学者を出すことなく試験を乗り切つた。

「そしてDクラスですが、龍園くんが退学となりましたね。石崎くんが龍園くんの退学を回避しようと奮闘していたようですが、実を結ぶことはなかつたようです」

「まあいいんじゃないの。本人も年明けてから無気力だつたし」

「ですが、こんなにもあつさりと退場するとは思つていなかつたので

意外でしたね

「しぶとい印象が強かつたからね」

物語の初めからずっと死亡フラグを乱立させ続けながらも結局工
ンディングまで生き残っている、そういう立ち位置が一番似合うだろ
うかと愛は思案する。

実際のところ、早々に退場してしまったわけだが。

「そういえば、石崎くんは綾小路くんにも助けを求めていたようです」
「そうなんだ」

「ですが、流石の彼でも手の打ちようがなかつたようですね」

「まあそりだらうね」

Aクラスの賞賛票は全て綾小路に。Cクラスの賞賛票は全てBク
ラスに。

龍園が賞賛票を得る手段はなかつた。

そして、退学を回避するだけのポイントも所有していなかつた。

「龍園くんの退学は大きいね」

「ええ。これでDクラスの逆転の可能性はなくなつたと言えるでしょ
う」

「そうだね。それなりの能力の人はいそうだけど、龍園くんみたいな
リーダー気質の人はいなさそりだし」

「となるとこれからは三つ巴の戦いということになるでしようか」

「そりだねえ」

とはいえ、まだ卒業まで半分に到達していないというのもまた事
実。

学年末試験を経て4月を迎れば、新入生がやつてくる。

これからクラス人数が増えたり減つたりしながら戦いを続け、最終
的にどのような結果になるのか愛は密かに楽しみにしているのだつ
た。

3月 裏話 その2

クラス内投票試験を終えた翌日。

整然と並ぶ机の列に、1箇所だけぽつかりと穴が空いた。

退学が決まった山内春樹が使用していた椅子と机は、初めからなかつたかのように取り除かれていた。

「こうして見ると、少し寂しさを感じるわね」

隣の席の堀北がその方を見ながらそう呟く。

年度が変わつて席替えが行われない限り、あれは残り続ける。

「これ以上退学者が出ないといいけどね」

「そうね。そのためにはプライベートポイントを用意しておく必要がある」

「だねえ」

「あなたにも協力して欲しいのだけど?」

「なんでさ」

「あなたがこのクラスの一員だからよ」

「ほどほどに頑張るよ」

「あなたがこのクラスの一員だからよ」

このクラスがAクラスに昇格しない程度にではあるが。

愛としてはこのクラスがどうなるうとどうでもいい。

2000万という莫大なポイントを集め、Aクラスに移動することができる。

極論、綾小路や堀北、龍園が退学しても救済しようとは思わない。

それを嫌うのは愛が存在しなかつた場合にたどるルートとの乖離によつて、原作ルートが役に立たなくなることとなるべく避けたかつただけだ。

「この学校の本性を見せつけられたような感覚ね」

「そう?」

「今まで何度も退学の危機に直面した生徒がいたことはあつたけれど、今までそういう生徒はいなかつた。けれど今回、退学者は出てしまつた」

「確かにそうかも。中学生までは義務教育だし、何しても退学にはな

らないっていう印象だつたからね」

高校からは義務教育の枠を外れる。

学校の品位を落とすような言動を行えばそれ相応の罰が降るわけ

で。

それでもこの学校の特異性は十分に体感させられているのだが。

「全員揃っているか？」

入室した茶柱が開口一番にそう言う。

この場には確かに39人全員が揃っている。過不足はない。

「では、これより今年度最後の特別試験の発表を行う」

要約すると、自クラスと相手クラスがそれぞれ作成した10の種目——合わせて20の種目から7つの種目を選んで戦い、その勝ち数を競う試験。

作成する10の種目のうち、5つを本命、残りの5つをブラフとするところは特筆しておくべきだろう。

そして肝心のポイント変動だが、1種目に負けたクラスから勝つたクラスへ30クラスポイント移動させる。また、勝つたクラスに100クラスポイントが付与される。

例えば4勝した場合、相手クラスからの30ポイントと100ポイントを合わせて130ポイント獲得することになる。

一方、3勝しかできなかつた場合30ポイントのマイナスという結果になる。

3勝と4勝では160ポイントの差が生まれるということだ。

また、種目はルールが簡単で有名なものであればなんでも良い。

特技を聞かれた池が『じゃんけん』と答えると、茶柱がそれを記入していく。

「ルールはどうする?」

「えっと……3本先取?」

「大勢が知る種目かつ単純明快なルール。学校がこれを認めない理由はないだろう」

「種目決まつちやつたよ……」

と、このような具合に。

種目の範囲は意外と広い。その中からクラスに合った種目を選ぶ必要がある。

「また、各クラス1名ずつ『司令塔』を選出してもらう」

「具体的に何をするんすか?」

『司令塔』の役割は各種目の参加生徒を決めることがある。なお、『司令塔』は種目に参加できないという点は注意しておこう。だが、各種目の任意のタイミングで介入することができる。条件は種目を決める際に同時に策定してもらうことになる」

さらにいえば勝利した場合『司令塔』は追加報酬を獲得できる。

敗北した場合は退学という厳しい処分を受けることにも注目しておく必要があるだろう。

「特別試験の今後の日程を説明しておく」

今日が8日。種目の発表は15日。試験本番は22日。

つまり種目の決定に1週間、それから本番までの準備期間が1週間ということだ。

「なお、種目決定の際のルールはこのパンフレットに書いてあるのであとで目を通しておけ」

質問がないことを確認した茶柱は、そう言って教室を後にした。

愛は隣の堀北の方へ目を向ける。

現状平田が全く機能していないので、その代わりを堀北にやつてもらう予定だ。

実際、チラホラとパンフレットを見に動く生徒はいるものの動きにまとまりはない。

クラスポイントが大きく動く特別試験でまとめ役がないとなると大敗は避けられない。

まあ負けることには変わりないのだが。

「……はあ、わかつたわよ」

ちよいちよい、と目配せをすると堀北は仕方なくといった感じのため息を漏らした。

Aクラスに上がりたい堀北が嫌そうな仕草を見せているのは、愛に従うと愛の計画を進行させてしまうと危惧しているからかもしれない

い。

しかし現状のまどまりのない状況を打開しなければならないことは共通認識であるから、ああいつた表情を見せたのだろう。

「……今回はまたほぼ出番なし、かなあ」

司令塔は綾小路の役目。まどめ役は堀北の仕事。

愛は面白くなさそうに窓の外の景色を眺めた。

その夜、愛は堀北の部屋を訪れていた。学年末試験の作戦会議をするためだ。もちろん泊まりである。

写真に収めた種目決めのルールを改めて確認する。

「これは結構難解だ」

「ええ。全員が理解するまで時間がかかりそうね」

ここまで成績だけを見れば最も優秀と言えるが、一部の生徒の活躍によるところが大きい。

アベレージの高いAクラスであれば全員で話し合いをして種目決めを行えるかもしれないがBクラスには難しいだろう。

愛の髪を堀北が梳かしながら続ける。

「このままだと非効率だから別の策を考えたほうがいいかしら」

「そうだね。具体的な中身の話し合いは少数でやつて、草案に不満がないか確認する方が良さそうかな」

「とはいって一人一人のことを詳しく理解しているわけではない。まずはそれを知るところからね」

「じゃあ明日みんなに聞くことになるかな。アンケートみたいな感じで紙に書いてもらうのがいいかも」

愛も全員の得意分野を把握しているわけではないし、そもそも記憶量が多すぎるのやろうと思つたこともない。

堀北のこともそこそこに勉強も運動もできる程度にしか理解していない。

強いて言うなら料理が美味しくて面倒見が良くて意外と母性があ

るというくらいだ。

あとは意外にも辛いものが苦手で実はブラコンである。

要するにあまり知らないということだ。

「大会とかで実績を残しているのであればそれも書いてもらつた方がいいわね」

「ひとくくりに得意と言つても本人の主觀になつちゃうもんね。そういう客観的な指標も欲しいね」

例えば愛であれば『テニス（全国大会3回戦進出）』と書ける。
同じテニスが得意な人でも、ただテニス部に属しているだけで大会で実績のない人と全国で戦う人では雲泥の差がある。
得意不得意の基準は非常に曖昧だ。

「終わったわよ」

「ありがと。やつぱり堀北ちゃんにやつてもらうと仕上がりが違うね。さすがプロ」

「慣れているだけよ。それにしても、随分と髪が伸びたわね」

「ほんとだね」

確かに、と鏡の向こうの自身を見つめながら髪を撫でる。

愛は長い髪は手入れが面倒な上、邪魔に感じていたので入学前は短くしていた。

髪を伸ばしているのは当然。ポイントを消費したくないからだ。

美容室に行つてカットをお願いすると1回50000ポイント程度。堀北くらいの髪の人人がどれくらいの頻度で通つているのかは不明だが、入学前の愛は2ヶ月に一度くらいのペースで髪を切つていた。つまり1年で300000ポイントの消費となる。移動するまでにおよそ500000ポイント程度使うことになるだろう。
他のオプションも合わせるともつとかかるわけで、これは最低ライ

ン。

もはや吐き気を催すレベルである。

とはいえた放置していると前髪が鬱陶しいので、そこだけは自力でどうにかしている。

「あとは種目の決め方ね」

「単純に普段のテストの成績がいい人でいいと思うよ。幸村くんとか、王さんとか。平田くんが使えないのはちょっと残念だけど」「そこは割り切るしかないわね」

平田は綾小路がなんとかしてくれるはずである。

堀北とともに種目決めに注力するのがベストだろう。

「Aクラスは平均的なレベルが高い。そうよね?」

「うん、それは間違いないよ。だけど突き抜けた能力を持っている生徒はそんなに多くないかな」

「そこは司令官……綾小路くん次第ね」

であれば問題はないだろう。

「あとはいかにAクラス一人一人の得意不得意を把握できるかだ」「それはあなたの仕事ね」

「……いや、私あまり知らないんだけど」

確かに愛はAクラスと一定の交流があるが、よく知っているのは坂柳くらいだ。

「そういうことは櫛田さんが方が詳しいんじゃない?」

「問題は彼女が協力してくれるか、ね」

「そこは堀北ちゃんの腕の見せ所だよ」

「そうね」

どうしても口を割らない場合は綾小路に直接聞いてもらうしかないだろう。

「でも、Aクラスは筆記を中心に種目を選んでくると思うけどね。それも比較的大人数の」

「Aクラスに頭のいい生徒が多い……というよりはこちらの問題ね」

「そう。運動能力に長けた生徒は多いけど、勉強は苦手な子が多いから」

もちろんそうでない生徒はいるが、Aクラスに遠く及ばないのが現状。

勝敗はいくらこちらが運動形の種目で固めたとしても筆記ばかりが選ばれたら勝ち目はないだろう。

「ところで、あなたはもしテニスが選ばれたとして勝算はどれくらい

あるのかしら?」

「当然100%だよ」

堀北の問いかけに愛は間髪入れずに答える。

「大会も近いからね。Aクラスには男子も女子も含めて全国レベルの選手はいないし、勝つて当たり前だよ」

「頼もしいわね」

「もちろん、もしテニスが選ばれなかつたとしても筆記でも満点をとるから」

これまで特別試験には真面目に向き合つてきた。そのスタンスはこれからも変わらない。

「それにしても意外ね」

「何が?」

「特別試験への姿勢のことよ」

「Aクラスに移動するつて言つてるのについてこと?」

「ええ。ただAクラスに移動したいのであればもつと楽な方法はあるでしようし、特別試験に真面目に取り組む必要もないはずよ」

「誰かの力を借りたくないだけ。一番信用できるのは自分自身だから」

他人を無条件に信用するのは危険だと言うことは愛自身が一番理解している。

だから坂柳との契約も書面で行つた。

「もし私がAクラスに移動したら堀北ちゃんはどうしたい?」

「それはどういうことかしら」

「堀北ちゃんもAクラスに移動したいかつてこと」

「それは……当然今のクラスで戦うに決まつているじゃない」

「えく、寂しいなあ」

「ならあなたが諦めることね」

堀北が残る選択をしたならそれまでで、再びDクラスまで突き落とすだけだ。

「ところで話は変わるのだけれど」

「なあに?」

「先日のクラス内投票、裏で私を動かしたのはあなたね？」

堀北は真実を知ろうと愛の瞳の奥底を覗き込む。

「ん？ なんのこと？」

「兄さんをけしかけて私にアドバイスをさせたのはあなたかと聞いているのよ」

「まあ否定はしないよ。 そうでもないと危うく私が退学するところだつたし」

堀北は不服そうな表情だつたが、愛は決して嘘についているわけではなかつた。

自身の退学を回避したいという安直な考えによつて多くのクラスメイトは山内に賛同し、愛の名前を書こうとしていたのだから。

「まあいいわ。 あなたからは真実を引き出せないそうにないもの」「嘘をついているつもりはないんだけどなあ」

「嘘じやないかもしねないけれど、真実とも限らないでしよう？」

「じゃあそういうことでいいよ……。 ふわあ、眠くなつてきちゃつた」時計を見れば、間もなく日付が変わろうとしていた。

それは愛の活動限界が迫つていてることを指し示している。
「あなた本当に泊まつていくの？」

「えつ、 そう言つたつもりだけど。 女の子は日常茶飯事だと思うよ」

実際にそう言う約束事をする会話は耳にするし、付き合つていると思われる男女もたまにそういう話をしている。

「まさかこんなに寒い中帰らせようとはしてないよね？」
「……それもそうね」

「わっほーい！ お泊まり！ お泊まり！」

いくら3月を迎える日々に暖かくなつてきたとはいえ、昼夜の寒暖差は大きく相変わらず朝は冷え込む日々が続いている。

綾小路に容赦なくコンパスの針を突きつける堀北でもさすがに躊躇われるようだ。

「子供みたいな真似はやめなさい」

「まだ子供だもーん」

16だもんね、と悪気もなく言い張る愛に堀北はため息を漏らす。

「このベッド、シングルよ。狭くないかしら？」

「へーきへーき、ほら」

先に入つた愛が端に寄れば十分なスペースが生まれる。

手招きすれば堀北は観念して、電気を消しひでに入った。

「おお、顔が近い」

「本来は一人で寝る場所だから当然ね」

少し顔を動かせば鼻同士がぶつかりそうな距離感だ。

両手を背中に回せばさらになづく。

「八遠さん、これは恋人同士がすることではないかしら？」

「そうかな。でも私たち乳縄り合つた仲だし問題ないよね」

「あなたが一方的にやつていただけでしよう」

「私には揉まれるものがないから仕方ないね。……うん、仕方ないの。ぐすつ」

「自滅してどうするのよ」

まもなく高校生活の4分の1が終わろうとしているが、やはり愛は幼児体型のままだった。

腹いせに、堀北の胸に顔を埋めておくことにする。

「これはよく疲れそうだ」

「なら早く眠ることね」

「冷たいなあ

「疲れたのよ」

それは言つたが、普段であれば寝ていてる時間だ。

しばらくすれば眠気が襲つてきて、愛は温もりの中で堀北よりも先に夢の世界へと旅立つた。

対戦相手クラスが決定した種目が発表されたその日の夜、愛はまたしても堀北の部屋を訪れていた。

前回と違うところは、堀北からの要望だということ。

デレたのかと思つてちよつかいをかけたが、軽くあしらわれたので

どうやらことではないらしい。

話を聞けば、ここに綾小路を呼んで話をするのだとか。

「なるほど、それで3人分のご飯を用意しているのか」

「そうね」

1人暮らしなのに3人分の食器を用意できたのかと思ったが、ちゃんとあるらしい。

手持ち無沙汰になつた愛はエプロンを纏つた料理をする堀北の後ろ姿を眺めることにした。

このあと綾小路を呼んで特別試験の——堀北が考えたプランを評価してもらうのだ。

事前に愛も目を通したが、よくできていると思う。

選んだ20の種目と、クラスメイト各人の得手不得手。そこから堀北が割り出した勝率や評価が細かく書かれていた。

さらに言えば、Aクラスの危険人物も愛が把握できる範囲で記載してある。

「結局、私がいる意味ってあつたの?」

「後でわかるわ」

いまだにその真意が見えてこないが、堀北なりに考えがあるのだろう。

今の堀北がリーダーとしてどの程度の能力を有しているか見ることができる可能性もある。

愛は深く追求することはしなかつた。

しばらくすると、インターhonが鳴った。おそらく綾小路だろう。私が行くわ、と堀北が言うので愛はソファード寛いだ体勢のままでいることにした。

「八遠もいたのか」「やつほー」

堀北が綾小路を机に座らせたので、愛はその向かいに腰を下ろした。

「八遠、どうして俺が呼ばれたのか分かるか?」

「さあ? そもそも私がここにいる理由もわかつてないから」

「そうなのか」

綾小路はキツチンに立つ堀北の方を見る。

「邪魔だつたか？」

「いいえ、せつかくあなたにも夕飯を食べてもらおうと思つて」
堀北の言葉に綾小路は黙り込んでしまつた。おそらく堀北の目的に気づいたのだろう。

「綾小路くんは堀北ちゃんから何も聞かされてないの？」

「話があるとしか言われていらない」

「あー……なるほど」

堀北は綾小路に夜ご飯と引き換えに面倒な話を聞いてもらおうとしているのだ。

ついでに愛にも。

「ちなみに味は保証するから安心していいよ！」 堀北ちゃんに餌付けされた私が言うんだから間違いないっ！」

「そ、そろか」

愛は満面の笑みでサムズアップする。

綾小路が若干引いている気がするな。

「いや、本當だからね！ 全財産賭けてもいいレベルだからね！」

「じゃあポイント全て預かつておこうかしら？」

「ステイ、今のは比喩表現だ」

エプロンを身につけていると、オカン属性が付与される気がする。
愛としては堀北の子供にはなりたくないところだ。厳しそうだから。

「何かついているかしら？」

「いや、そんなことないよ」

愛は座り直し、大人しくしておくことにする。

いよいよ皿が机に並び始めたところで綾小路が手伝いを申し出た。

「私は何かできることある？」

「そこでおとなしくしておくことね」

「ミッショーンを全力で遂行する」

「遂行すること何もないだろ」

「確かに」

愛も協力を申し出たものの堀北にあつさりと断られてしまつたので、2人の様子を眺めることにした。

堀北が白米や味噌汁を装い、綾小路が配膳する。言葉を交わさずとも、実に息のあつた連携プレイだった。

「これもう夫婦だよ夫婦」

「は？」

「もしかなたがそう見えるのだとしたら、その目は腐っているわ。新しいものに取り替えてもらひなさい」

「それはオレも傷つくんだが」

綾小路が流れ弾で致命傷を負つたところで、堀北特製の夕飯が全て食卓に並んだ。

「いただきます」

「いただきまーす」

「いただきます」

実際に揃わない挨拶を終えて、箸を手に持つ。

綾小路が味噌汁の大根を口にした直後。堀北が綾小路に一冊のノートを突き出した。

呆気に取られている綾小路に、堀北は言い放つ。

「食べたわよね？」

「え？」

「ご飯。それも私の手作り」

「前にもこんなことあつたような……」

渋々といった感じで堀北からノートを受け取ると、綾小路は読み始める。

それを見て、堀北は驚いた表情をする。

「八遠さん、あなたにも見てもらうから」

「えつでも」

「この前も食べたわよね？」

「はい」

愛は悟った。オカンモードの堀北には逆らえない、と。

とはいえたが、小路が読破するまで食事に手をつけないのも申し訳ないので、味噌汁の椀を手に取つた。

「うん、今日も美味しい！」

「それはよかつたわ」

「うまい！　うまい！　と言いながら食べ進め、半分ほど減ったところで綾小路からノートが回つてくる。

読み進めていくと、その情報量に愛は驚かされた。

クラスメイト各個人の得意不得意に始まり、堀北主観の評価や各種目に割り当てた場合の想定や勝利できる確率。そして愛が提供したAクラスの情報など。

よくできている、というのが愛の評価。

自分にはこんな作業はできない、というのが正直な感想だつた。「どうかしら？」

堀北にしては珍しく、愛の様子を窺いながら尋ねてくる。

このノートの作成に相当な時間と堀北の全力を費やしたことが必要だろうか。

「うん、よくできてると思うよ。私からは特に言う事はないかな」「ありがとう」

ノートを堀北に返すと、綾小路が口を開いた。

「オレも内容に異論はない。が、一つだけ頼みたいことがある」「何かしら？」

「確かチエスのところには八遠の名前があつたよな」

堀北がノートを開き、該当部分を確認する。横から愛が覗くと、確かに愛の名前がそこにはあつた。

「他に得意な生徒もないもの」

「だが、八遠には可能な限りテニスに参加してもらいたいと思つている」

「じゃあ代わりはどうするつもり？」

「お前だ、堀北」

「私？」

堀北はまさか自分の名前が上がるとは思つていなかつたようだ。

「ああ。お前に頼みたい」

「どつちも選ばれる確率は意外と高いからね。私以外にもできる人がいて損はないと思うよ」

「八遠の言う通りだ。それに、司令塔の関与が強すぎると言うのも気になる」

司令塔の持ち時間は30分。1試合丸々とまではいかないまでも、他の種目が人員入れ替えや1問の答案変更程度にとどまっていることを考えると、綾小路の考えは正しい。

「有栖ちゃんの腕前はプロにも引けを取らないのは間違いないね。何回も対局してるからわかる」

愛が坂柳の立場だつたとして、10種目の中にチエスを組み込んだ場合必ず本命の1つにする。

得意分野なのだから、当たり前の話だ。

「残念だけれど、私はチエスをしたことがないわ」

「オレが教えるから問題ない」

「八遠さんではなくて？」

「お、私が恋しくなった？ なつちやつた？」

「綾小路くんにチエスの経験があるか気になつただけよ」

愛が堀北の顔を覗き込みながら煽るが、堀北は表情を変えることなく受け流す。

対応に慣れてきてしまっている。

「オレもある程度はできる」

「あなたがそう言うのなら私から言う事は何もないわ」

「堀北ちゃんが冷たいよお」

「あなたが1人で盛り上がっているだけよ」

チエスの段取りが決まったところで愛の頭に一つの疑問が浮かぶ。

「綾小路くん、テニスとチエスでチエスが先だつたらどうする？」
「堀北だ。八遠の強みはどの種目にも対応できる万能性にある。仮にテニスだけが抽選されなかつたとしても必ず出番は来る。これは逆でも同じだ。先にテニスが選ばれた場合は八遠を起用し、堀北はなるべく温存する」

「おつけい。じゃあテニスは私、チエスは堀北ちゃんで決まりつてこと？」

「そういうことになるな」

「はーい」

頭の中のわだかまりが解消されたことで、愛は大人しくなった。
「それで、練習はどうするつもり？」

「堀北には無理を強いることになるが、夜中にネットでやろうと思う
「それなら人目につくことも、知られることもないわね」
「私もある程度は教えられるよ。有栖ちゃんの戦い方とかクセとか」
「それは知つておきたいわね。綾小路くんもでしよう？」

「そうだな。知つておいて損はない」

そうして、夜の秘密の特訓が行われることになつたのだった。

運命の日はあつという間に訪れた。

平田に関してはやはり綾小路がどうにかしてくれたらしく、数日前
からいつもの爽やかさを取り戻していた。

しつと退学していたらそれはそれで面白い展開になるのかなあ
と考えたりもしたが、そとはならなかつたようだ。

「あなたはいつも通りなのね。八遠さん」

「まあこういうのは慣れたしね」

大きな大会は何度も経験している。強敵との対決もあった。それ
に比べれば、今回の愛の役割は難しいものではない。

「堀北ちゃんはどう？ 緊張してる？」

「少しね。考えた作戦は上手いくのか、Aクラスに勝てるのか、不安
要素は山ほどあるもの」

それは種目決めから戦略まで頭を捻り続けてきたりーダーゆえの
責任感からか。

不安、心配、そういつたネガティブな感情が渦巻いていることを愛
は確かに感じ取っていた。

愛は僅かに震える堀北の手を取った。

「大丈夫！ 私も綾小路くんも堀北さんが考えてきた作戦に文句はなかつたんだから。今さら色々考えたってどうしようもないよ」

「……そうね。人選は綾小路くんに任せられている。私たちができることは選ばれた種目に全力で取り組むこと」

「うんうん。その調子だとも」

『これより第一種目を発表する。画面に注目しろ』

堀北を鼓舞していると、控室にアナウンスが響き渡る。いよいよ、特別試験の始まりだ。

「最初は……タイピング技能ね」

「僕の出番ですね」

綾小路が選出したのは、林間試験でござる口調というアイデンティイを失いパソコンが得意という特徴のみになってしまった博士こと外村。

だが、今回限りはそれが大いに役に立つことになる。

「堀北ちゃんはパソコン使うことつてある？」

「全くないわね。入学する前も使つた事はないし、高くて到底買えた物じゃないもの」

「うんうん、その気持ちよくわかる……ッ！」

「あなた、ポイントのことになるとわかりやすくなるわね」

そうかもしないと思いつつ、画面の向こうの外村の勇姿を見守る。

対するAクラスは吉田健太。

「話した事ないな」

だが原作通りであれば外村の勝利となる。

勝負内容は、単語、短文、長文をいかに正確に早く入力するかといふもの。司令塔は発見したミスを1箇所だけ伝えることができる。誰もが固唾を呑んで見守る中、制したのは——外村だつた。

「ひとまず先制ね」

クラスメイトが喜びの声をあげる中、堀北は安堵して一息ついていた。

本気で勝つのであれば、ここで喜んでいる場合ではない。

外村が戻ってきて皆から祝福を受ける中、第二種目が発表される。

「——テニス！」

「あなたの出番ね」

早くも、愛の出番であるテニスが選ばれた。

必要人数は4人で、ルールは2ゲーム先取の勝ち残り制。先に4人倒したクラスの勝利となる。

綾小路の選択は沖谷、南、井の頭、そして愛。

攻めた人選に、司令塔の坂柳は小さく笑った。

「いいのですか？ それで」

「ああ。問題ない」

「愛さんは確かに全国レベルの実力者ですが、弱点がないわけではありません」

だが、綾小路の決断は変わらなかつた。

愛の登場は4人目。最初の3人はオマケだ。

対する坂柳は2人目以降をテニス部員で固める。だが1人目もそれなりに実力をつけているようで最初の3人は見せ場なく撃沈する。

「ごめん、八遠さん」

「気にしないで。全員太陽まで吹き飛ばしちゃうから」

「う、うん、とにかく頑張つて！」

困惑気味の沖谷と交代し、愛がコート上に姿を見せる。
相手のサーブからスタートする。

球速は速くないし、球も正直。

適当に揺すつてやるだけで相手はついて来れなくなり、1ポイントも与えることなく初戦を終えた。

「やはりこのレベルでは相手にもなりませんね」

「そのようだな」

試合の様子を眺めていた坂柳は、驚くこともなくそう言つた。

次の試合は愛が水分補給を終えてすぐ始まった。

「こちらの冬森さんも愛さんと同じ女子テニス部員です。何度か対戦したことがあるようですよ」

「そうか」

だが、画面の向こうではやはり一方的といつても過言ではない試合が行われていた。

Aクラスの生徒は左右、前後と振り回され、返球だけで精一杯の様子だった。

「綾小路くんは愛さんの動きを見てどう思われますか？」

「八遠は一步目の動きだしがとにかく早いな。そうすることにより打ちやすい場所で構えられるようになる」

「愛さんは私と同じくらいの身長ですから、やはりその対策はしているというわけですね」

「そういうことだろうな」

1ゲームを終えた時点で、両者の差は如実に表れていた。
息一つ乱さない愛に対し、冬森は肩が上下しているのが見て取れる。

「冬森さんは限界が近いようですね」

「焦らないんだな」

「試験はまだ始まつたばかりです。他の種目で取り返せばいいだけですから」

愛の2試合目も、やはり一方的な試合展開のまま終了した。

「次からは男子が相手です。ただでさえ小柄な愛さんとは力に大きな差があるでしょうが、愛さんはどう対処してくれるか楽しみです」

「敵を応援してどうする」

「フフ、友人ですからつい」

3試合目もAクラス側——高宮のサーブから始まる。

球速、鋭さともにレベルが一段上がったことが綾小路にもはつきりとわかつた。

だが、愛はそれを当然のように打ち返す。

「君のサーブはそんなもの？ 男ならもつとかつこいいところ見せてくれよっ！」

「ぐつ……！」

高宮が必死に手を伸ばすも、その思いは届くことなく球は目の前を

横切つっていく。

「まだまだ……！」

「その調子その調子」

高宮は苦戦を強いられていた。八遠愛は坂柳と変わらないほど小柄な少女であることは高宮もよく知っている。

だから、女子部門とはいえこの少女が全国に駒を進めたという話は俄かに信じがたかった。

しかもテニスを始めたのは高校に入学してからだというから、高宮は耳を疑つた。

だが実際に対面するとどうだろう。

低身長を補う素早い動きでコート端の打球にも手を伸ばし、どんな体勢でも正確なショットを打ち返していく。

しかもコートの奥深く、ラインのギリギリを狙つたものばかり。

「……くつ」

放たれた打球の軌道を見て、高宮は慌てて駆け出す。

フォームはストレートとほとんど変わらないのに、ドロップボールが放たれたせいだ。

普通の選手は球種ごとにフォームが異なる。だから、相手の動きを見ればある程度の予測はできる。

それが愛には通用しない。ギリギリまでフォームを変えていないのだ。

おまけに飛んでくる打球は重く、返球が軽くなってしまう。

球速はもつと速い選手がいる。だから、愛は回転数で補つっていた。文字通り、格が違つた。

辛うじて拾つた球は当然、甘い返球になつてしまふ。

しかも高宮は前方で体勢を乱している。得点をあげますよと言つているのと何も変わらない。

「ふ……ッ！」

高宮の逆をついた最後の球が、コート内で弾んで背後へと飛んでいく。

高宮は一度たりとも愛の牙城を崩すことができなかつた。

戦わなければわからない愛の怪物ぶりを、高宮は見せつけられる形となつた。

「八遠すげー！」

「がんばれ！」

この逆襲劇に盛り上がつたのはBクラス側だ。

いきなりあと1人になつたかと思えば、一気に3人を撃破。あれよあれよという間に、状況はイーブンに戻つていた。

「全国レベルの強さは本物らしい」

「もつと喜んでいただいても良いのですよ？」

「いくら八遠が劇的な勝利を飾つたとしても、1勝の価値は変わらない」

「外村さんの1勝と愛さんの1勝は全く同じだと？」

「八遠の活躍でこちらの士気は大幅に上がるだろうがな」

坂柳は薄く笑みを浮かべる。

Aクラスの4人目、兼松は県大会でも上位に入賞できる力を持つているが、愛はそれを歯牙にも掛けない。

どんな球を放たれても、決して甘い返球はしない。

最も基礎的で、最も難しいことだ。

「坂柳は連敗がほぼ確実なものとなつたわけだが、それでも冷静なんだな」

「ここまで連続でそちらが選んだ種目が採用されています。それに、試験はまだ始まつたばかりですからね」

「確かに、筆記が立て続けに抽選されたら一気に窮地に立たされる」

坂柳が言う通り、タイピング技能もテニスもBクラスが選択した種目。取れるという自信があつたから本命として選ばれているわけで、絶好調というよりも想定通りと評した方が正しい。

「……鉄壁だな」

ネット際のたまに反応した兼松の鋭い打球に身を投げ出して反応した愛に、綾小路は思わず驚嘆する。

テニスに限らず、多くの球技では身長が高い方が有利になりやすい。

身長が高い方が単純に手の届く範囲が広がるテニスにおいて、愛の身長は明確な弱点であることには間違いない。

兼松も当然それは理解しているだろうし、そこを狙つていうところも見て取れる。

愛はそれをあらゆる方法でカバーしていた。

得点を取れそうで取れない。このような状況が続けば、己に原因があるだと自問自答し徐々に精神から崩れていく。

兼松の返球精度は初めと比べて別人かと疑うほど悪くなっていた。

「ほい、私の勝ち！ 対ありつした！」

膝に手をついて疲労困憊の兼松に手をひらひらと振ると、愛はさつき引き上げてしまう。

息切れはしていないとはいえ、汗が染み付いた服を着たままなのは気分が悪かった。

さすがにシャワールームは用意されていなかつたので、タオルで汗を拭き取つて着替えを済ませ、控室に戻る。

次の種目である現代文テストが行われている最中だつた。

「すごかつたわね。1回も点を与えないなんて」

「まあ私にかかるばこんなもんよ」

堀北の元へ行くと、珍しく褒められる。

「あなたがテニスなら負けないと話していただけれど、これほどとは思つていなかつたわ」

「そりや嬉しい」

「とはいえ、まだ安心できる状況ではないわ」

堀北が見つめる先では、現代文テストの成績発表が行われている。結果はAクラスの勝利。筆記ではやはり大きく遅れを取つていた。「あちゃー。こうなるといかに自分たちが選んだ種目を引き当てるかのゲームになつてくる」
「私たちが選んだ種目が多く選ばれること、そしてそれを落とさないことが必須ね」

そんな中、次の種目として選ばれたのは弓道。

Bクラスが選んだ種目だ。

三宅の得意分野であり、Aクラスに弓道部員はいない。そういう理由で採用されたものだ。

「——それにしても

随分と地味な存在になつたなと愛は対戦に臨む三宅を眺める。

本来であれば綾小路グループの一員で、重要な位置にいた三宅。しかし今回はグループは形成されず、三宅は相変わらずクラスメイトとは距離を置いていた。

「戦況はこつちから丸見えだし、眞面目にやつてくれるでしょ」「何か言つたかしら？」

「なんにも」

愛は画面に目を向ける。三宅が的の中心を射抜いたところだつた。

＊＊＊

三宅くんの働きで勝利を重ね、私たちは勝ちを目前にした。けれどその後の2戦は英語テスト、数学テストと立て続けにAクラスが選んだ種目となつてしまつた。

あと1戦で勝利できるとあつて綾小路くんは成績上位者を並べて応戦するも、どちらも制したのはAクラス。

3勝3敗となり、全ては最終戦に託されることになつた。

「……チエス」

最終戦の種目が表示された瞬間、思わず声が出た。

自分の出番だと自覚したからだ。私にクラスの行く末の一端を託されたことも。

そして、司令塔である綾小路くんの選出は当然私。

「堀北さん頑張つて！」

「堀北！ 絶対勝てよ！」

「……ええ」

控室を出て、会場へと向かう。

この1週間、綾小路くんと八遠さんに教えてもらつてわかつたことだけど、私の出番は半分の30分しかない。

坂柳さんもそれを狙つた種目決めをしていることは司令塔の関与量を見れば明らか。

前半は私が自力で戦うことになるだろうし、それを前提にした練習を行つてきた。

私の役割は、なるべく有利な状況のまま綾小路くんにバトンを繋ぐこと。

会場に到着すると、すでにチエス盤が用意されていた。

インターネットでしかプレイしたことがない私にとつて、実物は初めてのものだ。

そして、私の入室とほぼ同時に反対側の扉が開かれる。

坂柳さんが選んだのは——橋本くん。

話したことはないけれど、名前はよく知つている。どういう人物かも、八遠さんから聞いている。

「よろしくな、堀北」

へらへらと笑みを浮かべる橋本くんを睨みつける。

余計な話に付き合つつもりはないという意思表示だ。

「怖い表情をしてるな。この状況を楽しもうとは思わないのか?」

「この1年間独走していたあなたたちには、この1戦の重要性がわからぬようね」

「いやいや、俺たちだって負けたら状況が厳しくなるのは変わりないぜ」

勝ったクラスが130ポイントを得て、負けたクラスが30ポイントを失う。

CクラスとDクラスの対決の結果によつては再びCクラスに下がつてしまふ可能性がある。

Bクラスの私たちと400ポイント近い差があるAクラスにすこでも近づくためにはここで勝つしかない。

「俺、チエスを始めて数ヶ月だからさ。手加減してくれよ」「おあいにく様。私は1週間ほどよ」

「へえ……」

対戦相手が姿を見せた時点で戦いは始まつている。

チエス歴だつて、橋本くんが嘘をついている可能性がある。

『相手が誰だろうと、手を抜いたオレより強い相手はいない』

試験前に綾小路くんが言い放つた生意氣で憎たらしい言葉を思い出す。

普段なら呆れて一言二言言い返していたけれど、今は頗もしく感じる。

坂柳さんは舌戦の得意な橋本くんを使って揺さぶりをかけようとしているのでしょうか。

残念ながら、お調子者の相手は私の得意分野よ。

いつも楽観的で、誰よりも努力家で、誰よりも鬱陶しい友人が私は居るもの。

「これより第7戦の種目、チエスを行う。両者席に着くように」

先生の指示により、私たちは席に着く。

「それじゃあ始めようか。先攻後攻の決め方はわかるよな?」

「ええ」

そう答えると、橋本くんは白と黒のポーンを手の中でかき混ぜる。少しして私の前に両手が突き出された。

「左手よ」

開かれた手には白のポーン。私の先攻だ。

「楽しませてくれよ」

「1週間の私があなたの期待に添えられるかしらね」

初手はE4。E2のポーンを2マス前進させた。

初めは駒を中央に移動させることを考える。

橋本くんの一手目はE5。それを見て、すかさずナイトをG3へ動かし、出方を伺う。

序盤はお互いに無駄な時間を使うことなく進行していく。

だけど、打ち筋に明らかな違いがあることに気づく。

私は堅実に運んでいくタイプだけど、橋本くんは型に囚われない大膽なタイプ。

坂柳さんの入れ知恵であることは容易に想像がついた。八遠さんが坂柳さんのチエスについて『あまり見ない』と評していたことを思

い出しながら駒を動かしていく。

それは気付かぬうちに不利な状況に追い込まれてしまう可能性があるということでもある。

それでも、1週間しか触れていない私にテクニカルなことはできない。

教えられたことを、愚直にこなしていくだけ。

それでも、着実にリードを広げることができているということは分かった。

時間が進むにつれて、橋本くんの表情が険しいものに変わつていく。

橋本くんは持ち時間をどんどん消費していき、それでも状況を返すことはできない。

それでも決して気を抜くことはできない。

もうすぐ打ち手が変わることがわかっているからだ。

真の相手は、私の実力を遥かに上回る強者だ。

突如、橋本くんの表情が変わり、水を得た魚のように駒を動かし始める。坂柳さんにバトンタッチをしたということはすぐにわかつた。

綾小路くんからの指示はない。

持ち時間はまだ30分には遠いし、盤面だけで言えば私の方が有利。

圧倒的格上に対しても私がどこまでやれるのか、確かめようとしているのだろう。

けれど、時間が経過していくごとに形勢が逆転されていく。

このままであれば私が——Bクラスが負けるというのは容易に想像ができた。

綾小路くんと八遠さんの、対坂柳さんを想定した対局を観戦したことがある。

坂柳さんのチェスは、その時の八遠さんとよく似ていた。

2人の会話の意味は全く理解できなかつたし、盤上の駒は私の時と同じ競技なのか目を疑うほど躍動していた。

——けれど、私だって対策を何も教えていないわけじゃない。

「坂柳？」

それまでノータイムで動いていた黒の駒が止まった。思わず橋本が主の名を呼ぶ。

けれど、1分と待たず動き始める。

私はゆっくりと時間をかけて駒を進めていく。

教えられた対策は坂柳さんを出し抜く逆転の一手ではない。坂柳さんの猛攻をわずかに遅らせる、いわば悪あがきのようなもの。

だから私が守りに入っているという状況は何一つ変わっていない。

「……」

手が完全に止まった。

綾小路くんと八遠さんにはできるところまで1人で戦うようには言われたけれど——これが限界のようね。

インカムが接続される音が耳に届く。

それから3秒程度で、無機質な機械音が耳に入る。私にできることはこの音声に従つて駒を動かすことだけ。

勝負の行方は、綾小路くんと坂柳さんに託されることになった。

* * *

「堀北さんは本当に1週間しかチエスを遊んでいないのですか？」

坂柳にとつて想定外だったのだろう。思いの外善戦した堀北が。驚きを隠せない坂柳が、興奮気味にオレに問いかける。

「本当だぞ。基礎中の基礎と坂柳の対策しか教えていない」

「私の対策は愛さんに教わったのですか？」

「何度も対局しているんだろう？」

今回堀北がここまで抗うことができたのは本人の努力もあるだろうが、何より八遠の存在が大きい。

坂柳のことをよく知る八遠だからこそ、堀北でもできる対策を教えることができたのだからな。

「ええ。彼女との戦いはいつも私の心を突き動かしてくれます」

「それはよかつたな」

「綾小路くんも一度対局することをお勧めします。きっと有益なものとなりますよ」

八遠とは一度だけ対局したことがあるが、その時は坂柳のチエスをトレースしていたから八遠の実力だつたとは言えない。

坂柳がそこまで太鼓判を押すのであれば悪くないかも知れない。

お互に考える時間はわずかだけ。キーボードの上を指が駆け回り、指示を受けた2人が駒を動かす。

八遠の言葉を信用していないわけではなかつたが、坂柳の腕前はプロにも匹敵することはすぐに分かつた。それも、世界に通用する程だ。

が、初めて手が止まつた。オレの手が。

ミスをしたつもりはない。思い描いていたルートから外れたつもりもない。

坂柳の実力がオレの想定を超えていたのだ。

『綾小路くん……!』

縋るような表情で、画面上の堀北がオレの名を呼ぶ。

堀北が作つてくれた猶予を使いながら、新たにルートを構築する。そうして数分の後に堀北に指示を送る。

再び駒が動き出し、次に止まつたのは坂柳の方だつた。

「ああ……なんと楽しい時間なのでしようか。愛さんとの対局で腕を上げたつもりでいましたが、あなたはそれすらも越えようとしてくる。この瞬間を最上のものにしたい。この時間がずっと続いてほしい。そう願いたいほどです」

数分にも及ぶ長考の末に坂柳が放つた一撃は、それに見合うだけの重いものだつた。

『綾小路くん……もう打つ手はないの……?』

オレはある対局の後の八遠の言葉を思い出す。

——有栖ちゃんは戦うたびに進化している。今日の1戦が無駄になる可能性を考慮した方がいいよ。

控室の八遠がどんな心境で戦いを見ているか、オレには知りようもない。

だが、坂柳がオレを越えようと言うのであればそれを阻止するだけ。再び勝利までの道筋を思い描き、堀北に指示を送る。残り時間はわずかだ。

再び駒が目まぐるしく動き出し、黒のキングにチェックをかける。

「見事です……」

坂柳が感嘆の声を漏らす。

お互いが考えうる限り最高の手を打ち続けた極限の戦い。その終わりが迫っている。

『おいおい！ 何か手はないのかよ！』

オレも坂柳も、残された時間はごくわずか。短い時間で最上の選択を迫られる極限状態に達している。

「本当に見事です。綾小路くん。冷や汗をかいだのは久しぶりです。ですが、これで終わりです」

『待つてたぜ、お姫様！』

坂柳から放たれた起死回生の一撃は、一瞬にして状況をひっくり返した。

一手一手進めていくことに、こちらが追い込まれていくのがわかる。

「……」

残りが2分を切る中、オレは盤面をじっと見つめる。

こちらがチェックをかけていた先ほどとは打つて変わり、今はチェックをかけられている状況。

次の一手が勝敗を決すると言つても過言ではない。

『綾小路くん……』

何度もかわからぬ、堀北のオレを呼ぶ声。

『勝ちたいの……。ここまで来て、私は負けたくない』

涙を堪えているかのような震える声で、堀北は言葉を絞り出してい る。

『……私だつてわからないなりに必死に考えてる。どうすればこの状況を開けるのか、どうすれば勝てるのか！』

今までの堀北からは想像のつかない、感情任せの叫びだった。

『でも、私には坂柳さんを越える一手は打てないの！　この状況をどうにかできるのはあなたしかいないの！』

打てる手は少ない。残り時間が1分を切った。

結末まで脳内でシミュレートする。そうしてオレは、唯一の回答を入力する。

その一手が堀北に届くまでの時間はとても長く感じられた。

……いや、実際に30秒ほどかかっただろう。

オレからの指示を受け取った堀北は、目を見開いてそれに従う。

——嗚呼。

『まだやろうつて言うのか綾小路！』

再び、坂柳の持ち時間が減少し始める。

「ふふ、お見事です。綾小路くん」

坂柳がオレを褒め称える。

「綾小路くんも、堀北さんも素晴らしい。ここまで胸が躍る戦いは久しぶりです」

持ち時間が10秒を切った。これで勝敗は決したか。

「——ですが」

坂柳がエンターキーを叩く。

今度は黒が活気を取り戻す。手が進むことに窮地に追いやられていく。

『綾小路くん……！　もう打つ手はないの……！？』

オレに打つ手はない。これから手は全て、坂柳に誘導されたもの。

『お願い！　さつきのように、私が思い付かないような手はないの

……！？』

悪いな、堀北。オレはお前の期待に応えられなかつたようだ。オレの持ち時間が0になり、通信が断絶される。

『……参りました』

堀北と橋本の両名が座札をする。勝ったのは、坂柳だつた。

これで全ての種目が終了。Bクラスは3勝4敗で、Aクラスの勝ちとなつた。

この結果はホワイトルームからの刺客によつて歪められたものだとオレたちが知つたのは、それからすぐのことだつた。

3月 裏話 その3

3月24日、卒業式の日を迎えた。

3年間在籍し、生き残った3年生を送る大事な行事——なのだが、下級生からすれば退屈な時間になりがちだ。

特に特別試験という特殊なイベントがあるこの学校では、上級生との関わりは少なかつた。

愛からすれば、せいぜい堀北学と部活の先輩くらいなものだ。とはいえば会話のチャンスはごくわずか。謝恩会の後だ。

謝恩会とは生徒とその保護者が教師を労い感謝を伝える場らしい。おいおい正気かよトップ（偽）が不正してんぞ、と言つてやりたい気分だが3年生には関係ない話だ。

部活などでお世話になつた後輩は謝恩会終わりの3年生をパパラッチの如く待ち伏せするのが慣習らしいので愛もそれに従う。

この卒業式という特別な場で一言も話をしないほど愛の心は腐つていないので、機会を伺うべく遠くから様子を見守つていた。

すでに部活の先輩への挨拶は終えていたものの、目的は果たせていなかつた。

学は現在、南雲や桐山ら生徒会の面々との会話を楽しんでいる。

部外者である愛が割り込むわけにはいかなかつた。

「あなたも来ていたのね」

「まあね。部活の先輩とか、なんだかんだでお世話になつた人も多いし」

やはりというべきか、そこには堀北の姿もあつた。目的は再びの別れが迫つた兄に違いない。

「結構人気者なんだね。次から次へと人が集まつてくる」

「……昔から兄さんはそうよ。決して口数は多い方ではないけれど、いつも兄さんの周りには誰かがいた」

「堀北ちゃんはどうなの?」

「今更言うまでもないでしょう。1人だつたわ」

だからDクラスだったのでしょうかね、と堀北は付け足す。

「ところで、堀北ちゃんは一人で来たの？」

「いいえ、綾小路くんも一緒よ」

「どこにいるの？」

「あなたの真後ろよ」

「わつ、気づかなかつた」

「気を張れば気配に気づく」ともできたかもしれないが、卒業式くらい勘弁してほしい。

「んー、キリがないね。よし、堀北ちゃん！」

「な、何をするつもり？」

困惑気味の堀北ちゃんはお構いなしに、愛は堀北を連れて人混みの中へ突撃する。

「学せんぱーい！」

「……来ててくれたのか」

「もつちろん！ 妹ちゃんも連れてきましたよ！」

「お前が八遠か」

「私の名前、知ってるんですか？」

南雲先輩

「不自然にポイントを貯め込んでいる生徒がいるって言われたら気になるだろ？」

本当は一之瀬を自分の女にする計画を阻止されたことを根に持っているのだろうが、そんなことは公の場では口には出せない。

「鈴音、お前の話は八遠から聞いている」

「は、はい」

「八遠、ちょっとこっち来い」

堀北兄妹がいい感じなのを察してか、南雲は愛を少し離れたところへ誘導する。

「お前から見て、堀北先輩はどんな人物だつた？」

「私は学先輩のことをよく知りませんが、一度もAクラスを譲らなかつたと言う点ではすごい人だったのでしょうか」

「ああ、堀北先輩はすごい人だつたよ」

「そう言いながら、南雲は話をする堀北兄妹の方を見る。

「妹の方はどうなんだ？」

「現時点では、まだ注目すべき存在ではないと思います。ですが——伸び代はかなりありますよ」

「それは堀北先輩に匹敵する存在になる可能性があると?」

「いえ、もしかするとそれ以上になるかもしれない、かつてそう学先輩はそう話していました」

例えるなら、今の堀北は幼虫から蛹になつたようなもの。

その能力が完全に開花するのはもう少し先にはなるだろう。だが、それだけの可能性が堀北には秘められている——らしい。

「……そうか。それは楽しみだな」

学年末試験を終えて、堀北率いるBクラスはCクラスに再び落ちることになつた。

だが、Aクラス昇格を賭けた戦いもそう遠くはない。

その時、堀北はどんな存在になつていてるだろうか。

「だが、今の俺に敵がいないのは事実。今のおれがやることといえば、この学校の仕組みを変えることだけだ」

「仕組みを?」

「ああ。今まで以上に個人の実力を重要視するように変えていくつもりだ」

「そういうえば、学先輩が言つてましたね。そんなこと」

「お前は反対か?」

南雲が試すように愛の瞳を射抜く。

「いえ、私は別に反対はしませんよ。与えられた環境でできる限りを尽くすだけですからね。ただ……」

「ただ、なんだ?」

「一部の優秀な人間の功績のみで上に上がる無能が大嫌いなので、どちらかといえば賛成ですかね」

愛がそういうと、南雲は目を丸くして、それから大きな声で笑い出した。

「ははははっ!　いいなお前、気に入つたぞ。今から生徒会に入らなあいか?」

「今はまだ部活に入つてるのでやめておきます」

「退部の手続きをしておこうか？」

「結構です。今はもう少し部活にも力を入れたいので」

「気が変わつたらいつでも歓迎するぞ？」

「気が変わつたらそうすることにします」

愛は南雲のことがあまり好きではないので、南雲が生徒会長であるうちは生徒会に入るつもりはない。

気が変わるのは堀北が生徒会長になる頃だろう。

「八遠さん、兄さんが呼んでいるわ」

「わかつた、すぐ行く！……では、失礼します」

南雲に一礼して、愛は小走りで学の方へ向かつた。

「まず最初に、鈴音のことを感謝する」

「いえ、うちのクラスがさらに上を目指すためには堀北ちゃん——鈴音ちゃんの力が必要だと感じていましたから」

「おかげで、鈴音はこの1年で大きな成長を見せた」

「そうですね。入学当初は、かなり近寄り難い存在でしたから」

「……兄として、情けないな」

それは、妹がそうなってしまった原因が自分にあるという、学なりの懺悔か。

「ですが、今の彼女は変わろうとしている……違いませんか？」

「ああ。鈴音なりにな。だが、変わることは怖いことでもある」

「未知の領域へ足を踏み入れる、ということですもんね」

「知らない道を進むと不安になるだろう？　だが、その先には己を成長させる何かがあるはずだ」

愛は未知という暗闇に嬉々として突撃していくタイプなので学の言うことは理解できないが、これほどの人間がそう言うのだからきっとそうなのだろう。

「これから先、鈴音には高い壁が何度も立ちはだかることになると思う。越えられなくて苦しんでいる時は、手を貸してやつてくれないか」

「……私にできる範囲であれば」

去りゆく人間からの、心からの願い。

愛には断ることはできなかつた。

「もし良ければ、鈴音に言伝を頼みたい。31日の正午、校門で待つと」

「さつき、伝えなかつたんですか？」

「ああ。俺から直接伝えると、素直になれない可能性がある」

「先輩がそう言うのであれば、文句はありませんけど」

妹のことを最も理解している兄がそう言うのだから、愛はその言葉に素直に従うことにした。

「では、頼んだぞ」

学はそう言い残し、愛の前を立ち去つた。

堀北や綾小路はどうしているのだろうかと周囲を見渡すと、綾小路も堀北もその姿は確認することができなかつた。誰かと先に帰つたのだろう。

「あつ、愛ちゃん！」

声がして振り返ると、手を振りながら一之瀬がこちらに向かつてきていた。

「帆波ちゃんも来てたんだ」

「生徒会の皆さんとか、お話ししたい先輩は何人もいたから」

「私は一通り済ませたけど、帆波ちゃんは？」

「私もう用事はないかな」

「じゃあ一緒に帰る？ 連れがどつか行っちゃつたし」

「うん、そうしよつか」

寮までの道のりを、一之瀬と並んで帰る。

特別試験の話題を出すことはせず、他愛のない話をしながら。

ふと、愛は学の言葉を思い返す。

もしも無事にAクラスに移動できたとして。果たして自分の中で何かが変わるのだろうか。

愛はいい方へ変わるようにと願うことしかできなかつた。

テニスの全国大会を優勝で終えた愛はこの日、客人を待っていた。休みの日は少しでも長く寝ていたい愛ではあるが、この日は予定があるためそうするわけにもいかなかつたのだ。備え付けのテレビをつけて時間を潰していると、インターホンが鳴る。

愛はテレビの電源を落とし、玄関へと向かう。

「いらっしゃい、一之瀬さん」

「お邪魔します」

客人の正体は一之瀬。特別試験のことなど、話をしたかったからである。

「飲み物なんだけど、水、H₂O、DHMOと解凍した氷があるけどどうにする？」

「え、えっと……？」

困惑する一之瀬を愛は意地の悪い笑みで眺めている。

挙げた選択肢は結局どれも水といういたずらだつた。

「つて全部水じやん！ もうつ」

「おー、気づいた気づいた」

それ以外の飲み物といえば、賞味期限の切れたお茶だけである。

賞味期限は美味しく食べたり飲んだりできる期限のことなので、健康面ではまだ問題はない。しかし、客人に出す飲み物としては不適切だろうと言う理由で、選択肢から除外することとなつた。

「ごめんね、うち何にもないから」

「ううん、気にしてないよ」

おかげで誰も退学せずに済んだしね、と一之瀬は呟いた。

「この前の特別試験、Dクラスに勝つたんだって」

「運に助けられたところもあつたけどね」

「そうなの？」

「私たちの種目の方が多く選ばれたから」

とはいえる、取れる想定で選んだ種目をきつちり取り切るあたりはさすがである。

「でも、見てられないところもあつたな」

「どういうこと?」

「Dクラスが選んだ種目の中に柔道があつてね……」

「ああ……」

Dクラスには山田という巨漢がいる。あれを相手にしたら、同学年では勝てる人間はいないだろう。

「それは流石に私も無理」

「うん、一応山田くんも手加減はしてくれたみたいだけど、それでもあまりにも一方的だつたから」

手加減をするあたりは紳士的と言えるだろうか。人によつては舐め普と捉えかねないが。

「BクラスはAクラスと接戦だつたんでしょ？ そつちの方がすごいよ」

「もうちょっと運が良かつたら、こつちが勝つてたんだけどね……」

実際、筆記が3種目選ばれた時点でかなりの苦戦を強いられたのは事実。

とはいゝ、タイピング、テニス、弓道と個人種目で勝利をもぎ取れたのは褒めるべきポイントと言える。

おそらく、今回も月城の介入はあつたのだろう。

綾小路であればあの手を打つた結果は予想できていたらうから。月城の介入がなければ勝つっていたのはこちらだつたのであって、くじ運 자체は悪くなかった。

「でも、時々考えちゃうの。もしも龍園くんがいたらって」

「もう退学した人のことを考えても、どうしようもなくない？」

「……ううん、そんなことはないよ。堀北さんも坂柳さんも、龍園くんと同じくらいかそれ以上に強敵だから。もちろん、愛ちゃんもだよ」「一之瀬の言う通り、龍園がいたら一之瀬は負けていただろう。だが、龍園と同列に語られるのは気に食わなかつた。

「でも、私たちと龍園くんを一緒くたにしてほしくないよ。卑怯なことは絶対にしないし」

「ごめんね。……でも、龍園くんに勝てなかつたらAクラスなんて夢のまた夢なのは事実だもん」

そう言う意味か、と愛は溜飲を下げる。

独走を続けるAクラスに、5月0ポイントから脅威の追い上げを見せた愛たち、ほぼ横ばいの現Dクラス。

実績で見れば、前者2クラスの方が上位と見ることができる。

「……私はいつも助けられてばかりだなあ」

「別にいいと思うけどね。誰かに頼つても」

「うかがな」

「もちろんだとも。私だつて誰かの力を借りてる。有栖ちゃんも、堀北さんもそう」

「わっ」と一之瀬が声をあげる。愛がもたれかかつてきただからだつた。「帆波ちゃんはもつと、誰かに頼ることを覚えた方がいいよ」

「……うん」

「リーダーは何もかも1人でなんとかする役割じゃないしね」

自分にできないことは誰かに代わってもらえばいい。1人ではどうしようもない時は誰かに協力してもらえばいい。

「でも、みんな迷惑だつて思わないかな……」

「今更何を言つてるんだか。帆波ちゃんのお願いだつたら、みんな喜んで聞いてくれるよ」

「愛ちゃんも?」

「もつちろん」

「……そつか。ありがとう」

破顔した一之瀬を見て、愛はほつと胸を撫で下ろす。

一之瀬には、まだまだ頑張つてもらわねばならないのだから。

* * *

31日、正午過ぎ。

学は正午と話していたが、それより少し遅らせた。

学は綾小路にもこの時間に校門に来るようになっていたため、2人きりで話せる時間を用意してあげようという勝手な気遣いだつた。校門に近づくと、学と綾小路が話をしている様子が窺える。

内容はわからないが、それなりに会話は弾んでいるようだつた。

「やつと来たか」

「すみません、遅くなつちゃいました」

先に気づいた学に謝罪を入れ、合流する。

「鈴音から何か連絡はあつたか?」

「いえ、何もないですよ」

「そうか」

「聞いてみましようか?」

「その必要はないそうだ」

ポケットの端末に手をかけようとして、綾小路に止められる。

学も無言ではあつたが、否定はしなかつた。綾小路と同じ考えのようだつた。

2人がそう判断したのであれば、愛は否定することはない。

「南雲に、生徒会加入の勧誘をされたそうだな」

「どこかで聞いたなんですか?」

「本人がそう話していた。八遠という面白い人物がいたが断られた、とな」

「まあ私、テニス部に所属してますしね。もし生徒会に入るなら、部活を辞めないといけないですし」

「そういうえば、先日全国大会で優勝したんだつたな」

「私にかかるれば楽勝ですよ」

「だそうだ綾小路。頼もしいな」

「実際、この前の特別試験では相手を圧倒していましたから」

「あれはいいウォーミングアップだつたよ」

全国レベルとなると、地区大会や都道府県大会とは比べ物にはないほどレベルが上がる。

愛でも危うい場面があつたほどだ。

「お前は南雲の考えには賛成か?」

「どちらかといえば賛成派です」

「隠すこともなく、愛は言う。

ここでの役目を終えた人間に、わざわざ隠し事をする必要はないと

いう判断だった。

「とはいえ社会に出れば個人の能力も集団としての能力もどちらも求められるでしょうから、一概にどちらの方が優れているかなんて決めることはできないと思いますけどね」

最も大切なのは、与えられた環境でできる限りを尽くすこと。愛はそう考えていた。

「……そろそろ行くことにしよう」

学は腕時計に目を落とし、周囲を確認してそう言つた。

時刻は12時10分を過ぎていた。堀北の姿はなかつた。

「結局来ないのかなあ」

「そうであればあいつはそこまでということだ」

「なんだか、不器用ですよね。2人とも」

「そうだろうな。もつと器用だつたら、こうはなつていらない」

愛が思い描く兄弟像といえば、仲が良いか悪いかどちらか。

妹は兄を尊敬していて、兄は妹を認めている。なのに深い溝があつた。

変わつた兄妹だとはずつと感じていた。

「よその家庭事情に深く口を出すつもりはないんですけど、もつと上手いやり方はあつたんじやないんですか？」

「……そうかもしれないな。だが今更どうしようもない。再び2年の別れとなる」

その表情には後悔が滲んでいた。

本当はもう少し待ちたいのだろうが、バスの時間もある。

「……今までだな」

1年前、愛たちもくぐつたその校門が、目の前に立ちはだかつていた。

「一方的な願いにはなるが、鈴音のことは任せたぞ」

兄妹が和解せずとも、時間は流れていく。

見捨てられたとしても、世界は続していく。

「最後に握手をしてもらえないか」

「私も、お願ひします」

「ああ」

綾小路、愛と順番に握手を交わし一瞬寂しげに校舎を見やつた学が一步を踏み出そうとしたその時。

「——兄さん！」

聞き覚えのある声がして、3人は同時にその方を振り向いた。

声の主は、息を切らして走つてくる。

愛はほつと安堵の息をついた。

ギリギリで間に合つた。

「……おまえ」

兄の元にたどり着いた妹の姿を見て、学は思わず声を漏らした。

「遅くなつて、すいませんでした……！」

「……いや」

10分以上の遅刻。本来であれば学は妹のことを叱つていただろう。

だが、それを許さない並々ならぬ事情があつた。

学が追いかけるように入学した妹を見て成長していないと判断した理由が、綾小路にはすぐに理解できた。

学も綾小路も、珍しく言葉を失つていた。

「変われたようだな」

「私は……変われたのでしょうか」

「変われたというよりも——昔のおまえに戻れたのだな、鈴音」

「1年——いえ、何年もかかつてしましました」

どこか不安げで、それでいてようやく認められたという安堵も堀北の表情には内包されているようだつた。

少なくとも、愛や綾小路はこの表情をする堀北を見たのは初めてだつた。

「どうしてもつと、もつと早く自分を取り戻せなかつたのか……悔やんでも悔やみきれません」

学との距離を一步詰め、そう続ける。

「今、おまえは何を考えている」

「何でしょうか……。まだ混乱している部分がないといえば嘘になり

ます

1年前とは考え方が大きく変わり、長かつた髪もバツサリと切り落とした。

生まれ変わったと言つてもいいほどの変化をして、戸惑いがあるのは仕方のないことだつた。

「ですが、これだけははつきり言えます。私はずっと、兄さんの後だけを追いかけてきました。ですが、もうそんな私はここにはいません」「なら問おう。俺の背中を追うこと止めたお前がこれからどうしていくのかを」

「もう、誰かの後を追いかけるのはこりごりですから、私は私だけの道を探します」

堀北はまだ、束縛から解放されて自由を手に入れただけの存在。本当に成長できるかはこれから次第だ。

「そして——」

堀北が一瞬、愛と綾小路の方を見た。

そして再び、兄の目をしつかりと見据えて続ける。

「私は、これからクラスメイトのために自らが前を向いて進んでいたらと思います。そして、自分の道を見つけるためにこの学校で仲間と歩んでいきます」

妹の決意表明に学は一瞬面食らった表情を浮かべ、そしてふつと笑みをこぼした。

そこにいたのはこの学校の生徒会長ではなく、妹を想う兄だつた。「そうか。やつと、本当に……俺の記憶の片隅に残っていた、昔のおまえに戻つたということなんだな」

そう言つて、学は手に持つていた荷物を地面に置く。

妹に歩み寄り、兄妹は手が届くほどまで接近する。もう、溝はどこにもなかつた。

「俺がおまえを突き放した理由が何だかわかるか?」

「……いえ」

堀北が、不安げに学を見上げる。

「俺はおまえのこと大切に思つてゐる」

「……っ」

「俺は幼いおまえに大きな才能を感じていた。未熟ながらも、原石のような輝きを見せていた。やがてその原石が磨かれた時、俺を超える輝きを放つてくれる——そんな期待をしていたんだ」

学は穏やかな表情で、残された最後の一歩を埋める。

「だが、おまえは俺という幻影に囚われた。俺に劣っていると決めつけ、そして追いつくことは不可能だと諦め、自ら伸び代を捨てる選択をした。俺の背中に追いつくことだけを終着点としてしまった。俺はそんなおまえが許せなかつたんだ」

確かに学は優秀だ。それはこの学校での3年間が十分に示していることだろう。

だから堀北はそんな兄を目標に設定した。

それは決して低い目標ではなかつた。しかし、もつと先に進んで欲しい学にはそれが許せなかつた。

「他者に強くあれ。そして優しくあれ」

兄は妹を優しく、力強く抱きしめる。

無限の可能性を秘めた、妹の活躍を願つて。

「おまえはもう大丈夫だ。今、それを確信した」

学は堀北の短くなつた髪をそつと撫でる。

「数年間黙つていたことがある。おまえに謝罪しなければならないことだ」

「謝罪……？」

何のことか理解できていない堀北は疑問を口にした。

「ここまで俺たちの関係がこじれた原因は俺にある」

「どういう……ことですか？」

「昔、俺は長い髪が好きだと言つたことがあつたな。あれは適当についた嘘だ」

「そ、そうなんですか!?」

「短い髪型を好んでいたおまえが、俺の言葉を間に受けて自分の色を失つても髪を伸ばすのかどうか、それを確かめるために適当につい

た嘘だ

だから、学は長い髪の堀北を一目見て何も変わつていなることに気づいた。

堀北の実力を確かめるまでもなかつたのだ。

「その嘘を許せ」

「酷いですね、兄さん」

それでも、堀北は笑つて兄の罪を許した。

その真意に気付いていたからだ。

「鈴音。2年後、俺は校門の外でおまえを待つてている。成長したおまえを見せてもらう」

「はい。精一杯……最後の最後まで戦い抜いてきます」

助けはもう必要ない。今の堀北を見て、愛は確信した。

「綾小路、八遠。おまえたちとも会えることを楽しみにしている」「そうだな」

「はい」

時刻は12時半に迫っていた。まもなくバスがやつて来る。

再び、両者の距離が分たれる。

「また会おう」

そう言い残し、学は正門を潜る。

堀北学は、最後まで偉大だった。

* * *

3人は、学の姿が見えなくなつてからもしばらくその方を見つめていた。

愛は堀北や綾小路がどういった心境でそうしているのか想像は付かなかつたが、なぜか動いてはいけない気がしていた。

しばらくして、最初にその沈黙を破つたのは綾小路だった。

「寂しくなるな」

「そうね……」

堀北兄妹の2年間の別れはこれで2回目。

だが、それは似て非なるものになることは違いない。

「ありがとう綾小路くん、八遠さん……あなたたちがいてくれて本当に助かつたわ」

「そうか？ 邪魔にしかならなかつたと思うが」

「途中からは完全に2人の世界に入つてたしね」

「そんなことないわ。あなたたちが兄さんと話をしてくれていなければ、きっと私は間に合つていなかつた」

確かに、堀北が到着したのはギリギリのタイミングだつた。

あと10秒遅ければ兄妹の会話は実現していなかつたかもしだい。

「それに、兄さんの見送りが私だけなのは寂しいもの……」

改めて、堀北は正門の方を見やる。

謝恩会の後の集まりようを思えば、堀北の言葉は正しいものだ。

それでも、それ以上に学は妹を優先したかつたのだろう。

「オレもなんだかんだ縁があつたからな。もう少し話をしたかつたらいいだ」

綾小路の言葉に堀北が頷く。言動の節々に後悔が滲んでいた。

それに対しても愛は定期的に会つていたこと、謝恩会の後も話をしたことでもあつて未練はなかつた。

「それにしても髪、バツサリいつたんだな」

寮への道をゆっくりと進む途中、綾小路が堀北にそう声をかけた。

「昔はこれくらいが好きだつたのよ。……でも変な感じだわ」

「うんうん、私も変な感じ。今までの堀北ちゃんを見慣れてるから」

「春休み明けはきっとみんなにも驚かれるわね」

堀北はそう言つて恥ずかしげにはにかむ。

「ただ、それにしても一つくらい手を打つても良かつたんじやないか？ 兄貴に会えなくなるかもしれないなら、オレや八遠に足止めをさせた方が確率は上がつた」

「おねがいして、あなたは素直に協力してくれるのかしら？」

「流石に今日くらいはするだろ」

「……実際はあなたたちを頼ろうとしたのだけど。でも、あまりに慌

てていたせいかしら。携帯を寮に忘れたまま髪を切りに行つて、気づいた時にはすでにカットが始まっていたわ」

真面目な堀北にしては珍しい、凡ミスだつた。

相當に慌てていたことはそれだけで伝わつた。

「まあまあ、今回は間に合つたんだからセーフだよ、セーフ」

「そうね。けれど2度同じ過ちを繰り返すつもりはないわ」

「そうだといいけどね」

愛が堀北の方を見やると、堀北は真剣な表情で遠くを見つめていた。

「兄さんに橘先輩がいたように、私にはあなたたちがいるでしよう?」「オイオイオイオイ、俺たち愛の告白されちまつたぜ綾小路くんよ」

「やめてくれ」

「あちゃー、振られちゃつたね堀北ちゃん」

「そうね」

愛の弄りをあしらつた堀北は足を止める。

「どうした堀北」

「ごめんなさい、少し用事を思い出したの。悪いけれど、先に帰つてもらえない?」

それに気づいた綾小路に堀北はそう告げる。

だが、堀北には用事はなかつたし、綾小路も愛も堀北の真意にたどり着いていた。

「だつてさ、綾小路くん。私もちょうど用事があつたのを思い出したから、先に戻つていいよ」

「分かつた」

綾小路は愛の考えを察し、二つ返事をする。

そうして残つた愛に堀北は訝しげな視線を送つた。

「どうしてあなたも残るのよ」

「だから用事を思い出したんだつて」

「……そう」

どんな用事だと問い合わせたい堀北だったが、自分も同じ手を使つているため首を絞めかねない。

「本当はさ、用事なんてないんでしょ」

「……」

「学先輩——お兄さんと離れ離れになるのが寂しいんでしょ、本当は」

「そんなことは、ないわよ」

目を逸らした堀北の表情を窺い知ることはできない。

それでも、晴れやかと表現することができないことは言い切れる。

「隠そうとしたつて無駄だよ。1年の付き合いだし」

愛は堀北が本心を曝け出すその瞬間を待ち続けた。

「……寂しいわよ。寂しいに決まってるじゃない」

観念したように、堀北が口を開いた。

「やつと仲直りできたのに……。また離れ離れなのよ」

ボソリと、堀北は静かに呟いた。目には僅かに涙が浮かんでいた。

「やつと仲直りできたのに、また離れ離れなのよ！」

「そうだねえ。寂しいねえ」

やがて大粒になつて、地面を濡らしていく。

堀北がここまで感情をあらわにしている場面に遭遇するのは初めてのことだ。堀北にとつて、兄との別れはそれほど辛いことだつただろう。

「今のうちに満足するまで泣いときな。誰も怒らないからさ」

清々しいほどの青空の下、脇目を振らず涙を流す堀北に愛は寄り添い続けた。